中央公論第廿六年第六號目次

オートストラップ

自働研ぎ安全剃刀

ドンナ經驗のない御方でも安心して直ぐ使用して少しも怪我のないのが此最新式自働研ぎ安全剃刀。此研ぎ方の具合が無類簡便なり

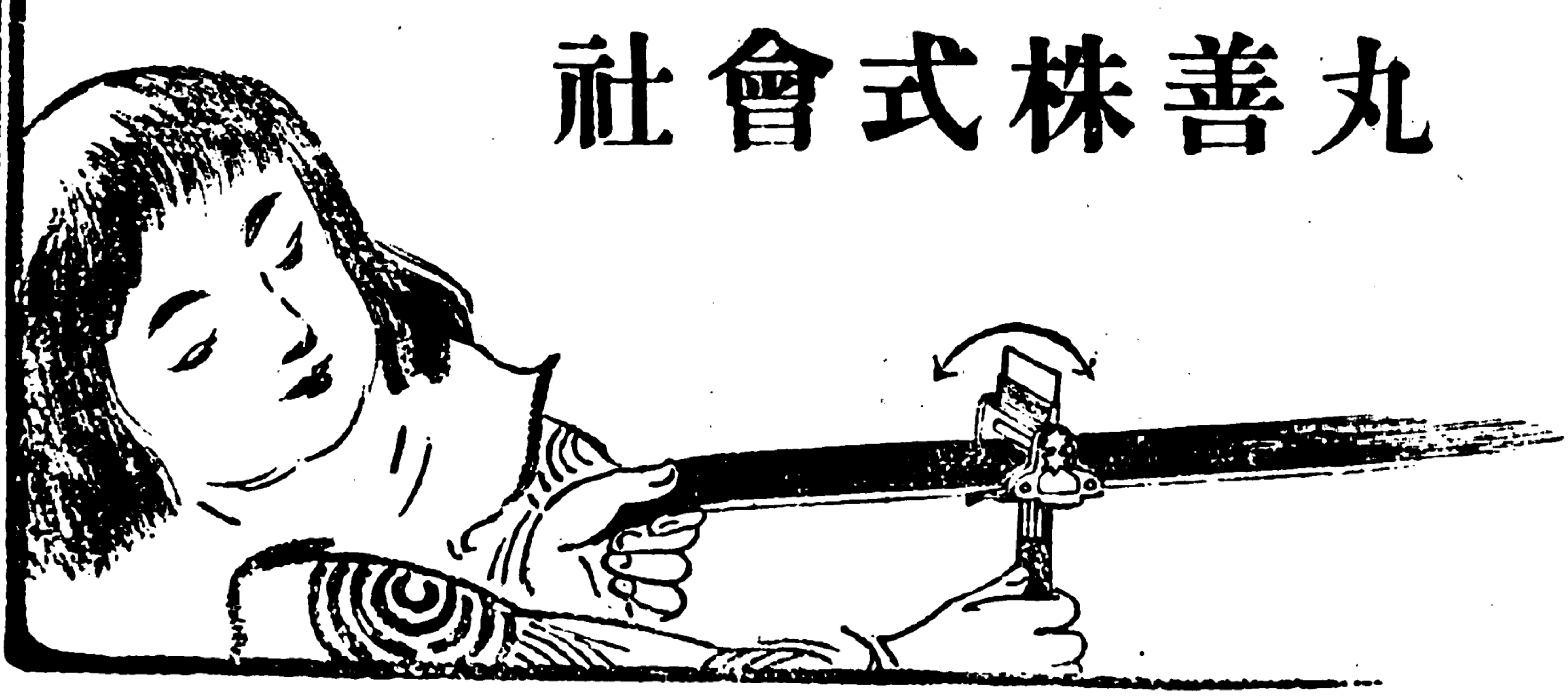
革砥及換刃付

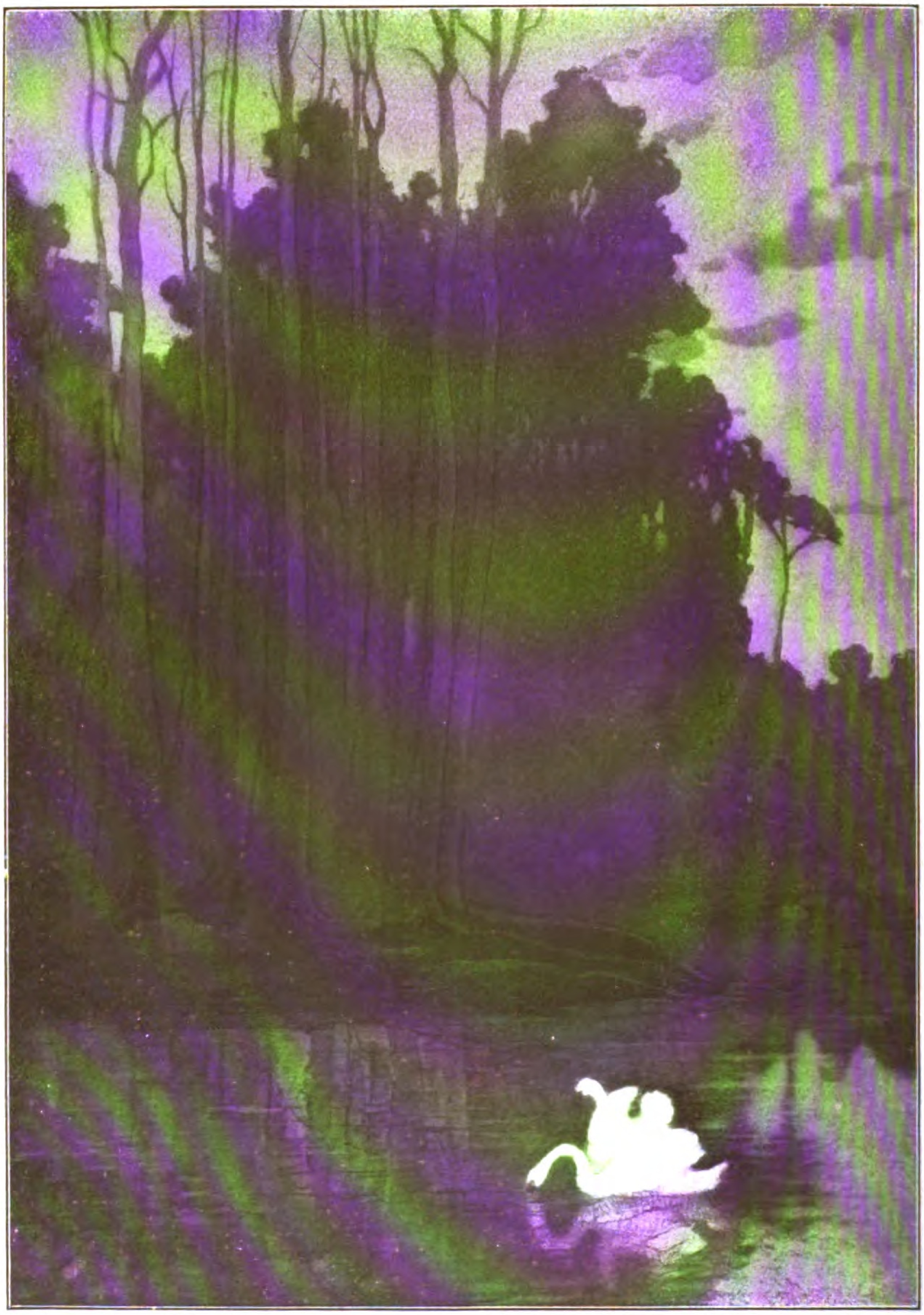
壹組金拾壹圓五拾錢

送料……内地 十二錢　臺樺朝淸 三十錢

東京日本橋通

丸善株式會社





中央公論



第二十六年
第六號
第二百六十七號

最要の大問題は我が隣國に繋る

（一）

凡そ與國の運に會するや、國家は當さに其の全力を擧げて解決すべき大問題を有す、換言すれば、國民發奮精苦し、國家鋭意黽勉して、相倶に進み相與に盡すべき一定の進路と責任とを有す、幾んど國の安危榮辱に關する大責任を有す、古人の所謂敵國外患無ければ國亡ぶと爲せると相似て甚だ相同じ。

内治上の汚隆若くは政黨政派の消長盛衰の如きは、例へば一の小波紋のみ、國家及び國民が斯の如き小問題にのみ出頭し沒頭する時は必らず衰ふ、故に經世の識慮あり、活眼ある政事家は、恆に最要の大問題を捉へ、國家及び國民を指導して其の向ふ所を謬まらざらしむ。

今の我が最要なる大問題とは何ぞや、願くは吾人をして少しく卑見を盡さしめよ。

（二）

清國に對する米獨佛英の四國借款調印せられ、殊に其の内三千萬兩を東三省に投ずる豫定なりと報ぜらるゝや、世人は恰かも惰眠の始めて覺めたるが如く、愕然として色を喪ひ、其の小賢しき者に至ては今更ながら外交當局の迂愚を難じて餘力を剩さず、蓋し錯愕の極、自から省みるの餘裕なく、偏へに餘憤を外交當局者に洩すのみ。

四國借款は必らずしも今回調印されし一億圓には止まらざるべし、普通に外國人は、一定されし開放地の外に於て、工業其の他の産業を營む自由なきに、若し米獨佛英の四國人のみ借款の特權に由て、陰に清國内地如何なる場所にも事業を經營し得ることとならば、四國以外のもの、殊に我が日本の如き、徒らに指を咬へて他の爲す所を傍觀せざるを得ざるに至るべし、且つ借款の一部を東三省にも放資し、其の背後に米獨佛英人ありて手を伸さば、啻だに我が南滿洲經營の妨礙たるのみならず、竟には南滿洲鐵道をも強ひて買收さるゝに至るべし、我が滿洲に於ける利權は、勢ひ四國人に沒收せられんとす、是れ實に十餘億の資財を糜し、十萬の生靈を犧牲として僅かに獲たりし我が利權を擧げて、空しく四國人に蹂躙せらるゝもの也とは、彼の惰眠より覺めし人々の主張にして、彼等は之を以て極力外交當局を非難す。

然れども思へ、清國の信用は、尙ほ一億圓の借款に次ぐに、更に幾億圓の借款を以てするに足るや否

や、其の財政は年々四千萬圓以上甚だしきは七八千萬圓の缺陷を生ずると、彼の資政院に於て暴露せられしが、米獨佛英の資本主は、斯くても尚ほ多くの借款を成立せしむる勇氣ありや否や、清國政府の庫中に收受する稅額の少きを視て、稅率甚だ低しと做すと勿れ、實際清人の負擔する租稅は甚だ重くして、國庫に納入するものに數倍し十數倍す、乃ち增稅の難きは言を俟たず、增稅は實に一の亂階也、然り、幾んど革命的大亂をも誘致すべきもの也、彼等四國の資本主は此の情勢を無視して尚ほ無限に借款を增加すべき勇氣ありや否や。

更に思へ、彼等資本主は必らずや清國の富源の那邊に存ずるかを熟知すべし、然り、清國の富は北にあらずして南に在り、人口衆多にして土地肥沃に、物產と富人と兩つながら甚だ多きは南淸也。北淸は土地貧寒にして不毛の處また少からず、南淸に比すれば實に別天地也、殊に南滿洲の如きは、土地瘠せて人口乏しく、其の鐵道は大豆と出稼苦力とを最大の貨客とするに過ぎず、彼等資本主其の南を捨てゝ北を取るといふが如きは理に於て有るべからず、乃ち有るべからずして其の實有るに似たるは他莫し、彼の米人ストレートが奉天に於て總督の顧問となれるよある緣故を以て、先づ全力を滿洲に諡すが如き形迹あるのみ、ストレートは素と一個の貧乏敎師に過ぎざりき、然るに其の滿洲に抵るや、前の東三省總督趙爾巽(今再任す)の帷幕に參して、言聽かれ謀用ゐられ、曾て一個憐むべき貧書生たりしもの、竟に大國政府をも動かす策士と爲る、彼が得意想ふべし、彼がモルガンシンヂゲートに用ゐらるゝに至ても、また清國の富の南にあるを說かずして、主として滿洲の富源をのみ誇張し、竟に米國資本家と其の政事

家とを驅て、滿洲にのみ鋭意せしむるに至れる也、然れども聰明なる米國の資本主及び政事家等、如何ぞ永く滿洲の實狀に朦晦ならんや、殊に獨佛英の資本主に至ては、南北の形勢に通ずる米人と同日に語るべからず、乃ち彼等の借款が漸くにして南方にのみ注入せられんと、多言を俟たずして明白なりとす。

吾人の今日までに領解する所によれば、四國借款は既に調印を終れるのみ、未だ條件の細目を決定して實資の授受を濟せしにはあらず、否資本主等は、其の借款の投資如何に由ては、其の契約を破棄する自由をも保留し居て、今尚ほ其の投資事項の調査考慮中にあるが如し、故に此の借款の結果を極度まで悲觀し、借款に繼ぐに借款を以てして竟に我が南滿洲に於ける利權をも粉碎せらるゝと做すが如きは、全く早計の甚だしきもの也。

借款の結果素より輕んずべからずと雖も、清國に於て我が大に憂慮すべきものは別にあり、識者は寧ろ此の方面に於て深く考究する所あるを要す。

（三）

或は曰く、清國政府若し變法自彊の策を實行し、其の財政を整理し、民心を統一し、海陸軍を緊張せば實に世界の强大國となる可く、蕞爾たる我が日本は、之に壓せられて其の下風に立たざるを得ざるべし、殊に去年合併したる朝鮮の如き、先づ第一に清國の掌裏に歸するや必せり、乃ち我が國は、唐の時全く三韓を喪へると同一運命に陷ゐるの外莫かるべしと。

是れ實に甚だ有理の說也、而して未だ其の實を得ざるもの也、吾人は假令變法自彊の方策實行せらる

ども、支那人種其のものの特質に視て、到底強大國たる能はざることを確信せんと欲す。

支那人種は極めて利己主義也、殆んど利己主義の極端に偏す、随つて國家君主に對する忠義の意なく、又社會同胞に對する公共心なし、立國の性質として、古來一定の君統なきを以て、彼等の忠義心なきは全く歴史的也、夫れ胡來れば胡現じ、漢來れば漢現ずといふが如きは、支那人種の宏量を表示するに似たるも、實は利己に偏して全く公共心なき結果に過ぎず、現に胡漢を別たず、また何の公共心かあらん、何の愛國忠君かあらん。

支那人は恰かも猶太人の如し、人種としては最も古く、又最も有爲也、然かも國民的資性に於て全く缺く、猶太人が世界に於て多くの富を有するは、現に事實の證明する所、英米佛皆然り、彼等は猶太傳統の敎法と舊慣とを堅守して、今尙ほ漫りに之を廢せず、且つ執著心深くして復讎を好む、然かも公共心なく、愛國忠君の至情なきがため、世界到る處に優秀なる人種として存在しながら、竟に一の國家をだも爲す能はざるのみ、支那人に至ては幸ひに清國てふ一の大國を作せり、此の一事僅かに猶太人の國を有せざると異なるのみ。

支那人は極めて懶惰也、彼等が一日十錢を得れば、其の半を生活費と爲し、五錢を積蓄するがため、極度の粗衣粗食に甘んずるを視るに、且つ厦門に於て裸體のまゝ舟を漕ぎ、孜々として蓄積し、積みて十圓に至れば其の全部を以て臺灣渡航免狀と舟賃とに充て、既に臺灣に上陸するや、乞丐となつて志す所に至つて勞役に就くを視るに、彼等は儉素と勤勉と忍耐とに於て、實に世界稀有なるが如し、然れど

も彼等が異常の勤勉、儉素、忍耐を爲すも、其の目的唯だ富を得るに在り、既に富を得れば、唯だ淫樂放逸に耽くるのみを目的とす、富に由て更に大に國家社會に盡さんとするが如き公共的遠圖は寸毫も之を有せざる也、看よ、富人の集まる所必らず劇場あり、狹斜あり、男色女色あり、博奕、飲酒、阿片ありて淫樂放逸の具一として供はらざるはなきを、支那人は唯だ富みて而して淫樂放逸に耽くるのみを理想とす、斷じて勤儉の民に非ざる也、換言すれば、極度まで利己に偏する也。

支那人の富めるもの、往々上海に移住し、殊に外國居留地に住むを好む、然る所以は他なし、治外法權の下に潛みて其の財産を安全ならしめんとするのみ、自家の財産を安くするがためには、外國の權下に走るをも恥とせず、愛國心なきもまた極まらずや、之を以て徒らに清國の惡政治をのみ罵るを休めよ、惡政治の下にもまた甚だ相應しき非愛國的人民あるにはあらずや。

彼等の外國に出稼するや、如何なる國民にも同化せず、獲る所を蓄積して必らず歸國す、然れども是れ愛國心あつて然るには非ず、外國に在ては常に輕侮嘲笑の中心となつて、富むも尚ほ淫樂を恣にする能はず、懶惰放縱の生を爲すを得ざるが故に、乃ち已むことを得ずして歸來するのみ、歐米人にして若し彼等の富に媚び、彼等の歡を承くるに努めて、一に彼等の欲する所に隨はゞ、彼等豈歐米に歸化するとを躊躇せんや。

清國には所在一種の自治團體の如きものあり、一村を以て一廓と爲し、盗賊を防禦し、官廳に應對するに一に其の進退去就を同くす、之を以て其の勢力頗ぶる強く、廓中の長老たる所謂郷紳の如きは、少

からず官僚に畏憚せらる、淸國が專制國に似ず、比較的多く民論に耳を傾むくるは、此の鄕紳等を憚かりて也、然れども之を以て支那人の公共心厚き證左とは看做すべからず、唯だ制度弛廢して盜賊橫行するも、軍隊警察兩つながら之を制する能はず、且つ惡政より來る酷吏の誅求苛斂に對するがため、例の利己一偏より斯の如き城廓然たる自治團體を生ぜるのみ、故に此の團體の勢力は消極的にして積極的に非ず、此の團體は能く盜賊と虐政とを防ぐに力あるも、之を伸べて他を征服し統一するには足らず、支那人にして眞に公共心あらば、此の團體を延長して以て國家に及ぼすべき理なるに、事實曾て然ると あるなし、是れ唯だ團體に由て自家財產の安全を保つに足れば可なりと爲すに止まるが故ならずや。

支那人の戰ひに臨むや、旌旗天を蔽へば則ち意氣大に揚るも、一び銃火發し、劍光相摩し、流血の淋漓たるを視るに及んでは、倉惶色を失ふて再び陣頭に立つと能はず、直ちに列を脫して奔竄するを常とす、曹操僅かに赤壁に敗るれば、百萬の大軍立ろに潰ゆるが如き、幾んど我が國人の夢想し能はざる所以のものは、必らずしも支那人の怯懦なるがために非ず、實に利己主義に極偏せる結果のみ、夫れ世界最古の國として四千年の歷史に養成せられし國民性（寧ろ人民性）なるもの斯の如し、到底强大なる國家を爲す能はざるや知る可きのみ、今の戰爭は武器の大小精粗を以て勝敗を決すると做すと勿れ、之を運用する軍隊の意氣精神こそ、實に重要なる最後の決勝點なれとは、卓越なる戰術家の齊しく唱ふる所ならずや、利己に偏して怯懦なる支那人は、猶ほ猶太人と同じく竟に强銳なる軍隊たると能はざる也。

淸國の政事家もまた其の人民以上に極度の利己主義に偏す、彼等の理想とする所は治國平天下の經綸

にあらずして、富貴淫樂を恣にするにあり、僅かに名聞を好むが爲めに、僅かに科擧に應ずるに足るの學力あるが爲めに、則ち商人と爲らずして官吏と爲れるのみ、其の目的の黄金ヶ獲るにあるや彼此相異なるなし、故に官吏となつて賄賂を收め、租税を私し、孜々として利を營むを常とし、竟に官たる三年なれば、乃ち終生安逸なるべき財を得るの諺あるに至る、上下官民利を征して爲さゞる莫し、其の國の未だ亡びざる寧ろ奇と爲すべきのみ。

（四）

淸國政府は明後年より憲政を實施して國會を開設すべしと稱す、此の國會開設に由て大に民論に力を添ゆるの結果が、果して淸國の弊政を釐革するの良結果を生ずるや、抑もまた姦吏百端、竟に大亂を招くの階梯たるやは、苟くも識慮ある者の齊しく疑問とする所なる可し。

理路に走るに急にして、甚だしく議論を好む革命黨及び其の一味の徒が、縱論横說、口角より火を發して過激なる政府攻擊を爲すや言を俟たざるべし、滿人の跳梁に切齒し、其の無能を侮慢せる漢人が年來の積憤を霽さんが爲めに、滿人政府を攻擊して餘力を殘さず、滿人も亦之に應戰して玆に激烈なる滿漢の軋轢を議場に演じて、暗鬪明戰兩つながら相讓らざると素より想察に餘りあり、然れども是れ未だ深憂と爲すには足らず。

國會開設に由て先づ第一に發生せらるべき禍患は財政上に在らん、資政院に提出せられし淸國の歲入歲出表によれば、其の一箇年の歲入不足實に八千萬兩に達す、之を補充するの途を問はれて、淸廷の大

官小吏一として之に答ふる能はざりき、蓋し何等の經綸計圖を懷抱せざれば也。

夫れ普通豫算を以てして尙ほ年々八千萬兩の歲入缺陷あり、若し民論に隨つて既成の鐵道を國有とし、且つ敷設せらるべき鐵道を自國の國費に由るとせば、歲入の缺陷は更に幾倍すべきや測る可らず、何ぞ況んや陸海軍備の擴張にも、また多大の費用を要すといふをや。

茲に於てか財政整理のため、第一に生ずべき論定は增稅ならざる可らず、然れども吾人の前既にいへるが如く、清廷の國庫に收受する租稅は甚だ多からざるも、人民の納むるものは甚だ苛細にして而して又甚だ重し、多數人民の憲政に囑望する所以は唯だ國會に由て其の負擔の輕かるべきことを欲して也、然るに國會の與ふるもの望む所の減稅にあらずして其の反對なる增稅ならば、多數人民は失望と共に必らず紛擾し反抗すべし、而して不逞の徒其の間に在て之を煽動する必然なれば、竟に大亂と爲るまた測る可らざる也。

若し國會または政府に明識の士ありて、其の歲入缺陷を補はんがため、現在の徵稅法を一變し、人民より直接に國庫に納稅せしめんか、少くも現在に二倍する歲入を得んと難からず、唯だ此の改革を敢てするを難しとするのみ、蓋し人民より直接に收稅する官吏は知縣及び其の屬僚にして、或は更に收稅の下請負を爲すものあり、而して知縣のみが此の收稅より得る所年額一萬五千兩より三萬兩に及ぶといふ、恰かも我が郡長に相似たる知縣すら尙ほ斯く大なる收入を租稅より割取す、其の下受負を爲すものの得る所想像するに餘あらずや、且つ知縣の上に巡撫あり、道台あり、總督あり、又各々數萬、數十萬、數

百萬の租税を割取す、啻だに此等大小官に止まらず、其の部下また等級に應じて各々租税の分割に與からざる莫し、三年官を作せば終身生計に苦まずといふに徴すれば、其の租税を割取するの多きや知るべきのみ、現に李鴻章の如き多年直隷總督たりしがために、其の富の多き貲る可らずして、肥馬數十頭常に其の厩舍に滿ち、食前方丈の驕奢を恣して、屢々外人を驚かしめしにあらずや、其の富の一部賄賂にあるは論莫きも、然かも大部分の租税割取にあるや多言を要せずとす、若し我が國民及び歐米人の常識よりいはゞ、斯る弊習を除くに何等の顧慮を費すを要せず、英斷一下せば則ち足ると做さん、然れども清國に在ては古來の常習慣行を打破する也、幾多の文武官吏をして全く其の既得の利を喪はしむる也、否、其の立場無からしむる也、幾んど政治組織を根本より一變するものにして、全く一種の革命也、其の容易に行はれざるや論莫きのみ、強ひて行はんとせば、大亂を生ずるまた實に測るべからざるのみ。

幸ひに國會の開設に由て大に民論を利用し、此の古來の舊慣常習たる大弊を刈除するを得ば、憲政の美果茲に大に擧るべきも、然らずんば、國會は寧ろ亂階のみ、而して識者多くは國會の亂階たるを憂ふ、虎視耽々たる列國中、或は之を機として將來の大變亂を豫想し、由て以て支那分割の大志を成さんと欲する者ある、また洵に免かれざるの數乎、吾人は實に茲に深憂を懷かざるを得ざる也。

（五）

清國よりいへば、其の最大憂患は實に人物なきに在り、然り、政治上の中心點たるべき大人物なく、國家を雙肩に擔當すべき力量ある大人物なきにあり。

袁世凱は現に清朝に於ける一等の人物と稱せらる、其の手腕識見或は群を絕するなるべし、然れども豚群に伍すれば狗もまた雄を稱すべきも、竟に獅子たる能はざるを奈何せん、袁は豚中の狗のみ、殊に其の爲人君國に忠貞なるべき操思を缺く、彼れが西太后に獻策して前帝の幽屏を敢行せしに覩れば、其の心事知るべきにあらずや、今の漢字新聞紙中、袁を起用するにあらざれば國事濟し難しと論ずるものなきに非ず、然れども袁の德望なき、滿漢を通じて然り、蓋し忠貞の誠なきもの、到底國事を擔當するに足らず、而して德望の以て民心を信服せしむるに足らざる言なきのみ。

袁と才識略々相競ふに足るもの、唯だ一の盛宣懷ありと稱せらる、二人共に李鴻章の門下に出づ、誼素より相親み相謀りて君國の爲めに盡瘁すべきに、其の交吳越も啻ならず、互ひに相容れざる所以のものは、共に支那人種の通有性なる利己主義に偏極して、互ひに勢權を爭ふ私心旺んなれば也、二人が共に滿族其の他の排斥を免かれざる所以また必らず玆に在らん。

李鴻章の死に瀕するや、其の親近する所の袁等に遺言すらく、滿洲は日露をして相爭はしめて以て其の間を利用すべし、若し日露相爭はざるに至らば、更に米國を延きて競爭せしむべし、斯くして空名ながら主權を把持するを妙とす、然れども萬已むを得ざるに至らば、斷じて滿洲全部を放棄せよ、而して支那全土を保有する計畫立てよと、現帝室たる愛親覺羅氏の發祥地を捨つるをも惜まず、然かも二虎三虎を相爭はしめて以て獵夫の利を占めんとする彼れの狡智の一端は、之に由て能く窺知し得、而して是れ實に淸國に於て識慮卓越する政事家の本色也、彼等が君國に忠貞の誠なきことと寧ろ驚ろくべからず

や、夫れ利害のみを計りて而して成敗利鈍を顧みざる大丈夫の意氣あらず、また利己に偏極する弊茲に至れるならずや。

近く新內閣制の定められたるに由て、總理大臣と爲れる慶親王に至ては、彼の淸國通として世界に名高き醫師モリソンの評せるが如く、實に一個無定見の耄翁のみ、肅親王は閱望高きも其の識才素より之に稱はず、攝政王は英明と稱せらるゝも、畢竟名門の英才にして、平人間に在ては一個の凡庸子のみ、素より言ふに足らざるのみ。

我が日本の朝鮮を併合するや、滿洲の官民は擧げて日本に併合せらるゝを畏怖し、而して淸廷の諸官また色を失ふて、日本の併合に關する詔勅其の他の規定を新聞紙に轉載するを嚴禁したりき、然かも其の眞意が、日本の朝鮮を併合するに當り、第一租稅を減免し、第二人民の生命財產の安固を保障し、第三人民に恩賜金を頒ち、第四大赦を行ひ、第五併合關係者に爵位を賜ひ、第六朝鮮人また日本人と齊しく世界一等國の列に入れるを視て、淸人も亦朝鮮人の幸ひを羨望し、自から進みて日本に併合せらるゝを欲するを怖るゝに在りといふに至ては、誰か啞然たらざるものぞ、然り、淸國政事家の識慮は實に斯の如きもの也、而して支那人種の意思やまた洵に然る也。

若し一代の民心を統合し、世界の大勢に順應し、法を變じ制を改めて、以て根本より其の基礎を築成する大人物出てば、淸國の前途必らずしも單に悲觀するのみを要せざるべし、然れども是れ革運易命に由て始めて望むべし、今の如き情勢に在ては、到底斯る大人物の出づるを望む可らず、況んや利己怯懦

なる人民性の牢として拔く可らざるあるをや、清國は眠れる獅子にあらずして半ば死せる象也、神經中樞殆んど其の機能を喪へる半死半生の病象のみ、然り、彼の國の最大病根は全く玆にあり。

半死半生の病象が、呻吟して僅かに其の形體を完ふするのみ、曾て虎狼の餌と爲らざる所以は何ぞや、虎豺狼群環視して、互ひに爪牙を出すを許さゞれば也、換言すれば、列國相互に控制して自から恣にすることを許さゞれば也。

（六）

英は長江流域に於て、獨は山東方面に於て、佛は雲南閩越に於て、露は北滿洲より伊犁甘肅に向つて、互ひに勢力範圍を定めて其の利權を張らんと欲し、苟くも相侵すを容さず、而して各々清廷の形骸にても存在するを利として之を亡ぼさゞるのみ、若し列國總て何等の干渉を爲さゞらん乎、我が陸軍五個師團あらば、今の清廷を滅ぼすと掌を反すよりも易し、更に五個師團を以て南清を鎮定せば、期年ならずして四百餘州の草木全く我が風に靡くべし、露國兵五軍團あらんか、また三年ならずして全支那を席捲し得ん、唯だ其の種文遙かに我が日本に異なるがために、統平聊か難きのみ、英獨佛米と雖もまた然り、半死半生の病象に屠るの容易なる、何ぞ多言を要せんや。

然れども列國相環りて而して相牽制し、互ひに獨り爪牙を逞くする能はず、現に一億の借款も、米國の一手にて成立せしむる能はずして、獨佛英を其の伍列に引入れしは他なし、互ひに相控制して單獨に手を延すを許さゞれば也。

我れ既に十餘億の巨資と、十萬の生靈とを、犧牲として南滿洲に利權を立つ、漫りに他の容喙を許さゞるは許なるも、我れさたこれ以外容易に手を延す能はず、露國も亦然り、況んや英佛獨米をや。

瑞西、白耳義の小國を以て、尙ほ歐洲の中央に國を存し得る所以は他なし、列國互ひに控制して之を分割するを許さゞれば也、淸國が積弱衰弊の餘を以て、尙ほ國の形を存するまた同じ、淸國の滅ぶべくして未だ滅びざるは全く列國の互ひに控制するに由る、支那人等之を知らず、動もすれば夜郎自大の舊態を持するは、寧ろ噴飯に堪えざるのみ。

（七）

然らば則ち淸國の前途は如何、曰く言ひ難し、保全か分割か、曰く言ひ難し、列國の志は果して分割か、而して我が日本の志は保全か將た分割乎、曰く言ひ難し。

則ち言ひ難しと雖も、我れは實に東洋の覇者たる使命を自棄す可らず、保全分割兩つながら其の準備を缺く可らず、露土の戰局僅かに收まりて所謂伯林會議の開かるゝや、英の大使ビコンスフイルド卿昂然として曰く、我れに和戰兩樣の準備あり、唯だ公等の擇ぶ所に從ふのみと、我れも亦當さに然るべきのみ。

唯だ保全分割の兩樣準備を爲すにも、極めて沈着なる準備を爲さゞる可らず、極めて精詳なる考慮を以つて、苟くも國命を誤るが如き事なきを期せざる可らず、竊かに列國の意圖を窺ふに、我れは最も大なる覺悟を要す、日露戰役以後の臥薪嘗膽は譬ふるにも足らず、我が國民は上下一致、官民共同して以て

一意専念に此の未來の大責任を盡すに遺憾なきを期待せざる可らず、大問題を解決する、豈大覺悟なきを得んや、區々内政の長短得喪を相較するが如き、素より言ふに足らざるのみ。

何故に宗教家を疎外するや

（上）

人心の凶險に趨くを防止する社會政策には、皇上の御軫念あらせ玉ふこと甚だ深く、竟に無告の窮民に施藥救療せしむるがため、殊に内帑の資一百五拾萬圓を割きて下し賜ふや、政府當局は深く叡慮の悠遠なるに感激して、聖旨の貫徹を謀るが爲め、幾回か閣議を重ねたる後、總理大臣及び内務大臣主として其の事に當るに決し、三都及び横濱、名古屋、神戸等の富豪を會して義金醵出を勸誘し、又新聞通信雜誌の主たる諸記者に其の同情と援護を求むると共に、一方には又貴衆兩院議長を介し、並びに各地方長官に對して多方面に斡旋すべきことを要望したり。

總理大臣の發表したる所によれば、恩賜金を基礎として茲に濟生會なるもを組織し、各國より少くも二千萬圓の基本金を集中し、其の利率に由て年々窮民に施藥救療する豫定なれども、義金の醵集せらるゝもの幾許の總額に達するや、未だ分明ならざるを以て、如何なる法案を取るべきか、其の豫見未だ立たざるも、今は全力を擧げて聖旨の貫徹に盡瘁すべき精神なりといへり、吾人は其の勞働を多として切

に成功を禱らんと欲す、悠遠にして且つ至仁至慈なる聖旨を貫徹せんことは、素より臣子當然の本分にして、又其の責任なれば也、但し閣臣等が醵金を求むるに方つて、富豪のみに重きを置て、而して之に關係あるべき宗教家を疎外したるが如き形迹あるの一事のみは、吾人の私かに遺憾を覺ゆる所とす。

（中）

公平に義金を集中せんとせば、第一華族、第二富人、第三收入多きものより先に之を取らざる可らず、華族中には素より公卿の位倒れたるものなきにしもあらず、然れども大名華族中、毛利家、島津家、德川家、前田家を首め、淺野、鍋島、黑田、細川、伊達（宇和島）松浦諸家の如き、裕福にして年々數萬又は十數萬の餘財を剩す公侯伯なきにあらず、彼等は平生其の舊領地のために力を致し、或は學校を廷て、産業を奬勵し、若くは育英事業を補助する等、相當に公共的事務に盡瘁せざるにあらず、然れども純然たる慈善事業に至ては、比較的出資したりし類例多からず、去れば稍々硬骨ある富人中には『風雨水災等の殃ある每に、天下擧げて富人のみに出資を促がして曾て華族に及ぶことあらず、華族も亦之を幸ひとして自から大に出金したることなし、彼の富裕なる五六十の華族は、其の資産の鞏固にして而して收益の豐かなる、優に富人中の上位を占むるに足る、殊に華族は國事王事に何等の勳功あるに非ず、又其の額に汗して勞苦し、若くは成敗を賭して冒險に事業を企てしにも非ず、單に祖先の勳功に由て、莫大の秩祿を賜はれるがために、乃ち今日の巨富を致せしのみ、殊に朝廷優遇を賜ひ、其の繼嗣者は一定の年齡に達すれば必らず五位に敍せられ、四時異常の殊遇を絕たれず、然るに四民の最上級に位ゐし

て社會の崇敬を享け、又皇家の殊恩を恭ふしながら、其の富を割きて汎く社會の慈善事業を助くることなきは、寧ろ奇怪の極也、今や聖意無告の窮民を憫れみて救療施藥を賜ふ、華族は常に其の自稱する如く果して皇室の藩屏たらば、今は必らず率先して出資せざる可らず、華族にして苟くも出し吝むが如きあらんか、我等また勢ひ路跙せざる能はず」と唱へ、竊かに華族の出資如何を凝視するものありと聞く、其の心事の醇正ならざる聊か憾みなきにあらざるも、其の言や自から理あり、未だ必らずしも人を以て言を廢す可らず。

富人の出資すべき素より當然のみ、吾人の思量する所によれば、地方には淳樸にして、又聖旨を畏む忠誠なる産家少からず、苟くも勸誘其の途を以てせば、彼等は感奮興起、或は分外の出資を望むなきを保せず。

一定の資産ありて富人と稱するに足らざるも、其の收入の多き、却つて富人に優さるものあり、俸給賞與等に衣食する者是れ也、三井は天下隨一の富豪と稱せらるゝも、其の主人の受くる所は、却つて其の使用人たる益田、團、朝吹の諸人に及ばず、甚だしきは飯田、早川、高橋、渡邊、岩原、山本等の理事に及ばざるもあり、凡そ大會社大銀行の重役といへば、年收一萬圓を下るものは幾んど多からず、然るに彼等は事有る毎に其の主人若くは會社銀行にのみ出資せしめて、彼等自からは曾て其のポッケットマネイを出せしとなし、是れまた公平を得ざるもの、今日眞に大に資金を集中せんと欲せば、必ず先づ公平を期して彼是厚薄なきを要す、聖德は天の如し、如何なる場合にも、聖旨の及ぶ所必らず公平なら

ざる可らざれば也、而して當局者は此の間に在て果して宗敎家の力を要する莫しとする乎、新聞通信雜誌記者の同情をも求めながら、曾て宗敎家を顧みざりしは何ぞや。

(下)

且つ宗敎家は、出資を勸化するに有力なるに止まらず、又實に無告の窮民を救ふに於て深緣あるもの也。歐米の牧師等一齊に謂へらく、基督敎を東洋に弘布するに方つて、未だ朝鮮の如き良好なる結果を呈せし所は之あらずと、然る所以は何ぞや、宗敎の力の最も深く滲入する所は、最も不幸なる人間なれば也、無告の窮民の如きは、最も宗敎の感化を享くること多し、されば施藥救療を受けしむるに方つても、又施藥救療と相俟つて、彼等の不幸に同情すると共に、又彼等を啓沃し感化して、善良なる方向に赴かしむるとは、實に宗敎家の本務にして、而して又人心の凶險に趨くを防止する所以ならずや、此の一事は宗敎家としては素より政府者の要望を俟つべきに非ざるも、政府者が悠遠なる聖旨を貫徹するに方つて、獨り宗敎家のみを疏外せしは、吾人の頗ぶる異とせざるを得ざる所とす、政府者は果して宗敎家の無能無爲なるを見限りて謀る所の必要なしと做せる乎、抑もまた千慮の一失、端なくも之を遺忘したる乎、若し政事家にして今日の社會に於ける宗敎の實力を解せざるものとすれば、吾人は寧ろ憐まざらんと欲するも得ざる也、今や文敎の重任に當るもの、敬神崇佛を以て一世の澆俗頽風を挽回せんとす、而して大政を綜べ、内政の樞軸を握るものにして、却つて宗敎の勢力を遺忘すとする乎、吾人は之を以て宗敎家の恥とせず、寧ろ彼等政事家の眞摯且つ透明ならんとを促すの無要ならざるを思ふ。

公論

本邦商權の推移

津村秀松

（一）

惟ふに安政五年我國は米國を始め諸外國の强迫に遭ひ止むを得ずして國を開き、通商貿易を許せしと雖も、當時、我國の商人は海外の事情に通ぜず、言語すらも解するものなき有樣なる上に、全く外國貿易に關する知識經驗を缺き、外國貿易に關する機關設備を有せざりしかば、輸出に就ても、將又輸入に就ても、貿易の事は一切擧げて之を居留地に於ける外國商館の手に委せざるべからざりしなり。

明治年間に入りて後も、永く此大勢を改めず、外國貿易とは言へ、其の實、居留地貿易にして、居留地に於ける外商は、全く我國の貿易權を獨占せり、而して此貿易獨占より生ずる利益意外に多かりしかば、外商の渡來するものも亦多く、外商によつて新に開發されたる貿易品も少なからずして、貿易額は年一年急激なる進步發達を遂げたり。されども相變らず、輸出入の大部分は外商の手を經るものにして、明治二十六年に至つてすら、尙ほ輸出入貿易總額の約八割三分は、居留地商館の掌中に歸したりき。

元來我國に於ける外人は、之を其の本國人に比するに、一般に品性陋劣にして、中には一通りの教育を享けたる者もあれど、是等の人達とても、本國に於ける

が如き、社會の制裁なきより所謂旅の恥はかき捨てたる態度なきにあらず。殊に條約改正迄は、治外法權を有せしかば、我國の官威を恐れず、警官の如きも眼中に措かず、居留地てふ一大城郭に立籠りて、隨分我慢勝手なる振舞多かりき。之れ已に我國人に對し、少なからざる不快の念を與へたるに、彼等外人は先天的優等人種たる假定の下に、常に我國人に對し傲慢無禮なる態度に出て、我國内に住居しながら、別に自から超然たる一社會を造つて、少しも邦人と交際せず、甚しきは其の邸宅の正門に、『犬と日本人は之より入るべからず』てふ立札すら、掲示するに躊躇せざりしとは、神戸の古老に聞く所なり。萬事が此の如き調子なれば、由來、敵愾心深き日本人をして憤慨の念に堪えざらしめたるは、恐らく彼等外人の想像以上なりしならん。且つ夫れ外人と言へば、當初渡來の際、微々たる一小商人も、數年居留地貿易に從事する内には、忽にして郊外形勝の地に宏大なる邸宅を構へ、超然として、我國に比較なき豪奢の生活を極む。此一事既に我國人をして居留地貿易の利の大なるを思はしむるに難からざるに、搗て〻加へて、是等居留地に於ける外國商館に雇はれ居る『商番』即ち商館番頭てふ下等人物に至るまて、月給僅か三四十圓を出ざるに、頗る人目を聳動するが如き贅澤三昧なる生活を敢てするは、不正なる「コンミッション」によるものならんも、さりとて斯かる不正の支出を充分に承知しながら、一向意に介せざりしが如き外商の鷹揚なる態度は、偶々以て居留地貿易の利益の莫大なるを立證するものなり。傳へ言ふ、居留地貿易全盛の時代に、商館は百斤の茶を輸出する毎に、金十圓を利益したりと。一事は萬事なり。當時彼等の收利如何に大なりしかは想像するに難からざる可し。之を要するに、從來、外國商館の主從ともに商人にはあるまじき放埒を働き、又我國社會に比類なき豪奢を極めながらも、尙ほ優に莫大なる所得を收めたるは、『士族の商業』と申す事あれど、之は實に『大名の商業』にして、此事實は、我國人をして常に羨望の念に堪えざらしめ、機會の乘ず可きあらば、取て以て之

に代はらんとの猛志を懷かしむるの誘因たりしや疑を容れず。殊に我國の商人が外國貿易の事情に通ぜず、進んで直輸出するの氣力なきに乘じて、隨分亂暴なる取引方法を定め、勝手氣儘なる商慣習を造りたるの例枚擧に遑あらず。之を我最重要輸出品たる生絲に就て見るに、俗に『拜見』と稱へて、先づ生絲を商館の倉庫に引き取り、其の檢査を終る迄、商談を行はざりき。勿論、之は當時本邦の製絲家も、將又生絲問屋も、見本通りの生絲の提供を保證する能力なかりし爲め、止を得ざるに出でたる商慣習なれども、慣るゝに從て、外商は之を濫用したるの形跡少なからず。即ち名を『拜見』に假りて、外國に賣口を求め得るまで、其の儘自己の手元に保留し置き、萬一、海外に於ける賣約整はざるに於ては、品質不良なりとの口實の下に、所謂『ペケ物』として用捨なく刎け、其の儘引き取らしめたるなり。此種の事たる、獨り横濱に於ける生絲に就て行はれたるのみならず、又神戸に於ける花莚に就ても行はれ、更に、製茶、羽二重其の他の我重要輸出品の如きも、偶々粗製濫造又は見本相違の批難あるに乘じ、之を奇貨として、略ぼ同一の手段に飜弄せられたること少からざりき。

（二）

それも我商人に直輸出の能力なく、輸出は一切之を外商に依賴せざるべからざる以上は、多少專横の處置に飜弄せらるゝも屈する外なく、只管外國商館の鼻息を窺ふ外、致方なき次第也。されど之れ我商人の永く堪ゆる所にあらざるに、永らく商館に出入する内には次第に外國貿易の呼吸にも通じ、又海外に往來する者多きに連れ、外國事情にも通じ、殊に明治十年此方、高等商業學校等を設けて、貿易上の知識の普及を計り、正金銀行、郵船會社等、貿易上の機關も一と通り整ひたれば、邦人中、多少資力あり、氣力あり、經驗ある者、進て直輸入を計畫し、再進して直輸出を企圖するの機運を生ずるに至れり。

此際、邦人の最も困難に感ぜしは、廣く低利の爲替取組を得る能はざりしと、一般に本邦の商品並に商人

の信用薄かりしとなりき。之を以て政府は先づ第一に日本銀行をして低利の資金を正金銀行に貸與せしめ、正金銀行をして、海外各地に支店を增設すると同時に、上記の融通を爲替資金として、低利の爲替取組に應ぜしめ、又取引開始に必要なる信用狀の發行に資せしめたり。次て横濱神戸に生絲花莚等の検査所を開きて以て、邦人の直輸出品に對し、商館の検査同樣の信用を有せしめんと圖れり。此内最初に計畫せる生絲検査所の設置に就て、外商は激烈なる反對運動を試み、検査所經由の生絲は一切商館に於て取扱はずとか、又は検査所に於ける検査の無効を本國に傳ふるとか、色々樣々なる直輸出防害策を講ぜり。されど是等外商の反抗運動は獨り効を奏せざりしのみならず、却て直接貿易に對する内商の決心を强め、勇氣を鼓舞したるもの丶如し。

其の後間もなく日清戰爭となり、條約改正となり、國威漸く揚ると與に、後商人の信用も亦加はり、直接貿易頓に發展したるは、正に此時なりき。即ち明治二十五年には、我が輸出總額中、内商の取扱高尙ほ一割二分五厘にして、輸入總額中、内商の取扱高僅に一割九分三厘に過ぎざりしもの、僅々五年の後たる明治三十年には、前者は二割七分二厘に、後者は三割六分二厘に急增しぬ。越えて明治三十七年日露戰爭起り、外人には寔に意外なる我國の大捷利となるや、忽ち之を世界の一等國なりと認め、曩に實力以下に輕視せるの反動は、今や實力以上に重視するに至り、本國に對する政治上、軍事上の信用は、日本人に對する經濟上、貿易上の信用となり、是迄對手にせざりし歐米の生產者にして、今は進て直接取引の開始を申込むもの、俄に增加し來れるが上に、新に亞細亞大陸に開拓せる我が勢力範圍は同時に我が利益範圍となりたるを以て、輸出入與に直接貿易上に一大飛躍を見るに至れり。

斯くて我國の商人は戰勝の餘威に乘じて、直接海外の商人と接觸し、握手し、貿易するに至りたるを以て、本邦に於ける居留地商館は、次第に其の重要の度を失ひ、取引薄きに、是迄通りの門戸を張り、今迄の如き

贅澤なる生活を繼けんには、到底收支償はざる可きを以て、機を得ば一日も早く旗を卷て本國に引上げ、若しくは、支那南洋等有望なる他國に轉ぜんと、窃に畫策を廻らすもの漸く多きを加ふ。斯る矢先に當て、明治四十年下半期に於ける海外の一大恐慌あり、次て四十年春以來、內地にも亦事業界の失態に基く一大不景氣生じ、內外共に資金の回收全く杜絕せしかば、居留地に於ける外商の窮迫日に月に加はり、倒産閉店續出せり。加之、日露戰爭後、外商は居留地貿易の衰微に連れ、收益薄きと、取引閑散なるとにより、蠣殼町、北濱邊に出入して、定期取引に浮身を俏すもの多かりしかば、貿易以外に此方面に於ける失敗により、一大蹉跌を來たし、終に致命傷を受けたる者も亦甚だ多し。近時我國に於ける獨佛商人又は支那商人中、屈指の者前後踵を接して打倒れたるは、遠因は兎に角、近因は多く玆に存するもの丶如し。

（三）

數字は讀者の目に煩しけれど、之に依て以上論述せる所を立證せんこと、差し當り必要なるべければ、暫く讀者の寬恕を請ふて、一と通り本邦商權推移に關する統計研究に從事せん。先づ第一に大藏省編纂「大日本外國貿易四十一年對照表」により、明治七年以來本邦輸出貿易並に輸入貿易中、內外商人の取扱に係る金額並に其の割合を揭記せんに、大畧左の如きものあり。

年度	輸出總額（千円）	內商取扱高（千円）	百分率	外商取扱高（千円）	百分率
明治七年	一九、三一七、	一〇六、	〇、五	一八、八九六、	九七、八
同十年	二三、三四八、	八四二、	三、六	二二、〇六〇、	九四、四
同十五年	三七、七二三、	四、二〇九、	一一、一	三二、七六九、	八六、八
同二十年	五二、四〇八、	六、五五五、	一二、五	四三、九九六、	八三、九
同二十五年	九一、一〇三、	一一、三九五、	一二、五	七七、九四四、	八五、五
同三十年	一六三、一三五、	四四、三七四、	二七、二	一一五、〇二四、	七〇、五
同三十三年	二〇四、四三〇、	七三、三八二、	三五、八	一二四、六八二、	六一、〇

年度	輸入總額（千円）	內商取扱高（千円）	百分率	外商取扱高（千円）	百分率
明治七年	二三、四六一、	七四、	〇、三	二三、一二八、	九八、五
同十年	二七、四二〇、	四二五、	一、五	二六、二八四、	九五、八
同十五年	二九、四四六、	九〇四、	三、〇	二七、九九六、	九五、〇
同二十年	四四、三〇四、	五、〇三〇、	一一、四	三七、三六六、	八四、三
同二十五年	七一、三二六、	一三、八一三、	一九、四	五六、二六四、	七八、八
同三十年	二一九、三〇一、	七九、五六一、	三六、三	一三八、八八〇、	六三、三
同三十三年	二八七、二六二、	一一三、七三七、	三九、二	一七三、四二四、	六〇、四

(備考) 本表輸出總額中には、内外商取扱高の外に、船用輸出を含み
又輸入總額中には、内外商取扱高の外に、官廳の直接輸入を含む。

由是觀之、明治七年には直輸出額僅に五厘、直輸入額僅に三厘にして、我國に於ける外國貿易の權殆ど全く外商の掌握する所なりしが、明治三十三年に至ては、前者は三割五分八厘に、後者は三割九分二厘に增加し、此間二十七年間に、直輸出は十萬六千圓より七千三百三十八萬二千圓に、直輸入は七萬四千圓より一億一千二百七十三萬七千圓に激增せしは、驚く可き現象なりと謂ふ可し。而して明治三十三年以後今日に至るの間に於て、更に著しき增加ある可きは、誰しも疑を容れざる所なれど、惜哉、其の以後の統計存せず、前掲大藏省編纂の統計表中にも亦之を缺くを以て、最近の趨勢は之を神戸及び横濱兩港の貿易に徵するの外なからむ。仍て先づ神戸稅關編纂の「神戸港外國貿易概覽」に基き、神戸港に於ける貿易中、内外人取扱高を表示すれば、左の如し。

	内商取扱高	百分率	外商取扱高	百分率
(輸出)				
明治二十年	一、三〇七、千円	一〇、二	一一、四六三、千円	八九、八
同 二十五年	二、〇四二、	九、六	一九、二五四、	九〇、四
同 三十年	一五、四三五、	三〇、〇	三五、九七五、	七〇、〇
同 三十四年	一九、二六六、	二四、八	五八、九四〇、	七五、二
同 三十九年	四〇、三二〇、	三六、五	七〇、二九六、	六三、五
同 四十年	四〇、七八九、	三八、二	六五、八七九、	六一、八
同 四十一年	三三、九〇一、	四〇、三	五〇、二一三、	五九、七
同 四十二年	四五、六三〇、	四三、四	五九、五九六、	五六、六
(輸入)				
明治二十年	一、六八〇、	一三、一	一一、一七三、	八六、九
同 二十五年	六、二四四、	二〇、三	二四、四五三、	七九、七
同 三十年	四二、八九七、	三八、七	六七、八四五、	六一、三
同 三十四年	四六、五七一、	三七、〇	七九、四〇八、	六三、〇
同 三十九年	八九、五五七、	四六、六	一〇二、六六三、	五三、四
同 四十年	一二四、五八五、	五五、七	九八、八五二、	四四、三
同 四十一年	一一〇、二四九、	五七、七	八〇、八三三、	四二、三
同 四十二年	一〇九、二四五、	五九、三	七四、九八〇、	四〇、七
(輸出入)				
明治二十年	二、九八八、	一一、二	二二、六三六、	八八、八
同 二十五年	八、二八六、	一五、九	四三、七〇七、	八四、一
同 三十年	五八、三三二、	三六、〇	一〇三、八二〇、	六四、〇
同 三十四年	六五、八三七、	三二、四	一三八、三四八、	六七、六
同 三十九年	一二九、八七七、	四二、九	一七二、九五九、	五七、一
同 四十年	一六五、三七四、	五〇、一	一六四、七三二、	四九、九
同 四十一年	一四四、一五〇、	五二、四	一三一、〇四五、	四七、六

同　四十二年	一三三、八六六、	三三、七	一三一、九七五、	四八、三

由是觀之、最近二十三年間に神戸に於ける直輸出は一割より四割三分に、直輸入は一割二分より五割九分に、而して全直接貿易に於ても一割一分より五割四分に激增せるを見る。豈に獨り神戸のみならむや。横濱に於ても亦略ぼ同樣にして、大略左記の如き趨勢を現はす。

	明治三十三年 金額（千円）	明治三十三年 百分率	明治四十二年 金額（千円）	明治四十二年 百分率
輸出貿易				
内商取扱高	二二、二七二、	二三、	八四、九三四、	四一、
外商取扱高	七三、八五三、	七七、	一二〇、二二八、	五九、
合計	九六、一二五、	一〇〇、	二〇五、一六三、	一〇〇、
輸入貿易				
内商取扱高	三一、四三一、	二九、	五九、三〇九、	四五、
外商取扱高	七八、三四三、	七一、	七一、六九一、	五五、
合計	一〇九、七七五、	一〇〇、	一三一、〇〇〇、	一〇〇、
輸出入貿易				
内商取扱高	五三、七〇四、	二六、	一四四、二四四、	四三、
外商取扱高	一五二、一九六、	七四、	一九一、九二〇、	五七、
合計	二〇五、九〇〇、	一〇〇、	三三六、一六三、	一〇〇、

即ち最近十年間に直輸出に於ては二割三分より四割一分に、直輸入に於ては二割九分より四割五分に、而して全直接貿易に於ては二割六分より四割三分に昂進しぬ。

（四）

此際特に我國貿易品中の二大關たる、輸出にあつては生絲、輸入にあつては棉花に關する商權の消長を一瞥せむこと、興味なきにあらず。按ずるに本邦生絲の輸出貿易たる、維新の當初にあつては、全く外商の掌中に歸し、製絲家を初め賣込問屋に至るまで、只管居留地商館の鼻息を窺ひ、唯命維れ從ふの有樣なりしは、曩に述べたる所の如くなりしが、近時我經濟界の發展に連れ、之が商權も亦漸次我貿易家の手に回收せられんとす。試に已往十年間に於ける内外商の取扱高を比較對照せむに、左の如きものあり。

年度	外商輸出高	内商輸出高	外商輸出高に對する内商輸出高の割合
明治三十年	一〇九、一九七、擔	一八、八四七、擔	一、七割
同　三十五年	九七、四六九、	三九、四二三、	四、〇
同　三十六年	八四、二三〇、	三三、七〇五、	四、一
同　三十七年	一〇九、六五一、	五五、七二八、	五、一
同　三十八年	七五、五〇〇、	四七、二七八、	六、三
同　三十九年	一〇二、五五〇、	八〇、四九〇、	七、八
同　四十年	七三、九六八、	六五、一五二、	八、八

方今横濱に於ける外國商館は實に二十五の多數なるに、內商の直輸業を經營するは僅に三井物產、生絲合名、同伸、原合名の四會社あるに過ぎざれども、三井及び生絲合名の飛躍は驚くべき成績を擧げ單に米國向輸出額のみを以てすれば、優に外國商館を凌駕せんとす、原輸出部の如き固より前兩者に及ばざる遠しと雖も、漸次取扱高を增すの一事は注目すべき所なるべし。此趨勢により進んで止まざらむか、一兩年の間に內外取扱額を折半するに至るは勿論、一歩進て我れ彼を凌駕するは期して待つ可きなり。

次に本邦輸入貿易の大關たる棉花取引の狀況を見るに、我が紡績業が未だ今日の如き盛況に至らざりし當初にありては、原棉の供給は殆ど全く外商の獨占する所なりしも、爾來紡績業の發達と與に、內地棉花商の信用と資力とは漸次嵩まりて、直輸入を企つるもの次第に增加し、今や原棉の輸入は殆ど外商の手を離れて、內商の掌中に歸し、彼我の位置將に顚倒せむとしつゝあり。今本邦紡績の需要最も多き印度棉に就て之を見るに、實に左の如き變遷を現す。

年度	內商數	外商數	內商輸入高	外商輸入高	直輸入の割合
明治三十四年	六、	一二、	一〇四、七三九、	一六三、四五七、	三、九割
同　三十七年	九、	一二、	一三九、八〇〇、	二〇九、六三〇、	四、〇
同　四十年	一六、	一五、	三二九、三六一、	九三、八一五、	七、八
同　四十三年	一四、	一七、	五五六、〇一八、	一二九、三二三、	八、一

即ち全輸入額中直輸入にかゝるもの、十年前には三割九分に過ぎざりしに、今や八割一分に上る。以上は印度棉に就ての話なれど、神戶輸入の繰棉全體に就ても亦略ぼ同樣の有樣にして、明治四十一年に於ける輸入額五千八百五十萬八千圓中、外商扱千五百九十五萬七千圓即ち二割七分、內商扱四千二百五十五萬一千圓即ち七割三分、又四十二年に於ける輸入額六千九百九十五萬二千圓中、外商扱千三百八十一萬七千圓即ち二割、內商扱五千六百十三萬五千圓即ち八割に當る。

序に明治四十二年神戶及び横濱稅關の調査に基き、兩港に於ける一切の重要輸出入品に就き、內外商取扱高の割合を表示せば、一には各品に關する現狀に通曉し得可く、二には此後努力す可きの方面を察知し得可

し。仍て左に其の大要を掲げむ。

神戸の部（明治四十二年度）

（輸出）

	内商扱	外商扱
米	七六%	二四%
綠茶	二六	七四
銅	八一	一九
寒天	八	九二
樟腦	七九	二一
薄荷油	一三	八七
魚油、鯨油	六〇	四〇
木蠟	三四	六六
絹織物	六三	三七
羽二重	二二	七八
綿フランネル	三六	六二
綿縮	四〇	六〇
浴巾	二八	七二
綿メリヤス肌衣	三九	六一
貝釦	四二	五八
紙類	六八%	三二%
銅	一五	八五
磁陶器	四六	五四
玻璃製品	二四	七六
竹材	三九	六一
木材及板	五二	四八
麥稈及經木眞田	二八	七二
花莚	二五	七五
竹製品	二五	七五
洋傘	四	九六
扇子團扇	二八	七二
ブラシ	七九	二一
玩具	二六	七四
燐寸	四二	五八
合計	四〇	六〇

（輸入）

	内商扱	外商扱
米	三〇%	七〇%
大豆	七七	二三
コンデンスミルク	一	九九
砂糖	九九	一
革類	二〇%	八〇%
石油	〇	一〇〇
乾藍	一	九九
アニリン染料	一五	八五
毛絲	三六	六四
生、晒金巾	二一	七九
綿繻子	四四	五六
更紗	二六	七四
羅紗	四九	五一
モスリン	五五	四五
紙類	七八	二二
鐵鋼塊	五六	四四
鐵鋼條竿	五二	四八
鐵鋼板	六一	三九
亞鉛板	四九	五二
鐵釘	二九	七一
自轉車	三五	六五
紡績機	八六	一四
電氣機械	五五	四五
パルプ	五九	四一
硫酸安母紐亞	四八	五一
生綿	三〇	七〇
繰綿	八〇	二〇
羊毛	三七	六三
油糟	五三	七四
玻璃板	八〇	二〇
合計	四二	五八

横濱の部（明治四十二年度）

（輸出）

	内商扱	外商扱
生絲	四七%	五三%
羽二重	四〇	六〇
銅	一八	八二
製茶	一一	八九
生皮苧	一	九九
絹製手巾	二七	七三
熨斗絲	二	九八
海産物	九	九一
絹織物	九九	一
魚油	一八%	八二%
製帽用眞田	四二	五八
煙草	九九	一
精糖	一〇〇	：
毛皮	二三	七七
琥珀	一一	八九
漆器	三五	六五
百合根	七三	二七
綿布及絹布	一三	八七

眞綿	一	九九
醬油	九四	六
綿縮	二三	七七
陶磁器	三四	六六
其他	三九	六一
合計	四一	五九

（輸入）

	内商扱 %	外商扱 %
繰綿	五六	四四
油精	九四	六
機械類	四六	五四
羊毛	四七	五三
砂糖	八五	一五
米	八九	一一
金巾及更紗	一四	八六
石油	：	一〇〇
羅紗類	三七	六三
硫酸安母尼亞	二七	七三
葉鐵	四六	五四
印刷料紙	五四	四六
乾藍	：	一〇〇
條竿鐵	一六	八四
電線	二五	七五
大豆	九七	三
革類	五八	四二
銑鐵	四九	五一
生護謨	三四	六六
麻類	五七	四三
鐵釘	三五	六五
コンデンスドミルク	九六	四
小麥粉	七七	二三
板鐵	四二	五八
鐵道機關車	二六	七四
燐礦石	五七	四三
綿天鵞絨	一五	八五
自轉車	七七	二三
小麥	八八	一二
塊鐵	五九	四一
過燐酸石灰	五一	四九
懷中時計	五三	四七
苛性曹達	三六	六四
胡麻子	一	九九
其他	三〇	七〇
合計	四五	五五

（五）

更に外商間に於ける商權推移の狀態を觀察するも、亦一興なきにあらず。開國當初に於ける我國の貿易は、外商とは言へ、其の實、殆ど全く和蘭人及び支那人の掌中にありしが、爾來、漸く英米人の手に移り、居留地貿易の大半は永く是等兩國人の獨占する所となりたり。然るに近年に至り、獨逸商人の到來著しく、英米人に比し日常の生活程度低きと、日本語の習熟に力むると、愛敬多きと、取引敏活なるとにより、盛に英米人の繩張りを侵し、須臾にして各港居留地内到る處に三色旗の跳梁跋扈を見るに至れり。されど獨逸商人は尙ほ之を以て甘ぜず、新進の勢に乘じ、一擧に地盤堅き英國商人の得意を奪はんとて、英國商人の如き手堅き取引法を避け、六十日目拂乃至九十日拂といふが如き、盛なる延取引を許せしかば、成功著しかりしも、失敗も亦著しく、前年内地に於ける一大恐慌に際し、内商の破綻續出するや、最も手痛き打擊を被りしものは、實に是等の獨逸商人なりき。獨り我國に於てのみならず、支那に於ても獨商成功の原因は此種の延取引法にあり、其の失敗の原因も亦此種の延取引法にあり

たるは、一時獨商の勢力第一と稱せられたる天津居留地に於ける昨年の悲劇に徵して明かなり。畢竟するに、我國に於ける商權推移の有樣は、恰も彼の走馬燈の如く、蘭は英に逐はれ、英は獨に逐はれ、而して獨又日に逐はれんとす。讀者若し閑を得ば、試に横濱又は神戶居留地を散策せられよ。綠蔭影冷しき居留地內到る處、最も人目を聳動す可きは、唐様ならねど筆跡床しき「かしや札」多きと、横文字なれども正しく日本商なる招牌多きとなる可し。

さあれ今日とても居留地貿易全衰せしにはあらず、英商去て跡なきにあらず。今も尙ほ我國貿易の一半は居留地の關門を通過せざる可からず、今も尙ほ居留地貿易の一半は英米人の手にあるなり。全貿易に就ての統計なけれど、獨り神戶に於ける貿易に就き、各國人取扱高統計存すれば、之を千分率に改て以て內外各國人間に於ける商權推移の一斑を知るの便宜に供せむ。即ち左の如し。

（輸出）	三十九年	四十年	四十一年	四十二年
日本人	三六五	三八二	四〇三	四三四
清國人	二一二	一六一	一六二	一五五
英國人	一五三	一六〇	一四九	一七〇
獨逸人	一八九	二〇六	一七三	一三九
米國人	五七	六六	九一	八一
佛國人	六	九	一四	一三
瑞西人	六	八	|	|
和蘭人	二	|	二	二
丁抹人	一	二	一	一
葡萄牙人	四	三	一	|
墺太利人	|	|	一	一
伊太利人	一	一	一	一
西班牙人	一	|	|	一
不詳	三	二	二	二
計	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇

（輸入）	三十九年	四十年	四十一年	四十二年
日本人	四六六	五五七	五七七	五九三
清國人	九三	八一	七八	七七
英國人	二一八	一六六	一六七	一六四
獨逸人	一四二	一二八	一〇三	一〇八
米國人	五九	五一	四九	三六
佛國人	八	六	一三	一四
瑞西人	九	七	一〇	六
和蘭人	二	一	一	一
丁抹人	一	|	|	|

葡萄牙人	一	一	一	—
墺太利人	—	一	一	一
伊太利人	—	—	—	—
西班牙人	—	—	—	—
不詳	一	一	—	—
計	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇

由是觀之、方今我國の外國貿易なるものは、日本人以外に於ては、專ら英米獨濟の四國人に依て營まれ居るものと稱するを得可く、就中、今尙ほ英國人を以て最大となせども、輸出貿易に於ては、明治三十九年より同四十一年に至るまで、獨逸人は遙に英吉利人を凌ぎ、唯四十二年に於ける獨商失敗の結果、同年に於てのみ稍々遜色を見るに過ぎず、將來遂に獨商の天下を見るに至らざる可きか、頗る注目を値するものありと謂ふ可し。斯くて外商間には盛衰の變著しけれど、全體に於ては皆悉く衰頽して、內商獨り日進月歩の勢を呈す。

（六）

最後に以上論じ去り論じ來る所を一括して論斷せむに、今や我國の外國貿易なるものは、(一)輸出入與に其の商權の半を恢復し、(二)就中輸入貿易は輸出貿易に比し恢復力多く、(三)又直輸出中特に發達の著しきは東洋方面なるが如し。此內、第三の原因は近時東洋方面に於て我國の軍事上政治上の勢力著しく加はりたると、西洋方面に比し抵抗力薄弱なるとに歸するなる可く、第二の原因は、賣るは買ふの易きに如かざるに存するなる可く、對手の側より論ずるも輸入は內地の消費に起因するものなるが故に、消費者と直接接觸するものは即ち內地商にして、其の內地商は又內地商より輸入するを便利となす可く、輸出の場合には全く之と反對の關係にあるを以て也。而して第一に就ては更に數言を費さざる可からざるものあるを覺ゆ。

近年我國に於ける直接貿易の發達著しく、今や全貿易の半は我國商人の掌中に歸せしといふと雖も、尙ほ未だ全からず。殊に國に就て言はゞ對歐米貿易の如き今尙大半外商の手に依り、又品に就て言はゞ茶、銅、花莚、眞田、石油、乾藍、羽二重、化學製品等の貿易の如き殆ど外商の掌握する所たること、今尙ほ昨の如

し。是れ抑も如何なる原因によるか。個々に就て論ぜば種々由來する所ある可けれど、大局に就て達觀せむには、外商は一般に資力豐富なるが上に、內外に亙て廣く且つ鞏固なる聯絡を有すること其の一なり。外商は多く輸出入を兼營するが故に、爲替其他取引上に便宜を有すること其の二なり。外商は今尙ほ多く本國の製造元との間に一手販賣權を有すること其の三なり。而して內商中には違約破談其の他取引上の信用を害するもの尠からざること其の四なりと謂ふ可し。

居留地貿易の衰微せる今日、復昔日の如く鉅商多からざるも、之を內商に比すれば。今尙ほ一般資力豐富にして、而も海外各地に有する商業の聯絡たる、根柢頗る鞏固にして、容易に動し難く、支那滿洲の如き內商の勢力扶植に便なる地方を除くの外、到底覬覦を許さゞるもの少なからざる可く、從て此種の地方に對する貿易は今尙ほ外商の力を藉るもの丶如し。且つ夫れ外商は一般に輸出入與に之を兼營するが故に、チャーターの場合に於ても、又爲替に關しても、其の他取引擴張上に少からず便益を有するものなるに、內商にして新に直接貿易を企つるものは、直輸入にあらずむは則ち直輸出一方なるが故に、比較的出費多く、又比較的資金多くを要す。內商が容易に外商を壓倒する能はざる所以の一は全く玆に存す。加之、別に又內商が外商の手より奪ふ能はざる輸入あり。そは外商がそれ〳〵本國の製造元との間に一手販賣の特約ある商品なりとす。此種類の商品は今も尙ほ多數にして、從て內商の直輸入發達の上に、常に甚しき妨害となる。勿論、近年海外に於ける製品改良の氣運旺盛なるが故に、外商が專賣權を有する昨年の最上品も、最早や今年の最上品にあらず。需要頓に減少し、多額の輸入をなす能はざるに至るのみならず、甚しきは數年にして全然其の需要杜絕するものも亦尠なからず。之を以て、新製品の出現する每に、彼等の有する特權の價値減少する一方に、新製品の本邦に於ける賣込に就ては、製造元と雖も、是迄本邦に於ける外商の專橫と貪慾厭くなきの暴狀に苦しめる折柄、日露戰後日本人に對する尊敬の念

加はると與に、此後は寧ろ內地の事情に精通せる內商の手に依るを便利とするに至れるを以て、スタンダードの如き、ライジングサンの如き、本邦に直營の店舗倉庫等を有するものの外、此種の一手販賣權も漸次邦人の手に移らむとする傾向なきにしもあらず。されど全然轉化するに至らざる今日、今尙ほ外商の命脈存する所以の一は、確に此一手販賣權なるものゝ上にありといふを憚からず。それも本邦商人にして專ら確實を旨とするに於ては、戰後の恢復力今一層偉大なりしならむも、人々是に留意せず、屢々違約破談を敢てし、折角の信任に反くの行動に出づるものありたるが上に、又往々見本と相違せるもの、若くは品質粗惡にして注文價格と非常の懸隔あるものを賣付けむとするが如き、悖德汚行續出せしかば、本邦商人に對する信用は地に落ち、商業道德の缺如を云々する聲漸く喧きに至れるは、確に商權の恢復の機運の上に、一大頓挫を來たさしめたるものゝ如し。之を以て我國商人の常に唱導する所の、直接貿易奬勵策として、金融機關を整備す可し、交通機關を完備す可し、通信機關を刷新す可しといふが如きは、固より至當の要求なれども、內商自から前記の四點に留意し、反省し、改良する所なくむば、到底其の目的を貫徹する能はざらむ。殊に是れ迄は主として輸入貿易權の恢復なりしかば、比較的容易なりしも、此後更に一步を進め、輸出貿易權をも其の掌中に、收めむとする一段に至ては、事決して容易ならず。輸入貿易に於て我に便利あるは、即ち輸出貿易に於て彼に便利あるを意味するものなるを思はゞ、過去の成績を以て直に將來を推す可からず。我國商人の奮勵一番を要するは、即ち此後にある也。

中等教育の裏面

文學博士　松本文三郎

大學側の人は毎々現時學生の學力不足を嘆じ、特に語學の力に於て遙かに以前よりも劣つて居たといつて高等學校に向ひより多くを要求する、が高等學校の敎官は之を以て中學敎育の不備に歸さんとする傾があり、中學の方からいへば又それ〴〵言ひ分があらうと思ふ。其失の果して何れにありとするも、少數の秀才を除いては、現時の學生の學力が一般に十年乃至二十年以前に比して低下したことは事實であらう、併し又之を以て一概に敎育法の如何にのみ歸することも稍穩當ならざる議論てある。昔は高等學校や中學校の數も比較的少く、從つて之に入學するものは少數の選拔された青年であつたのである、然るに現時は高等學校も中學校も共に其數が非常に增加した、結果、高等學校の如き、其入學の際には難關を通過し、選拔されなければならぬとはいふものゝ、其收容人員は遙かに以前よりも多くなつて居る、從つて餘り秀雋ならざるものも容易に之に入り來ることが出來る、其收容人員が益多くなるに隨つて平凡なる學生の多くなることも爭はれない事實である。秀才は如何なる時代にも多くあるものでないから、平凡なものが多くなるに隨つて、學力の一般に低下するのは必然の勢である。

高等學校は固より論ずる迄もなく、中學校といへども現時のものを以て之を二十年以前のものに比較すれば、其設備の整頓、敎官の優秀、乃至敎授法の巧となつたことは著しい事實である。だから理論上からいへば假令ひ現時の入學生の學力が昔に比して少しばかり劣つて居ても、彼を以て之を補ひ尙ほ餘りあるべきであるが、實際上は何處の學校にあつても、其創立の際、

不完全な設備の時代には優等生が出てゝ次第に其設備が整ふに從ひ、活氣がなくなつて平凡なものが多くなるやうであり、之には又色々の原因があるが、兎に角今の中學も亦實に此弊に陷ゐつて居るのである。

高等學校に於ても中學と略同樣であらうと思ふが、今之を具體的の事實に徵することが出來ないから姑らく此には論ぜぬ。中學校に就いては每年文部省が「高等學校大學豫科入學者選拔試驗報告」なるものを出版し、之を關係學校に配布して居る、昨年の分も此四月に發行されて居るから、吾人は之によつて略其狀態を想像することが出來る。昨年の試驗には殊に「中學時代の回想」なる作文の題があり、靑年が赤裸々に中學時代の感想を書いて居るので、一層能く其裏面の眞相を觀ることが出來る。中には勿論此にいふ所と無關係の旅行や、朋友の思出等のことを述べたものもあれば、師友に對する感謝の意を述べたものもあるのであるが、第三高等學校の報告によると「師長ノ提撕ニ對スル感謝ヨリモ、寧ロ自己ノ怠惰ヲ悔恨スルモノ多イ、而シテ其怠惰ノ原因ヲ運動遊戲ニ對スル嗜好ノ偏倚スルモノ多シ」とあり、第五高等學校の報告にも「悲觀悔悟的文モ亦多數ナリキ、……不勉強ナリシヲ悔イ、朋友ヲ擇バザリシヲ悔イ、人格ノ修養ヲ怠リシヲ悔イ、『每年々々勉强すべし〳〵と決心しつゝも』、又は『一瞬間の決心は以て年來の慣習を破り能はざりき』ナドノ句此許多ノ篇ニ見受ケラレタリ」等とある。固より之を以て全體を推す譯には行かぬが、兎に角現時の中學生には不勉强怠惰にして學業に忠實ならざるものゝ甚だ多い事は疑ない、而して現時中學生に盛に行はるる運動なるものが與つて大に力あることも事實であらう。運動は人生に缺くべからざることであるから、運動の奬勵は大に望ましいのではあるが、之が爲め學業を懈怠し、其素志を誤まるに至つては大に當事者の一考を煩はさなければならぬことゝ思ふ。それ其の罪は運動にあるのではなくして、運動の方法如何によるのであるから、當事者は今一層運動の方法に就いて考究せられんことを希望する。が其れは尙ほ幾分恕すべし

としても、第八高等學校の報告には吾人は實に驚かざるを得ないものがある。或は「諸先生ヲ蟲ノ如ク思ヒタリ」といひ、或は「諄々タルノ教師ヲ度外シ」といひ、或は「師ノ進歩ノ早キヲ理由トシテ全部缺席シ教師ノ惡ロヲナス……教師モ手ニアマセリ」といひ、或は「父母ノ命モ雷地震等ト比シテイチジルシク輕ンズルニ至ル」といひ、或は「父常理ヲ解セズ、……父ハ金ヲ多クトルコトモ出來ズ又休日ハ日々安閑トシテ時間ヲ空費シ、徒ニ怠惰ヲノミ之レ事トス」といひ、或は中學時代ハ先生ノ教ヘ方一ニテ將來良キ方ニモアシキ方ニモナルナリ墮落生ノ出ヅルハ中學教育ノアシキ故ナリ」と迄放言して居るものもある。此等に至つては子弟の分として、實に言語道斷の考方ではなからうか。此の如き心得を以て日々其教場に出席して居るとすれば、如何に設備が整つて居ても、如何に教授の法が巧であつても、書生の人格を養ひ、學業の進歩の望むべからざるは當然といはなければならぬ。於是乎余輩は思ふ、現時の如き中等學校に於ては、設備の整頓も望ましく、教官の學力ある者も必要であるが、更らにそれよりも必要なのは人の侮を受けざる人物である。又修身杯に於ては忠孝を說くも宜し、愛國を說くも結構であるが、尙ほ一層それよりも根本的に必要なのは常識の養成である。常識がなくては小にして一身を誤まり、一家の不和を釀し、大にして社會擾亂の基ともなるのである。

現時の中學生が其師を敬せざるの結果、其學業の懈怠不注意を來し、而も一定の試驗に及第することを得なければ卒業することが出來ないものであるから、一時を糊塗して其體裁を飾らんとするに汲々たるとは、前記報告の中至る所に顯はれて居る。今左に其最も著しきものゝ數例を揭げて讀者の一覽に供し、今の中學生は如何なるものであるかの一斑を知らしめやうと思ふ。

第五高等學校の報告(歷史)には受驗者中中等教育を受けて卒業したる者とは信ずる能はざる程無常識のもの少からずといひ其例として「水戸光圀ノ日本考記、

日本外史、」「松平定信ノ大日本史」「頼山陽ノ日本書記史記」などゝいひ、乃至岳飛を以て韓國東學黨の首領となし、若しくは戰場若くは媾和締結の場所となす等を擧げてあるが、尙ほ吾人の一層驚くは「天皇辭職云々」「家康即位云々」「皇族には三條實美などありて云々」といふにある。是に至つては吾人も啞然として言ふ所を知らざるのである。

歷史問題の中、岳飛の答案は殊に奇を極めて居る、第二高等學校の報告には、岳飛を以て「七本槍の古戰場なり」となし、尙ほ甚しきは「岳飛字は張良、壯ニシテ秦始皇ヲ要擊セントス、アヤマチテ副車ニ當ツ、匿レテ楚ニ入ル、一老人ニ教ヲ受ケ漢高祖大ニ其才ヲ愛シ、之ヲ茅屋ニ訪ヘリ、有名ナル臥龍三呼トハコレナリ」といふのもある。第五高等學校の報告にも「岳飛ハ勇武大膽ナル人トシテ世ニ知ラル遠征甚ダ多シ、」「岳飛は支那ノ英雄ニシテ戰陣ニ於テ功アリ忠孝ノ道ヲ守リタル豪傑ナリ」、「唐宋時代ニ於ケル有名ナル文剛ナリ書ヲ好クス、」「支那古今ニ通ジテ智德兼ネ持タル大學者ナリ、」「人の名ニシテ此人ハ甚シキ英雄ニシテ常ニ諸國ヲセメ大ニ名ヲ天下ニトヾロカセシ人ナリ」等とあり。一體此等の答案を書いて彼等は果して如何なる點を得んと欲するのであらうか、又彼等は之によつて能く試驗官の眼を瞞着し得ると考へて居るのであらうか、彼等は何を苦みて試驗場に此遊戲を敢てするか、余輩には更らに其眞意が判らぬ。

漢文の試驗に「昔者三代之民」とあり文句を解し、「鎌倉三代、」「三國時代、」「祖父以來三代、」「一般の人民、」「農工商、」「昔の武士」等といへる類の誤謬は何れの學校の報告にもある。殆んど彼等は何の爲めに漢文や歷史を修めたのか判らぬ位である。が古代東洋のことは我と直接の關係もないから忘れたとしても、當時の隣國にして今や我邦の一部たる朝鮮の事に關しても「殷の臣箕子なるもの殷の滅亡するや唐に降るを潔しとせず、直ちに朝鮮に走りて王となる、是れ即ち朝鮮の太祖なり、而して代々唐の封に屬し居たり」といふやうな囈語に類するものが幾らもある。我邦の事では如

何うかといふに、我邦で而も其時代の甚だ近い「德川時代に於ける尊王論の發達」の答案には、(第六高等學校報告)紫式部、辨內侍、大貳三位、赤染衛門等を以て德川時代に於ける尊王論者となし、或は王陽明を以て幕末に勤王論を唱へたる漢學者となし、或は吉備眞備を以て德川時代の國學者にして本居宣長と時を同じくとなすものも少くない。其他林子平、渡邊華山、高野長英を尊王攘夷家となすか如き、又大貳少輔、大縣少武、竹內式部、山內大貳乃至高山林次郎などいふものを勤王家の中に列するが如き、如何に其頭腦の混亂して居るかゞ判る。尙ほ最近明治時代のとに就いても次の如き文があり、「初め西郷南洲隆盛等尊王論ヲ起シテ先ヅ臺灣征伐及ビ韓國ニ對スル問題を起シタルニ、隆盛ノ論即チ征韓論ハ行ハレズ、隆盛國ニ歸リテ私學校ヲ建テ、多クノ青年子弟ヲ集メ、大ニ兵學ヲ敎ヘタリ、然ルニ佐賀ニハ桐野利秋等亂ヲ起シ、時ニ德川氏ニ於テハ此ノ事ヲ聞キテ征代ノ將ヲ遣ハシタルモ、敵シ慶喜逃レテ大阪ニ入ル、會津諸慶喜ヲシテ出デ下ラシメントセシモ遂ニ聞カジ、大政奉還ヲ勸ム、此ニ於テ慶喜大政ヲ奉還シテ今日ニ至レルナリ、」(全ク原文ノ儘)

以上引用する所によつて見ると、彼等には外國のことでも又我邦のことでも、古代の事實も將た近代の事實も、更らに其知識が纏まつて居ない、唯曾て聞いた彼此の記憶が雜然として顯はれ來るのみである。即ち彼等は單に一事實に就いて忘れたのではなく、始めから其知識が統一消化されて居なかつたのである。余輩は中學に於ける歷史教科書の如何なるものであるかを知らぬが、恐らく此の如き事實は確かに記述されてあることゝ思ふ。だから彼等は此等の教科書さへ能く消化して居れば、以上引用したやうな愚なる答案は出來ない筈である。處が此の如き答案が各學校に於て續々顯はるゝのを以て見ると、彼等の自から告白する平素の怠惰不注意は事實の上に歷々として證明さるゝのである。

歷史は從來高等學校入學試験には餘り重きを措かれて居なかつたのであるから、受驗者も特に學習しなか

つたので、此の如き不成績を呈したものと姑らく辯解して置き、他の學科に就いては如何であるかといふに、遺憾ながら他の學科も餘り之と大なる差違はない。試みに漢文の答案中殆んど何人にも解され得べしと思はるれ「老將」を「老弱な大將、」(第三高等學校報告)「名將も衰殘の老人となりては、」(第八高等學校報告)等と解釋するもの至る所にある、又「宗廟」を解して「皇室、」「孔子ノ廟」、「宋ノ朝廷」、(第三報告)「宋トイフ人ノ廟、」等といひ、或は「兵を談せず」を「兵士ノ事ヲ相談シナイ」とか、「兵卒ノ强弱ナドハドウデモヨイ」等といひ、「良賈は深く藏す」の良賈を「人名」とか、「良將の氏名」とかいひ「桃李言はず」の桃李を「支那の詩人、」桃遠明」「李子」等と解するのを以て見ても彼等の知識は容易に之を想像することが出來るではないか。尙ほ少し長くなるが國文の答案の中最も面白いものゝ一例を引用しやう、問題は

老將は兵を談ぜず良賈は深く藏す、言多きものは卑しとせられ、語少きものは憚らる、言を以て招くは無言を以て招くに如かず、語を以て斥くるは無語を以て斥くるに如かず、桃李何を言ひて下おのづから蹊を成せるや、宗廟そも〱何を語つて人あへて瀆さゞるや。

而して其答案には

元老なる大將が兵法を講ぜぬとか又立晴なる商人が慾張りて財産を藏にしまひ込みて少しも出さないとか世人に多く言わるゝものは卑劣な事とせられ又餘りに口數少ないものは世人に憚られる言葉を以て人を呼び寄せるのは言葉を以て呼びよせないで心を以て呼びよせるに及ばない言葉を以て怒り付けないで顏色に表して人を斥けるに及ばない支那の桃李といふ人は如何なる事を云ふて下々の者が自然と蹊を成したのであローか又宗の朝庭はいつたい如何なる事を云ふて人民等が少しも瀆さゞつたか

とあり(第五高等學校報告)。而して此の如き類は少からぬと附言してあり。是に至つては唯に其誤字や宛字やテニハの違杯を喋々する段ではない。

外國語の答案に於ても其珍なるもの甚だ多いのである、餘り長くなるから今は略して置くが、吾人の最も知らなければならず、又中學卒業生の知らぬ筈はないJapan を Jopam, Japon, Japun, Japanese, Janpan, Japane, Zopan, Jane, Jopanen, Janpne, Janpan, と書いたり、或は London, を Londen, Lond, Ladon, Lodon, Lundon, Radun, lundem, Donden, randon, Landon, Rondon, landen, lun, land, laden, Longdon, Loundon, Landau, landant, randam (第四高等學校報告、英語書取)と綴るものもあるのを見れば、其一斑は容易に推察することが出來るであらう。

余輩を以て之を見れば今の中學生の中には己の足下を觀ずして徒らに青空に飛翔する鳥を憧憬せんとするものが甚だ多いやうである。彼等が徒らに卒業後の妄想を夢み、金錢の打算、位階の高下にのみ其心を勞して、日々の課業を懈怠し、其師長を侮蔑し、唯人目を瞞着し、一時を糊塗するをのみ努めて居るのは根本的に其思想が誤つて居るのである。斯くの如くにして其社會に出づるや、至る所に不平を鳴らし、其本務を勉めず、竟には一身の計を誤まり、國家の遊民となる、實に寒心に堪えない次第である。勿論前に引用した答案の如きは、所謂低能兒であつて慈悲的に及第せられたものかも知れぬが、既に中學を卒業したるものが續々として斯かる答案を出すに於ては當事者も亦大に猛省する所がなければならぬと思ふ。而して余輩の當事者に對し大に注意を要することは、第一に教官人物の選擇を嚴正にするにあり、固より學力の如何を顧みざれといふ意義ではない、けれども坊主惡けりや袈裟迄惡いといふやうに、師長が既に侮蔑されると子弟は到底其命を奉じて學業に熱心なるを得ないのである。第二には徒らに分量の多きを授くるよりも、少量でも其の基礎概念、根本思想を自由自在に應用し、手に任せて之を左右に取り得ることが出來るやうに、正確に理解せしむることが必要である。分量の多いのを望まぬ譯ではないが、是れは基礎概念が既に出來た後のことて、根本原理が明かならずして分量の多いのは、徒ら

に思想の混亂を來すのみで何の用をもなさぬ。第三には即ち常識の養成である。常識の養成といつても別に困難なことはない、一切の學科に於て其根本思想を明かにさへすれば常識は自然に養はれる譯であるが、倘ほ其上にも成るべく彼等をして實際社會の狀態に接觸せしむることが必要であると思ふ。倘ほ第四に若し運動によつて學業の懈怠を來すものが多いとすれば、須らく其方法を改良し、運動をして一般學生の共通に行ふ所となし、現時の學校に於て屢見るが如き唯一部のものゝ專有物たらしめず、又興行同樣に他人に觀せしむるといふよりも、寧ろ青年が皆自己の爲めに運動するといふやうにせしめなければならぬと思ふ。如何なる事物如何なる方法に於ても利害の相伴ふことは勢の免れざる所であるから、其害の顯著なるに至つては、速かに之を除くべき他の方法を案出するのは當然である、而して現時に於ける中等教育の弊害は、一言で之を要すれば禪學に所謂「看脚跟下」の一句に止まる。敎官も子弟も只此一句に參じて、日々奉行怠らざらんことを切望する次第である。

（完）

我外交の將來を論じて外交機關の刷新に及ぶ

望月小太郎

一

日英同盟條約なるものは、今から五年後（恰かもパナマ運河の開通する前後）に期限が來て改正を要するが、其時には千九百二年並に千九百五年の同盟條約

の基礎、即ち同盟の範圍其儘を繼續して行くか、最初千九百二年の條約には單に東洋だけの範圍のものを千九百五年には印度迄に擴めたものだが、今度は更に支那、印度以外何れの方面に迄擴めるべきであるか、それとも全然此根本からして改正を要せねばならぬであらうか、此三つの問題が起る。

私は此日英同盟の繼續を望むものだが、之を日本の側から見ると、日本は既に朝鮮を合して事實上大陸的國民となつた。然るに滿洲には十三年後には遼東半島の借地を支那に返さねばならず、其間に又所謂門戶開放、機會均等で、滿洲を列國に向つて開放せなければならぬ、宣言を厲行するは勿論、最近の滿洲に對する四國借款に對しては、將來滿洲の工業に對して清國政府は四國に借金の優先權を與へつゝあれば、近き將來に例の錦愛問題等類似の新鐵道敷設の計畫起らずとは云ふべからず、其結果はどふならふか、殷鑑遠からず埃及に於ける第一の軍勢的地位を得たものは佛國なりしにも係はらず、ベーコンスフキールドが議會の協賛をも經ずしてスエズ運河株の大多數を英國に買收し、引續き英國の資本が埃及に於て其財政上發言權の上位を占めし時は、埃及は事實英領同樣の地位になつた如く、又獨乙が最近數年來頻りに和蘭の屬島へ向て商工業の資本を注入し、異日の素地を造りつゝあるが如く、滿洲に於ける日露兩國は其戰前、戰時、又其戰後に於て如何に赫々たる武力を示し又示しつゝありと雖、滿洲の將來は最早武力の大小に非ずして經濟力の優劣に存することを綜合研究せん乎、四國借款の將來は決して樂觀すべきものに非ずと考ふ。それに又支那全體には何時如何なる騷動が持上るか知らぬ、又米國の艦隊がパナマ通河後太西太平の兩艦隊が聯合し布哇、ヒリピンの海軍根據地が立派に經營せられ、太平洋の一面に於ける優勢なる米國艦隊は動もすれば一部の清國人をして排日親米の煽動政策を利用せしむる機會の起らぬとは斷言出來ぬ、此間に處する日本の關係及び其將來の運命は甚だ重大なものだが、如何せん日本の海上權は餘りに小なるものである、それ故此缺陷を補ふべく

世界の海上權を有する英國と同盟を結ぶことが甚だ利益である。又英國の側から見ても、英獨海軍の競爭は列國の問題となり居り、一方は英、佛、露の連鎖一方は獨、墺、伊の連鎖を以て互に「ドレッドノート」式競爭を續けて居るが、若しも此間に於て獨墺伊の海軍力が英佛露の海軍力と舷々相摩するの近距離比較が起るとするなら英國は全力を注いて北海に努力せなければならぬ、此曉には其東洋に於ける、即ち支那印度に於ける英國の政治上貿易上の利益を依賴する爲、日本の充實したる海軍の力を假らねばならぬ。更に思へば今や巴爾幹半島もボスニア、ヘルツゴビナ二州が墺太利のものとなり其墺の背後には獨逸あり其獨逸が前二州は勿論、土耳其より小亞細亞を一貫してバグダッド鐵道を波斯灣口まで作り出す場合には巴爾幹半島中亞、中亞よりアフガニスタン印度に一貫せる勢力は決して英國獨占のものとならざることは英國政治家と雖ども之を論じて居る、其中亞の大關門たる今日の波斯は幸に英露の協商によつて平穩になつて居るが、今獨逸の新勢力が其處に加はるとなると又一つ紛糾が起る、即ち獨逸の商工業は今既に英國と兩相拮抗する程に進み、東洋のみではなく北米に於ても十分其商工業の勢力を据ゑ、更に南米に於ても大なる發達を見つゝある、斯る有樣て、左なきだに獨逸は英國の競爭者であるのに將來は必ずや又波斯灣頭に於て其競爭對峙を見る運命に至らなければならぬ。

以上、歐洲形勢の推測概ね斯の如しとすれば五年後の國際關係の變遷は如何ならう、差當り亞細亞大陸に直に百萬の大兵を最も有利なる地に送り得る國は、日本以外には何處にもない、之を一考すると英國ては日本との同盟に多大の効果を感ずるに相違ないから此同盟の繼續を望むは日英相互の雙務的利益であることが明かだ。

更に眼を轉じて見るに、米國の經濟的發展は近年驚くべきもので、今ては一年間四百億萬圓乃至五百億萬圓の商工業の生產高があり、向後十年の後には七千億萬圓の生產ある筈になつて居る、是は昨年出た米國十

年間の統計の結果によつて明てある、米國は此富の增加と共に次第に從來の海陸軍の缺乏を補ひ、陸軍準備、海軍擴張をして居る、そしてキユバ、ヒリッピン、ハワイを取つて居る、次第に勢力を東洋に注いで來る、其軍備の擴張、充實と共に又其大資本を亞細亞大陸に入るゝを勉める、現に粤漢鐵道の借款問題に空前の外交的大飛躍を試み、又四國借欵の中心にも立つて働いた如く愈々益々其平和的大資力を亞細亞の中原に用ふるに相違ない、すれば今迄の支那の市場は、英、獨、日、佛露以外に新進氣鋭の米の勢力を入れるといふ事になる、更に又パナマの運河も竣功する五年後にマハン大佐の所謂米國が歐羅巴問題に發言權を有する時で、太西洋から直に地中海に出て列國の係爭問題の中に首を入れる事が出來る、即ち現下の英、佛、露の連鎖、獨、墺、伊の連鎖の中に、太西洋より地中海に及びて亞米利加なる新勢力が一つ殖える譯になる。然るにもと〳〵米は英と文明の起りを一にし人種宗敎の起りを一にする上に、更に英國重要の殖民地たる加奈太が亞米利加に接近して居るから、兩者の間感情の融和し易き素質あると共に更に利害の關係も密接なものがある。此亞米利加が新に歐羅巴大陸へ入つて來ても別に英國に利害の相背く事は無からうけれども、併し飜つて東洋方面を見ると、英國の同盟國たる我日本には如何てある、若し不幸にして萬々一前段一言せしが如く、清國問題等に關して不幸にも日米の意見一致し難き場合が起ると假定するも其際に英國は如何樣な態度を取るてあらうか、即ち五年後の英國は日本との同盟の基礎を那邊に置かんとするものてあらうか、頃日來の英米協約問題の範圍等は實に日本の大研究を要する大問題てある。又支那大陸に對して我商工業を發展し行く將來は如何か、支那大陸は我國商工業の將來最も大切なる市場のみならず英國の利害も同一てあるのてある、そこて支那の和亂如何の運命を研究すれば我日本の武備の强弱、商工業力の消長が如何樣に世界に波動を與へるてあらうか、日本の弱いのが英國に取て不安を感ぜしめるか、日本の强いのが英國に取て安心ならしむるか、此

英國の一安一危、從て我國の一擧手一投足も今日以後は啻に亞細亞のみではなく直に世界に活動を起し、列國議論の問題となる事と思ふ、思ふて玆に到れば我國民は正に冷慮深考熟計周察を重ねて最も賢く其間に處せなければならぬ。是に就いては私かに鄙見がある。がそれは擱置き差當り、外交機關の刷新の關する私見なの一端を話して見やう。

二

日本が此の四十年間に世界の强國と仰がるゝに至つたのは何によるかといふに陸海軍の力である、陸海軍の力の此の如く優勢なのは畢竟天皇御親ら大元帥と爲らせ給ひ、皇太子以下皆軍職を帶びさせ給ひて擧國一致の制と爲つて居るからでもあらうけれども、更に見るに陸軍には參謀本部あり、軍事評定官あり、海軍には海軍評議官あり、それそれ評議の機關が備つて居り、それには又多年實戰に經驗ある老功の人物を用ひてある、これが我國の富の小なるにも拘らず、而かも軍備は力に於て充實して、遂に日露の如き大役にも優勝を占むることが出來た所以である。然るに獨り怪む、何が故に我外務には此の如き機關不必要であらふか明治の外交を見るに、勿論其結果からいへば成功なりといへやうけれども、其所以を極むれば皆陸海軍の餘光に由るものに外ならぬ。尤も世界列國何れの外交も武力の後援に賴るには相違ないが日本國民が陸海軍に安心する丈、外交に安心せないはどういふ譯であらう、其本づく所は何所にあるか、陸海軍に於けるが如き其樣の機關の無いのも其一つてはないか、それ故林前外務大臣の如きも大使とすれば立派な人であるに拘らず遂に大臣としては偉功がなくて仕舞つた。日本に居て外務大臣としては非難の多かつた加藤高明氏も、駐英大使として外に出ては立派なものである、想ふに現任小村侯も其大使として外に居た時の苦心と、大臣として今内に居る時の苦心とは非常に違ひ、今の昔に比べては勞徒に多くして功の擧がらぬといふ氣はせぬか、私は是非とも此缺陷を補ふべく外務にも陸海軍同樣の何等かの補助機關を置きたいと思ふ。即ち實例を擧げてい

ふなら、井上侯とか、青木子とか林伯とか若くは井上勝之助氏とか加藤高明氏とかいふ樣な、責任あり、實驗あり手腕ある有數な人物を集めて相談役とし、國家の外交を爲す上に、常に當局者と意見を交換し評定して行く諮詢府を設くる必要があると思ふ。

次に憂ふべきは日本の外交は言ふ迄もなく政府若くは一個の國體の外交ではなく、實に六千萬同胞の外交であるに拘らず、左樣の自覺乏しく、無責任な議員や、新聞記者や又は國民が勝手な言議を敢てして我外交に不利を與へることが每々ある、其實例を擧ぐれば本年の議會にも有力なる一議員が日英關税改正問題の質問に已に其率の法律で定つて居るものを、それでは高過ぎるから英國が應ぜぬ、もちつと負けてやれ、負けてやらなければ同盟の根據が危い抔といつて騷いで左樣いふ事が皆當局者の交渉に差し響いて來る、丁度譬へれば牛を良人が十圓で賣ることゝ切出し、買手と掛引して居るに拘らず、考のない妻君が出てそれは高過ぎる、八圓にせよ、五圓にせよ、三圓にせよ、二圓にせよ、場合によつたら只でもと側からいふ樣なものだ、定まつたものも賣れなくなる。曾て大臣たりし一議員すら彼樣な事を議會でいふと、英國の政府反對論者は、それ見た事か、日本の議員が彼樣いふじやないか、前内閣大臣が彼樣いふんじやないか、そんな高い税率に應ずる事はならぬといふのは當然だ、條約は決して一小村外務大臣の條約ではない、從つて其改正も一小村外務大臣の改正ではない、日本帝國民の條約であり、條約改正であるのだ。其言議を愼重にせなければならぬのに是では困る。尚ほ一例を擧ぐれば朝鮮に於ける我政治が武斷政治だなどといふ無責任な議員がある、古來如何なる國と雖も武斷ならずして能く國を合せ又其新附の民を御し得たものがあるか、然るに日本では一兵をも損せず一劍にも衂らずして併合を行ひ又統御しつゝあるではないか、此事は寧ろ外に向つて大に褒めて見せるが眞に忠愛なる我國民の態度だと思ふ、實に露西亞の如きですら此度の日韓の合邦を褒め、世界未曾有の大成功といつて居るではないか、況んや滿韓の形

勢は首尾相應ずるの今日、乾隆皇帝の所謂「黒龍首を俛れて渤海の水を呑むが如し」と云ふ其滿洲には今や四國借款と云ふ潜龍がある、其潜龍の眼中には何卒日本が朝鮮政策に失敗すればよい、其影響は滿韓に對する自己の蜿蜒を助長するに至るてあらふと考へる者がある。昨今日本國民自身が折角合同した朝鮮政策に關し無責任の言論を弄するのは如何にも殘念千萬である、要するに根柢なくして只感情の上からのみチャラッポコをいふことは甚だ憎むべきてある。予は云はん斯の如くして若し未來に於て朝鮮を亂すの大不幸あらんか、一朝鮮を亂すものは外國人に非ずして日本人なりと結論せなければならぬ事になると、而かも此如きは其本づく所何から來るといふと世界の事情に暗いからてある。それ故私の第二の希望としては貴衆兩院中に外交調査會なるものを設け、十名位の議員を選んで其員に擧げ、毎日變化しつゝある外交事情を調査し研究して、之を以て當局者に種々の打合をする事にしたい、そして陸海軍にも軍機の漏泄出來ぬ名譽ある人々を集めて諮詢府に置く樣な具合に此外交調査員にも左樣いふ人物を選用するが宜い。

又既に一等國ともなれば大使公使のみでなく、更に半官半民の邦人を海外に常派し又は英米獨露の大都には我有力なる新聞通信員をも置き苟も日本に屬する誤解記事の起りし場合は十分に之を辯駁論議し官民相通じて勉めて外交の情勢に通曉する樣にしたい。又我外務省に於ては次官、政務局長、通商局長の外に大臣を補佐する者がない、而かも此等の人々は皆朝九時十時より午後は六時迄も出勤して事務に忙殺され、ゆるゆる讀書考察の隙もない。此有樣では、如何に八面千手の敏腕家も逼迫湊合せる列國の問題に關し萬遺策なしと云ふ時間と腦力とが續かぬ、それ故予は多年の希望として外交の補助機關を增置したい即ち各次官や局長を親任官にするがよい、すれば大使、公使を其處に使ふ事が出來る、今の樣では大使や公使になつた後には最早や次官や局長にはなれぬ、早い話が本野、井上、加藤、內田等の人々が戻つて來ても遣ふ道がない、其

の爲め人材をも空しく野に遺てる事となる。それ故須らく親任官を要路に殖して人材の溜場を作り、そしてそれ等の親任官の下に諸方より調査の集まつて來るものを地理的に分類し、歐羅巴部、南北米部、亞細亞部といふ樣なものを作り、それぞれに又局長（次官、局長と同地位）を置いて調査させるがよろしい。一體日本程殖產、工業、外交などに於て世界の情勢に對する調査の不統一の國はない、直言すれば商業の方であると、不思議にも正金銀行ても三井ても、大倉ても、鉦商等の間には其職業丈に對しては今日迄の外國の事情を調べてあるけれども其他は深く關心せぬ各省が多い。

次には外交官の選擇にも其範圍を擴めたい、參與官、書記には專門的技能を要するけれども、其他の主腦の位置に就く者には必ずしも專門的技能を要するものでない、駐米英國大使ブライス氏や又米國駐英の大使レイド氏の如きも專門的技能の外交官ではないが盛名赫々技能秀越のものである、又マクドナルドの如きも亦軍人出身である、即ち遠きは數百年近きは百有餘年間樽俎揖讓の間に國家の運命を定めて來た歷史ある國に於ても、大使公使たる長官には外務仕立ての者計りを用ひては居ぬ、況して日本の如き外交の歷史は日尚ほ淺く、日清戰爭から十四、五年の短日月の間の經驗あるのみでほかないのに、公使を選ぶにも大使にも必ず外務省出身のもののみを採るといふは餘りに狹い、決して人材を求むる所以のものでないと信ずる。如上列舉の幾多の要目に着眼し、外交機關に一大刷新を加へ、以て至大至重なる我外交の將來に處して萬遺策なからしめん事を切望するのである。

米國の對淸政策と日本の滿洲經營

東亞同文會長 根津一

亞米利加の支那に對する考は以前は甚だ冷淡で、重きをそれに置かなかつた、然るに團匪事件以後支那の前途が列國に對して大利害あるを感じ、同時にルーズヴェルト氏が民族的帝國主義の發展を考案してより、最も重きを太平洋問題に置き、從つて支那に對する經營を重大視するに至つた、元來列國の支那に對する考は何れも支那の諸般の革新が此十年内外に於て實に就くべく、其一大時機に於て支那の新天地に立ち經濟經營の一大競爭を試みやうとして居るので、數年前から準備に孜々たる有樣である、就中大凡一國に對して經濟上の大經營を行はんとするには、先づ其國の人心を提ぐるより大切なものはないが、それに就いて日本の支那人民に對する敎育政策なるものは、予輩の見る所では頗る遺憾の感を有するなれども、彼等は外觀から見てそれを一大成功の如くに考へ、各々倣うて敎育政策を其準備事項中最も大切なるものとして着手して居る、其二三の例を擧ぐれば、獨逸の靑島に於ける支那の官憲と共同して經營しつゝある山東大學校の如きがあり、一昨年來二百萬圓の費用を投ずる見込で經營に着手しつゝある英國の香港學校の如きがある、就中米國の如きは殊に多大の力を加へ、北京にも種々の學校を建てる、中にも湖南にはエール大學の分校を設き、之を支那敎育界の淵源とするといふ程の適れの抱負を以て大規模に經營しつゝある、然るに又昨日漢口から來た報告に依ると、米國の宣敎師團が主として英獨の宣敎師と聯合し、武昌に從來あつた亞米利加の文華學院を新に大學組織として三百萬圓の資本で之を經營し、エール大學を高等學校として其附屬校とし、互に

襄陽に於ける英吉利の大學をも高等學校として其附屬とする事とし、以て長江一帶の教育權を綜攬せんとの考て其實行に掛つて來たといふ事だ。

此米國の教育政策に就いて就中最も吾人の重大に感ずるのは、一昨年亞米利加が團匪事件の賠償金の殘額三千萬圓を一の條件の下に、綺麗に棒引として支那へやつた事である。其條件は、高等學校以上に入學し得る支那學生を毎年百人宛亞米利加へ派遣し、四年目から五十人宛にして無期限に派遣するといふ事である。唯是丈の條件の下に三千萬圓の大金を棒引にして支那に遣つたのである。此大規模の遣り方を敢てする所以を考ふれば、將來亞米利加が支那に對して如何ばかり大仕掛の經營を爲さんとするかを推測するに難くはない。即ち此等の留學生が卒業歸國の曉には官民の間に重要なる勢力を得るに相違ない、其將來の地盤に向つて大經營を建立せんとするもので、我日本の對淸經營の上から見て甚だ恐るべき事である、例へば新聞の一事て考へて見ても、今上海に新聞報と名くる米國の機關新聞がある、是は僅か一萬五千以內の發行紙數に過ぎぬけれども、此渺たる新聞の記事の爲に、上海並に揚子江筋に於ける我日本居留民の惱まされたのは一再ならぬ事である、然るに若しも前述の如き卒業生等が假に米國の資本で支那の各省の省城並に其他の重要地に大規模の新聞を發刊し、米國で學問並に實際から收め得た新知識により、得意の漢文を以て支那人の知識の程度、感情に當て篏まる樣に書き立つる場合には、若しも亞米利加が之を統一し利用して日本に對抗する如き事ありとせんか、所要に應じ支那の大部の商業市場を擧つてボイコットを起さしめ來る位の事は敢て難くない、斯樣に米國では支那經營に重きを置いて着手しつゝあるが、其第一に着眼する所のものは滿洲に於ける經濟經營である。即ち滿洲全部を擧げて一大工業地となし、其製作品をば地續きなる本部十八省の大市場に供給せんとしつゝあるもので、誠に至當の考だと思ふ。此に於てか聊か滿洲の事情を語らねばならぬ。

滿洲に關する見方は日本人中で色々に變り、或は重

しとし、或は輕しとし、十分其眞價を見極めたものは甚だ少い、それ故に先づ滿洲は如何なるものかを語ることの必要がある、抑も滿洲は土地肥沃て、地表に無限の富を包藏し居る所だ、現在の人口は約千五百萬、其面積は三十六萬方哩、日本面積の約二倍程ある、而かも其面積の五割は耕し得べき地だが、之を假に三割丈開拓し得るとしても現在の耕地の四倍半に達する、從つて其開拓の極に至る時代を豫想すれば人口も亦今の四倍半に達する譯である、特に森林事業、鑛山事業、其他諸般の工業が起つて自ら人口の收容力を增加するから、滿洲全體は一億萬位の人口を包容すること敢て難しとせぬ譯てある。現在の貿易額は昨年の統計表に依るに一億四千二百萬テールだ、十年の後を考へると、人口は必ず二千萬に達するから、其貿易額も約二億萬テールに達するてあらう、(現在貿易額は平均一人に九テールの割合)其地表の產物には頗る貴重なるものが各種類あり其分量も豐富に、殊に大工業を起すに最も適當な原料が澤山にある、試に其二三を摘擧すれば、南滿洲全部を掩ふ高粱の如きがそれて、其根は取つて燃料とし得、其莖は紙を製し得、砂糖を製し得る、其實は食料にも出來れば又燒酎をも製し得る。其燒酎の如きは全部アルコール分て出來て居る、之を一回精製するとウヰスキー以上の美味の酒となつて而かも其價は甚だ安い、豆の如きは無盡藏に出來、日本に入る豆粕と豆の量だけても約二千萬圓近くもあらう、一昨年來歐洲へ輸出を始め、昨年輸出した量の如きは遙に日本へ輸入の額よりも多い、其用途は豆粕は牧畜の飼料、肥料に供し、其油は器械用にも燈火用にも食料油にもなり、石鹼も出來、ビスケットも出來る、誠に用途の廣く有益のものだ、又柞蠶の如きも南滿洲には不測の產出があり、日本に入る絹紬の需用額は頗る多いが、そは現在のものでも一回練り上げさへすれば立派の絹になる、それに更に支那人の嗜好の模樣を染め出せば支那に於ける無限の需用にも供給が出來る見込てある、硝子原料の如きも澤山にあり、金州附近の岩石の如き全部硅石てあり、其土は全部石灰てある、之て

硝子を製造し、支那の交通機關の發達に從つて四億萬の人民に供給するなら、茲に亦大製造業が起る譯だ。其他甘大根を以て砂糖を製造する如きも有望であるし、一昨年來試作され居る棉の栽培の如きも其結果甚だ好く、朝鮮棉の樣に房が大きく粘着があつて强い、て今大に栽培せんとしつゝある、煙草の如きも所謂有名な吉林煙草が澤山に出る、米國はそれを集めて試に奉天に送り、英米トラストなる大製造所を設けて製造して居るが頗る好結果である、その爲に日本の官營煙草は多大の打擊を蒙りつゝあり、て營口に製造所を建て吉林煙草を買ひ入れて之に對抗して居るけれども前途甚だ困難の形勢と見受けられる、其他森林の如きは黑龍江省から盛京省に亙つて數百淸里に連るものが幾所もある、鑛物では金、銀、銅、鐵、石炭の如きも無限に包含する、現に石炭の如きは撫順炭坑の炭量二億萬噸と稱して居る、實に一個所に石炭の集ること此の如き所は世界にも類がないといふ程である。斯の如く滿洲は地中に無限の富を包藏する一大未開地と稱して宜い。

日本の人に滿洲は住み惡いなどいふものもあるけれども是れは間違つて居る、第一氣候をいへば空氣が乾燥して居て最も健康に適して居るから日本內地に比し優つて居る、家を造らうとすれば材木は澤山あり、煉瓦の製造所も至る所に建てられて居る、寒中には防寒用として蒙古方面から毛皮が安直で幾らでも輸入して來る、牛肉抔は蒙古から輸入し美味にして廉なり、魚類も大連灣方面に豐富に產出する、又營口以北では芝罘、山海關方面の海產が非常に安い、又長春迄行くと松花江方面珍味の者が安く輸入する、野菜も栽培すれば白菜始め美味のものが所要を充たされる、鹽は復州から有名な天日製鹽が多量に出る、醬油は小麥の產地であるため原料が得易く營口丈に日本人の釀造所が三個所もある、米の如きも朝鮮米が鎭南浦から大連灣方面を經て入り來り、日本內地よりも安い。奉天附近及以北へは安奉線から朝鮮米が入り込んで居る、此の如く衣食住共に物資は安く供給されるから居住するには

便利なことが證せられる。さればこそ米國人の先づ此處に着眼する譯である。

現今歐米の經濟學者の說く所を聞くと、未開地に大資本を卸すべき經濟上の大事業は、森林政策、鑛山政策、鐵道政策といふが米國人が此三政策を行ふには滿洲は最も當て嵌まつた土地である、又今日商工業上に就いては、經濟學上の學說に依るに、以前は工業は商業に對して其從屬であつたが、今はそれに反して商業が工業の從屬となつた、主客地を換ふるに至つたといふが、其如く、現に上海邊に在る幾多の大商事會社は、其本國を調べて見れば皆大工業會社で、前者は何れも其出張所といふ形勢である、是より考ふるに米國が滿洲を大工業地として支那全土の大市場に供給する政策を取ることは最も徹底せる眼識といつて宜い、が其實行に掛るに於ては巨大の資本を放下せなければならぬ、すれば其放下した資本の安全を謀らねばならぬ、是が即ち昨年一月滿洲鐵道の中立提議の由つて起つた所以、滿洲に於て後日又萬一日露戰爭があるとすると、それが爲に其放下した資本は甚だ危險である、安全を期することが出來ぬ、然るに此提議が行はるれば、列國共同の力で滿洲の中立を維持するから、戰爭は從つて起らなく放下した資本の安全が期せらるゝ譯だ、又好しや此提議が行はれぬとしても、其爲に支那の民心の收攬が出來る効がある、果せる哉此提議は、日露の抗議で撤回されたけれどもそれより以後支那人は皆米國に信賴し親近し來たので、此効果だけでも重大な値打を持つた。

斯くして此提議は已むだが、彼は空しくは止むまい、何か又他の提議を案出し來るであらうと思つたが、案の如く近日に至つて現はれて來た、即ち四國借款である、四國借款は世人の知る如く全部は一億萬テールで、其内七千萬テールは支那の幣制改革の基本金だが、殘り三千萬テールは滿洲の經濟事業に投資する事となつて居る。其に就いて最も注目すべき條項は、滿洲の經濟事業を完全にするに就いて此金でまだ足らぬ時には、更に須要の金を處辨する、但し決して他國よりは

借り得ぬといふ優先權を保留する、其擔保としては滿洲の燒酎税、煙草税、製造税、消費税の中より二百五十萬テールを取りて之に宛て、更に全國の鹽の價を增して、それより得來る收入增加中二百五十萬テールを加へ、併せて五百萬テールとして元利に宛て、四十年間に之を償却するといふ約束に爲つて居る事である、即ち此の如く滿洲に於ける收税を擔保とする時には日本の滿洲經營に直接間接に大故障を生じて來る譯となる、蓋し日本の滿洲に於ける東淸鐵道の鐵道用地と關東州の租借地なるものは、その條約の規定年限内丈日本の領地と同樣租税も日本で取り立て、行政權も警察權も亦日本で持つて居る、此地域の收入のみは此度の擔保中に無論加はらぬ、それ故此擔保其者に對しては、日本の經營が現狀に止まるとすれば異狀はない、けれども租借地の年限は十三年である、鐵道用地は鐵道開通後十年だから、二十五年の後には支那政府は第三國の評價により買ひ戻し得るといふ規定に基き、今より十四五年の後には之を買ひ戻し得る時期となる、此時期内此地域内だけなら宜い、何等の異論はないが、若しも此地域より少しても經營を發展する場合があるとすると、其土地から生ずる收税を擔保に居る聯合列國の異論を忽ち惹起する恐がある。

更に經濟上の發展から見るに、同じ滿洲で同じ樣な經濟事業が一方から盛に發展するに至れば、勢ひ日本の利害と衝突を來すは見易い道理である、即ち四國の聯合と始終衝突を釀すといふ甚だ不利な形勢を來すのである、更に一歩を進めて考ふるに、日本の經濟經營は甚だ困難となる、其次第は、彼等が無限に資本を放下し、支那官民の名義で各所に經濟事業を發展させると爲ると、開港場に限らず何處にても、手を伸ばし得る、然るに日本は租借地、鐵道用地と開港場以外には一歩も足を踏み出す事が出來ぬのである、此の如く限定されたる地域内の經營と、廣き自由の天地に於ける經營と、其の利不利は如何であらう。

徐ろに日本と支那と亞米利加と、此三國の立場の如何を考ふるが宜い、亞米利加は實に夫の鐵道中立提議

の行はれるよりも以上に、是に依つて目的を達し成果を收めたものである、何となれば四國聯合の力によつて經濟上の發展を爲すと同時に、日露の滿洲に於ける經濟經營の跋扈を抑壓し、放下した資本の安固を謀つたからである。然らば支那に於ては如何であるか、支那では朝鮮の併合後には、早晩滿洲は日本に併さるべく、最早や滿洲は中國の有ならずと感じたものが多かつた、此際に當り四國借款が起り、其聯合の力で最早支那の有に非ずと感じた滿洲が、姑息ながらも一時維持が出來るとすれば、左傳流の巧妙なる外交策として之を歡迎すべく、果して左樣と見へて現在良策成功の如く論じ立つるものが多い、が是には二樣の見樣がある、支那が將來果して富國强兵に至り得るならば、此政策は利用となつて十分の効果を保ち得る、けれども然らずして依然弱國で持續するとなると、列國を誘うて利益分割と爲るの端を啓くものである。それ故支那の大なる前途を考へると實は害用となる。併し是は支那の將來の問題として利用害用果して何れとなるかには暫く疑を存して置く。獨り何れにしても不利を見るものは我日本である。然らば之に處するに當に如何にすべきであらう。

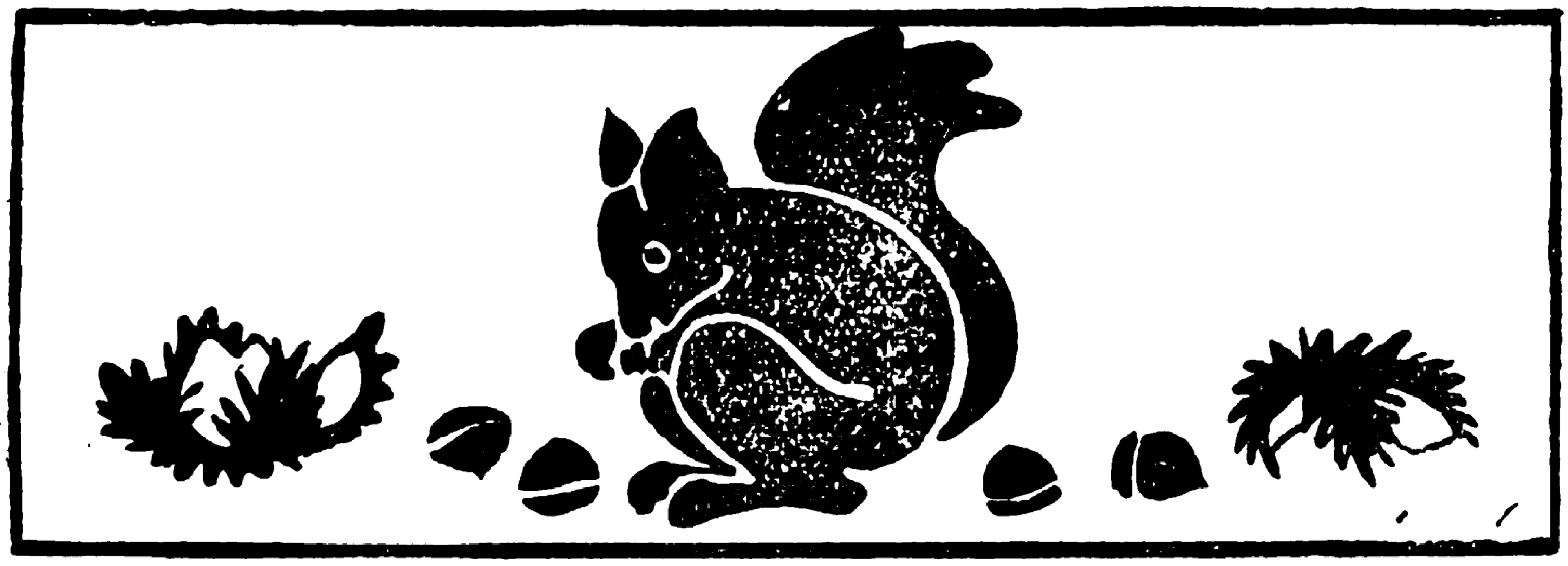
借款條約を見るに三千萬テールを滿洲の事業に支出するには、豫め其經營する事業の種類を列擧して、之を四國の債權國に示し同意を得なければならぬといふ事がある。それ故その經營する事業の明かになつた時に、それに對して我利權と衝突するや否やを吟味し、不利の事項に對し十分の抗議を爲し、それぞれ善後策をするのも一案であらう。更に一歩を進めて二案として考ふるに此際日本も彼の四國と同樣の利權を取らねばならぬ、即ち定まりたる地域以外に滿洲の各地に彼等と同樣事業を起し得るといふ權利を取るべきである、すれば朝鮮と地續きである丈に彼等よりも一層有利に活動し得る譯である。

序に茲にいふべきは、日本の對淸經營として滿洲の有利なる此の如きものあるに拘らず、一部の論者は滿洲は望がないから放棄せよなどといふものがある、是

は甚だ所由ない。政治上の關係は元より軍事上特に經濟上の關係から考ふれば無稽も亦甚しい說である。政治上から言へば、日本の征韓論時代には內を主とする政治家と外を主とする政治家とあつて互に嫉視するに至り、遂には大西鄕等の如き對外政治家が敗れて、其反對者が施政の衝に當つた結果、日本は對外の英志が消磨し退嬰一方になり、海外に向つて發展するに不適當の人民となつた。幸にも日淸日露の兩大役があり、其爲聊か對外思想が興隆した、是は誠に世界の一等國の立場とし、民族的帝國主義で相競ひ居る、世界の局面に立つものとして相應の潮流と思ひ居る處、滿洲の如き一度びは日淸戰役に於て甚しく人命財產を損し、二度びは日露戰役に於て實に二十億の大金を費し、幾十萬の死傷者を出して、それ等の犧牲の下に漸く今我發展を試みつゝある時に當り、輕々しくも之を放棄するが如き、事を爲さば、我對外思想の積極的意氣を復たも沮喪する恐がある。

又軍事上からいつても實に我帝國の歲出豫算の大部を占むるものは陸海軍だが、此陸海軍の魂とし尊ぶ所は志氣である、然るに一朝滿洲の經營を棄つる如き事があるなら如何にして軍事敎育を施すべきか、即ち志氣の敎養が出來ぬ、すれば是れ直に帝國軍の價値の半を失ふものである。

又經濟上から論じて見ても、米國は此處に森林、鑛山、鐵道の三政策を經營し、之を骨子として一方に又煙草を初め其他百般の工業を起し、滿洲全土を一大製作工業地として支那全土に製作品を供給する見込なのだから、其滿洲經營の一張一弛一盛一衰は、直に我日本の滿洲經營の一張一弛一盛一衰に關係するのみでなく、日本の支那全土に對する政策の恐るべき對手として一張一弛一盛一衰の關係をそれに及ぼすものである。其重要なる策源地、主動力の淵源地であるべき滿洲であるのに、漫然放棄するといふが如き考は實に狂人の常識を失つた言といはなければならぬ、偶ま四國借款の善後策を考ふるに當つて併せて附言して置く次第である。



數寄傳

田岡嶺雲

(一) 即ち凡人傳也

(1) 凡人の天下

一體吾等の如き、凡庸なる、愚劣なる、名もなき者、物の數にもあらぬ者が、自傳を公にしやうなどとは、烏滸がましき次第である。僭越至極の沙汰である。古より自傳の作者は多く、賢れたる、著れたる大人物である。固より不朽なり得べき大人物の作たる者のみが、今日に傳はりしといふ事情もあらうが、兎に角吾等の知れる限りに於ての自傳の作者は、皆大人物である。少くとも其の自らが其の自らを傳ふるに足るべき、又傳へざるべからざる價値を有する者と、信じ得るだけの力量材能の人物であつたには違ない。セント、アウ

ガスチンでも、ルーソーでも、フランクリンでも、ギヨエテでも、アンデルゼンでも、近くはトルストイの如き、クロポトキンの如きでも、其の自傳を書くに至つた動機に相異はあらうが、併し何れも皆吾等の如き吹けば飛ぶやうな人物とは其選を異にしてゐる。彼等は皆之を仰げば彌よ高き、世界の人物中の泰山北斗である、吾等は恆河の沙の中の其の一粒よりも、猶吝な碌々たる斗筲の輩である。彼等は皆珍珠美玉の彌よ久しうして彌よ光輝を發すべき本質を具へ、吾等は水の流れに書く數の、痕なくして消ゆべき運命を有する者である。此くの如く小なる吾等が彼の如く大なる彼等の爲に倣ふて、自傳を公にしやうなどと企てる、此が僭越で無くて何であらう、厚顔恥を知らざる所行で無くて何であらう。

然し今日は英雄の時代ではない、凡庸の時代である。天才の時代では無い。機械の時代である。選ばばれたる者の時代では無い、均一均等の時代である。演繹と獨創の時代では無い、歸納と實證の時代である。鷹と獅子との時代では無い、雀と鼠との時代である。聖人賢者の時代では無い、町人百姓の時代である。一國の政治は、愚衆の彈機装置の如き起立によつて決せらるゝ時代である。教育は萬金丹の如く模型に打込んで、大小不同なき人物を製造する時代である。藝術は、天馬空を行く想像の飛翔を容さず、地上の泥濘に寫實の尾を曳く泥龜たるを誇り得る時代である。哲學を理想の大空より、プラグマチズムの名によりて、損益打算の帳場格子に引き下す時代である。宗教を神秘の幽冥より神學の名を藉つて、所謂高等批評の砂原に引出す時代である。小説をローマンチシズムの夢幻の朧より、自然主義の名を以つて、汚れたる現實の日影に曝す時代である。所謂偉勳を以つて昨日の徒士足輕の輩が公爵となり得る時代である。海老茶袴を脱いで三年すれば、天晴帝國劇場附女優となり得る時代である。平等の假面を被つて平凡が踊る時代である。自由を笠に着て一寸法師が跳る時代である。ニーチエが激して超人

を唱へざるを得ざりし時代である。幸福なる哉、斯かる時代に生れしこと、光榮なる哉、斯かる時代に活くること、今日は凡人の極樂である、今日は凡人の天下である。斯かる時代に際會したるは吾等の爲めには千載の一遇である、凡人たる吾等も自傳の筆を執るに疚しさを感じない、今の時代は吾等凡人をして、大天才大人物と同じく自傳を公にし得る權利あることを信ぜしめる。僭越とは禮儀あつての上の語である、『無作法』の『自由』が因襲の名を負はせて謙遜を驅逐した今の時代に、顔を赤らめるなどは臆病である、野暮である、吾等は勇を鼓して玆に自叙傳を草するの大膽不敵を敢てする。

(2) 凡人の價値

ブランデス氏は古來の自叙傳の種類を別つて、(一)セント、アウガスチンの如く、己が迷途より一轉して正道に入れる開悟の次第を叙したる者、(二)ルーソーの如く、天下の人皆同じく有りとして、忌憚なく自己の罪過を叙したる者、(三)ギョエテの如く、其天才開展の逕路を叙したる者、(四)ハイベルとの如く、自己の才能によつて贏ち得たる名と譽とを誇らんとする者、(五)アンデルゼンの如く、其名聲を博するに至れるまでの健闘の狀を語らんとする者の五とした。併し此くの如きは天才者の自傳に就てのみいふべき事で、吾等の如き凡夫には、固より大迷も爲ければ大覺も無い、故に吾が半生の閲歴には人に道德的訓誡を與ふるに足るが如き悟道の事實が無い、又吾には天下の人に傑れたりとの自負が無い、從つて吾は何の疚む所なく昂然其罪過を天下に懺悔する自信と勇氣との有り得ることを自ら疑ふ。されぱとて平凡の才が平凡に發展しゆくに何等の興味も有るべき筈が無い。又誇るに足るべき名聲もなく、從つて名聲を得るに費されたる苦心も亦無い。既に然らば吾等の、敢て自傳を草するは竟に無意味

なる努力に過ぎぬては無からう歟。

如何に名優でも團十郎一人で芝居は打てぬ。並び大名も必要である。いらせられませうの腰元も必要である、三枚目も必要である如く、天下は大人物の獨舞臺では無い。枯木も山の賑ひ、吾等の如き小人物も亦社會組織の一要素である。從つて天才者大人物の自傳が世道人心に貢献する所ありとすれば、吾等凡夫小人物の自傳も亦全く梨棗を災するに過ぎぬ者でも有るまいと思ふ。

吾等の活きた明治の世は、我邦に於て急轉直下の最も激しき變動の時代である。獨り我邦のみではない十九世紀後半より二十世紀初に渉りて、世界の文明が、加速動の勢に乘つて突進しゆく時代である。最も變化多き、最も事件多き時代である。社會の狀態は活動寫眞の如く推移して、僅に四十年間殆ど今を以て昔を推し得られぬ程の變動がある、躬歷した者にさへ回想の十年前を夢と感ずる。此くの如き時勢を目前に觀、此くの如き時勢と面のあたりに接觸したる者の、其の自ら閱し自ら歷たる事件事實の敍述は、假令一私一局の觀察に偏する嫌はあれ、亦一箇の活きたる小時代史を語る者である。此點に於て吾等の自傳も、固より時代を支配し、時勢を指揮し、風雲を喚起して、撥亂反正の大功を成せる英雄豪傑の、波瀾あり奕彩ある積極的行動には缺くるも、猶一種の消極的受動的なる觀察の記錄として、古老の聞書隨筆が歷史上の參考たり得るだけの價値は有らう。

且又、吾等凡人には凡人ながらの喜怒哀樂の發情がある、而して其の泣くにも笑ふにも夫々の理由がある。他目には矛盾にも見へ馬鹿氣ても見へる云爲擧措にも、當人自らよりいへば、其の自身を辯護し防衞するだけの相應な心理的逕路が有る。吾等四十年間の生涯は決して大詩人大哲人の如き趣味あり敎訓ある者でないとしても、而かも瘋癲や白痴の者の研究が猶心理學上に必要なりとすれば、吾等の自ら

經驗した心理的狀態を、自ら反省し自ら解剖した者も、亦心理學者の參考として、或は一瞥するに足るものが無いともいへぬ、此點に於て吾等の如きものゝ自傳も全くの反故紙に比すべきものでも無からうかと思ふ。

(3) 僞るを要せざるを僞らざらん

古來の自傳作者は皆一種の誇を有してゐる、其の誇は即ち其の天才を自覺した誇である。ブランデスが分類した第三以下の者は固より、セント、アウガスチンの懺悔記の如く敬虔の情の溢れたる者も其の奥には、我よく自ら眞道を發見し得たりといふ誇が潛んでゐる。ルーソーの自己の非行を諱む所なく憚る所なく暴露たのも、己を一段高き地に置て天下の群小をあざ笑ふ意氣が有るからである。胸底に此の一種の誇を有すればこそ、自己を叙して臆面なきを得るのである。此點に於て何等の誇りとすべき者をも有せざる吾等の如きが、自己を告白して僞らざらんとするは、彼等大人物、天才者の夫に比して更に困難である、更に多くの良心的努力を要すべき至難の事である。且つ既に大人物として世に認められ、天才者として其の名の著れたる者に在りては、其の人の過去に於ける罪惡若しくは過失は、其の人の價値を減ずるよりも、寧ろ對照的に其の人の光りを添ふるの結果を生ずる者である。加之其の罪惡も過失も之を筆に上せて叙述する時には、自己より離脱して一つの客象となり、對境となり、脫質的の者となるのである、恰かも苦痛の經驗も追想に於ては樂しきが如く、興味を以て此に對するを得る假象となるのである。即ち小說家が其の材料に對すると同一の氣分を以て之を取扱ひ得るのである。故に大人物天才者が其の自傳に於て露骨なる懺悔をなすも敢て驚異すべき事では無い。寧ろ吾等の如き無名の一小凡

夫が自己を語るこそ精神的に苦痛の大なるものがある。

故に予は今茲に自傳を叙するに當つて、敢て蔽く僞らざる自己を語り得べしとはいはぬ、僞るを要せざる範圍に於て其の僞らざる自己を語らんと欲するのである。想ふに人には他の語るべき事と語る可からざる事とがある。今の小說家が所謂自己告白なる者の如く、語る可きにあらざる隱秘をも敢て語ることは、吾人をして謂はしむれば亦是れ一種の奇術である、即ち一種の僞りであると信ずる。

(二) 記憶に遺れる幼時

(1) 生後第一の印象

時は夜である、予は何人か(多分母であつたらう)の膝の上に抱かれてゐる、座に見慣れぬ人の顏があつて、これを圍んで集うた人々の話し聲、笑ひ聲が賑やかに冴へて、明放した外面の闇に餘りの光を漂はせて一間の中に燈の影も明るい。

此の光景が、予の其の生れ出てた世界から受けた印象の、予が記憶に銘ぜられた最初の者である。其の幾歳の時であつたかは自分も識らぬ、併し自分は何故だか此時の光景が伯母が永の旅から歸つて來た團欒の時であるやうに信じてゐる。併し母の懷に居る分際で、そんな事が譯るべき筈がない、此は多分較々成人してから後に聞いた、伯母が歸つた時に恰度自分が生れてゐたので、其の老を託すべき養ひ子として兄弟の中より特に自分を擇んだといふ事を、自分の最初の印象の記憶に結びつけて、何時か此んな考を有するに至つたものであらうと思ふ。

此の伯母は唯一度人に嫁した事があつたさうであるが、諧はずして家に歸つてよりは、終身寡居の決心を定めて御殿奉公に出て、其の侍づいて居た姫君の嫁ぐに扈從して、京都の公卿家の奥に勤め、遷都と共に東京にも往つて都會の空氣を永く吸ふた人である。躬ら薙刀を提げて、姫君を守禦しつゝ蛤門の兵火をも潜つた。三條實美卿や岩倉具視卿やの風采をも蔭ながらではあらうが親しく見た。又猿若町に鼻の高い阪東彥三郎や、四肢の無い澤村田之助をも見た、當時で謂へば女否寧ろ男にも罕な世間を知つた、見聞の博い、從つて物の譯つたリファインした人であつたので、予は啻に養母として、實の母にも劣らぬ鞠育の恩を負ふてゐるのみならず、亦我が性情の上に善き感化を與へられたことが頗る大であつた。予の最初の記憶を、此伯母の歸國の時の光景とするのは、假令幻想に過ぎずとするも、亦何等かの因緣といはゞいふべきであらう。

(2)　吾は何處より生れしや

予が多少物心がついて、吾が身といふ者を自覺して先づ起つた疑問は此の吾の何處より生れしやといふ事是であつた。此の疑問は知識の萌芽として何人の少時にも必ず起るべき者であつて、而して恐らく靑年期に起る吾は何故に生れたりやといふ哲學的懷疑の前驅をなす者であらう。予が五六歲の頃でもあつたらう。予は甚だ內氣で臆病で、家の外で友達と跳廻るよりも、寧ろ女の兒じみた仕事を好んで、土いじりや水いじりをする代りに、母が拭き掃除の後について雜巾がけの眞似をするのが常であつた。此時も恰度母が厠の掃除をしてゐた折である。何でも厠の傍の小さな畑に苣の葉が青く繁つてゐた樣に覺える。突然と母に向つて、自分は何處から生れたかと聞いた、尤も母から生れた者だといふ事は朧げに

は知つてゐたが、其の母の何處から、自分の樣な大きな形のものが生れ得たかといふ事が疑問であつたのである、母の答は固より何人の母も斯る問に對して答うべき紋切形な者であつたが、併し吾は餘程大きくなるまで母の答を信じて、予は吾が母の臍から此世に出て來た者たるを毫も疑は無かつた。

(3) 空とぶ鶴

大空高く飛び行く鶴を見た事が唯一度ある。

三百年間權威の源たりし德川幕府を一朝に顚覆した明治維新の革命は、其の餘勢を以て一切の古格舊例の破壞して其の破壞するに必ずしも是非善惡を問はなかつた。然れども解放と自由とに向つて驀地に突進する革命が、熟慮と愼行とを缺くは免れない。革命は修繕では無い、改築には先づ建物の全部を破壞する必要がある、善き部分の破壞は惜むべきであるが、是も改築の爲めには已むを得ない。

鶴の禁獵の制も、凡ての古格舊例と共に棄てられた。維新の革命は丹頂皓裳の仙鳥の上につれなかつた。鶴の渡る數は年々に減じて、大空に舞ふ其の形を見ることは漸く罕となつた。今日では動物園に畜はるゝ者の外に、自然のまゝなる鶴を見ることは全く出來ない。

吾等の生れたのが、維新後あまり時を距てゝゐなかつた御蔭で、夫でも吾等は唯の一度なりとも自由に空を翔ける鶴を見得たのである、夫は予が五歳許りの頃であつた、母と母方の伯母などに連れられて、五里許り距てた町に、母方の叔父を訪ねた折である。母に手を引かれて、草臥れた足を曳摺る樣に歩み行く人里離れた野中の街道に、午寂かに空は晴れたり、忽ち一羽の大きな鳥が、翼を熨して高々見上ぐる頭の上を過ぎた。

時勢の犧牲となつた此鳥の、或は此が我が郷土に於ける最後の飛行であつたかも知れぬ。

(4) 刀を差す

予の生れたのは、歐羅巴では普佛戰爭のあつた明治三年である。未だ廢刀令の出ない前で、自分が朧ろげながら記憶する事の出來る歳頃まで、二人の兄は刀を佩いて居た。自分も唯一度、刀を佩いた事がある。袴着の祝に氏神へ參詣した折で、夫は恐らく廢刀令の既に出た後であつたかも知れぬが、舊慣の惰性は典故を重んずる儀式の上には、殊に其の勢力を永く失はなかつたのであらう。(葬儀に麻裃を着たる事なども中々に廢れなかつた)氏神は、我家からは鏡河を隔てゝ、向ふの岡の樹立の鬱つた中にある八幡宮で、河には狹い長い板橋がかゝつてゐた。其の橋の此方の岸の袂を振の長い紋服に袴を着け、小脇指をさいた予が、伯母と母とに手をひかれながら、ヨタ〱と歩いた姿を覺えて居る。

吾等の家は、祖父の代に百姓から藩の家老の家に仕へた所謂陪臣の、輕格ではあつたが、兎に角士族といふ肩書だけは得られた身分なので、吾等も袴着に刀をさすだけの格はあつたのである。自分は此の士族といふ事に、又となき誇を感じて、(階級の觀念の人心に根を下せることの如何に深く且牢かりしを觀よ)其頃非常に賤しんでゐた新平民にして徵兵に出るのを甚しき恥辱の樣に考へながら、併し又其徵兵を免れん爲めに分家して(其の頃は一家の主人及び長男は兵役を免れ得たのである)。平民に落ちる(士族から平民となるのを自分が落ちるやうに思つてゐたのである)のも堪へ難く厭て、幼な心を此のディレンマに惱まされたのであつた。

併し自分に金錢を一種汚らはしいものゝ樣におもふ思想が成人つて後迄深く頭に浸み込んで除れなか

つたのは、此の幼時に於ける、自分は士族の子であるとの自負と、華胄の家に仕へて氣位が高くなつてゐた伯母の感化との爲めてあつたらしい。

(5) 鰹の刺身

高知の市街は鏡河の北岸に沿うて西から東へ延びて（自分の生れたのは其の西端の町外れてある）、其の東端は海に枕んてゐる。其海を吸江といふ。抑も土佐は九十九灘、太平洋を南に受けて、其の兩端に斗出した岬に抱かれて彎曲せる沿岸の其の中央程が浦戸港て、灣をなして深く入り、甕狀に中が括れた其の底に當る所が、即ち吸江てある、穩波翠巘相映發して、其の北に長堤透邐たるを青柳新地といひ、虹の如き長橋を隔てゝ其の東に聳ゆるを五臺山といひ、其の上に夢想國師の開基に係る吸江寺がある、其本尊の文殊を以て有名て、寺の名を呼ぶより寧ろ文殊樣といつた方が通りが宜い。其の文殊樣の賽日か何かの折に、一家の人々に連れられて五臺山詣をした事があつた、午時になつて、料理屋てゝもあつたらう、何ても二階のある家へ上つた。飯の菜の誂を聞かれた時、さつそく言下に生のびんび（魚）と答へて、母どもに、夫てもお芋や大根といはなくつて宜かつたと笑はれた。予は鰹の刺身が大の好物てあつたのてある。

後に上海に遊んた頃、支那ても今に五臺山詣が盛んて、上海から別仕立の汽船が出る、校書などが態々燒香に出掛けることを新聞て知つて、自分の此の折の母に笑はれた事が想ひ出された。

(6) 火事

予の父は、吾等の眼からは極めて嚴格な謹恪な人であつたが、而し決して頑固な、乾燥な、趣味を解しない人では無かつたらしい。父は家の事、村の事に鞅掌して忙しい隙々に和歌をも讀み、又或時など瘧か何か熱病に罹られて（父は極めて健康で予が覺えてから床に就かるゝやうな事のあつたのは此時のみである）、略々癒えた病間の徒然に、一冊の戯文を草せられた事もあつた。演劇なども好であつたらしい。高知の市街の東西端に相對峙してゐた其の西なる方の劇場（東のは前にいつた青柳新地にあつて下の芝居といひ、西のは我が村の管内なる玉水新地にあつて上の芝居と呼び慣はしてゐた、兩新地ともに花柳の街で、又一種の游樂場であつた。建設の發起者の一人であつたのも、必ずしも營利の打算のみからでは無かつたらう。此の劇場が、始めて竣工して、大阪から俳優（璃玨、雀右エ門などゝいふ相當な名題の者であつた）を喚下しての舞臺開きをした其初興行中に火を失して燒け失せた事も予が幼時の記憶の一つである。

暗い夜であつた。予は何人かに抱かれて門の外に立つてゐた、東の方に闇を破つてパッと明るい焔が空に立ち上つて、黒い人影の右往左往するのが廻り燈籠のやうに映つて見へたのを覺えて居る。

燒けた劇場は再建された、予の家には株主の一人として、何時にても自由に入場し得る木戸札があつたので、吾等は不斷に出入して少年時代の好奇心を滿足さすることが出來得た。

此は餘程後の事であるが、前代の芝翫が來た事がある（此は下の芝居へであつた）、東京新下りといふので、市中の評判は湧きかへる樣であつた。吾等も祖母などに連れられて見物に往つた。寺子屋で芝翫の松王の黒の着附に紫の鉢巻をしてゐた姿のみは今も眼に遺つてゐる。技藝の巧拙は固より分らう筈は無いが、唯同行の人達が他の役者が惡いからといつてゐたのを覺えてゐる。

(7) 痲疹に罹る

多病羸弱の予、長くて四十迄と想つた命の四十を既に二歳も超えて猶幸に（或は不幸に）、綿綿たる宿痾を抱きながらも生存てゐる。予は既に幼時より屢々病に侵された。母の懐に在る頃に、ひきつけて氣絶した事が幾度かあつたことも後に聞いた、併し覺えてからの最初の病氣は痲疹に罹つた折である。何でも寒い時の、夕暮であつたか曇天の爲めであつたか、鈍い色の蔽ひかぶさつた日であつた。熱の爲めだつたらう、苦しさに身悶えして泣きむづかる予を、小蒲團に厚く包んで雙手に抱きながら、伯母上の玄關先きの小庭を行きつ戻りつ、賺しあやし慰め給はりしことを忘れ得ぬ。

其の後も病める毎に、伯母上の心盡くしの看護を受けた。其の折には唯有難しとのみ思ふまてゝあつたが、今の病に罹りて、足痿えた身の、左右に親しき者もあらず、思ふに任せぬ事のみ多き毎に、今更に亡き伯母上の厚恩誼が染々と懐ひ出される。

游子空しく四方に放浪して、歎を其膝下に奉ずるの時なく、病弱なる吾を幼時より手しほにかけて哺み給へる劬勞の萬一にも報ひ得ざるのみならず、徒らに閭に倚つて待つ老いの心を煩はし、痛め奉る事のみ多かりしことを想へば、不孝の罪の、空恐しさに禁へぬ心地がする。

（三） 臆病なりし少時

(1) 三ツ兒の魂

予は、我が家の三男に生れた。上の二人が既に男の兒てあつたので、予は寧ろ女の兒たらんことを家人から期待せられてゐたとの事てある。其の期待に反し、予も亦生理的には男の形を以て生れたのてあつたが、併し心理的には女らしい性情を有つてゐた。予の少時は極めて内氣て臆病な意志の薄弱な、今の言葉ていへば感傷的な者てあつた。此の稟性は獨り少時のみならず、予の今日迄をも貫いて、一切の行爲の背景をなしてゐる。予に若し正しき善き或る行ありたりとせば、そは道徳的良心の努力の結果てはない、思ひ切つて惡をなし非を遂ぐる程の勇氣が乏しいからてある、予は惡をなさぬ正しき人となり得るも、義を執つて屈せざる剛直の人となり得る資格がない。予には固より罪がある過がある、而し予が爲せる凡ての罪も過も亦、積極的に獰猛な目的を以てしたのてはない、其の折々の境遇に對して又は誘惑に接して自己の操守を固執する能はざるより生じたものてある、予が胸には惡辣の快さを感ずるにはあまりに弱い、常に抱くものは悔みてある。予の前半生の思想が一種の厭世に陷つたのも物を悲觀するに傾き易きが爲めてある。厭世より一轉した後半生の思想が、動もすれば一種の社會主義的（予は組織的なる社會主義研究者にもあらず、又其の運動に關係あるものにもあらざれども）の色調を帶びたるが如く認めらるゝも、亦予の同情が自己の弱きより推して弱者貧者に向ひ易きが爲めてある。予が亦文學を男兒畢生の事業としては餘りに輕く、あまりに價値無きものたるを感じながら、竟に賣文の境涯を脱し得ずして、今に至れるも、予の氣質が世と鬪ひ人と鬩ぎて功を成し利を贏つに餘りに懦弱なるが爲めてある、予が一生の歴史に奮鬪的生活の華々しき一節だも有り得ざるも予の性情の然らしむる所てある、然かも亦其の生活の活氣と光彩なきに似ず、心中の煩悶苦惱の比較的に多きも亦性情の然らしむる所てある。又予の戀愛がプラトン的の虛しき戀か、否らずんば金て買ふ汚れたる戀てあるも、必ずしも

女の膝下に跪いて憐を乞ふを羞づる誇からては無い、女の手を執つて其の耳に意中を囁くにはあまりに臆病てあつたからてある。予の一生が浮華飛蓬、東西に飄零して殆ど寧處するに由なかつたのも、江山風月に傲嘯する風流の爲めてはない、偏狹にして永く人の下に立ち、又人と事を與にするを得ないからてある。予の權勢の門に出入せざるも之を恥とする爲め許りては無い、予には之を敢てするにはあまりに卑怯てあるからてある、予に交友の多からざるも人と交るを厭ふがためて無い、人に交を求むるにはあまりに内氣てあるからてある。予は凡ての事に進んて取る運命の開拓者たり得べき者ては無い、予は當然世途の落伍者たり、命數の不遇者たるべき素質を以て生れた者てある。即ち予に數奇傳ある事は蓋し予の宿命てある。

(2) 學校て泣く

予は極めて發育が遲かつた。生れた時から既に足が弱かつたらしく、誕生をも過ぎ、三歳に至つても、未だ立つて歩け無い、纔に膝を以て横さまに膝行くのてあつた。弟があるにはあるが夫は予の八歳の時に漸く生れたのて、予は長く末ッ子と看做されてゐて、從つて隨分遲く迄母の乳を離れなかつた。彼や此やて予が幼時の世界は家の内て、予が友としては家族あるのみてあつた。

こんな有樣てあつたから、始めて小學校へ入門したのは八歳の時(予は十一月生れの年弱てはあつたが)てあつたにも拘はらず、泣出して兄を手古摺した。初め二人の兄に連れられて往つたまてはよかつたが、兄どもは予を八級の教場(其の頃の學制は半年が一學年て、級數が八つあつた)へ置いて、其の儘見えなくなつた。ガヤ〳〵と罵り騒ぐ小兒の群の中に、吾獨り除け物にせられた樣に誰も相手になつてくれる

者もない、どちらを見ても知らぬ顔のみ、恰然大海の濤の渦卷へ突然投げ込まれた樣で、取りすがるもののない寂しさと心細さに涙がこみ上げて來る、終ひに堪らずなつてワッと泣き出した。教師が知らせてくれたのであらう、兄が來てくれる、スルトいくらか心強くなつて泣きやむものゝ、兄達も自分の方に授業があるから、予の側に附きッきりに居る譯にはゆかぬ、兄が去つて仕舞ふと又悲しくなつて泣出す。二人の兄が奔命に疲れて、其の日家に歸つてから、兩親に明日から予を學校へ連れて往くのは厭だと斷つた程であつた。

夫ても其の内に慣れて、泣くやうなこともなくなつたものゝ、こんな具合であつたから、恐さが先に立つて、課業には身が入らず、八級の時の成績は極めて惡く、僅か一番下で纔と進級したが七級から六級へ進む頃は、怯氣が全くなくなつて、課業にも趣味を感ずる樣になり、二十人許の中の頭の方であつた。

(3) 西郷の詩

予が泣蟲であつた事に就いて、今一つ憶起す事がある。夫は父に連れられて、町の或る遠緣の家の遠忌か何かに招かれた時であつた。海につゞく堀割に臨んだ家で、表の構へは左程にもない金物店であるが、其の傍に架けた橋の名が其の家の屋號に呼ばれてゐるほどの素封であるから、奥の造作は深く廣い。父は直ぐに座敷の方へ通つたが、予は外に取り殘された。獨り悄然と、薄暗い玄關の入口に待つてゐたが、待てども待てども父は影をも見せぬ。時々奥に人聲の谺に響くやうに漏れ聞こゆる外は、森として物の氣色もない。初めは唯所在なさにあぐね果てゝゐたのであるが、後には言ひ知れぬ寂しさに襲はれ

て、聲を上げて人を呼びたくなつたが、夫も流石に恥づかしい、袂を嚙んで立つてゐると急に悲しく悵めしくなつて、竟には欷歔あげて泣き出した。此時程平生優しい父がつれなく想はれた事は無い。

　何でも二時間以上も待たされた樣に覺えて居る。漸く父に喚ばれて一處に通つたのは、あまり廣くは無いが、淸楚とした水に面した座敷であつた。座には主人と吾等父子と三人きりで、軈て酒が出た。床の間には西鄕南洲が自筆の詩の大きな軸が懸つてゐる、酒間の歡談は、此軸の由來に及んだ。維新前薩士の連衡を策せんが爲め、西鄕の我が藩に來りし時、此の家を宿とした其の折の揮毫であると主人は語つた。其話に耳を傾けて、譯らぬながらに其の軸をしみ〴〵と見た。

　西南の役は予の八歲の時であつた、此時は今の渡邊國武氏が縣の權令であつた、從つて西鄕隆盛の名は吾等の耳に熟してゐた。其の頃『西鄕隆盛や鰯か雜魚かたいに追はれて逃げて行く』との俚謠も流行つた。谷將軍の下に籠城した我が村出身の吉村といふ少佐の勇ましき討死の狀が傳へられ、又同じく我村出身の某少佐が、敵に後を見せたといふ取沙汰も村の人の口に上つた。谷將軍と同村で且つ其門下たりし我が親戚の者の、熊本城の急に馳せた其人の口から親しく籠城の實際談をも聞いた。繪本や錦繪には筒袖の戎服に陣羽織を着て太刀を佩いた薩摩方の武者振を描いた物が多かつた。兄や兄の友人などの、稍年長けた者は、皆西鄕方たることを公言して憚らない中に（當時土佐の人心の嚮ふ所此にても卜すべしてある）、自分は何だか賊軍といふ名を忌はしい者に思つて、獨り官軍方だと反抗したこともあつた。

　斯く其の名の吾等の口に熟し、耳に熟した英雄の其の人の筆のあとを眼前に見た事は、予をして一種其の人に對する景仰と又其の人に對する懷かしさとを加へしめた。

(4) 吾をして僧たらしめば

予は此く意氣地の無い泣蟲であつたと共に、又極めて氣の弱い、善く言へば情深い、惡く言へば女々しい所があつた。幼い腕白時代には誰もある鳥を獲つたり蟲を殺したりする惡戯を、予は竟にせず過ごした。凡て生ある物を虐み殺すに忍びぬ程予は女々しかつたのである。

從つて地上を歩行くにも、蟻などの働いてゐる處は特に避けて通つた。或時誤つて一匹の蟻を蹈み殺して、慘ましさに其儘に去るに忍びない、土を掘つて擴を造り、丁寧に其屍骸を葬つて纔に稍々心を安じた事がある。又或時弟が折角捕へて來た蟬を放して仕舞つて、弟に泣かれ、母から叱られた事もある。

予にして、若し鎌倉以前の時代に生れて、圓顱緇衣の身とならしめたらば、縱令名僧知識たり得ざるまでも、全くの腥坊主とはならなかつたかも知れぬ。明治の世に生れて、何等世を益し人に竭す所なきを一竇文郎を以て終るよりは、寧に優であつたものを。

予が此の女々しき性格は、世間と接觸する度を加ふると共に、漸く硬化せられて、冷忍酷薄の殼皮を被ぶるに至つたが、それでも所謂三歳兒の魂の今に全然失せて仕舞はぬ。世界の大平和と、人類の大平等との早晩來るべく、又來らざる可らざることを夢みてゐるのも、要するに人間の悲慘なる爭鬪を見るに忍びぬ予が女々しい性情の發現に外ならぬのである。

(四) 無言無形の伴侶

(1) 錦繪と繪本

アリストテレスの言の如く、人は竟に社交の動物である、必ず何等かに友を求める。但し其の友は必ずしも人の形あるものたるを要しない、動物も亦侶とするに足る。必ずしも形ある者たるを要しない、讀書も默想も亦一種の精神的交友である。孤棲の者は獨語をつぶやく、其の獨語は即ち彼の影の如き友たるのである。

外に向つて歡笑の友を求むるに怯懦なる予は、他人と交渉なく、精神的に內に向つて獨自に樂み得る方法を採るの外は無かつた。予の嗜好は專ら書籍に向つた。

予は少時より錦繪と繪本とが唯一の伴侶であつた、錢さへ手にあれば、菓子も買はず、玩具も買はず先づ繪草紙屋の前に立つを常とした。

繪本には武者を畫いたのが多く、其の繪の上に小さな假名の繪解がある、夫を拾ひ讀にするのが又なく樂みであつた。此くして義經の八艘飛び、辨慶の七つ道具、天勾踐の兒島高德、糞汁を灑ぎかけた正成の千早籠城、蝟の如く鎧に矢を負ふた正行の四條畷の討死などの樣な、傳習的な歷史の知識を、學校の敎科書に敎へらるゝ前に得たのである。

錦繪には金ピカ銀ピカの大阪出來のも雜つてゐたが、中には祖母や伯母の江戶土産の物も多くあつた。千兩役者の似顏の上に、勘亭流の肉太な字で給金附が書いてあるのが幾枚かあつて、中には先代の芝翫の福助時代などもあつた。其の役者の說明を伯母に聞きながら、賑やかな華やかな都會生活の光景を、小兒心に想ひやつた。

(2) 隔日發兌の新聞

予が學校の六級に進んだ頃、新聞が始めて縣下に發刊せられた。予は父に請ふて新聞を取る事の許を得た。其の折の嬉しさは、臆病な予が自分で町へ出て、其の社へ往つて注文して來たのでも想像せられる。新聞は高知新聞といふ隔日發兌の小型な四頁の者であつた。新聞に書いてある論文や記事には讀めない個處が尠くない（固より其の頃の新聞には旁訓が無つた）、又讀めても譯らぬ個處だらけであつた。夫でも讀めぬながら、譯らぬながらに、之を讀む事が一つの樂しみであつた。

其の時、人間の目的は利己にありや將た利他にありやといふ問題を懸けて、投書を募つてあつた事を記憶する。併し其の時の學力では此の問題の意味は固より解し得なかつた、但兒童にはあまり難かしい者であつただけ、却つてその文言だけは今でも記憶して居るのである。

當時政府の言論に對する壓迫は隨分酷烈であつた。土佐は殊に『自由は土佐の森林より出づ』と言ひ囃されて、自由民權主義の中堅たり、又策源地であつた爲め、政府の注目も嚴であつたが、新聞の論調も過激であつたらしい、新聞は頻々と發行停止に遭ふ、終には發行禁止となつて、新聞の葬式などといふ奇矯な事も行はれた。兎に角此の頃は一種の革命的な殺氣が漲ぎつてゐた。

久しからずして新聞は日刊になつた樣に覺えてゐる、そして記者には坂崎斌（此文武を合せた斌といふ字が吾等には目新しかつた）、和田稻積、宮崎芙蓉（二人共後に繪入自由新聞の記者となつたが早世した）などいふ人々があつた、坂崎氏は後に新聞に汗血千里駒といふ坂本龍馬の傳を書いた人で其頃から既に頭が禿げてランプといふ渾名を呼ばれてゐた。植木枝盛氏の論説は佶屈聱牙な文體で極めて讀

みにくいものであつた、何でもバークの功利說を駁した論文が連載せられた事がある。此の植木氏は吾等の村の出身で、小さな祠の傍に巨きな椋の木が枝を張つて高く聳えてゐるのが我家から見える、其附近が氏の生れた處であるとの事であつたが、その頃はもう其家はなかつた。

(3) 小學とリードル

又此頃であつたらう、學校から歸ると、父に『小學』の素讀を習うた。飴色の厚い表紙の大きな本に重々しい四角な文字が威儀儼然と列んでゐるのが、何となく尊いやうであつた。『小學序、古は』と口うつしに敎へられるのを、夢中で覺えた。譯も判らず難かしい者とは思つたが、漢籍を習ふといふ虛榮の誇の爲めに、左程厭だとも想はなかつた。

小學校へ草紙などを入れる文庫と、手習机を持ち込んだ時代であるから、學問の上に未だ寺子屋時代の風が全くは去らなかつた、從つて敎師の自宅へ通つて、科外に漢籍の稽古をする事が生徒間に競爭的に行はれた。國史略から日本外史、十八史略といふ樣な順序であつた。天地未だ開けざる時、渾沌として鷄子の如しといふのが、國史略の開卷第一の語であつた。

英語は其の頃官を辭して國に歸つて居つた叔父から學んだ。十一か十二の歲であつた。ウエブスターの綴字書から、ウヰルソンの讀本(リードルと呼ばれてゐた)時に進んだ。第一頁の發端に猿と蟻との繪があつて、猿が手をもつ、蟻が脛をもつといふ語から初まつてゐた。はぎといふ日本語すら我には初耳であつた。

自分は此の英語を習ひ始めた時ほど染々自分が厭になつた事は無い、習つて居る時にはどうにか覺え

るもの丶、サテ翌日になると全然忘れてしまう、何遍習つても習つても、片ッ端から忘れて、復習毎に赤い不審紙が撒いた様に一杯になる、情けなくなつて泣きたい程であつた。それでも一年許りか丶つて、第二讀本からパーレー萬國史の半頃まで進んだ、萬國史の羅馬の處など今考へてもウンザリする程難解しかつた。

(4) 草雙紙に耽る

少しく字が解り始めると同時に、假名をたどつて小説を讀み始めた、夫は上の兄等二人が貸本屋から借りては讀んで居たのを見習ふたのである。中の兄などは讀むのが非常に早くて、殆んど十行並び下るといふ勢であつた。自分もどうにか其の眞似がして見たくてならなかつた、其の内に追々讀み慣れて、日曜日など朝から晩まで卷を手に釋てず、五冊物の草雙紙を一氣に讀終る事もあつた。

十四歳に大阪に遊學した頃迄に、出入の貸本屋のものは、寫本の軍書から馬琴等の小説の殆んど凡てを渉獵り盡くして、終には爲永春水の人情本にも及んだ。

軍書草雙紙の類は、父も好きで、敢て咎めず、大びらで讀み得たが、流石に人情本を借りた時は、家人に隱れて讀んだ。

斯く小説を耽り讀んだ事は一面に予の讀書力を加へしめたと共に、一面さなきだに悲傷的なる予の感情を更に過敏にした。

併し小兒は矢張り小兒だけに、當時最も面白いと思つたのは孫子童觀抄といふ孫子を軍書風に解説した本で、夫が唯一冊缺本になつた居たのを非常に遺憾に思つた程であつた。其の頃は何でも凡ての兒

量に通有なる野心の、天晴大將になる積てあつたらしい。此の未來の大將軍が孫子の軍法を一呑にして裏の五形花畑を戰場として、友達を聚めての軍ごと、奇兵、伏兵、背水の陣などを應用しやうとした小兒らしさは、今想ふと噴飯にたへぬ。

春到る滿鮮樺

大庭柯公

一

○樺太幌內河の流域、一帶の林沼地なり。河口右岸の敷香に對する邊、オロチヨン土族の馴鹿の群を林間の草原に放ちて悠遊するもの、春の樺太に到れるなり。

○幌內河沿岸水楊特に多し。多來加灣邊五月尙晩雪を見るも、六月末春色は早く水邊の白楊枝頭に上る。

○亞庭灣の東北角四大湖あり。トンナイチヤ湖北に孤立し、チペサニ、ワワイ、フツセ三湖、南に灣に枕む。而して湖邊一帶廣濶なる針葉樹林地たり。

○蓋し針葉樹林は雪景に佳にして、濶葉樹林は春光に可。亞庭灣の西角能登呂岬より眞岡に至る半島型地は濶葉樹林の大域なり。

○若し夫れ初夏綠葉の季、トロイツコエ農事試驗場內の池水に、舟を樹下蘆邊に繫ぎて釣を垂るゝ時、誰か亦匏庵の所謂「海豹裘暖穴居初、到々啫々調狗車」の嚴冬の光景を想はんや。內淵川は支流に富み、支流亦急湍多し。美保魚貫の瀧恰として小ナイヤガラの觀あり、蓋し樺太初夏好景の一。

○ノーアレキの共同牧場、廣漠四十七萬坪。十里の森野相連り、木柵疎密斷續し、緩流柵に沿ふて幾迂曲す。

放牧の馬牛陽光を浴びて春水に飲み、綠芽嫩葉を咬むもの、狀景酷だ西伯利小村落の春日に似たり。

○樺太主要の市街旅館の名あるもの、大泊の北海屋あり、その露西亞式の丸太建築は內地遊客の眼を惹くに足る。豐原の花屋は大にして凡。獨り眞岡の百足屋あり、純內地式の客間を有し、檐頭庭前池を堀りて鯉族を放てる、特に賞すべしと爲す。

○彼岸後三週、鰊族群れ集りて漁船相次ぎ到るもの、正に是れ春風春水一時に到るの觀。內地人の樺太遊覽に意あるもの。初夏內地を辭して北上數日、眞岡客舍に旅裝を解きて、春の海岸に樺太魚族の饒富を睹る亦豪快。

○蓋し六月の樺太は鰊鯑の樺太なり、正に是れ鋤雲翁の所謂「百里名山好水涯、鰊春鯑夏訝家移」もの。

二

○朝鮮の春は鵲唳より來り。滿洲の春は白楊枝頭に立つ。端陽の節、中部滿洲の兒女が、槲葉に白麵を包める海羅餅を食ひて相祝するは、人事の春を語るものなり。我の柏餅とその俗を同ふする亦一奇。

○滿洲の五六月、高粱二尺、大豆尺餘。而して春の告天子は高粱の畑より起ちて、大豆の壠圃に沒す。朝鮮の北部、陽春五月、大陸晴の蒼空に鶴の翩翔する時、春風北韓の水村山郭に吹き到りて、白衣の人多くは群踞す、光景自から悠然。

○甲辰の役、僕第一軍に從ひて鎭南浦に上陸し、一日の行程數里、平壤より鴨綠江畔に至る、旬餘鞍上の人たり。順安に向ふの途上、單騎路を失ひ、春日の長途人馬共に疲る。時に淸唳頭上に落ちて僕覺えず眉を揚ぐ。

○僕爾來每歲滿韓の遊を爲す。某春北韓に遊びて途に一淸流を徒涉せんとして沙岸に立つ。忽ち見る、丹轎盛裝の兒女を戴せて到るあり、轎中の少女齡三五、紅衣綠裳甚だ人目を惹く。知る是れ新婦を鄰村に迎ふるなるを。萎廢せる北韓亦此の春色あり。

○人は言ふ、朔北の地冬長く夏到ること急にして、亦春に會はずと。滿洲の五月、郊邊野外、大小の娘々廟

日を期して祭祀を啓き、村郎野孃の到り詣するもの、途上絡繹、正に我に於ける春日の開帳に似たるあり。

○娘々廟の祭日は滿洲全域に於ける娘孃の解放日なり。眞に是れ結氷せる野水の一朝にして融解するの狀。

○或は驢を驅るの老父、驢背の家婦に殿し、或は一家混載の滿洲車、放歌微吟の郎群と相前後す。尺餘の高粱は青嵐を送り、幾寸の紫雲英は春色を吐くに似たり。途上路傍露店を張るもの多く、各種の紅餠黄糕、特に多く行人の間に買はる。古詩に所謂「麥隴風來餠餌香」の狀。

○若し夫れ北滿洲の春に至りては、四月松花、嫩二江の解氷を見、五月僅に綠野翠楊の春に會ひ、六月雨期の到る、直に洪水の大域と化して、到る處に周回幾里の湖面を現出す。

○僕齊々哈爾を過ぎて卜魁城に遊ぶと前後四回。一昨夏最後の遊を爲すや、城内歐風公園の新築既に成るあり。花壇綠芝の間、西洋草花妍を競ひて莖枝繚亂たり。而も北滿洲の八月、暑を感ずるの强くして、花に會ふも竟に春を懷ひ得ず。

三

○滿洲に春を探らんもの、喇嘛塔の苔の花を逸すべからず。滿洲の喇嘛塔、名あるもの優に十指を屈すべし。基壇、塔身、層屋、相輪の剝落片壞するもの。佛像花紋の雨絲風片と戰ひ、而も歷々印象を保てる、古雅古趣の掬すべきある、眞個東洋美術の粹たり。

○奉天に四塔あり、僕特に護國廣慈寺の南塔、永光寺の東塔を愛賞す。東塔の基壇花紋を鐫刻する處、半ば叢棘の裡に埋もれ、逆蓮の座を支ふるの獅頭は、空しく丈草に摩せらる。壇面刻するの雲珠、塔身彫するの佛體、徒らに鳥糞に汚さる。此の數百載の古色古體、唯一新春の粧を着く、苔の花即ち是。

○若し夫れ奉天の北陵に到り。銀錢一片を門衛に賂して奥殿に進み、三層樓に登りて、樓後聖祖の土陵を拜せんか、丈草寸蔹の密茂陵を蔽ふ所、紅黄白紫の草花、自から春を飾るを見ん。

○吾人は春の滿洲に俳仙子規の句を想起するを禁じ得

ず。子規子、日清役に初めて大連埠頭に上り、滿洲の山を見る、句あり「大陸の山皆低き霞かな」。

日露の役、兩軍鴨綠江を挾んて相對する旬餘。義州に駐するの我軍士氣橫溢、而も滿を張て放たず。時に河畔の樓臺統軍亭に上り、雙眼鏡を把りて敵情を望めば、煙霞山腰を透りて、人馬動もすれば沒せんとす。

○蛤蟆塘の捷後、全軍鳳凰城に迫らんとして、敵を追ふて湯山城、高麗門を過ぐ。牙狀の鳳凰山は春霞の裡に煙むるが如く、柳楊の村は人空ふして眠るに似たり。時に一陣の風李花を散せば、驟聲頻りに里門より到る。

○鳳凰城に入らんとして、一河流あり。軍橋未だ成らずして、人馬皆徒涉す。水邊の楊柳已に綠に、民舍の桃花尙ほ枝頭にあるの邊、人は脛を浸し、馬は蹄を洗ふて春水を涉る、亦軍陣場裡の畫趣たり。

四

○樺太の豐原、中央政廳の所在地たり。其の街路の廣濶、背後山を負ふるの景、人をして北韓の羅南を想起せしむ。眞岡市街を海上より展望する。恰として露領ボッシエットの遠望に類す。

○柳坡小川君あり、樺太島風物土壤の對岸大陸と相等しく、兩者關聯の必然たるを唱ふ、想ふに或は然らんか。水楊の多く、落葉松の繞く、大麻の鬱蒼密茂せる滿樺を通じて植物の同系なるもの。若し夫れ人事に見る、ギリヤークが兒童を繦捲に納めて養育するは、滿人の家庭之を乳兒の搖籃に用ふると同型たり。

○若し夫れ晚春初夏の樺太に、アイヌ土人が身自から河中に立ち、所謂マレップを使用して、鱒を刺すの巧なるに至ては、竟に獨特の技。滿洲土民の農にして漁を兼ぬるもの、松花江に嫩江に鯉魚と血魚を漁するの劣拙なる、畢竟平原民族の海洋に親しみ得ざる所以。

○諸君は松花江の血魚を味へりや。北滿洲の晚春、哈爾賓埠頭區の東洋館に投じ、洋裝を解きて褐博に更え、命ずるに和食を以てせよ、血魚の刺身はミンユヘン麥酒と共に膳に上らん。都人士が新綠季に初鰹を要するとせば、晚春初夏の北滿觀光客も亦血魚を賞味するを要とせん。

○殖民地魚族の春を語るに於て、京釜沿線密陽の鮎を忘るべからず。上下急行の客、車窓に鮎鮨を呼ぶ甚だ可なるも、若し一段の風韻を探らんとする、河邊の密陽樓に上り、四望の春色に鮎鮨を風味する更に妙。

○南滿の熊岳城亦鮎を産すると聞く。鮎の香に高梁の風、趣味必ずしも一致せざるに非ず。五月七日滿鐵主催の熊岳城廻遊列車、九輛の車內悉く疊を敷き、座臥談笑家居に倣ふ。我が滿鐵が斯る設備を凝して、雅客を引くに勉むる多しとすべし。

○樺太初夏海岸の風光、西岸名好の夕照を第一に推すべし。北滿哈爾賓の埠頭、第二松花江鐵橋の遠望、朝霞に可く、夕照に佳し。滿樺の風物、狀景は往々にして一致するが如し。

五

○鮮人の白衣は却て凉冷の觀なきに、淸人の藍衣は楚々人をして淸凉を感ぜしむ。

○若し夫れ瀋陽城外の民家、門前の楊柳六七株、水藍色の長衣を靑嵐に吹かせて、剃痕尙靑きの圓頭に、光澤ある辮髮を垂るゝの夫子、團扇に春光を翳して門外の野色を望むものある、是れ眞に得易からざるの畫趣。

○淸廷の斷髮易服の令、吾人は與せず。

○朝鮮の春色は多く渡船場に賞せらる。漢江沿岸鷺梁津の渡場、遠近の山影濃淡畫の如く、平壤楊花の渡津、幽邃愛すべし。『楊花古渡最淸幽、特出奇峰枕碧流。』渡頭水邊、一婦人甕を頭上に載せて河水を搬び、少婦三五、白衣を石に打ちて洗ふの時、春水環り洗ふの岩角に、鶺鴒の春を告ぐるあり。

○滿洲を荒寥索漠の天地なりと速斷するものは、晩春新綠の安奉沿線に一遊するを要す。鷄冠山の翠葉、草河口の晩霞、釣魚臺の淸溪、皆春に佳し。

○一昨初夏、僕安東縣を發して瀋陽に向ふの途、晝食を鷄冠山の驛站に取る。驛背社宅五六、庭前一重櫻一株、日本より移植せるもの、僅に花を着く。

○昨秋歐洲よりの歸路、奉天を發して再び安奉線に由り、途に鷄冠山を過ぐ。時正に改築工事に際し、民舍僅に數十戶を超ゆ、而も一株の櫻樹、その存否を知る

に苦しむ。移住の邦人。業に勞し利に專らにして、花を語るの餘裕なき、三嘆に堪へたり。

○滿洲の春、桃櫻李花一時に到る。若し觀光團の此の時に發程して、鴨緑に朝鮮の春を開き、花瓣の風に滿洲の春を尋ねば、滿鮮の天地に芳春の浮動するあるを知らん。

醫學的に觀たる杜翁

ドクトル 富士川游

トルストイの家は元と獨逸の出である、即ち先祖はプロイセン人で名をディックといふ、それを露西亞語ではトルストイといふ。十六世紀に初めて露西亞に來ペーテル大王の時に伯爵に叙せられた、杜翁と呼ばれて名高い、彼のレオ、ニコロウイッチ、トルストイは其母はウヲルコンスカヤ公爵夫人で詩の嗜みのあつた人、其爲に子息のレオは幼い時から想像に富んで居た、家庭の教育は善かつた譯である、千八百四十三年にカザン大學に入つて一年ほど東方語を勉強し二年ほど法律を研究した、都合三年ほど大學に居り、それから又自分の郷里に歸つたが、其郷里といふが彼の名高いヤスナーヤポリヤーナの地で父の別莊があるのだ。

此學生時代に於ける杜翁の思考の力は甚だ常人と異なり、頭角を顯はして居た、千八百五十一年高加索の戰爭に出陣し、爲に親しく高加索人に接して其狀を審にする所あり、其後それに就いての著述が澤山ある、翁は實に此時に於て戰爭の慘澹なる事を痛切に感得したものだ。それから經濟的社會的事業に着手し、千八百六十年に小學校を建てる、國民讀本を作る等、色々の事に盡力した、それから五六年の後に「戰爭と平和」

を著し、次に又「アンナカレニナ」を著した。大凡そ二十年間は斯くも社會的經濟的方面に努力して居たが、その後暫く休息した、年齢は當時恰も五十であつた、それより前千八百六十二年に夫人を迎へて小供も十三人ある、が其中の多くは死んだ。此沈默時代から又一轉して宛ら夢から覺めたものの如く、變つた精神の生れた如く、今度は風俗の革命に從事し、先づ自己の從來の生活を自己で判斷し、過去の罪惡を懺悔し、自分の嘘を言つた事、泥棒した事、人殺しをした事等を逐一白狀し、斯くて世間の倫理上の改革を心掛けた、それに就いて色々の書物を書いたがそれは人の能く知る處だから略する。

併し是が如何いふ譯からか、斯う自己の過去に於ける罪惡を仰山に言ふけれども、其人殺しといふが如きも說く所の意味は單に戰爭に人を殺したといふ程のものである、此點が頗る疑問である。アンナカレニナの著述を終つた後に翁は自殺を企てた事があつた、其時の症狀は、醫師の語る所に從へばメランコリー即ち鬱憂狂といふ風て、精神に絕えず病的の苦悶、鬱憂がある、それが漸然に亢進し、其頃から後に書いた書物には此趣の見えるものが多くなつて來た、「人と仕事」といふ著の如きは特に甚しい、斯くて美術學術それから在來の宗教やら國家やらを盡く批評し否定し呪詛する何でも彼でも凡て此調子と爲つた、又戀愛をも擯斥する樣になつた。併し翁には妻君があり小供も十三人もある事前述の如く、即ち若い時分に結婚して居りながら年を取つてから夫婦關係を排斥し、夫と妻とは兄弟姉妹の間柄か或は親類の樣にして生活するがよいと說き、之を立派に其著クロイツエルソナタにも書いて居る。是は如何思つても不條理な病的の考と見なければならぬ。特に更に晩年に及んでは病的の自己意識が盛になつた、言ひ換へれば頑固が病的に亢進し、容易に人の言ふ事を聞かぬ、自己の說をのみ主張する、即ち執拗强情といふ性が著しくなつた、此性が一般に老衰者に伴ふ點からいへば、杜翁には老衰の徵候が盛になつて來たのである、それから例の伯爵の榮譽を有しな

から自らそれを顧みず、百姓の着る粗服を纏ひ、上に革帶をした、若い時の寫眞を見るとフロックコートやギーロックを着て相應に邊幅をも繕うたものだが、それをばさらりと一變してしまつた。

元來此杜翁は身體の構造が人より一寸變つて居る、今より丁度十年ほど前にザーベルといふ人が翁の身體の様子を書いて居るが、丁度其時翁の年齢は七十二歳て、それによると大分老衰の徴候が見えて居た、顔の形は何といはうか、實に比較すべきものがない程、額が非常に凸出し、それには澤山而かも可なり深い筋が並ぶ、眉毛も非常に濃くそして非常に下垂して居る、其下に小さな目が開いて奥深い所から人を見る、鼻は不恰好て大きく鼻孔も大きく、鼻の兩側に二つの深い溝がある。是は物を深く考へる人に能く見る特徴だ、頭の毛は薄く、額の方から禿げ掛つて居り、鬢と後頭部に丈、厚く耳に掩ひかゝつて居る、耳の形は甚だ美はしい、それから口と頰と頤とには長い胡麻鹽の髭がある、つまり顔全體の調和は取れて居ぬ、だから綺麗てはない、初めて見る人には何となく不安の念を起させる、けれども能く〱見て居ると、顔の形は智力と意力との能く平行し居ることが分る、要するに杜翁の人格は遺憾なく其顔に現はれて居る。例の百姓着物に革帶で人と對話する際、油が乘つて快感を催して來ると、常にジャケッに手を挿し込むで話し續ける、翁の性格は全く主觀的て、著述の大部分はそれより出來て居る、自分は如何して生活したか、又生活するか、如何して失策したか、又失策が出來たかといふ如き、凡て自己の主觀の歴史の樣なもののみが其著述に書かれて居る、斯くして學術、美術、社會の組織、警察等を惡口し、只道德と節調する人だけを漸く能くいふ、凡てが主觀的だから自分の精神内に起る不安が伸びて、元は一寸位のものが二尺にも三尺にもなつて外へ出て來る、是は美術家小説家に具はる性質だけれど翁には特に甚しい、例へば前に言つた性慾問題にしても、其言ふ所書く所を見るに皆左樣である、元より夫婦關係否認者は杜翁のみてはなく以前にも澤山あるけれども、杜翁は

獨り性慾は人間を動物と爲し了るといひ、自然の規則を全然無視して取上げぬばかりて、然らば全然性慾を止め戀愛を止めたら人類が如何の狀に至るといふ樣な其根本問題になると何等の解釋もしてない、萬事が是てある、色々大問題に就いて說いては居るけれども毫も適當の解釋を下してない。遂に社會的、文學的、美術的、哲學的の事に就いて色々說を立てた末無政府主義となつた、或は爲つたてなく左樣てあつたのてあらう。それ故杜翁の人物を見るに此精神方面を特に研究する必要がある、

フリードレンデルといふ人が此杜翁の精神方面を專ら研究したが、氏は前述せる如く杜翁の父はプロイセン人、母は純粹の露西亞人て、異なる二系の血液が混合して居たから、斯樣な事が其所生兒たる翁の性格に關係ある事てあらうといつて居る、此フリードレンデル氏の考ては翁は斯く主觀的の熱狂的の人てあるけれども、さればといつて精神に異常があつたてはなからう、杜翁の學術を排し、美術を排し、戀愛を排し、又法律を排し、國家を排し、兵隊を排し、租稅を排し、租稅兵制を廢せば國家は成立たぬからとて勉めて之を以て人に說き、遂に無政府主義となつたのは全く自己の主觀的傾向の亢進した結果てある。(ド、ホ、ボルゼン、是は露西亞の無政府主義の一つて、一に之をトルストイ主義ともいふけれども左樣てはない、杜翁以前に存在するものて翁は偶ま之を贊成し誇張したに過ぎぬ)即ち是は一方から見るとモノマニーといふ精神病の一種に屬するが、想像が非常に盛となり漸次に斯うなる事もあるといつて居る。要するにフリードレンデル氏の意見ては、翁の精神は健康ならずといひ得るけれど、それは主觀的態度の漸次の亢進てある、そして血液混合の影響が與つて大なるものてあらうと見て居る。

文藝委員會の眞價如何

○文藝委員會私見

戸川秋骨

文藝院若くはこれに類似した機關に就て私は絶對に不賛成を表するものである。その有るは無きに勝ると云ふものに對して、私は有る方が餘程惡いと云ひたい。どんな惡い事も多少の善を伴ふ譯であるから、文藝委員會のやうなものにも多少の善はあらうが、その善に比して害は無限大であらう。私は有名なフランスの文藝院すら幾何程の利益をなしたか疑はしく思ふ。殊に今日に至つては猶更らその存在の價値が怪しく思はれる。文藝の全く個人的なるべき事は何人も疑を容れない事である。文藝院なるものの、無用のものである事も論理上當然の事である。

全體文藝の保護奬勵などゝ云ふ事は一寸もつともらしく聞えるが、よく〳〵その意義を考へて見ると頗る曖昧なものになつて仕まふ。皮肉を云ふのではないが今の政府が若し少しても文藝を保護し奬勵しやうと云ふ積りがあるならば、此れを放任して置いて貰ふのが一番の保護であり奬勵となる次第である。云ひ換へれば政府の保護奬勵なるものがある丈けそれ丈け文藝は衰へると私は斷言する。委員會が未だ何事も仕ないのにそんな斷言が出來るものかと云ふ人があるかも知れぬが、現在今の政府は百方力を盡して文藝を撲滅したてはないか。昨日の新聞を見ると小松原さんは戰後の文學は大に興らなければならないと云つて居るが、實際日露戰爭の前後から文學は盛んになつたのである。然るに今日てはやゝ衰へたやうな樣子が見える、それは誰れの所爲かと云へば、云ふ迄もなく政府自からである、今迄やゝ盛んであつた文學を眼中に置かず、百方これを阻害して置いて、その側から文學を保護すると云つても、誰が當局にそんな眞意があると思ふてあ

らう。又そんな當局の創めた機關が如何して立派な文學を保護奬勵する事が出來やう、私に云はせるとこの事たるや隨分人を馬鹿にしたやり方だと思ふ。何んだか狼が人に化けて來て羊を食はうとするのではないかと思はれる。

尤もこれは邪推であるかも知れぬ、併し眞實に政府が文學の發達を思ふと考へて見ても、私にはこんな機關は贊成が出來ない、論者は文學も國家の一事業であるから、國家が是れを取り締るのは至當だと云ふかも知れぬ、それは道理至極な説である。それであるから政府には文部省と云ふ行政機關が置いてある、その外警視廳でも內務省でもそれ〴〵一部分の取り締はやつて居る。それは行政上の事で將に然るべき事である。然るにそれでもまだ不充分だと云ひ更らに文藝院のやうなものを置くのならばそれは行政の統一を缺く次第てある。自から矛盾を敢てする事である。或は又行政機關のみては文學の眞價が解らぬと云ふので、參考のために斯樣な機關を置いたのであるならばそれは政府自からの無能を表白したものだ。又文藝の事には文部省がある、それ故にその仕事として文部省に斯樣な機關を置き健全なる文學を起さうと云ふのであると云へば、それは責任を他に頒つ事になる、甚だ宜しくない事である。それも物質上の事なら差支はないが、文藝と云ふ精神上の事になると、その結果丁度政敎を一致させやうとするのと同じ事になる。つまり物質上から言つて自分の責任を輕くすると云ふ事になるか、左もなくば精神上から言つてそれを利用すると云ふ事になるのである。政府はこの委員を鐵道會議や生產調査會と云ふやうなものと同じに心得て居るのであらうか、如何にもさうらしいが、果して然らば甚しき謬見である。文藝を侮辱する事これより甚しきはない。

つまりこれは文藝の士にその説をきゝ國家として某某の文書は善良なるものであると云ふ事をきめるのだと論者は言ふかも知れぬ。處がそれが大變に有害な事だ。大隈伯を主宰として雜誌を發行する、心あるものは大隈伯の主宰たると否とは眼中に置かぬ、併し田

含漢や、無智の人々はこれに隨喜して雜誌を購讀するまことに商賣としては卑怯なやり方である。國家をうしろに置いて精神上の標準を建てやうと云ふのはそれにも增して卑怯な事である。卑怯な計りではない有害な事である。所謂武士の風上には置けぬやり方である。この點に就て私は夏目さんの發表された意見に同意である。

併し若し論者があつて、それは國家の定める意見ではなくして、委員會の考である、立派な委員の意見であると云ふかも知れぬが、若し立派な委員としての意見ならば、特にそんな國家に附屬した機關に附屬せずとも、左樣な立派な人の考は又立派に世に行はれるに相違ない、又今日實際に於て立派な文人の意見は世に行はれて居る。さうして實際世を指導して居るのである。

論者はよく歐米の先進國では文藝を保護して居ると云ふが、私はそんな事を聞いた事がない。それは私の淺學寡聞だから仕方がないが、少くともそんな保護に依つて出來た大作を見た事がない。私は人爲的に文藝の大作が出來るものではないと信じて居る。論者は或は直接に利益はなくも間接にあると云ふかも知れぬが間接の利益と云ふなら自由に放任して置ても得られるのではなからうか。私は度々既に云つた事であるが、保護とは反對に迫害して却つて立派な文學を生じた例を知つて居る。今日流行のロシヤ文學がそれである。私は何も迫害してくれと注文はしないが、政府殊に今日迄文學を迫害をして居た政府に今更ら保護などはして貰いたくない。實に有害無益難有迷惑の次第だと信じて居る。

凡そ日本のもので外國に誇るに足るものは先づ餘計にはない、茶と生絲と軍隊と位なものであらう。如何にも此の軍隊丈けは何億と云ふ金を費し、之が爲に多大な犧牲を拂つて居る故に少しは見るに足るらしい。此の外只獨り文藝のみは全く獨立獨歩、迫害は受けるも、何等の保護なくして、やゝ見るに足るべき、外國に出しても恥かしからぬものを出すやうになつた。飛

行器や無線電信を西洋に逆輸入する事は到底出來ぬ。大金をかけてロンドンまで行つて演じた菊地さんの演說は滑稽なものだ、まるでお話しにならぬ。さる西洋人がひどくあれを冷笑して、これを聞かされたロンドンの人はたまげたてあらうと云ふのを余は聞いて赤面した。併しよく引き合ひに出してすまぬが、夏目さんの小說ならロンドンへ出しても、パリへ持つて行つても立派なものだ。否豈に夏目さんを勞せんやで、每月出る雜誌の小說は西洋の小說雜誌に出るものに比べて遜色はない、この獨立獨步て育つて來た文學を今迄迫害して置きながら今更ら保護するの奬勵するのとよくも今の政府に云へたものだと、私はその厚顏と云はうか盲目蛇と云はうか、その圖々しくて蟲の良いに驚いた。

　政府に對する偏見や邪推と推定さるべき恐れのある斯樣な考へを去つて、偏に方法さへ良ければ利益もある事と假定して考へて見るに、文藝の保護奬勵なるものに如何なる良法があらう。懸賞などの無益なるは云ふ迄もなく、飜譯をさせるなどは三十年位前に文部省がやつた事をくり返すので、今日に於てはこれ又用なき事である。又立派な作に賞を送ると云ふ事があると云ふが、恐らくそんな書物の著者は公衆の批評を望むてあらう、獨力て世に見えたいてあらう。心ある人てあつたなら國家の後見などは却つて邪魔に思ふてあらう。その場合賞金などは著者に對する一種の侮辱になる、何となれば大木を溫室物扱ひにするからてある。要するに世評て立派に認められたものに賞を與ふるは蛇足てあるし、世評のないものに賞を與へては著者に迷惑を加へる事になる。又迷惑を感じないやうな人ならば始めからそんな立派なもの丶出來る筈はない。何れにしても、賞金などはつまらない事てある。

　要するに私は徹頭徹尾この種の機關には不贊成てある。併しこれは文藝委員會なるものを重要視して云つたのてある。これを輕く考へて見れば多少の利益がある、例へば文壇の宿老に所謂年金をやるやうな事、若くは委員に依り今日の大作の内に多く見る語格の誤り

や、又立派な翻譯書の内に時々ある誤譯を訂正する事や、固有名詞の發言を正す事などは至極適當な仕事て又それに依つて日本の文藝は大ひに裨益する處があるてあらう。

若し夫れ今日の委員の顔ぶれの如きは末の問題て私は兎や角云ふ處てはない。煙草を官營にし鹽を官營にし、保險をも官營にせんとする政府の事てあるから、それ等の商品と同じく、忠君愛國を官營にし、文藝をも官營にせんとするに、何の不思議もない事てある。只御氣の毒な事にはこれ計りは、左樣簡單には行くまい。私は一種の滑稽としてこれを見物したく思ふ。

○文藝委員會集合の前日

正宗白鳥

○僕はこんな事についてあまり話したくない。別に立派な意見もない。明日は委員會最初の會合があると云ふ事だから、どんな組織になるか知らんが、まあ前日の勝手な想像をして見ると、文部省では報德會などに對すると同じやうなんだらう。大臣の說として豫報されてるやうに雄大とか健全とか何とか空疎な考を以て文學に對してゐるので、先方の文藝院を起した意味は想像される。要するに文藝公設展覽會とは全く意味の異つた者になるんだらう。

○福原幹事の話にあつたやうに作物の價値を審査するとなるとあの委員の顔觸が可笑しい。若し美術展覽會の審査員にこの委員中の或人々などを入れたら可笑からう。眞面目に出品する人さへないだらう。展覽會の審査員は兎に角美術界て相當の地位もあり技倆もある人ばかりだが、文藝の方には丸てその方面の知識のない人もある。

○新聞記者を入れたのは文部大臣が新聞の同情を得たい爲なんだらう。そして藝術その物の保護よりもこれを政治上の一機關とするつもりだらうと思ふ。

○いくら今の文學が詰らなくても、作者は皆相當の苦心をしてゐる。碌にその道の修養のない人が一國を代

表して作物を審査するとなると滑稽でもあり僭越でもある。(二十一日)

○文藝委員會に對する予の希望

島崎藤村

自分は簡單に、文藝委員會に對する希望を述べやう。

新聞紙上に發表されたところを見ると、當局者の方針は、作物の選奬、懸賞作物の募集、外國文學の翻譯等である。これだけのことならば、事理に通じた、所好に偏しない、眞に精選された少數の人があれば足りる。十數人の委員を擧げて事々しく論議すべきほどのことでもないかと思ふ。それに、文藝は政事とか實業とかの場合に於ける如く單に多數を以て萬事を決すべき世界では無い。文藝の事は、多くは、少數の精しき知識と努力とに依つて導かるべき性質のものである。

自分は當局者の方針といふものを讀んで、文藝の性質から見て、委員が多過ぎるやうに思ふ。昨夜、文部大臣は委員諸氏を集めて、雄大なる文學を期待すと演說されたといふ。それには先づ、國家が天才を認め、尊重し、誘掖するほどの理解と宏量とを欲しい。

新聞紙が報導するところでは、文藝の範圍を小說、脚本に限らず、評論、詩歌、記行、隨筆にも及ぼすべしといふ委員の意見が多かつたとか。それに就いて、自分一個の希望を言へば、既に種々な方面に渡つて多數の委員を網羅したのであるから、その範圍を更に廣くして、歷史、科學、哲學、美術、其他あらゆる學藝に關した著述に渡つて、毎年特に傑出したものを推薦するやうにしたらば奈何かと思ふ。文藝の收穫は年々一定しない。もし官省風に、定まつた金を文藝にのみ投ずるとなると、どうかすると其標準は固定したものに成る。それよりは、今年は歷史に大きな著述が出たとか、今年は科學に好い研究があつたとかと言へば、それに對しても賞金を與へたら奈何だらう。そこに學藝の發達の比較が出來る。文學は單獨には發達しない。他の

學藝に關した著述をも選奬するといふは、やがて大に文學を興す道てはあるまいか。

以上は大體に渡つての話だが、自分は當局者の方針以外に、文藝の爲に望みたいことがある。左に、その主なるものを述べて見たい。

文學者の爲に研究觀察の便宜を與ふること。

これは文藝を豐富ならしめる道て、その方法は、推薦した人物に對して――あるひはその賞として――特に便宜を與へて可い場合もあらうし、又は適當と認めた人には許して可い場合もあらう。例を擧げて見ると(一)有望なる脚本作家に海外の劇場を視察する便宜を與ふることと(二)海外文學の研究者に同じく視察の便宜を與ふることと(三)戰爭のある場合等に、從軍を許すことと(四)遠洋航海の志望者に乘船の便宜を與ふることと(五)議會、裁判所等の傍聽の便宜を與ふることと(六)國寶の美術、建築、彫刻、繪畫、文書等を味ふべき機會を與ふることと(七)兵營、工場、監獄等の縱覽、其他公けの儀式、祝賀、等に參列せしむること等てある。

この他にも、口語文典を完成するとか、海外にある文士組合を調べるとか、委員會としてやつて貰ひたいやうな仕事もあるが、こゝには略する。

要するに自分は、當局者があまり神經質てなく、坦懷を以て委員諸氏に接し、文學者が單獨に出來ないことゝか、個人として不便を感じて居るとかの方面に、出來得るかぎりの力を添へて貰ひたい。委員諸氏、殊に純文學の方面を代表する諸氏は、文藝の爲には一歩も讓らないほどの意氣込を以て、今日の文學者の心を當局者に通じて貰ひたい。自分はあまり多くを文藝委員會に望むことも無理だと思ふ。唯、自分等の生れた國て、いかに文藝が取扱はれ、いかに人間の思想が重んぜられるか、それを見たい。

○何も云ふ必要はないが

上司小劍

▲兎に角日本の官報にも「文藝」と云ふ字が發賣禁止の

告示以外に印刷されるやうになつたのは、進歩に違ひない。

▲私の友人の或る創作の大家は私に向つて、『我々の文藝を撲滅する爲めに文藝院とか云ふものが出來るさうだね』と云ふたことがある。其の後いよ〳〵文藝委員と云ふものが發表されると、私は多くの友人からいろ〳〵の言葉を聞いた。其の中には『文藝を知らぬ文藝委員』とか『高等警察の分店』とか、隨分無禮千萬な惡口や皮肉もあつた。

▲しかしながら、物を惡く云つたり、皮肉を浴びせたりするのは、其の物を重く見てゐる證據――尠くとも眼中に置いてゐないのではない證據――であるから、文藝委員會と云ふものは、先づ〳〵其の存在を認められた幸先きを喜んで可いと思ふ。

▲日本の政治家には、昔しから文藝などゝ云ふものゝ大嫌ひな人が多く、(もとより文藝を正當に理解し得たものもなく)能ふべくんば總べての小說を禁じ劇場を閉鎖したいと云ふ水野何某とか呼ぶ德川幕府の役人に似た人も尠くはなかつた。けれども一槪にさう云ふ譯には行かぬので、演劇は勸善懲惡の範圍に於て、小說は國運の勃興を助成する程度でやらして置くと云ふやうなことになつてゐた。

▲今度文藝委員と云ふものが出來たに就いて、それに關係してゐる或る役人の話にも、矢張り『淫靡なる文學藝術を排して國運の勃興を助成する雄健なる文藝の興隆に盡すべし』と云ふ言葉がある。勿論この役人の話が文藝委員の意見を代表してゐるのではあるまいが政治や事務に當る人の文藝に對する考へが今も昔も大抵同樣だと云ふことだけは分る。

▲同じ人の話にまた『大戰役の後には大文學が現はれなければならぬ筈であるのに、日本に於ける日露戰役後の狀態は全くこれに反してゐる』と云つたやうなこともある。日露戰役後に於て新しく流れた我が文壇の大潮流、思想界の大動搖をば、單に淫靡なる文學藝術の湧出などゝ云つてゐるやうな、盲人の垣覗きにも足らぬ次第では、たとへ大文學が眼の前に現はれて來て

も、氣がつかぬことはなからうか。

▲政府の事業と云ふものは、何處の國でも、何時の世でも保守的になるもので、新鮮な氣分を強權を負ふた仕事の中から求めやうとするのは無理であるから、要するにこの點に於ては何も云ふ必要がない。

▲氏神の參詣や先祖の墓詣りが盛んに奨勵され、特別高等警察とか云ふものが各府縣に設けらるゝ今日、文藝委員がそれ等の良政策と相待ち相助けて大に活動し當局者理想通りの大文學の出づることを期待したいものである。

▲中にはまた文藝委員會に對抗して、在野の文藝院と云ふやうなものが出來て、新しい文學者の集團が作られ、其の方の活動に却つて大に見るべきものがあつたならば、即ち文藝委員會の間接の功勞に歸せざるを得ないと、半ば分つたやうなことを云ふ人もあるが、そんなことは先づ〳〵無いであらう。自分は自分だ、他人と事を共にする集團なぞ面倒ではないか。

▲因に、文藝委員會で、確かな人に頼んで外國の名著を翻譯させて出版したら第一の功德になるであらう、と云ふ人もあつた。それも所謂「名著」の選擇次第であらう。

○手簡數通

水野葉舟

一

某兄

文藝委員會が出來た。この會合が出來るにつけて、前から、君はよく氣にして居たつけね。今の日本ではこんな事が意外に、惡い影響を與へる。誤つたオーソリチーが表はれて來る。それてなくつても、實に感受性の幼い。理解力の不足な民衆が、こんな事で、一層混迷するだらうと。

君はこれを言つて、僕に何故無頓着で居るかと僕の身體を揺るやうに言つて居た。僕はその時には、この委員會の成立と言ふ事は、まあ出來ないだらうと考へて居たのだ。處が、議案が議會を通過してしまツた。

併し仕方の無い事なんだ。一體日本では、まだ個人と言ふものが、意外に認められて居ないんだから……しかし、出來た以上は、君のよく言つた、その誤つたオーソリチーに向つて、戰はねばならぬ時が、必ず來るに極つて居る。それでなくッても、藝壇が枝路に入り易くなッて居る現在に。又厄介なものが表はれて來る譯だ。成程、君の先見に服さずには居られない。

某兄

二

しかし、僕は又一方からは、こゝに集められた――政府の意志の下に、委託された、委員の人々の迷惑を察せざるを得ない。第一互にこの人方は緣もゆかりも無い人達では無いか。それが、忙しい時を割いて、集まらなければならぬ。第一、集つて何が議し得られるのであらう。實に勞力の浪費ではないか。そして意外に有難がられない役廻りだ。その迷惑、察す可してはないか。

僕はともかく、この委員の人選が發表された時に、一種不可思議な矛盾を持つて居る團體である事を感ぜられた。君はバベルの塔の下で、太古の人間に行はれた、奇蹟を思ひ出してくれたまへ。あれに似た一種の不思議がこの團體の中には、必ず起つて來るだらうと思はれる。

この團體の人々の間に、互に思想の理解が出來にくいと言ふ事は、誰が見ても分る事だ。互に矛盾し、不理解に落ちると言ふ事は、隨分、外から見た豫想以上であらうと思ふ。僕はもッとバベルの塔に近い事が起るだらうと思ふ。恐らく或る人々の用ふる言語の意味が通じない場合があるだらう。吾々はそんな事で、これ迄にも隨分醜い愚劣な言葉を聞いて居るてはないか。自然主義と言ふと、すぐ性慾を恣にすると言ふ事のやうに言つて居る。あれなどはそのバベルの塔の下で出來た奇蹟の一つだ。

しかし以上のやうな、汚い卑しい事はとも角として僕などはこの僕の言葉の意味を理解してくれぬ、兩親の前に出て、隨分盛んな、Tragi-Comedy の反對をやる

事がある。一體、この思想が理解出來ず、その言葉に含まれて居る、内容が全く了解の出來ないと言ふ人々の集つた場程、困つたものは無いだらう。互に投げる矢に見當が無いんだからね。さうなると、あの委員の中で、その全體の人の心持が分る一部の人の感じは、喜劇を見るやうでもあらう。しかし、實に迷惑千萬の事であらう。

第一、斯う言ふ會合の中で、何が有効に計畫されると思はれる。僕は、五月廿三日の朝日新聞にある記事を見て、この會合の席で行はれた、喜劇と、それを見物した人とを、まざ〳〵と描かれた。

主客ホンノリと醉つてアイスクリームの舌觸り美味き頃小松原文部大臣閣下は起つて一同の來邸を謝し健全なる文學の發達を望むがために此委員會を設けたり、願はくは國家のため世道人心の爲めに新興文學の事に就て御盡力を仰ぐとて總て新聞紙上に出た過日の挨拶あり、次で何したならば

健全なる文學を興す事が出來るかと云ふ事に就き將來半ケ年又は一年間に出た小說、脚本の類を精査し傑作と認むべき物に賞金を與ふる事、賞を懸けて小說、脚本を募集する事との六條を擧げて委員諸氏の高見を伺はれしが抱月、桂月、青々園氏等は一言も云はず、萬年、潮風、敏、醒雪の諸家また說を吐かず僅に鷗外、竹柏園、露伴、篁村氏等文相に應接し先づ懸賞募集といふ事は今日まで新聞雜誌社の先例に見て結果決して面白からず懸賞に依りて健全なる文學を望むが如きは

有害無益の事なりとまで說し人ありしが文部大臣は決して左様に悲觀せず、「夫は新聞社雜誌社の懸賞ですから不結果なのでせうが、苟くも文藝委員會の名で天下に傑作を募る以上は必ず傑出した小說脚本が出るに違ひありません」といつていつかな動かず、更に「相應の題目を定めて歷史小說を募つては何うでせう」とのお尋ねありしがこれは頭から問題にならず、竹柏園は特に願出の者に限り小說脚本の檢定をしても宜からうと云ふ、鷗外漁史は又外國にも文藝院はあるけれど功果なしと說き露伴博士は

範圍を廣めて小說、脚本以外に評論、詩、歌、俳句も傑出したものに授賞せよと論じ又文藝の發達に功果ある團體たとへば文藝協會の如きも授賞の要あるべしと發議せる人あり、要するに來月十二日改めて委員一同文部省に參集し細則その他を協定する事となり再び談話室にてハムレット劇の評判取沙汰などありて九時散會したるが此の第一會合に見るも文部大臣などの考へと文學者側の考へとに多くの相違あり、文學を政治上の一機關として取扱はうとして居る樣子が見えるとぞ

この通りではないか。この人に依つて何が議せられるのだ。實に、全く相融合する事の出來ない、幾種の水と油とになつて、空な議論でも戰はさねばならぬ場

合が多いのであらう。一體、このバベル塔の奇蹟と言ふものは、各時代に起るものと見える。

三

某兄

僕は以前に學校に居た時に、經濟學の初歩を學んだ。その時に、保護政策と自由政策とについて、講師が分りよいやうに、かい摘んで話してくれた。だが、その時にも僕は考へた。保護政策がいゝと言ふ事もない。自由政策がいゝと言ふ事も無い。一體、政策には理論は無い。技術だ。政策をする人の時と場合とに望んでする、技術があるだけだ……と、誰でも思ふ事を、僕も人並みに思つた。

一體、この自由政策、保護政策と言ふ事は、同じ原理で、凡ての政策に向つて行はれるものだ。この藝術の發達の上に於ても、同樣だ。第一に藝術を保護し、選擇すると言ふ前に、この保護する人、選擇する人に藝術が理解されると言ふ事が、根本の要件だ。こいつが第一に出來て居なければ、その外の事は、凡て徒勞ではないか。

然らば、今は藝術は理解されて居るか。斯う言へばもう、すぐ答へが出る。四を二で割るよりも樂だ。

「否！」

これだけでは無いか。吾々は今、不思議な保護政策の下に立たうとして居るのだ。幸と、保護費がポッチリなのと、世間の一部では、口々に馬鹿々々しいと言つて居るからいゝやうなものゝ、それでなかッたら飛んでも無い化物が出て來る事に成るだらう。

僕は藝術の保護と言ふ事は、藝術の自由を尊重すると言ふ點に於て、藝術を理解すると言ふ點に於て、第一に出發さる可きものであると思ふ。保護者が、或る藝術を起さうと思ふなどの事は先づ、飛んでもない間違つた方法だと言はねばならぬ。まして、これに依つて、この人々の信じて居るものと、相容れぬものを、破つて行かうと言ふに至つては、天を恐れざる行爲である。

更に「藝術」に向つては、保護者が正當なものを認め

ると言ふ事が第一に困難であらう。何が標準になつて正當なものが認められるのだ。

藝術には自由の發達と言ふ事が第一である。極めて狹量な、無智な考へからして「自由」を阻害せぬと言ふ事が第一である。殊に、現在の日本では、この「自由」の發達を計る事が、最善の方法である。吾國民を今日よりも BETTER な位置に運ぶ上に於て、最善の方法である。

文藝委員會の方々はこの開き古した兩政策の關係を一度考へて頂きたいものだ。

四

某兄

一體、大勢の人が、しかも互に別々な思想の人、感情の階級の異つた人が集つて、或る標準を立てゝ、選擇をすると言ふ場合には、だん／＼各自に割引をし合つて、いゝ加減、低いレヴエルに止つてしまふのは、自然の數だ。

その無難な、特色を割引された藝術と言ふものが、最良のものと、認められると言ふ事は、藝術の本當の効果を奪ふと言ふものだ。

一體、今の日本はこの中和と言ふ事、折衷と言ふ事が尤もよい事に思はれて居る。すべての時代の長所を取つて作つたとか、種々なものを折衷して作つたとか言ふ事が、大變立派な事に思はれて居て、肝腎のオリヂナリチーと言ふものが、少しも認められて居ない。斯う言ふ事は藝術の賊だ。

文藝委員會の委員長を初め委員達の思想を數字と、色彩とで表はす事が出來たらば、その爲事の結果が、隨分一目瞭然となる事であらうが、自分には、それが出來ないのが殘念だ。しかし、まあ、小松原氏、岡田氏、篁村翁、澁柿氏、佐々氏、上田(萬年)氏、潮風氏、敏氏、桂月氏、鷗外氏、と順々にその人々の距離を比較して見たらば、その間に行はれる、特色の割引がよく分るだらう。

翻つて、更にこの會合が持つて居る、政治的の權力の如何を考へて見たらば、苦笑しないわけには行くま

い。日本の政治上の權力關係で、文部省はどれだけの强制權を持つてるのであらう。それを一つ消息通の政論家に聞き度いものだ。

雜然と、思ふ事を書いてしまつた。さよなら。

○文藝委員會に就て

德田秋聲

長いあひだの宿題であつた政府の文藝保護問題も調査會に依つて愈よ實行されることになつた。動機は何云ふところにあるのか我々には判らぬ。行政上の意味か單なる文藝保護の意味か固より解らない。文部省としては無論双方の意味合から來てゐる仕事かとも思ふが强ち文藝壓迫策とも考へられぬ點もある。芳賀博士上田博士の如きは、昔から文藝を尊重した人々で、外國文學や、新時代の思潮とは多少懸離れてゐるにしても文藝保護の必要ぐらゐは疾に認めてゐた人である。森博士は無論重なる提言者の一人である。勞た文藝の側から企てられた仕事と思ふ方が穩當であらうが、一國教育の府たる文部省に屬してゐる以上は、それだけの色もついて來る道理である。

政府や教育者、一部の新聞記者からは隨分妙な目を以て見られて來たのでもあるし、我々作家側から云ふと、何處々々までも政府のお世話を受けずに進んで行きたいと思ふ。作物の審査と報酬と云ふやうなことが、調査會の文藝保護策であるとすれば、事實今迄と別に變つたことはない譯なので、殊に費用が少ないから、それによつて作家が大に霑ふといふやうなことも望まれない。審査は從來とても世間の批評と云ふものがあるので、先づ是迄公平に行つてゐる。調査會がそれ以上の仕事をする餘地もないやうに思ふ。それも誰が見ても首肯するだけの一流の鑑賞家ならば可いが、顏振を見たところでは、文藝の鑑賞家は甚だ鮮いやうである。中には全然文藝と沒交涉な人もある。單に過去の文藝の愛好者に過ぎない人もある。單なる學者もある。正當な文藝の鑑賞か、あの委員達によつてなされやうと

は思はれない。それが出來るにしても、殊更に調査會に待つほどのことはなささうに思ふ。

人選については人各見るところありて、強ち非難も加へられないかも知れないが、一體に公平を闕いてゐる。それかと云つて、こゝが文部省の方針だと思ふやうな定見かあるやうにも見えない。廣く人を採ると云ふことならば、外に入るべき適當の人もあるやうに思ふ。もし一定の標準で選擇したものとすれば、餘りに散漫である。

調査會の仕事としては、翻譯などは尤も期待が多からうと思はれる。民間では一寸むづかしい仕事なので外國文學移植と云ふ大切な仕事は、まだ〳〵放擲されてあるものが多い。しかし是とても、文部省の費用に限りがあるのと、風教上の制限があるのとで、思ふやうな仕事も出來ないと思ふ。加之振返つて見ると、色々の人の手によつて、隨時に飜譯されたものも可也に多い。二葉亭氏のツルゲネフを初めとして、時代に先んじて、外國文學を紹介した人は澤山ある。其功も大きい。此後とても益出ることと思ふ。調査會は調査會としての仕事もあるだらうけれど、先づ大した望もおけない。

一國の文藝に培ふとするには、天分の厚い人を洋行させるか、どし〳〵外國文學を移植するか、目下のところ其樣なことが反つて、效果があるやうに思ふが、混亂し易い文壇を調節するとか、一般國民の文藝に對する注意を喚起するとか云ふやうな一般的仕事は、比較的功が擧るであらう。つまり教育と文藝の接近調和、そんなやうな方面で功績が擧るだらうと思ふ。もし文壇が調査會に重きをおくと云ふやうなことにでもなれば、文藝は反つて型にはまつて、進歩しないことにならぬとも限らない。

○有るもよし無きもよし

佐藤紅綠

文藝委員會といふのは如何なるものか私には解らん

在てもよし無くてもよいものならば無いよりも在る方がいゝかも知らん。

いつか繪畫の展覽會て文部省が新聞記者の中から委員を擧げた事があつた、其時大分攻擊が盛て辭退した人も二三人はあつたと思ふ文藝委員會もあゝいふ風のもので無い事を望む。

政府が文藝の保護をしてくれるのは難有い、併し保護はどれだけの限域に及ぶかが問題てある、保護と束縛と相伴ふものなら寧ろ保護の無い方がいゝ。

著作物の權利の保護に就ては當局者は殆んと無神經であつた、例令ば脚本興行權の如きは貧乏文士にしては過當の苛税てある、原稿料よりも興業權が高いのがある、五十圓といふ金は滅多に得られるものでない。そして脚本に對する當局者の束縛は其れは〱實に酷なものである。戀といふ臺詞は可成は省けなどは呆れて物が言へない、も一つは作者に依つて寬嚴の手加減が違ふ事がある、更に甚だしきは某といふ文士の小説は掲載せぬ方がいゝ抔と新聞社に半命令する事だ、爾いふ政府が文藝保護のために文藝委員會を設けたといふ事は私には不思議て物が言へない。委員の顏觸を見て成程と氣が付いた、其れは私共のやうに政府に睨まれてる人達てないやうだから、ねえ君。だからさねえ君。

文藝なんてものは政府に保護されて興るものでない文藝には文藝の國がある、何人も犯すべからざる國がある、其れて澤山だ、縱令其國が貧しからうと、窮屈さうてあらうと、不自由勝てあらうと其れは門外漢の觀察て、保護などは大きに御世話な事だ。

可哀さうだから俺が手を曳いてやらうと助けてくれるのは辱ないが、其代りに俺の行く處へ一緒に來いと言はれては困る、文藝を教科書にされては文藝たるもの惡魔に會食を御馳走になるやうなものだ、うつかり油斷すると自分までが頭からワングリ食はれて了ふ。

今更ら政府が文藝を保護するなんて恩着せがましい事をするのが癪に障るぢやないか、政府の手を藉らんても文藝は立派に發達して來たぢやないか、獨立て成

人して來たものを俺が學費を出してやるから俺の養子になれといふのと同じ事だ、利害打算の外に考のない政府だもの、ロハで保護などをするものか、一面からいふと文藝を侮辱してるものだ、文藝國を俗惡國に編入しやうとしてるものだ、日韓合邦の今日でも、私共の國は私共が建てゝ行きたい、隨分今まで私共の生存の權利まで害された干渉を受けても猶ほ忍んで生きて來たのぢやないか。

恁ういふと僻みだといふかも知れないが、文部省が文藝のために骨を折つた事は一度も無いぢやないか、文藝國の獨立を認めたのか但しは文藝は神聖なものだからといふのでワザと遠慮したのか、兎も角もかよわい肥立の惡い赤兒を手にも觸れずくたばるなら早くくたばれといふ態度で居らしつたのだ、そして赤兒が啼くと其聲がいやだから手拭で口を縛れといふ風であつた。

心機一轉、蓋し利害のためなりか。

どうも抛て置かれなくなつたと急に噪ぎ出した、委員に選まれた人達こそいゝ面の皮といふものだ、文士と文部省との思想の融通を計るのかも知れぬ、假に委員の方で考を提出した處で御採用にならぬは火を睹るより明かだ、爾だ實に明かだ、「現代の思想を根據とした新道德を建てる事」これが委員會の詮じつめた決爭點になるのだ、扨て其れが今の文部省に出來やうか。委員の方でも其處まで突込んで文部省を動かさなければ委員の資格が無い、其覺悟が無くて政府の御用聞きになるのなら三河屋の子僧同樣の御役目に甘んずる事になるのだ。文藝の自由、其のために働いてくれるのなら私共は佐倉宗五郎よりも難有いと思ふが、左樣でムるか御尤でムる主義でなければ文部省と衝突する、狼を羊の牧場に飼ふやうな文部省でない以上は、破壞は今から解りきつて居る。

案ずるに、委員の方では物珍らしさに委員を御受けするだらう、當分の間は兎も角政府の意見を聞て見やうといふ事になる、そこで委員長の次官閣下は演說を遊ばすね、至極寬大な開放主義のやうな汎く輿論を容

れると言たやうな誇張澤山の支那の熟語字典のやうな大人振た事を言ふ、委員の方でもう些と具體的な案が欲しくなるね、あれやこれやと考へるね、極小さな詰らない案は寛大な當局者が喜んで容れてくれるね、而して其他は、其他は、其他は、最も大事な新思想の處置は!?

此に於て一の武器あり、曰く其れは重大な事だから追て調査の上て。

・だから私は在ても無くてもいゝといふのだ、御苦勞樣にも委員は馬鹿を見る丈けの事だ。

委員の顏觸が如何だといふのか、いゝ顏觸ぢやないか、文部省直轄の學校に關係ある人と新聞に關係ある人とを多く選拔したのは所謂輿論本位なのかも知れぬけれども恁ういふ委員は可成多方面の人を網羅して貰いたいと思ふ、文部省の嫌な自然派の側から島村君一人は心細いぢやないか、其れては輿論てない、も一つは純作家の方面々忘れた事である、夏目君ても田山君ても島崎君ても純作家て日本の思想界が此人々の作品に依ていつても多大な影響を受けてるのだ、私は確信ずる、今度委員になつた人々——二人は除く——の作品は現代の思想界にどれ丈けの影響も及ぼさない、此人々の作品よりも寧ろ近頃芽を吹き出した新進青年の方が現代に接觸した頭腦を有して居るのだ、政府が何故彼の三人を忘却したか、其れには理由がある、夏目君は博士を辭したからだ、田山君や島崎君は自然派の大將だからだ、そんな毛嫌をする位なら委員會を置かぬがいゝのだ。

委員になる人々には其れ〳〵成算のある事だらうから私共は牛壘を叩く程の事てもない。

併し私はくれ〳〵も言て置きたい、どうか委員會ては一歩も文藝の獨立を枉げて貰いたくないものだ、苟くも作家の技倆や思想に立入つて品隲評價などはして貰いたくないものだ、委員會の標準に媚びる作風などが出來るやうなイヤらしい事は注意して貰いたいものだ——そんな馬な鹿事はあるまいが。

註文は追ていろ〳〵あるさ。

○藝術に協力なし

森田草平

目下、專ら創作に從つてゐるせいか、こんどの事に對しては、極めて冷淡です。

ある方がないよりはいゝだらうといふ島村抱月氏等の説を成る程と思ふ位のものです。少くも文壇に話題を提供するから面白いとても言ひませう。

あれて、眞面目に運用を始める時には、先日朝日新聞て發表された夏目先生の説—あれに大した違ひはありませんが、要するにあれもセオリイて、事實としてはあんなに重大なものになりはしないだらうと思ふ。從つてまことにインデイフアレントです。

今、日本の國情から言つて、文藝院のやうなものを建てたところて大した結果はありますまい。たゞ、文藝といふものが國民性に及ぼす影響は、さう呑氣なものではないと思ふ。而もその影響の性質は政府が考へてゐるやうなものではなく、又それが政府の力てどうなるものてもないと思ふ。

文藝の影響は大きい。けれども、大きいからいけないのてはない。實はもつと大きくな、もつと國民の意志を動かすやうなものてなければならぬと思ふ。その力さへ、政府から保護されて大きくなり、增加するやうなものてはない。文藝家自身の力てす。それ丈けてす。政府の仕事てはだめてす。

保護といふ事は、文學を職業とするものには聞きものてありませうが、保護それ自身の性質からいふと、國家の機關とか、團體とかの保護は有難くありません。

私は、昔あつた、專制の帝王の保護のやうなものが欲しい。その帝王は文藝を解し、趣味も深く、そして特に自分の作物が好きてありたい。さういふ帝王と自分とが同時代に生れて居たらと思ふ。

イギリスの桂冠詩人等のおこりも、さういつたやうなものてはなからうか。今いつたやうな帝王が生れる時こそ、世界にいゝ文學は出るのだらうと思ひます。

元來、保護といふものは、決して公平になれるもの

てはありません。

政府の比準から賞を贈られるやうな文學はダメてある。國民から、個人から出たものでなければならない。金の寄贈等も矢張、先きにいつたやうな帝王からしてもらいたい。あのやうな機關からてはダメだ。

文藝は何といつても個人のものです。それだから、帝王といふやうな事もいふのです。團體でこれをどうしやうといふやうな事はまるでダメでせう。

藝術にはあくまでも協力といふものがないと信じます。

○政府の仕事

馬場孤蝶

今日のやうに、政府が民間の事業に就て細かに世話をやかなければ氣が濟まないといふ世の中になつて來ては、政府は文學に同情するや否やを問はず、義理にも文學の事を世話をやいて見なければなるまい。て、文藝委員會なるものが作られたのは尤もな事だとおもふ。

處て、元來が文學といふものはどういふものだか、又現代文學はどういふ風にして出來たものだか、そんな事は一向にわかつて居ないお役人の仕事であつて、どちらかといへば、文學なぞはない方がよからうと思ふ位な人々のやる事であるから、委員の人選には痛く苦心をされたやうに見える。何とも御心配の程お察し申す。

お役人の目から見れば身分のある人が何でも偉らからうと思ふのは當然の事で、學校の先生とか、學位を持つてゐる人とかいふものが文學でも偉らいのであらうと、一も二もなく思つて仕舞ふのは無理はない。而も今の若い人のやるやうな、文藝には、どちらかといへば、反對な政府の事であるから、成る可くは自分の方の味方になるべきやうなものを委員に選びたいと思ふのも尤も至極の事だ。けれども自分の方に都合のいゝ人ばかり選んだのでは少しバツが惡いといふので、

そこで二三新しい人を加へたわけなのであらう。さういふ人選の仕方は至極尤もな選み方で、現代文學を萬更度外視するわけではないといふ事を仄めかし乍ら、委員會の多數決では政府の思ふやうな決議をさせて行けさうな陣立てあつて、中々苦勞人の仕事だと、感服の外はない。

けれどもあの役割では政府の思ふやうに働けるかどうだかわからない。委員の中の新しい連中が根據のある議論をする場合に外の人が之に反對してその進んだ人の說を通過させない事にしたといふ事になると、世間の文學者仲間の方からは、その反對者は痛く卑められるわけにならう。で、さういふ事に遠慮していくらか人氣を氣にかけるやうな委員は、進んだ說に雷同するといふ事になりはしまいか。頑迷なら頑迷でもいゝが、別にきまつた意見といつては、なかりさうな連中、中には文學は扨ておき、普通の學問でもろくに出來さうもない人々までかり集めて相談させて見たところで物のわかりさうもない連中からは、何等いゝ意見の出る氣づかいはなさゝうに思はれる。つまりは委員中の新しい人に言ひまくられていゝ加減な議決をするといふ事になるであらうと思はれる。

文學をよくするといふ事は、政府の仕事では行かない事であるのだから、文藝院とか文藝委員とかいふものは、先づ進んだ政府の飾りであつていゝものだ。だから委員にはなるべく立派な文學者を選ぶやうにする方がよからうと思ふ。今の民間の文學者のやつてゐるところが間違つて居るとしたところで、それと正反對な方面へそれ等の人々を向はせるといふ事は、誰がやつても、今更出來る事ではない、さすれば現代の作家の作物に賞品を與へるといふ事になるのなら、どうしても今の新しい人々に與へなければならない事になるだらう。

賞品を與へて、その人の偉さを推薦しても、委員にしてその人の名譽を增すといふ事にしても、結果は同じ事であらうと思ふ。當然本職の畑をもう少し中へ入れるのがいゝのは論を俟たないところだ。

然るにそれをやらずに、いゝ加減な人選をしたのを以て見れば、政府の眞意が今の文學をこれまでの沿革に從つて進ませて行く、卽ち大勢に從つて文學を進ませて行くといふのにない事は、大抵分かるやうに思はれる。現代の文學、否文學といふものが解る人の仕事なら、人選などは森鷗外さんあたりとよく相談してやるべきであらうのに、聞くところによれば、鷗外さん等には何の相談もしなかつたといふ話だ。

新聞の流行言葉でいふと、文藝委員の人選には政府は誠意を缺いてゐるといはなければならない。けれどもこれを現政府の立場からいふと又尤もな事なのである。現政府の施政からいふと、文藝を保護する等といふは矛盾である。內務省、警視廳のやり方では、體のいゝ事は言ふものゝ、實際は現代文藝を荷厄介にしてゐるのだ。さういふ文藝嫌ひな政府の一部分たる文部省が、文藝を保護する等といふのは、どうも少し虛らしい。文藝を本當に保護しやうと思ふならば、今の時代の如きは文藝を放任する方がいゝのである。右の手でなぐり倒して左の手で、起したところで、元々ではないか。倒したり起したりする丈けが、徒勞であり、費用倒れであるのだ。

明治の文藝は政府のお世話を少しも蒙らずに今まで發達して來てゐるし、又之から先きも政府のお世話を蒙らないだつても進み得るのである。それを、世話をするといふには政府の體裁であり、政府の申譯に過ぎないのだ。だから、政府の飾りである。飾りなら又申譯なら、體裁なら、本職のものから見て納得するやうな委員の顏觸れにする方がよからうではないか。吾々は內務省の仕事も、警視廳の仕事も、文部省の仕事も同じ政府の仕事であるから、その間に大體の統一のあるべきものだと思つてゐる。然るに、その間に箆棒な矛盾があるとすれば、どうも變な事だと思はざるを得ない。それから吾々は、時代々々の政治といふものは大勢を利用する方針を取らなければならんものだと思ふ、卽ち治者が被治者を理解して居らなければ本當の政治は行はれないものだと思つて居る。文藝を保護す

る、文藝の世話をするといひながら、現代文藝とは全然沒交渉な人々をその委員に任命するといふやうな現狀にうとい且つ常識をはなれた現政府の一施設が總て現政府の施設全體の象徴ではなからうか。然らずとするも、少くも文部省の施設の全體が、此文學に對する施政と同じやうに、時代に適しない迂遠な無益なものではなからうか。吾々は此點に關して、甚しく不安を感ずる。

文部省の文藝委員の仕事の一つに、外國の名作を飜譯して出すやうにするといふやうな事が書いてあつたが、之等は殆ど滑稽だと思ふ。

外國思想を悉く危險だとして居る現政府が、その危險な外國の本を飜譯させて出すなどは、何といふ事だか、吾々には解らない。或は文部省の名を以て飜譯して出せば危險ではないが、民間の個人が出せば同じものでも危險になるといふのであらうか。

文部省、内務省の今日鼓吹したがつて居る忠孝思想から見れば、外國の文學書で危險でないといへるものが一冊だつてある氣遣ひはない。一方では極力忠孝思想を普及させるやうにし、又他方では之をぶちこはすやうな本を飜譯して出すといふのは、何ういふ了見なのであらう。政府といふものはさういふ矛盾をやるべきものであらうか。

文部大臣の演說によると、文藝委員を設けた目的は日本の文學を雄大にするとか、健全にするとか、いふにあるのださうだが、恐らくは文部大臣及その他のお役人の考へる雄大とか健全とかいふ意味は、吾々民間の者の考へる雄大とか健全とかいふものとは、まるで違ふ。本當に國家の爲めになる、人類の爲めになる雄大にして且健全なる文學は、現政府が極力保護しやうとする舊精神を頭から破壞するものであらう。

文部省は果してさういふ文學、さういふ精神を盛んならしめる爲めに、文藝委員を設けたのか。若しさうでないとすれば、文藝委員なるものは、吾々の方からいへば、全く進歩の邪魔物だ。今一歩進んで言へば、今の政府が文藝の世話をする等は、チト柄にない仕事

だ。文藝の世話に手を出す前に、先以て自分たちのやつて居る頑迷なやり方を止めて了ふやうに骨を折るのが至當である。

○審査よりも便宜を與へよ

田山花袋

文藝委員會ですか、私等は格別何とも思つて居らぬ作物の審査などいふよりも、作家に便利を與へるといふ方にしたがよい、例へば材料を得るべく、何とか軍人や貴族の家庭へ入り得る樣に便宜を謀つて呉れるもよい、が其樣な事は迚も今の政府の人達に怖くて出來ることではあるまい。先づ見込のある作家を選んで西洋へでもやるがよい。何に限らず凡て作家を守り立てて十分文藝の爲に献身出來る樣にするがよい、是迄隨分苦戰惡鬪して不遇に倒れた者が多くある、北村透谷等を初としてまだ澤山あつたからね。作品其者を尊重して其販路に便利を與へるとか、作家其者の社會的位置を高め一般の尊敬を受ける樣にするとか、工夫したらまた色々保護獎勵の道はあらうと思ふ。作物の審査などは好まぬ。一體文藝委員會なるものが或る定まつた目的を持つて、之を以て作家に臨むといふ事は宜くないと思ふ。

委員會の人選の仕方は國語調査會などの場合と同樣或は作家或は評家、或は學者、其中にも國文學は誰とか英文學は誰とかいふ風に、各方面から集めたものだらう。實際審査の能力あると認められるものは森、上田(敏)、島村の三人位のものだね、さあ審査の方法は如何するかね、彼の顏觸では如何いふものになるか分らぬ、私等にすれば小說などは森さん一人で見て呉れれば澤山位に思ふ。それだから實は審査は御免だといふのだ。(談)

○育てあげたら立派にならう

後藤宙外

選ばれた人々の顏觸れを、世間のある者は、頭からケナして居るやうである。併し、私はまああの位が、我慢の出來る處だらうとおもふ。

慾をいへばキリはない。人數を殖やし、新方面の人々をも加へたら更に結構に違ひない。露伴、篁村、澁柿氏等の人々は作者としても大家ではあるが寧ろ學者である、近來は作物を餘り出されないやうだ。澁柿翁だけは歷史小說專門の人ではあるが、孰れも先づ文壇の元勳と見る方が適當であらう。元勳の意味で委員に擧げたかと思はれる。さうすると委員の顏觸には、鷗外氏以外に作者側は先づ見當らぬといつてよい。それでも差支へはない。若し作家を入れるとなれば、各方面から取らねばならぬ事になつて勢ひ非常な增加を來す事になる。政府の方針は寧ろ、作家を除き、元老學者評論家等の方面から集めるにあつたものであらう。併し評論家で選み漏れが二三人ある心地もする。たゞ殘る問題はその事業と其の遂行の方法である。當局者にとつても、これは企圖中の最も困難な方面であらう、又誰がやつても困難な仕事なのである。

已に發表された處によると、第一に作物の懸賞募集であるが、元來、多數者の判斷に依賴する懸賞作選定の弊は、何時も結果が折衷に終る事である。例へば甲作について、百點を與へるものが三人、乙作に八十點を與へるものが十人あるといふ場合に、その裁決が生むところは、八十點のが勝利だ。どうしても諸人向きといふに落ちて、傑作が却て洩らされる處もある。飛び拔けた天才肌の作者は頭のあがらぬことも無いとは言へぬ。

此の懸賞制度が、現代の第一流の作家とは殆ど沒交涉なものにならう。それ故、第二流、又は無名の作家が應募する事になると、其の方面の發奮の動機になるかもしれぬ。同時に懸賞の傑作といふやうな型が出來

はせぬかといふ人もあるけれど、左程なこともあるまい。委員の勢力盛んになれば之れに對抗する在野の勢力も盛んになるわけてある。その現象が甚だ興味あるものてはあるまいか。

在野黨即ち委員會派と在野派が出來る曉には、自然相角逐する所から却つて相互の勵みとなつて宜しからう。委員會の成立の大體に於いて私は賛成する所てある。由來まゝ子扱ゐにされてゐた文藝の努力を認めて兎にも角にも國家と文藝の聯絡がついて來たといふ事は好い事てある。

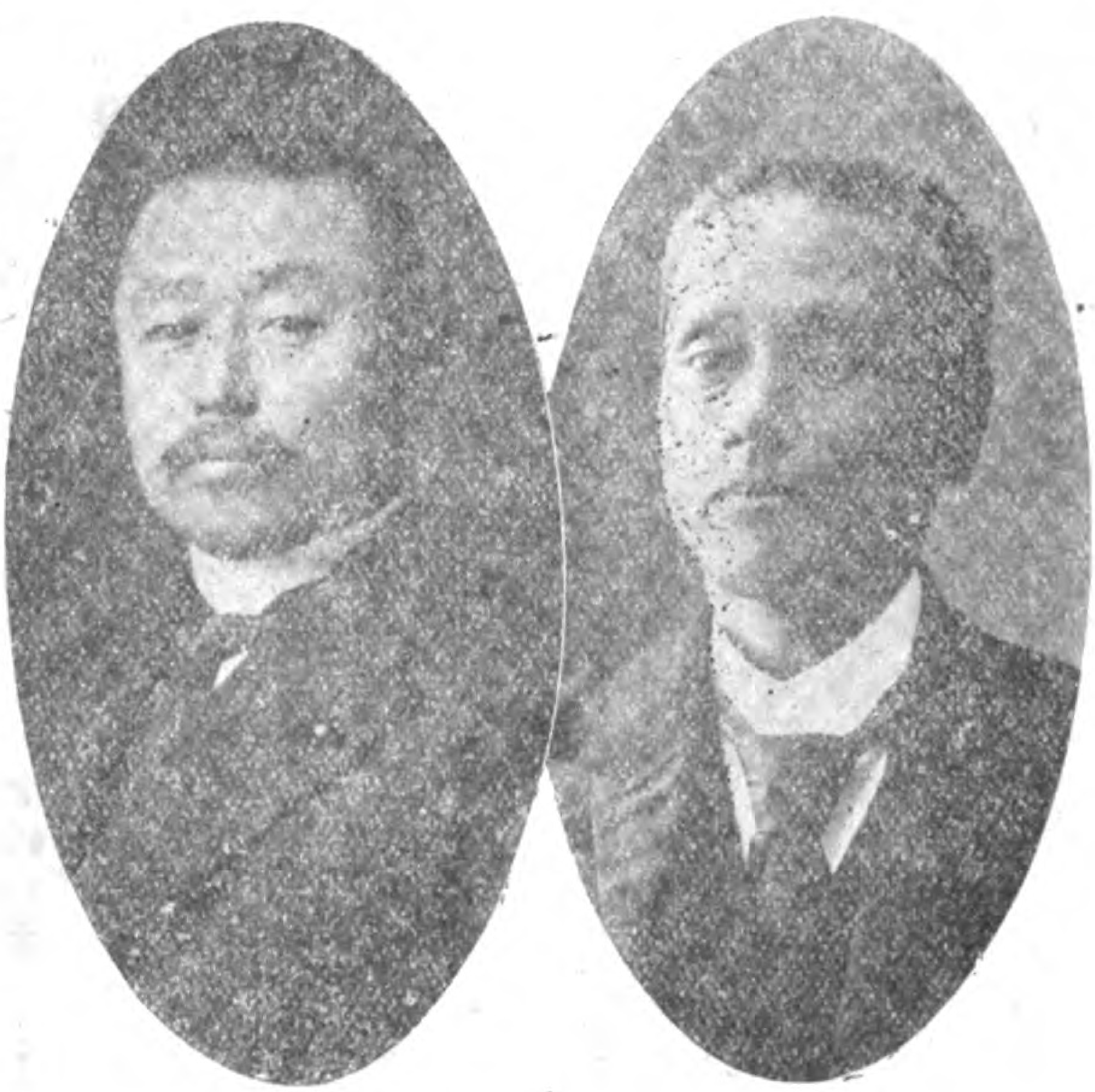
委員會に不完全な點ありとすれば追々それを補ふことは、決して難事てはなからう。或は民間の評論家、學者等が批評し、忠告してやつたり、案を與へたりすれば、委員會も多士濟々てあるから善いことは採用しよう。文部省とてもこれを以て、輿論を實現する機關とするに吝ならぬてありませう。

無闇にケナス事ばかりが能てはない。

さて、委員會の事業として、一番いゝのは翻譯てある。書肆が尻込をする有益な外國の名著を翻譯して出版する事、既に出てゐる物でも更に好いものに改譯するのも可い。

人物評論（十七）

山川九州大學總長
と
澤柳東北大學總長



△山川氏と澤柳氏

文學博士　三　宅　雄　二　郎

人に譬へれば山川氏は乃木大將と菊池大麓氏とを合せて三つに分けた其の一部

であり、澤柳氏は渡邊無邊と渡邊千秋氏とを三つに分けた其の一部である。合せて二つに分けたと言ひたいが、今日の處どうも左樣は明言し難い。山川氏從來の經歴は、氏の性格に最も適當したものか否かは疑問である、或は軍人に適したかも知れぬ、或は其他に適した所あるかも知れぬ、物理學者となつたのは全く性に合はぬ事とはいへぬにしろ性に合つた事とも言へぬ、學者としても他の方面に向いた方が多く効果があつたらうとも思はれる、物理學者として菊池氏程の數學の能がなく、何れかといへば數學は短處である、併し菊池氏よりも專門とする所に熱心で、理科紀要に大理石熱傳導の測定といふ論文もある、けれども學問上に於て後進の中にその及び難きを見ないのも少くない、只特種の性格を具へ自ら信ずる所飽く迄之を守らんとする邊に尋常人の及ばぬ所がある、稍乃木大將に似て居る。大將ほど特色が著しく現れず、それ丈貪夫をして廉に懦夫をして立たしむるといふ事がなくても管轄部內の人に何等かの感化を及ぼし、職員ならば職務に忠實ならしめ、學生ならば課業に勵ましむるといふ樣な處がある、目立つ程でないにせよ、幾分はある。何處に居つても、在職中綱紀の紊亂といふ事のないのは殆んど請合ひ得られる。澤柳氏は之と性格を異にし、所謂世渡り上手である、何事も己れに必要なることは相應にやつてのける事が出來る、學問も出來ぬ方でなく、意見も立たぬ方でない、して別段學問するでもないのは必要なきに因る、意見を立つるにしても或る主張を以て貫かうとせぬのは其必要ないからだ、中學校に居ても、高等學校に居ても、高等師範學校、高等商業學校、何處にても無事に勤まる、而して體能く其日を送り行くといふでなく、時としては強く出たり頑張つたりする、がそれで面倒を惹起したりなどはせぬ、普通にいふ官海游泳術に長じたものとも違ふが游泳術に拙てはない、なか／＼巧みてある、一種のコツを得て居る。次官を罷めて高等商業事務取扱と貴族院議員とを得、更に東北帝大總長となつたのは游泳として上出來てある、近頃咄嗟の間に斯う都合よく行つたのは少からう。

ところで山川氏は今年五十八、それに業務に專なる性質であつて、既に安川氏の工業學校を主宰し、更に九州帝大總長となつたのであれば、或る不時の出來事のない限り、之を以て終身の業とするであらう、文部大臣たるの交渉を受けて辭退するやは分らぬが、さる

變化のないと見積る方が自然てあらう。澤柳氏は今年四十七、總長たるに若い。東京帝大て菊池氏が四十四て總長となつた例もあるが、東大ては今後五十以前ては成り得まい、六十前ても或は覺束なからう、秩序の定まるほど飛び越したりするのは六ケしくなる。東北帝大は四校帝大中比較的最も未成品て、札幌の農科大學は事實上獨立し居り、僅に理科大學の成立たんとするもの、總長の仕事は理科學長に代つて文部と打合はすか、爾餘分科大學設置の準備するか位のものだ、澤柳氏の割合に若くて總長となつたのは斯く未成品てあるからだが、氏は此未成品を成品にし、完全無缺にするに勉むる積てあるか、或は從來一段落を着けては他に昇進し來た如く、東北帝大も一段落の着いた所て他に轉ずる積てあるか、其邊は明かにする事が出來ぬ。が氏は長く仙臺に止まらうとせぬことは疑はれまい、機會もあらば榮轉すると見積る方が自然てあらう。

帝大總長は一の教育最高機關を主宰するもので、教育家として最も働き甲斐ある位置なるかに思はれるが、得べくんば左様ありたき事としても事實に於て左様てない、大學總長は教育家たるよりも、事務官てある、事務を執るのが重もてある。元より他の官廳と違ひ、一通り事務が執れさへせば勤まるといふ方てない、大臣の威光て据ゑ付けらるゝのみては教授連に承知せぬのがある、岡田氏が京都帝大て不首尾てあつた例もある、けれど教育家として如何なる事をすべきかとなると少しく明白を缺く、教授に對して如何すべきか、學生に對して如何すべきか、直接に是ぞといふ様な事はない、評議會て定めた事、教授會て定めた事、或は學長又は教授の申出した事、之を判斷すると云へば判斷するだが、大抵の場合ては行ひ難い所は初から行ひ難いと知れて居り、行ひ易い所は初から行ひ易いと知れて居る、人一倍の智慧を絞らねばならぬ事もない、經驗に富んて居れば、教授が少し腑に落ちぬ事があつても我慢して聽き、本省と打合はす段に押が利くといふ位のものだ、實際の仕事は事務てある、眞に大教育家てあれば特別に教授を向上せしめ學生を向上せしむる事もあらうが、其れは一寸望み難い。何處の大學ても要素は教授てある、教授には學者として世に重んぜられ、或は世界的人物、歷史的人物となつたものもある、總長其物としては之に類した事がない。獨逸ては總長は教授の廻り持の様になつて居つて教授として名の聞えたのは多いが總長として聞えて居らぬ。英國ては名譽總長

があり、有名な政治家若くは學者が之に推選される、言はゞ早稻田に高田學長の上に大隈總長がある樣なものだ、大隈總長よりも尙ほ名ばかりてある。それから見ると米國ては實際の腕利きが總長となつて居る、といふのは寄附金には或る他の手段て學校を擴張する必要があり、只の學者、只の事務家てはやり切れぬ、中には隨分辣腕を振ふのもある、併しそれにしても總長丈ては如何に働いても知れたものだ、重なる政治家程に見られぬ、重なる學者程に見られぬ、スタンフヲード大學總長ジョルダン氏は三總長の一人三大教育家の一人と見られて居るが、若し生物學に於ける研究がなかつたならばそれ程に見られるのは疑はしい、總長は名前のいかめしい割合に餘り大した事のない職てある。それとも小學は中學の影響を受け、中學は大學の影響を受け、大學に感化を及ぼすは教育上最も効驗ある事どして之に從事するは聞えぬてはない、或る點に於て左る關係は存在する、けれども左る關係あるにせよ總長は實際授業に從事せぬ、身を以て衆の模範とし、或は教授と談話し、學生と談話する間に知らずく効能の現はるべきてある、それには人格の特に著しく現はるゝ所なくてはならぬ。

乃木大將は教育學教授法等を心得て居らぬが、遉に感化を及ぼす所がある、學習院とか士官學校とかては誂向てある、言ふ事が偏して居つても何處か味ふべき點がある。が只上官に引立てられ順序善く鰻上りに上つたといふのは、一と通り事務を執るの外如何なる力の他に及ぶべきてあらうか、人に意見しても其意見が何處か縁遠く聞える、二階から目藥指す樣な處がある。山川氏は何等かの感化を及ぼすてあらう、多少配下をして眞面目に傾かしむるてあらう、けれど遂に物に片寄つたりする、千里眼なんど、普通の人は常識で手品類似の事と思つて居た、山川氏は進退を苟もせず愼重に愼重を事とする方てあるのに態々出掛けて之を實驗しやうとした。斯ういふ事は人に任せて宜いのだ、他に爲すべき事は頗る多い、それに彼を措いて此に熱中したなど、如何にも片寄つて居る、此邊が今一層圓熟せば立派な教育家と爲り得やう。

澤柳氏は教育家たるに餘りに世渡り上手てある、立志篇的自助篇的分子に乏しい、困難を排して或る一事を貫くといふが如き處はない、次官を罷めると直に同文館と富山房とに跨つて仕事をしたりするのは上手といへば上手、しかし餘裕がない、教育家としては今少

し利益に目を呉れず、人の敢てし得ざる所に運命を拓くべきである。氏は才がある、官吏として昇進した様に實業界にも働ける、が時として才が勝ち過ぎる、才に累ひされる、若し教育家として立つの意あるなら、更に克己心を強め御都合を我慢すべきである。併し氏は教育家たるよりも他に希望があらう、現に官僚派とも見ゆれば前内閣の關係で政友會派とも見られる、何かして文部大臣を贏ち得る位の事あつて宜い、尚ほ春秋に富んで居る、折角肝膽を碎いて然るべきだ、併し餘り碎かなくとも相應に道が開かれ相にもある、何處か渡邊兄弟に似て居る。

△現教育界の二明星

文學博士　建部遯吾

山川、澤柳兩總長は共に我輩に取つては頗る能く知りもし知られもして居る先輩である、二氏共に一種の氣骨を具へ、今の人物拂底の教育界には珍しい明星だ。

澤柳氏は曾て文部省に奉職し、書林文學社の事に坐して職を退き、其際一つの蹉跌をされた。此様な事は山川氏の經歷にはない、併し乍ら過を觀て共に仁を知るて、澤柳氏當時の蹉跌は或る子分の爲に義俠の事をやり、それより計らず累を得たものと承知して居る、兎に角此一波瀾は氏の公生涯に取つて面白い點である。山川氏は、明治卅八年日露戰役の後日物語として、當局者が戸水教授を處分せんとした時、之に關聯して大學總長の職を辭された、斯様な噴れの辭職はまだ見た事はない。が澤柳氏は吉村第二高等學校長が高山樗牛等數名の教授と共に學校騒動の爲總辭職をした後を引受くべく就任し、僅々一ヶ年の在職で容易に學校の楔子を締め、秩序を完全ならしむる點に於て成功した。斯様な手の離れた仕事はまだ山川氏の經歷中には見えぬ。然るに右兩氏の此二大事件が、共に我輩と關係あるのは面白い。

澤柳氏が吉村氏の破綻の後を受け、新に二高内閣を組織せんとする時、禮を厚うして我輩を招かれた。當時我輩は既に聊か着手せる所あつた爲氏の懇切なる招聘には應ぜなかつたが、それ以來氏とは親しい交際を續けて居る。山川氏が帝大總長の職を辭さるゝや、我々同志及び其他二三の教授は直に辭表を提出した、すると山川氏は己れの辭職より施いて大學秩序の大紛亂

に至らん事を恐懼せられ、切に我々同志に向つて慫慂する所あり、大學の秩序及び進歩の爲に講義の繼續を我輩に望まれた、望まれた事は望まれたが、大丈夫の出所進退に就いては、富貴や威武を以て其德を二三にする事なかるべきを期するに於て、聊か氏と我輩とに於て主義の相通ずる所があつた、乃ち我輩が、貴下にして復職さるゝならば我輩も亦辭職を思ひ止まらう、と言つたに對して、氏は私の辭職は固より何等言ふ迄もない事である、と輕く答へられた計りであつた。山川氏の心事の皎々として潔らかなるのである事が是で分る。山川氏は少し緩和の態度を取る事を我々に勸められたけれども、我輩の行動に對しては必ずしも與せざる所あるにも非ざる樣であつたのである。山川氏の經歷の花は實に氏の東京帝國大學總長を辭さるゝ時にあるといつて宜い。勿論今日以後に於て更に精彩を發せらるゝ事だらうが、兎に角あの時の幕に於て、菊地、山川、穗積、濱尾と教育界の尤物、總幕出揃ひの時に當つて、如何しても山川氏が座頭の地位に在つたのてある。當時我輩一人が跡始末の中て殘つたにも拘らず、他の諸君子には最早や善後策の十分に立つたものと思はれ、後興行々引受けられた樣子てあつたが、扨引受けて見ると一寸片付かぬ、そこて再び山川氏の出馬となり、是に於て山川氏は我輩が鎌倉に母の病を看護して居た所迄駕を枉げられ、短い乍らも甚だ要領を得た士君子の相敬し相重んずる所以に叶ふ對談をして行かれた次第である。三軍師を奪ふべきも匹夫の志奪ふべからずといふが、人間は餘り學問すると匹夫の志を失ふこともあるもの、此邊に於て餘りに世間慣れたものには、往々餘りに輕々しく物の多寡を括り過ぐる。兎に角我輩一人の爲に彼の有名なる大學事件が翌三十九年の二月、即ち桂内閣瓦解西園寺内閣成立の一ヶ月後迄長引くに至つた、つまる所斯ゝる打算の過誤に本づいたものである。

澤柳氏は從來未だ曾て山川氏の此場合の樣な曠れの舞臺には出遭はれぬ。外山先生が、其極めて短い文相の地位を去られて後、僅の間に政黨内閣も亦瓦解し、尾崎、犬養の兩大臣を經て藩閥内閣の復活となり、樺山伯を文部大臣に迎へた時に、教育行政の元老、黒幕大臣として、有力なる助言を樺山伯に與へられた、其成績の一として上田專門學務局長と共に澤柳普通學務局長なるものが文部省内に產出された。斯くて澤柳氏は一官十年、此位置を守つた、そして在來教育行政家

として出發した氏は、玆に教育行政學の普通教育を十分に履修するに至つた。

斯う言へば如何にも澤柳氏は一個の能吏たるに過ぎざるが如く聞えやう。如何にも澤柳氏には一個の能吏たる資格は十分ある。けれども氏を以て一個の能吏とするは恰も田尻稻次郎氏を一個の能吏とするの類である。澤柳氏は次官を罷めて數年閑居した時分に、言論を以て大に社會に活動した。田尻氏はまだ官を罷めた經驗は無いけれども、公退の餘、自家の所信を披瀝し自家の蘊蓄を傾倒して、言論を以て社會を指導し啓發するに興味を有して居らるゝ、此言論を以て社會を指導し啓發するは尋常能吏の能くする所でない。果せる哉、澤柳氏は循吏能吏に有るまじき不穩(?)の行動を議會に於てされた、と傳へらるゝ、即ち江木千之といふ一議員の提出した道德振興に關する建議案に對して、滿場一致と思ひきや、一人の議員の不起立といふ事があつた、それが澤柳氏であつたといふ人がある。

全體道德振興などいふ事に人間誰も異議の有るべき筈がない、併し乍ら兎角日本の政論、特に日本の教育論の癖として、希望を以て策論と誤認する弊がある。例へば教育年限短縮論の如き、是れ一個の希望としては何人も異議ない所である、けれども之を實現せんとするには、綿密なる研究、綿密なる考慮を以て、徐ろに其方策を立てなければならぬ。然るに何等の方策をも立てずして教育年限短縮の希望のみを口八釜しく論じ、之を一種教育行政に關する政論と信ずる分らず屋が世間比々として皆是である。此度の道德振興論が矢張りそれである。何人と雖も今日の日本社會の道德を完全無缺と思ふものはなからう、が道德振興を日本の地に發揚させ樣とするには如何なる方法を採るべきか、之を先づ研究せなければならぬ。玆に道德振興を希望する教員があらば、如何にせば我教導の下にある生徒を感化すべきかの方策を研究せなければならぬ。玆に道德振興を希望する教育行政の當局者があらば、如何にせば我監督の下に在る全國幾多の教員をして道德の權威と實力とあるに至らしむべきかの方策を研究せなければならぬ。而して玆に又道德振興を希望する國會議員があるならば、彼は如何にして我教育行政の當局者を刺激し、其監督の下に在る教員をして道德信仰の事を完成せしむるに足る所の行政を實現せしむべきかの方策を立てなければならぬ。然るに今回貴族院から出た道德振興の建議案は、己が國會員たるの位置を

忘れ、文部大臣としてすらも甚だ不似合なる、實に一個の村夫子、實地の教育家の執るべき態度を取つた次第である。此の如きは啻に何等の効果なきのみならず、直に其國會議員たるの職責を忘れたる擧動として、甚だ失態を暴露せるものといはねばならぬ。澤柳氏が貴族議院員として若しも此案に不起立であつたとせば、其理由何處に在るか、直接氏の説明を聞かぬから分らぬけれども、我輩の見地よりすればこれは是非かくあらねばならぬ事と思ふ。澤柳氏が循吏能吏に過ぎざることなく、獨自一個の識見を以て卓落不羈世論に雷同せず、事物を根本的包括的に觀察し、判斷し、而して主張して、邁往勇進憚る所なき眞骨頭は、輓近かゝる評判のあるにも現はれ居るといふて宜い。

輓近の出來事に就いて一つ山川氏の爲に惜むべきは千里眼事件に對する氏の態度である。千里眼事件が假令氏の考へられたらしい如く、迷信の助長となり、世の中を蠱毒することあるにした處で、猶も杓子も狂奔し、丸龜に向ひ熊本に向ふといふ彼の樣な時機に、氏の如き教育界に九鼎大呂の重きを爲す大人物が輕々しく足を擧げられたのは、其損失たるや獨り氏一身の上のみに止まらず、實に我國教育界の大損失たる次第である。此の如き事は、假令之を放置するに於て天下の害となる恐あるにせよ、氏の門下の理學博士理學士連を驅使して事に當らせれば澤山である。幸にして遠からず氏は新に設立された九州帝國大學總長となり、傍ら從來關係せられたる明治專門學校の校長として、氏の性格の全幅を以てする教育者としての事業に專心從はるゝ事となつた、氏の高風の下に教育される九州健兒の幸福は言ふに及ばず、更に是れ實に我明治教育界に於ける至幸といはなければならぬ。

安川某の明治專門學校は我明治の日本の私學として奇態なる一の例外である、即ち公學よりも潤澤なる資本を有する唯一の私學である。此點に思ひ至ると同時に我輩は澤柳氏が早稻田大學開校五年祝賀式に於ける祝辭を憶ひ出さざるを得ぬ。氏は早稻田大學に對する祝辭に於て、斷々乎として我國の私學の言ふに足らぬを公言した。乃ち曰ふ、米國等に於ける私學に學ぶ所は、公學の企て及ばぬ資金を擁し、獨立不羈、特有の校風を發揮する所に在る、然るに我國の事情は、早稻田大學を以てすと雖も其貧や公學の貧に過ぐる以上、如何に卓犖なる大隈伯、英邁なる高田學長ありとも、迚も獨立不羈の校風の發揮などは思ひも寄らぬ事てあ

ると、是が氏の主張の要點である。澤柳氏をして此點に於て山川氏の校長たる明治專門學校を評せしめたならば、茲に初めて私學らしい私學があると頷かるゝことであらう。

澤柳氏は隨分著述の多い人だが、我輩之を筆記者及び速記者に聞くに、氏の辯は訥々として殆んど言論に堪えぬらしいとの話である。が此處等が氏の愼重苟もせざる態度の現はれるものであらう、我輩の如きは此點に於て大に修養を積まなければ、容易に氏の驥を奉ずるにも至り兼ぬる事である。山川氏の東京帝國大學總長として、毎年三月一日の大學令公布紀念日に於ける演說が、從來の形式的會合を一變する運を開いた事は事實である。氏は白虎隊には少しく年が若く、而かも會津の落城と運命を一にし、爾來十四歲から十五歲に至る二ヶ年間、越後葛塚町の遠藤といふ土豪の家に潛伏して居られた、丁度其家に藏書が頗る多かつた爲、此一年半の間大に讀書修養を勉められた、是れ氏が其後夙に米國留學生たるの運命を有せられたに拘らず、少しもハイカラと爲られなかつた所以であらう。右葛塚潛伏の一段は我輩が鎌倉で親しく氏の直話で知つた事實である。

澤柳氏と山川氏との柄に似合はぬ共通の事柄は兩氏共に羅馬字に熱心なるの一事である。

△山川、澤柳兩總長の性格

山外道人

極、飾氣の無い所をいはう、山川博士は誰も知る如く東北のタイプとして顯著なものだ、東北のタイプといふは他ではない、東北人は斯う一方に頑堅な樣な所があつて融通が利かぬといふ風なものが多く出る、雲井龍雄の如きが左樣である、根本通明の如き人も大分其タイプである、平田篤胤も東北流である、後藤新平なども幾らか左樣いふ所があるらしく思はれる、特に山川博士は會津の出だから會津の氣風を代表したものともいふべきだらう。山川博士の兄弟の山川浩は軍人だつたが、山川博士も軍人だつたら尙ほ善かつたらうと思はるゝ樣な所がある、東京では餘り演說されぬらしいけれど地方に行つては折々大和魂とか武士道とかいふ事を演說されるが、左樣いふ事の演說に餘程適した人格で、軍人にしても一向差支ない所が見える、現に

角一種の硬骨男子で將軍の性格を具へて居る、然らば乃木大將と比して似た所があるかといふに、幾らか似た所がある、融通の利かぬ樣な處は大分似て居る、乃木大將も仲々融通の利かぬ所がある、そこが乃木大將の特色だが左樣いふ風の性質が山川博士にもある、乃ち多少共通點があるらしい。けれど大分違ふ所がある、といふは、乃木大將は山川博士に比べると一層辭令に長じて居られる風の處が見え、交際などに至つては消極的でない、餘程積極的に勉められる、山川博士となると交際などの側は餘程消極的である、乃木大將の如く積極的に勉めて交誼を全うするといふ樣には出來ぬ、何方かといへば乃木大將の方が溫か味が多い、山川博士は餘程冷な所がある、冷にして鐵の如き處がある、それに乃木大將は時に詩を作り歌を作り書を試みるといふ樣な所があつて文藻の趣味があるが、山川博士には其方が非常に少い樣だ。是は其專門の然らしめたものなるやも知らぬ、山川博士の專門は理學で數學の如きに自然多く智を配る所がある。乃木大將は兵學の如きものに氣を配る所がある。どちらも好學の士ではあるが趣味に於ては違う。

一體會津は朱子學で固まり近思錄を讀ませた所だから、山川博士も近思錄で頭を固めた所がある、頑堅に出來て居り融通の利かぬ所のあるのは其邊から來て居るのだらう、長く米國に留學されたけれども性格は何處までも日本的でハイカラでない。質朴な風を維持して居られる。何處迄もそれで貫き行く側の人である。東京の大學總長であつた頃にも、餘程古びて何年前の外套かと想はれる程の外套を着用された、といふ風に質素な人である、左樣いふ樣子故敢て富を成すの考のある事もなからう、別に蓄財に心掛くる樣の事は一向ないと思ふ。左樣いふ事を餘り口にせぬ人である、が質素にして居られる爲に極めて財產家である、無駄遣ひのない結果として富は自ら蓄積されたのである。小石川の元の地所は十萬圓で人に讓り渡された由に聞くが、果してそれの事實か否かは知らぬけれども、先づそれ位は十分あつたらうと思ふ。近頃は池袋に大きな邸宅を構へられ、又地所も廣く、更に益々其附近を買收されるらしい、仲々學者仲間では財產家である、學者なるものに財產家は滅多にない、醫學、工學の方には隨分有るけれども理科文科には財產家は其樣に無い所であるのに、其中に於て山川博士は藤澤博士と共に傑出して居る。

山川博士は冷にして鐵の如しといつたけれどもそれは一方面の見方なので、情の温い所も無論ある。元來寡默の方である、餘り無駄口を言はぬ。全體からいへば言葉が少い、演說なども好まぬ方である、必要があればやるけれども何方かといへばやらぬ方である、けれどやれば仲々力ある强い音聲で意見を無遠慮に述べられるから何處となく人を感動させる處がある。其意見の述べ方といつたら誠に單純で一直線で些の變化がない、思ふ所に直着けに着けるので時あつては極端に走る事がある、王公大人にも憚る所なく自ら顧みて不可とする所はドシ〳〵言ひ、言ひ盡さなくば已まぬといふが其性質である、昨年であつたか埼玉縣教育會で現文部大臣を大に攻撃され、彼方では大分困つたらしかつた、けれども山川博士は其樣な事は一向氣に掛けぬ、氣に食はぬ處があれば大臣であらうが誰であらうがドシ〳〵言ひ破るといふが其持前である、左樣いふ勇氣がある。左樣いふ風だから無論上手といふ樣な事はない、婉曲などいふ事は出來ぬ、夫の京都大學總長の菊地男爵は、交際側はズッと山川博士よりも圓滿に行く、角目がない、溫和である。山川博士の方は如何かすると餘程圭角がある。けれども又學生學友等と相接して談笑を交ふるや誠に和かで其上義俠に富むだ所がある。又交誼を全うする所にも餘程勉むる所がある、これは即ち或る場合、患難とか疾病とか、何等か人の急を要する所になると中々勉められる、要するに一般普通の交際には積極的でないけれども、或る特種の場合に大に勉められる、此處等が甚だ見るべき所だ。只斯ゝる性格の人ではあるが美術文藝の側には甚だ趣味の乏しい事前述の通りである。美學的の趣味などになると殆んど相談相手にならぬ處がある、餘程殺風景である、又不善邪惡などに對しても其程度を問ふ事をせぬ、凡てを同じ樣に撲滅する態度に出て來る。或る時山川博士は斯ういふ事を言はれた事がある、彼樣な大きな監獄を罪人の爲に作り置く必要はない、皆殺せばよいと。犯罪人の罪の輕重を考へそれぞれ或は重く或は輕く、或るものは嚴刑を加へ、或るものは寛大に處すべきは言ふ迄もない事だが、山川博士の眼中には彼の不善邪惡も許容されぬのである。餘程武斷的である。此處に一種特別の性格があり、人格として重きを爲す所以がある、けれども人情に於てはまだ徹底してない所があるから、如何しても世間の複雜なる人情を能く

察し、それ相應に待遇せなければならぬ點に於て不足を感ずる所がある。此側に於て物の行屆かぬ點があるが、其性格の然らしむる所で已むを得ぬ、即ち一方に甚だ善い所があると同時に亦甚だ極端な所がある。此罪人の話の如きは深く考へて言はれた事ではなく一場の座談なるは言ふ迄もない乍ら、其處に却つて僞らざる山川博士の性格が發露して居ると思ふ。

又山川博士の教育なり政治なりに就いての所說にも何うも左程正しからぬ事がある。例へば或る女學校に行つて斯う言はれた事がある。今日の如く、女子が高等教育を受くるのは如何であらう、寧ろ有害である、女子が高等教育を受くると其出產力を害する、此點が考へものであると、元より女子の高等教育に就いては色々說がある、獨り山川博士の說を待つものではない、併し日本の現況は如何であるか、その女子の高等教育は左様偉らい程度に至つて居らぬ、即ち出產力を減ずる程には至つて居らぬ、之を男子の中學より高等學校に入り更に大學に行くものに比すれば其幼稚なる事多く言ふを値せぬ。女子大學があり女子高等師範があつたとて知れたものである、今後大變高い程度の學問をするまでに進歩し、心身を苦めることが強くなれば初めて疑問とならうけれど、まだ今日に於てその爲に女子教育の發展を阻害するなどはあるべからぬ事である、山川博士のその見界が間違ひ居るとは決して言はぬが、正確に當て嵌まるとはいへぬ、少くも今日の我女子教育界の實況には當て嵌まらぬ。

それはまだ宜いが更に斯ういふ事を記憶して居る、それは實業之日本に述べられた說である、山川博士の最も尊信し居られる人物が二人ある、一人はルーズベルトで一人は何うやらいつた、今では名も記憶して居らぬが田舍の人の薩張り名の聞えぬ人間であつた。ルーズベルトの如き現世界の英傑中から一人を選んで偉らしといはれるには非難がない様だけれど、まだルーズベルトは生きて居る人間だから、未來の變化測るべからざるものがある、之を出して世人の模範とするは採らざる所である。特にルーズベルトは亞弗利加で頻に猛獸狩をしたが、是にも非難すべき點がないではない、が更にそれ以外に色々世評がある、欧羅巴に行き、特に獨逸皇帝と握手談笑した時には殆んど天下の英雄我と汝といふ趣があつたけれど、そのルーズベルトの近狀果して如何、彼は其後困頓失敗して又昔日の赫々たる聲名を維持し居らぬ、色々の事で叩かれて甚

だ沈頽不振の有樣である。亞米利加は妙な所で多數者の勢力が重なるものとなつて居る、て多數者の勢力がルーズベルトを偉く持上げると其名は表面に赫々と顯はれるけれども、又此多數の人が却つて集つて突き落すことがある。ルーズベルトの如き今は人望を失ひて多數者から突き落された狀態に居る、そして又非難すべき點が幾らもある。それ故山川博士が以前に、天下の廣きも現今の人物は只二人のみ、一人はルーズベルト、一人は何の誰と言はれた見解は餘程極端の言である。山川博士の見界の齟齬し居ることを證するものである、それ故山川博士の所說に無論善い事も澤山あるが、一々正確なりとはいへぬ、彼れ程の人格ではあるけれど其所說は餘程用心して聽かねばならぬ。

それに山川博士の行動は、自ら最も重んぜらるゝ所であらうが、如何も傍から觀て十分に理解出來ぬ事が幾らかある、例へば文部省の教科書の編纂に當つて修身教科書の主任と爲られたが、其教科書に就いては、世間の非難が色々ある、然るに其非難に對して部長たる人の一言の辯解のないのは何うい ふものか、又思へば今日の普通教育に於ける修身教科書の部長として果してそれを擔任する丈の素養を持たれたてあらうか、十分其方の素養なくして部長たるの地位を受けられたとすればそれは何う云ふものであらうか。若しそれ丈の自覺あつたものなら今日あれだけの非難あるに對して十分の辯解がなくては相濟まぬ譯でないか、又博士の性格は何うも何處迄も學者であらうと思はれる、理學を以て貫くべき人と思はれる、それ故安川の實業學校長とか九州大學の總長とかいふは如何しても嵌まつた仕事とは思はれぬ、此等は全くの事務官である、大學には所管事務も學問に關する事が多からうけれども、猶ほ全くの事務官である、山川博士は心底から斯かる事務官を以て自ら甘んぜらるゝ人であらうか、之を受けられるのはそも如何なる動機に出るものであらうか、吾人はその了解に苦む。

次に東北大學總長となつた澤柳政太郎氏に就いていへば、氏は曾て大木喬任氏の文部大臣の頃に文部省に出られたが、その頃何かの問題を漏洩したとかいふ事て官を罷められ、其後又々同省に入り、爾來漸次事務官として手腕を現はして來たのである、又一方には佛教の信者で、雲照律師を尊信し、屢次目白僧園に行かれた、即ち左樣いふ信仰のある人だ。學問の方は大して深い根柢のあるてはないけれど、仲々精力家で根氣

の強い所がある、それで色々教育上の著述をして勢望を博し、遂に總長とまでなつた次第だ、人物拂底の時だから、比較的氏が總長となるの資格を持つたといふものだ。それに此事務官となるものは段々學問をせぬ樣になるが通例である、さうして學者は事務の才に乏しい。學問と事務とは元と頗る兩立し難いものである。それに此大學總長なるものは大層事務が多い、先づ東北大學の如き新しい大學では左程でないかも知れぬけれど、それでも其任に當るものには事務の才を要する。澤柳氏は文部次官として事務の才ある事は知れて居る。けれど又暫く退官した爲に其間に讀書に勉め著述に力を用ひられた結果、學問上得る所あつた次第である、學問といつても別に是ぞといふ專門的の素養を有する譯ではないけれど、他の普通の事務官とは違ひ、續々著述をしたといふ樣な點で、事務と學問との力を幾らか合せたと見られる處がある、是が今の人物拂底の時に於て澤柳氏が多少傑出して居る點である。

けれど、如何にも氏の行動にも了解に苦むことがある、例へば修身教科書を書かれたが、是は元來哲學科の出身でもあり、教育の事にも心を用ひた人だから怪むに足らぬ、でも直接自ら諸學校教員にそれを採用して呉れと云ふ手紙を送つたと云ふことだが何ふもそれは厚つかましいやり方のやうである。それから又漢文教科書をも出された。之を出したのは如何いふ理由か、吾人は遂に澤柳氏が是ぞといふ漢文を書かれたのを見た事がない、漢文に於て特別の知識ある人とは到底考へられぬ。漢文教科書を書くならば他に幾らも其人がある。例へば服部宇之吉、市村瓚次郎とかいふ人々なら、最早や書いて出されたかも知れぬがそれは兎も角として、此人々が出さるゝなら少しも怪むに足らぬ、然るに澤柳氏にして漢文教科書を出されたのは何の所以か、大隈伯が曾て澤柳氏を評して斯う言はれた事がある。貧乏はしたくないものだと。是は氏が貴族院議員となるに當つても、チャーンと條件が定まつて居て、主義に於て束縛されて居たかに聞く、それを大隈伯が聞いて左樣に言はれたのである。其後著述で大分收入もあつだと聞くが、併し漢文教科書に迄手を出すのは少し醜いやうに思はれる。此邊が吾人の了解に苦む所である、又彼の「孝道」の中に露國の君主に對して報復を謀らんとするものが載せられてあるとて、色々非難するものもあるに對し、其際氏の辯護した所は甚だ大人氣なかつた。只區々辯護せんとて辯護し、そして反

對者に攻擊の矢を放つた處が見える、彼樣いふ事は最早や初めから惡い事は惡いとして寧ろ改むべきではないか、左樣いふ時に氏の行動の上に疑點を招くことないてはない、最も是は備はるを賢者に求むで、誰でも缺點を探せば探され樣けれど、此樣な缺點があつては氏の將來の爲にならぬ。他人の事は分るが自分の事は分らぬのが人間の常だから、斯かる事を此際言つて置くのも贅てはあるまい。

尙ほ序に言ふが、大學總長は一體獨逸の樣に、敎授が代る〲なる方が宜い、先づ東京の帝大總長は餘程前からの關係があるから暫く別として、今後の大學總長は敎授が爲るが宜い。最も菊地總長山川總長は元と敎授であつたから總長としても相當の人と思ふが、澤柳氏に至つては只文部省の官吏といふ丈である、官吏が大學の總長となるに至る理由は、敎授は一般に事務を五月蠅がる、事務を厭がる、といふは事務を取れば學問が出來ぬからだ、さうして又事務が不得意といふのが通例だからである。今度の東北大學に於ても斯いふ樣な譯からして、文部の一事務官たる澤柳氏を簡擢して總長としたに相違ない、それ故總長に爲つたからとて各專門敎授以上の人格となつたと自分で思はヾ間違である。それは官制の上から見れば總長は他の敎授よりも官等も俸給も上であるが、是は單に複雜なる事務に酬ゆるだけのものである、要するに只の一事務官に止る。大學に重んずる所は學問に在る、それ故總長たるものには此心得が必要である、純粹の官吏が各專門の學者の頭領と爲つた樣な考を持つてはいかぬ、學問の點からいへば總長は只一官吏である、眇たる一官吏である。何等優等の資格を學問上に有するものでない、一體純粹の事務官を各專門の學者の上に在ると思はす樣な事は學界に於て甚だ宜くない事と思ふ、此點からして今後の總長は敎授が代る〲なるか、若くは元敎授であつた十分學力ある人物を選ばなければならぬと考へる。

兩先生の人格

吉田熊次

山川澤柳の兩先生は我敎育界の先輩である上、私個人としても出身學校の關係上先輩として尊敬し居る人々であるのに、その人に對して人物の批評がましい事

をいふのは實は甚だ好まない、出來るならば斯らいふ問題に就いて評論なさる事を止めて戴きたいと思ふ、けれども私ひとり辭退しても貴社の計畫を換へて貰ふ事が出來ぬも知れぬ、それが出來ぬとすれば屹度色々の評が紹介されるとと思ふから、左樣ならいつそ自分も自分の見た所を正直に申上げ、幾分でも正當な人物評が世に傳はる樣に致したいと思ふ。

第一に私の困ることは、兩先生とも私に比較すると知識も廣く又經驗にも非常に富んで居らるゝので、私の感じた事が如何も兩先生の實際の御心持等を伺ひ知る事が出來てあつたか如何か、是は本當ですよ。といふは私の兩先生に接したのは限られた期間の事で、朝夕咫尺した等の譯で無論なく、又親しく仕事を一所にした事もないからである、只私は妙な緣故で、兩先生とは三年間ばかり稍頻繁に接する機會を持つた事がある、それは教科書編纂の事に就いてで、明治三十七年に公になつた國定修身書の編纂の際に、私も關係した事がある、其節澤柳先生は普通學務局長として修身書調査會の幹事でもあり又委員の一人として調査に從事され、殆んど三年間程一所に仕事をした、それから四十一年以後再び教科書調査委員會なるものが出來、修身書の訂正をすることとなつた折、山川先生は其修身書調査部の部長でもあり又無論委員でもあつた爲、三年程先生と比較的頻繁に接した、それ位で實は兩先生の全般に就いて如何といふ事は言へぬが、左樣いふ機會に聊か感じた所をのみ今言つて見やうと思ふ。山川先生に對しては一般世評も定つて居る樣だが私の感ずる所では御侍の權化らしく見える、人格の崇高なる事は勿論、その意見を立てられる有樣に就いて考へても、極健實な眞面目な道德的觀念が常に基礎と爲つて居る樣に思ふ、從つて御一身の言行に就いても一點の虛僞虛飾或は胡麻化しがましい等の事がない樣である、調査會なぞに出ても常に私自身の恐縮した事は私共が用事などがあつて少し遲刻して行つても、先生は定刻前に必ず出て居られる事である。其上議案となつたものは、如何に小さな議案でも殆んど始から終迄精讀される、此樣な事は極些細な樣だけれども、現時の一般の德義心等に比較して餘程違ふ所がありはせぬかと思ふ。想像する所は宛も昔の武士が一度宜しと請負つた事は必ずやる、如何樣な事でもやる、人の知ると知らぬとは聊か念頭に置かぬといふ樣を面り見る心地がする。是は故の高嶺秀夫先生に聞いた所だが、高嶺先生

は山川先生と一所に會津の人て、そして白虎隊に加はり共に自殺する筈てあつたけれども僅か年齢の足らぬ爲にせなかつたと、多分山川先生も高嶺先生と同一の事情てあつた事と思ふ、此等の經驗は先生の人格をして決然として守る所あるといふ崇高なる點あらしめた原因てないかと思ふ。從つて一般道德上の議論をせらるるにも常識を基礎とせられるには相違ないながら嚴肅に節義を重んぜられる事と思ふ。

けれども先生は決して頑固一點張りの人と思へぬ、先生の思想を想像し見るに、餘程進歩的の處があるらしい、論より證據、先生は國語を簡易にせよといふ論者て、漢學とか漢文とかの煩瑣複雜なもの、無用なものてある事を熱心に主張される、此等は敎育家としては極めて進歩的の思想といはなければならぬ、斯ゝる事は先生の專攻學科の影響にもよるかと思ふ、先生は物理學者て中にも光學のオーソリチーてあらせられる、その研究の爲に夙に米國に赴きエール大學に學ばれたから、それよりして推度しても頑固一點張りなどとは思ひもよらぬ、尤も先生自身には仲々漢學に精通して居られる樣だが、餘り六かしい漢語を遣ふは惡いといはれながらも、自身には好んて漢籍を讀まれるのてあらう、又和書をもよく讀まれる、歷史にも精通して居られる、それは何時頃からの事か知らぬが敎科書調査の折などに能く話に出るので私等の常に敬服して居た所てある、それ故進歩といふ點はあるけれど、さればとてハイカラは微塵もない。是は餘り私に係る事か知らぬが、ニッケルてはないらしく、何れ銀てあらうが、大層大きな時計を所有し、其紐たるや絹かは知らぬけれど日本出來の糸紐てある、そして決して人の爲る樣な金側時計に金鎖といふ樣な見えはされぬ、此糸紐の大銀時計！之を見ても如何に其ハイカラならぬかが分る、敎育界ても一番の人格家てある、從つて人格に重きを置かれるから、敎育上進歩主義を倅ばれると同時に又眞面目なる人格の陶冶に勉めなくては居れぬのてある。

今一つ最も先生の人格を代表すると思ふのは千里眼事件に對する先生の態度てある。彼れに就いては色々噂が傳へられて居るらしいが、即ち先生には初から物理現象以外の現象を認められぬ、極端なマテリアリストてあるかの報道もあつた樣だけれど、私の親しく先生より聞いた所てはそれとは全く違ふ、即ち其場合にも極めて高明正大な、眞の嚴正中立の態度てあつた、

千里眼なるものが實際有るとして研究するでもなく、亦無しとして研究するでもない、有るか無いかの事實を公平無私に世に明にせなければならぬとの學者的の態度で研究に從事せられたのである、即ち初から信じて掛つた人と疑つて掛つた人との中間に立たれたのである、學者の態度としては最も正當を得たものと思ふ、若しも左樣な事實のないものを事實であるかの如く世に傳へ、徒に人心を動亂するが如き事あつては、我教育界並に思想界の爲に由々しき大事だと思ふて、提身自ら其研究に赴かれたのである。斯樣な事は第一眞理を愛し、世道人心を憂ふる事の深いものならでは出來ぬ事だ。千里眼の現象、それよりも深い現象の研究は外國にも良く例のある事だけれど、左樣の研究専門家なるミユンスターベルヒ氏でさへ、ユーサピアの實驗に立合ふ時には非常に躊躇したと云ふ事である。で山川先生の研究の爲丸龜へ行かれる時に、彼樣な事して騷がずとも分つた話だと笑うものもあつたし、又餘計な事をせぬが宜いとて直接忠告した人もあつたかに聞く、が先生の此等の忠告を一切排斥して自ら進んで實驗を試みられた事は、先生の如き眞面目な考を待たないでは出來ぬ仕事である、萬一成功した所が當り前の話、成功せなければ不名譽だから、自己一人の利害の打算からいへば、十分の名譽を荷ひ居る先生の位置としては彼樣いふ風に手を出す勇氣は出ぬ譯である、それにも拘らず斷然局外中立の態度で着手された事は、其處に能く先生の人格を窺ふ事が出來る樣に思ふ。先生は又嚴格であるけれども人を容れる度量に乏しい感は毫もないと思ふ。私共は隨分失策もあつたらうけれど先生は能く寛恕して一所に仕事をするを許された。それは先生の寛容なる事といつては、事に當つて斷乎たる意見を主張せられるけれども、些細なものには御自分の意見は別であるとしてもそれを多く主張されず、發表もされぬ樣である、要するに先生は嚴格な性格で包まれた複雜な人格で、近代的の所はあるが其弱點のハイカラに陷る事なく、昔風の武士氣質であつて、而かも頑固な所が無い樣に見える、私の山川先生に感ずる所は此樣なものである。

澤柳先生は年齡に於ても經歷に於ても山川先生よりは新しいと思ふ、先生は大學で哲學科を出られた人、日本に居て明治の教育を受けられた人である、それ故思想の點に於ては一層進歩的でないかと思ふ、私共の修身書の編纂に關して特に先生に就いて感じた事は、

第一に見識が高いと思ふ、例へば教科書の調査方針を定めるに於ても、それは幹事として當然の職を執られたのではあるが、自身に大體の方針に對する立案をされる、それて其案を見ると、仲々凡庸ならぬ處がある、實に卓越した見識から出來て居る、事を處するには又極めて果斷て、嚴肅な所があると思ふ、第一先生の物を決するや甚だ早い、明敏果斷とてもいふべきか、直に事の眞相を達觀する明がある樣てある、それ故先生が經營されると事が運び易く、着々として纏まつて行くのは誠に痛快を感ずる。

先生に對する世評の中にも間違つた所がある樣に思ふ、それは世人は動もすれば先生をポリチシアンなりとの評の下に、何となく權謀術數を逞うする人物かの樣に思ふ事だが、私はそれとは正反對の印象を止むるものだ、私の見る所ては先生は常にジャスティスを基礎として事をされるらしい、先生の能く修身書編纂の折に言はれた事だが、ベネヴヲレンス(慈愛)も無論尊いけれども、併しジャスチイスの方が尙ほ尊い、是が行はれれば、ベネヴヲレンス迄に進まなくても立派な人間が出來るてあらう、が今の世は此ジャスティス迄も十分に完成されて居らぬと、先生の實行の跡を見ると誠に能く其所信が證される。先生が教育に關する大問題の起る毎に率先して意見を發表せられ、又著述によつて遠慮なく所信を公にせらるゝのも、畢竟正しい道理のある所に勝利が伴ふものとせらるゝ樂天觀に基くもので、軈て先生の人格の公明正大なる事を顯すものと思ふ。

先生は常に吾人を戒めて言はれる、一體人間は先づ此世を益する樣な仕事をせなければならぬ、若し自己が眞に此世を益する樣な事をさへするなら、國家として決して其人間を棄てることの出來ぬ話てある、それ故世の中の仕事は理由なしに胡麻化して行くものでない、先以て實力を養ひ、そして實際の仕事に當つて眞面目に力を盡さなければならぬと、教科書の仕事の如き毎日同じ樣な事をばかり繰返して居るので隨分五月蠅いものだから、偶ま私共が左樣な事をいふと、直に忠告を與へて曰はれるには、一つの仕事をし始めてそれを完結せしめ得ぬ樣な人間ては、何仕事やつても纏まるとはないと、私共が眞に自分の身を處する上にも道德上正しい道に由るより外、安全なる事はないと深く感じたのは寧ろ直接間接に先生の御教訓に由る事と思ふ、先生は普通學務局長の時に色々世間の批評を受

け、或は官學主義の人と言はれたけれども、私共の見る所では全く正義の方針によつて立たれたに外ならぬと思ふ。正義からいへば、學校監督者の目より見て正當なるものは之を尊び不正當なるものは之を抑ふるが自然である、何等かの關係から情實を以て、監督の仕方を二三にするといふなら兎に角、然らずして正義を標準とし、事實に由つて其可なるものには特權を付與し其不可なるものには特權を付與せぬの外仕樣あるものでない、不幸にして我私立學校には其設備の整頓したものもあるけれども整頓せぬものも隨分少くないのが事實である、すれば眞に教育の進歩を圖る高義の監督の念からは、其不整頓の學校に對しては之を抑え、それをして新に整頓を見るに至らしむるのが當然である。此點に於て世人の先生に對する考の誤謬あることを深く遺憾とするものである。

先生が如何に誠を重んじ、道德上正しい道を踐まれたかは其經營に徴しても明である、先生は群馬の中學校長となり、又第二高等學校長ともなられたが、此等は共に學校騷動の後を承けられたので、何れも餘程卓越した人物ならでは始末の着かぬ所であつたのだ、然るに常に能く内外の名望を收めて其學校の秩序を恢復せられたのは、決して一時の胡麻化し瞞着で出來る事とは思はぬ、親しく先生より承つた話だが、其群馬中學に赴任せられた時には、常に學生に對して、親切なる教師とは何ぞやといふ疑問を掲げ、之に對して極力懇切に説明を與へられたといふ事である、其説明は斯うであつた相だ、嚴肅なる教師は決して不親切なるものではない、却つて生徒の將來に對して努力を致ふる親切なる教師であるのだと、其結果生徒は遂に學校の爲す所教師の努力の存する所を了解して穩かになり、今迄騷動で困つた中學も善く改まつたといふ事である、此一事直に先生の教育家としての力量を計り得るのみならず、又其如何に赤誠を以て事に當らるゝかを知り得る好證左であると信ずる。で一方からいふと常に學校騷動跡始末の大役を引受けられる形がある、夫の高等商業學校の如きも學校騷動の跡を承けられたのであり、又高等師範學校長に爲られた時も矢張り學校に多少の波瀾のあつた後と思ふ、そして何れも能く其秩序を恢復された、此の如きは皆先生が卓越せる識見を持して敏速に事を處する才能を有し、それを包むに至誠を以てし正義を尊ばるゝ結果に外ならぬと思ふ。

△才物の澤柳と古武士風の山川

蓬々子

どちらも研究的に調べた事がない、又調べ樣とも思ひもせぬから能く分らぬ。澤柳の人物などは如何いふものかね、温厚篤實だか如何かは分らぬ、が何處かに引張りがあるんだらうね、それでなくて彼の若さて、早く次官にもなれば貴族院議員にもなる又今大學總長にもなる、何處に在るか知らぬけれども屹度引つ張りがあるに相違ないよ。それてその人の性格の大凡そも分りはせぬかと思ふ、つまり才物、悧巧ものだね、見識は文學士だと思ふ、如何も學問の筋途の大體に就いてそれ程深い廣い見解があるか如何か、今迄書いたものを見ると疑はれる、敎育者としては見解が偏りはせぬかと思ふ、大學總長としたならば左樣、才子て人を籠絡する道を知つてる樣だ、東京の大學總長としてはそれは迚もいかぬけれども、若い連中ばかり多く居る東北大學だから——、それは札幌には少し年の寄つたものもあるけれども事實上獨立してるからね、先づ新しく出來た東北大學だから折合も附き、格別不都合もなく行かうと思ふ、それても先日來新聞に見えた、彼の口から出た抱負だといふものを聞くと如何かとも思ふ。

大學といふ所は拗ね者の寄り集り、我儘勝手の者の寄り集りて、また總長の顏を見ぬといふ樣な者が多い、只自分の學問だけやれば宜いとして居る、獨逸語ではプロフェッソーレンといへば常識ないものといふ意味を持つ程だ、言はば馬鹿者だ、が彼地でもプロフェッソーレンで居る間は宜かつたが、此の頃の伯林大學敎授は仲々プロフェッソーレンでなくなつた、元の樣にシガーを吸ひながら無邪氣に無常識な話をして居る間はよかつたが、如何して近來は左樣でなくなつた、身なりを繕つて夜會に出掛けるなど常識の交りをする樣になつたから大層惡くなつた、學者には我儘な所があつて宜い、それでなくては迚も學問にばかり專心することが出來ない、總長といふものは只事務を取つて政府から金を取出せば宜い、そんな面倒臭い事があるから丈て、他には總長を置く必要がない、それなら只書記官見た樣な事務を執るものさへあり、そして會議の時に採決を採るものでもあれば澤山だ、が何時左樣な

理想の時代が來る事か、今ては只空言たるに止まる。然るに澤柳の所謂抱負なるものを見ると、如何研究して、如何傳へるの、如何擴げるのといつて居る。彼れては如何だか知れぬ、總長が一種の抱負を持つては行けぬかも知れぬ、到底所信通り行はれぬかも知れぬ。大學には一體好いプロフエツソルが居なければならぬ、それ故つまり總長の職としては好いプロフエツソルを集むるといふが詮要なんだ、それを集めた以上は前に言つた樣な性質のものだから十分それを寛容してやる雅量がなくてはいけぬ、が奴さんには其雅量が何れだけあるか知らぬ、何となく安つぽい氣持がする。

山川は全く正反對の人物だ、やり方は旨くもなければまづくもない、稀に見る古武士の風がある、その代り盲ら判てやり損ふ事もあらう、戸水事件の如きがそれて失敗して居る、大抵の事は學長に任せて盲判のみつく人てある、何となく大きい人物てある、けれども一方には狷介の處がある。何故か知らぬが學士會院を辭して仕舞はれた、又是迄一度も出られなかつた、一體學士會院は菊池の跋扈する所隨分我儘をする處だから、農科大學の如きは石川一人丈、他は何人も會員にはならぬ、山川も矢張りそれが忍べなくつて罷めたと思ふ、其理由とする所を聞けば暇がないといふ、所が學士會院に何仕事がある、何もせぬ所だ、閑職に居て暇がないといふ譯がない。併し此處に其古武士の風がある。頗る物事に耐忍の出來ぬ人かも知れぬ。古武士が矢張りそれだ、死すべき時には躊躇なく腹を切る、時には切らずとも宜くても腹を切る事のあるのが古武士だ、山川には何となく激烈な所がある、慥に會津武士の好標本を示す人と思ふ、演說は嫌ひだといふけれども遣らすと非常に上手だ、上手といつても普通にいふ上手てない、普通にいへば格別上手てない、が一句一句乾度人の肺肝に徹する。即ち自然的に上手なのである、寛大てはあるが時として激烈てある、理想には總長として好い人てあらう、が金を政府から取つて其學校を發展させる段に於ては澤柳が宜からう、併し部下の人を服させる段に於ては到底澤柳は山川に及ばぬ東京帝大の人達も山川には多分能く服したてあらうと思ふ。山川なら內は治まる、が外に向つての發展はやらぬだらう。

△申分なき人

湯原元一

二人とも今の教育界では申分のない人だ、大學總長としては無論適任であることと疑ない、特に山川博士の如きは東京帝大で良總長の名を得た人、屹度九州大學へ行かれても亦同樣の名を得らるゝであらう。山川博士は殆んど武士の典型である、其家庭の風を見ても其兄弟の樣子を見ても實に武士道の結晶と申すの外ない、崇高な、廉潔な人格で一點野鄙の處がない、人格としては此上ない、世情に疎いとか偏狹だとかいふけれども、是丈あれば澤山である。凡ての缺點を補ふて餘がある。事務の才學問の厚薄とかいつたらまだ外にそれ以上の人が有るも知れぬが、今の社會に一番缺乏して居るのは高尚な人格である、此點に於て我々は山川博士を推重せなければならぬ。

澤柳氏には大學總長たる經歷はないが、併し幾多の學校の校長として至る處に良成績のあつた人、又事務官としては普通學務局長ともなり次官ともなつた人て、今日の教育上の仕事といふ仕事は大抵彼の人のした事だといつても宜い程、手腕は何人も認めて疑はぬ所だ。今では總長には元老株と學問に於て名高い人とがなる習ひだから、ともすれば世間では年が若いとか學問が足らぬとかいふか知らぬが、年からいへば最早や四十七歲、濱尾さんの初めて總長になられたのは三十時代だつたから、それ等を考へ合はせれば若くもない。學問は肩書こそないが見識に於ては非凡である、今の世にはまだ漢學の遺臭があつて、學者といへば言ふ事爲すことペダンティックで、何處か腐儒といふ臭のする者でなければ承知せぬ傾があるから、不足も見えるのであらうが、澤柳氏は見識の點に於て多くの學者中決して遜色あるものでない。近來書かれた「教育學」の如き、形式上から言へば進步して居る、本に捉はれる人では餘り言へぬ事をいつて居る、左樣いふ點でいふなら多くの博士中にも比肩すべき者はなからう、隨分佛書も讀めば漢籍も讀む、洋書も讀む。讀書はする。が學者振る事をせぬ、振る事を嫌ふのである。ても博覽多識といふよりも長所は見識の方であらう。

人間の方は山川氏の樣に崇高ではない、それにまだ年も若し、意氣强烈、何となく信州の山越しの中に育つた一種の人格を思はせる。一旦思ひ立つた事は萬難

を排して貫徹する、天下を相手としても戰ふといふ處がある、澤柳氏は如何なる所に居ても無爲で終りはせぬ、脚元には常に事務が伴つて居る、生々活潑地に世を渡らるゝ、氏の赴く處は用なき處にも用を見出し、無味の處をも直に活潑地と化して仕舞ふ、それは從來事務官とし、又色々の處に居られた經歷が之を證明し、事實上掩ふことが出來ぬ、その爲に本人の出世の妨をする事も往々あらうが、兎に角所信を大膽に公言し、所信を非常の執着力を以て遂行するものは敎育界には氏の外に左程人がない、今の只上手に渡るをのみ勉むる世の中に氏のあるのは偶ま周圍の惰眠を警醒する力があると思ふ。敎育者は兎角退嬰主義で善い加減の事をばかり言つて居るものだが、澤柳氏は獨り此間に立つて他と選を異にして居る、公明正大に思ふ事はドン〳〵言ひ、望む事はドシ〳〵實行して行くといふ風である。

澤柳氏は曾て第二高等學校長として仙臺に行つて居た事もあり、彼地の事情を知つて居るし、又東北大學成立の議には次官としての在職中に與つて居た事でもあり、傍ら關係が多い、それに農科大學々長とも互に知り合つた中てあるし、新設の理科大學長は氏の推薦した人物てあるし、屹度調和の點に於ても旨く行かうと思ふ、それ故今度其大學總長として就任されるならば屹度良成績を擧げ、其在職中に必ず完全なる綜合大學の基礎を据ゑられる事と思ふ、此點に於ては殆んど疑を挾まぬ。

一體東北は何方かといへば開けない地て未着手の事が多い、此樣いふ處には澤柳氏の樣な手腕ある活動的の人物を要する。九州は是とは趣を異にして最早や開けた所てあるから、事に忠實なるそして品性崇高なる山川博士の如き人物を要する。それ故人物は他にもあさも二人者の選は先づ適所に適才を得たと言つて宜しい、此兩人を抽いた事に就いて兎や角不足いふものがあるとすればいふものの誤てある、望む事の餘り多過ぐるものだと信ずる。

自分の能く親近する人物の批評は禮として宜くないとは思ふけれども此兩君は强いて語らせられれば先づ此の如く申分はない人達てある。

△山川博士の生立ち

柴　四　朗

山川家は會津で家老の家である、祖父が有名な人で家老を勤めた、父は若年で無くなつた人で、如何樣な人物か能く知らぬが、母が有名の人であつた、其同胞の人達を話すと、一番大きい姉さんが二葉子といつて女子高等師範の舍監をして最早やなくなられた有名な婦人、其次が御維新前に洋行して、歸つてから砲兵大將となつた山川浩で、遂に貴族院議員にもなられた、伊太利公使の林權助の父が又有名な人物で、是と共に編制した砲兵隊で大に伏見に於て薩長と戰つたが利がなく、幕軍には死傷甚だ多かつた。其時山川浩が獨り殿して退いたのであつた。三番目が又婦人で山川操子といひ、皇后陛下に隨從して佛蘭西へ洋行し通辯などをもした人だ、其次に今一人婦人があつて、それから今の山川總長である、間の婦人といふのは良人と共に北海道へ行つて、良人の沒後彼地で敎員などをした人、此人一人丈が境遇上名が顯れぬ、一番不遇である、總長の次が長崎控訴院の檢事正をして居る山川篤治、其次が捨松子といつて現大山大將夫人である。

先づ兄弟姉妹皆多く名が顯はれて居るが、是は多分お母さんの薫陶の力であらう。しつかりした婦人で學問が出來歌を善く咏まれた。御維新の後には皆祿離れしたので山川家も隨分窮した生活に陷つたが、其間を屆せず切り拔けて多くの子女を敎育して出られたのだ、此樣な話がある、或る時某警部が此夫人の樣子を認めて變つた所があると思ひ、怪んで尋ねたけれども夫人はそれに答へず、「只蛋の子なれば」と二度も言はれたとやらいふ、是は「蛋の子なれば宿も定めず」とかいふ古歌の意を諷されたものだ相な。

健次郎氏は非常に身體が弱く、所謂蒲柳の質で痩せ細り、仲間から靑瓢箪などと惡口された人、初中終學校を休んでばかり居る神經質の人であつたが、それにも拘らず學問は非常に能く出來た、今なら優等生とい者だらう。會津戰爭の時は數へ年で十五位であつた。沼間守一、當時は愼太郞といつて德川の人だが、幕府の再擧を謀るべく二十四五名を引率して暫く會津に來て居た事がある、是が佛蘭西人から直接敎授を受けたといつて佛語の力のあつた人、健次郎氏は戰爭中此人から佛語を敎つた。沼間は明治になつて元老院にも入

り東京市會議員ともなり、民權論者の頭領てあつた事は人の能く知る所てあらう。健次郎氏は白虎隊へ入れば入れたてあらうけれど、藩ては學問の出來相な有爲な人物を抽いて洋行させ樣と思つて居たので彼の赤羽四郎などと共に惜んで其仲間に加へなかつた、とはいふものゝ愈よ敵の城下に肉迫した時には矢張り銃を取つて戰つたのてある、兄の浩は日光口防禦の總督てもあり、健次郎氏とて矢張り屍山血河の戰場に馳驅した人なのだ、が會津籠城も結局戰は不利に歸し、間もなく會津から二三里離れた猪苗代の地に舊城下があるので其處に藩士の半は禁錮され、遁げたものは首斬られた次第てあつたが、其時先輩の人達は官軍の方針を探り兼ねて、非常に心配し、藩主の刑罰は如何てあらう、死刑てあらうか、それも斬罪てあらうかと思案するけれど薩張り知れぬ、でつまり我々少年を教唆したので、十四歳未滿のものは敵は殺さぬ相だ、十四歳未滿といへば使命を全うし得るといふ樣な事をいふ。一城の安危特には藩主の生命にも關する譯故、遂に山川、赤羽、僕等の子供連が決心し、城を遁げて有栖川總督宮に至り、全然自分等の意中から出たので他に關知するものなき樣に粧ひ、斯くて大凡その樣子を探る事とした、處が脫走した時は風雨晦冥の夜てあり、間には關所が二つか三つある、右に左に樹立繁き山山を縫つて行つたので何處が總督府やら見當が附かず、濡鼠の姿で到頭土佐の本陣へ往つた。皆が怪んで子供が何をしに來たかと騷ぐ、其時出て應接されたのは今の谷さんてあつたが總督の宮へ行くなどとは飛んでもないとて一晩陣屋に留められ、翌朝護衞の兵を附けて城内迄送り返された、がそれで大凡官軍の方針も分り藩主の死刑に處せられぬ事も知れた。隨分其時滑稽談もある、雙方旨く語が通せず、幸に私が兄共に從つて早く京都に赴き、多少彼地の語にも通じた所から一行の通辯をするといふ樣な次第、一行の中には肝腎な年齡を詐ることを忘れて、うつかり正直に十五といふたものもあり、皆がひやりとした樣な話もある、土佐は會津に降服を勸めた關係から色々會津の爲には盡して呉れた。此の騷て我々は脫走の罪を獲て寺に押籠められたが、併し其の間、漢學先生などを附けて窃に勉強をさせられたもの、健次郎氏も此處て初めて詩を作る事を覺えられた。

長州に前原一誠といふ有名な人があり、其參謀に奥平謙輔がある、それが我藩の有名な秋月種樹氏に漢文

の手紙を寄越した、それをたよつて秋月氏は奥平の居る越後へ潜行し、會津の將來の事を頼んだが、其際に會津の有爲の人物を世話して吳れる事となり、山川氏等は前原、奥平の手に託せらるゝ事となつた、此樣な譯て山川氏等は禁錮の中に入らず、越後へ行つて其處ても漢學をやる事になつた、それから東京へ來たが、前原、奥平等の長州人が官を罷めて國へ歸つてから、當時土州藩の學校に招かれて鍛冶橋傍の屋敷に教授に行つて居た沼間守一氏に依る、兎角する中開拓使て男女の有爲の人物を選び外國に留學させる事となつたのて、健次郎氏は妹の捨松子と並に其選に中つて遂に其處から洋行した、それは明治二三年頃の事だが斯う言ふ事を記憶する。洋行するといふので俄に洋服を新調させたが立つといふ間際に間に合はぬ、て私を洋服屋へ催促にやつたが、洋服屋は何でも神田の明神下邊てあつた、丁度其頃人力車が初めて出來た時分、歩いては遲くなるといふのでそれに乘つて馳け付ける、處が其頃の人力車は至つて御粗末なもの、條撥も何もありはせぬから反動が強い、刀を力に車臺に腰掛けて居たら其爲鍔て目の上を礑が打つて痛い思をした。それても如何にか間に合つて、碌々着樣も知らない者が善い加減に洋服を着て立たれた事を記憶する。米國へ行つてエール大學へ入られたが、行つてる中に開拓使が廢されて費用が出なくなり非常に困つた、幸に彼地の或老夫人が憐れむて學資を給して勉强させて吳れる、斯くして又一年か半年居り、到頭卒業して秀才として日本に歸つて來、それから帝大に入つて繼續して今日に及んて居るもの、それ以後の事は何人も知つて居るから私から語る必要はあるまい。

仲々小供の時から負けぬ氣の人てした。酒は好きて大に飲む、手酌てグビリ〱遣る。が品行の方正は言ふばかりない、恐らくは氏に丈自分の妻君以外の婦人に關係した事がないとの保證が付かう。面白い話があるよ、第一銀行に居る日下義雄、彼れが井上さんの命て洋行した時に、山川、赤羽、僕などの連中て見送りに行き、戻りに赤羽や僕等が窃に惡い相談をして、品川て一つ遊ばうと定めた。て何も知らぬ山川氏を品川へ連れて行き、先づ酒を飲み、飯を喰ふ、それから僕等が銘々の室に分れて姿を隱すと、女等が困つてやつて來る、如何したといふと彼のお客が大立腹て歸るといふ、それは困つた何とか旨く說けといつてやつたが、又來て到頭戻つて仕舞つたといふ。其樣子を聞くと斯

うだ、女を捉まへて汝等は何故斯樣な賤業をするか、正しい婦人のすべき事でないといふ、でも外に食ふ道がないからと答へると、では女中奉公でもすればよいでないかと說法を始め諄々と其不心得を戒めて去られたと、僕等は笑つて歸つたが、山川氏の憤怒は非常なもので、直に翌朝絕交狀を赤羽四郎宛に送つて來た、友人を惡所に誘ふ不都合極る奴だ、以來は固く絕交すると、それが早や洋行歸の後、明治七年の事なのだから、それ以後の山川氏は其境遇上からいつても益々操行の嚴正を加へたに相違ないと信ずる。

畫界近事

木下杢太郎

昨年秋、文部省展覽會開催後に、私は讀賣の紙上を借りて、その秋の收穫を概評した。今、更に今年四五月にわたつて開かれた各大小の展覽會について概評を試みやうと思ふのである。その後大して新しい書物も讀まず、各方面の變つた說を聞く機會をも多く持たなかつたから、別段自ら特に開發したといふ處を意識せぬので、實は控えてゐたのである。のみならず今は身の周圍も少しく忙しいので、特に此稿に關しては、他人の筆を煩はして私の話を筆記して貰ふ事になつた。時間の缺乏と、自ら筆を取らなかつた譯とに對しては、深く讀者の諒を乞はねばならない。

一、概目

今、四五兩月に跨つて開かれた大凡の展覽會の名を擧げて見ると、私の興味を惹いたものだけでも

一、博物館の德川時代浮世繪展覽
二、无聲會
三、肉筆と版畫展覽會
四、八官町の吾樂殿にあつた美術新報社の催しにかかる小品展覽會
五、山脇信德氏作品展覽會
六、吾樂と交詢社と二ヶ所で開かれた三宅克巳氏の展覽會

七、東京勸業博覽會の一部に展覽された日本畫と西洋畫

八、大平洋畫會

九、藏原惟廓氏の歸朝土産とかいふものと、白馬會同人の作品

十、本鄕のパラダイスに開かれたアブサント同人の小品展覽會

この位あつた。日本畫の方では二葉會等もあつたが見ない。さして注意もしなかつた。此の外に、面白かつたのは神田の靑柳であつた古書畫展覽會、それから南葵文庫の道中畫展覽會等の催しであつた。尤も此種のものは直接創作の部に屬しないが、現今のある運動には直接間接に深い影響があると思ふ。であるから眞に繪畫に注意を拂はんとする批評家は、一通りは之等を系統的に批評し紹介せねばならぬ筈であるが、憾むらくは、日本の批評界といふものは未だそれ程の餘裕を持たぬ。私のやうな門外漢が、かういふお話をするやうになるのも止むを得ないわけなのである。

さて、右の檢目以外に、それと前後して現はれたのは藝術殊に繪畫に關する批評や畫論であるが、殊の外めづらしいもの奇拔なものは見つからなかつた。中に比較的面白く論じてあつたのは、西洋畫に於ける正宗得三郎君、齋藤與里君等の、讀賣或は早稻田文學に寄せた各篇である。その他美術新報社にも此種のものは見えたが、注目すべき程のものではなかつた。

次に主なる四月中の現象は、青木繁君の死である。四月の二十二日に、新宿の碌山館に開かれた、荻原守衛氏の一周忌である。三宅氏の歸朝展覽會もその一つであつた。

二、私の態度

批評に先立つて極く簡單に、私の態度に就いて話させて貰ふ。

態度といつて別に去年より進歩したわけでもないが、元來私は、出來る事ならば、美術上の現象を時代とか文明とかいふものから見たいといふ側のものであるが、これは非常な時間と努力とを要する事で、とても目下の眼目とする事は出來ぬ。たゞ個々の畫に對する印象的批評といふやうな事は、その折々の新聞紙の批評家が進歩して居るばかりでなく、專門の畫家連中に任せて差支へない事である。例へば、齋藤君の評論等にも、此の問題に觸れて居る所が見えるが、兎に角現今の畫界には特に論ずべき問題が多いやうである。社會對藝術家の問題とか、日本人が已に完成した、西洋の藝術に對する態度とかいふやうな問題に就いても、深い研究をして見たいのであるが、今はたゞその人を待つより外はないやうな有樣にある。

三、博物館の浮世書展覽會

これは特に私が論じやうとする洋畫界の運動に關してゐるものではなく、私自身の興味に從つて言ふのであるが、德川の時代は過ぎて、今はそれをある完全なものとして回顧する事が出來る時であるから、その

生活殊に市民の生活、政治、偶然の天變地異、精神的物質的の文明即ち衣服、裝飾等の流行、各種の文字、音曲等は皆當代の繪畫に關せしめて見る事が出來る。片々たる浮世繪もその一つ〳〵が已に背景としてある漠然たる時代といふものを背負ふて居る。浮世繪はそれを通じて時代を見るといふ見方からその味を得る事が出來るのである。一派の人々に言はせると、浮世繪といふものは、日本人が初めて自覺して作つた藝術である。例へば天平の藝術、明兆の畫、雪舟の畫等と昔から隨分いゝ畫もあるが、之等は直接間接に遠くは印度、近くは支那朝鮮の影響を受けてゐる。然るに浮世繪に至つては、その性質が全く日本的のものであつて、繪としても裝飾としても、さう大したものではない。たゞそれが實によく德川時代といふものを綺麗的に表象して居るところから興味を惹くのである。それを徒らに過重するのは、言ふまでもなく、近頃の泰西の趣味に影響されたのであらうと思ふ。

博物館の浮世繪に就ては、世間ではあまり批評をせずたゞ讀賣新聞に藤掛靜也氏が何か書いて居られたやうであるが、それも大體の說明に過ぎなかつた。然し、浮世繪に關する新しい流行が近頃になつて起つて來たのは事實である。その態度は非常に慊らぬが、宮武外骨といふやうな研究家もある。唯、萬安、靑柳あたりに折々開かれる古書畫や浮世繪の展覽會等も盛大ではあるが、つまりは商賣の爲でなければ、老人連の娛みに過ぎない。科學的研究の態度は更に見えないのである。餘り感服もして居らないが、西洋では、ユリウス、クウルト氏のやうな人があつて、已に歌麿に關する大きな本を書き、近頃は春信、寫樂等のモノグラフイイを書いてゐる。古くはフランスのエドモン、ド、ゴンクウル等が、比較的不便な地に居ながら敬服すべき態度を以て北齋や歌麿の傳記をかいた。その中には、常盤津文字大夫が兩國の京屋で名披露目の會を開いた時の引札の飜譯までものせてある。日本の浮世繪に就て、西洋人の事業は澤山にある。獨り浮世繪のみならず、更に古い時代の解釋し難い南宗畫のやうなものをさへ、研究し初めて居る。

先日、伯林博物館員のドクトル、クラアゼルといふ人が來て、折々談なども交へて見たが、時間や費用を惜まず、零細な小幅さへも、出來る丈け多く研究しやうとする態度は驚くの外はない。或は西洋人は日本人に先んじて完全な系統的な日本美術史を作るかもしれぬ。殊に今日、日本人の古美術に對する態度は、凡て骨董的寶物的である。深く個人の庫の中に藏して、一般國民をして鑑賞に與からしめない。

一般の日本古美術は元より、德川時代の事は近くもあるし統一して居るから、當時の浮世繪以外のクラシックな繪の宗派と共に、科學的に研究したら面白いに相違ないと思ふ。吾人は一近世繪畫史では滿足する事が出來ない。

四、无聲會

此會に關しては格別言ふ程の事もない。たゞ當時の各新聞紙に載つた批評の中に、二三變つたものがあるから、それに對する私の意見を述べて見やう。

眞朝報では、中にも石井柏亭氏の畫を賞めて、「淸新か潑溂か、新日本畫か、聖母の樹の下に對すれば、世の色を論ひ、光を爭ふ大家諸先生乃至靑年作家のいとあはれにも見ゆるかな。柏亭の足の到り著く日、歐洲の畫界は從來の日本畫の何物が與へしよりも深き印象と强き感動とに打たれん事、蓋、疑ふよしもなし」と、奇拔な賞め方をして居る。

從來の日本畫が與へたよりも、より以上の好果を與へたとなると、結局石井氏が古往今來日本第一の畫家といふ事なのであらう。他人の賞贊にケチをつけるのはよくあるまいが、希くはも少し日本畫に就いて、深い研究をしてもらいたい。石井氏は私の友人である。私は此の人の畫に淸新を發見するものには相違ないが、新しい日本畫は唯此道一つから出やうとは思はない。從來ある日本畫でも種々な性質を具へてゐる。支那から渡つた芥子園畫傳的の骨法用筆もあれば、日本固有の諸大家が新しく發見した手法もある。そして剛柔正奇等の氣性によつて、その畫もさまざまになつてゐる。中にも骨法墨法は、昔の日本畫が今に遺して吳れた貴重な寶であつて、古いものよりも新しいものを喜ぶ吾人でさへも、之等の價値を否定する事は出來ない。加之、これ等が大なる獨創力ある天才によつて、今の世に於て新しい意味を持つて來る事と信ずる。新日本畫の存亡に關しては私にも意見がある。日本畫の亡失といふ事はどうしても考へられない。

元來、畫といふものは、純粹なる自然の模倣ではなくて、自然と作品との間に人間の氣性及能力を挿んでゐる。故に同時代に於ても。例へば十九世紀末のフランス藝術の如く、同じ女をかきながら、ドガアとルノアアル、マネ、ゴオガン皆別々に描き分けてある。名は忘れたが、近頃、人間の肖像を幾つか の小さい三角形の集まり で描き出してゐる人がある、その人は特殊の氣まぐれからではなくて、已に多數の模倣者をすら生じてゐるさうである。美術の樂享はこれ一の自己投入（ジッヒアインフィウレン）であつて、必しも作品から、原の自然を探し出さうとするのではない。であるから眼が三角形であつても、山が芋に似てゐやうとも、往々差つかへない事があるのである。此の考へを否定したならば、古い日本畫、南宗畫又はルネサンス以前の畫などは鑑賞する事か出來ない筈である。同じ意味で、今の油畫とても、最も眞にせまれる自然の再現だとは思はれない、矢張美術家の能力の發現である。寫眞ならいざ知らず畫といふものは今の世の所謂寫實といふものの凡てではない。同じ意味で、古い日本畫が、今の世にその存在を主張し得るが如く、今後新しい日本畫が生れないとはいへないのである。今後の日本畫は西洋畫と妥協すべきであるとはいはない。複寫ながらフランスのマテイスの畫等を見ると、今までとは全く違つた遣り方をしてゐる。

石井君は理解力を持つた畫家であるから、往々今の日本畫家のする（京都あたりにはこれが多い、近頃廣業氏もこれを始めて居るやうだが、）下手の水彩畫等を調和させようとしないで、何處までも種の純粹（ラッセンラインヘイト）を保存しやうといふ處を、氏も亦持つて居られる、私もこれには勿論贊成である。たゞ石井氏の畫に現はれた個性が同時に藝術家の個性の凡てゞはな

い。從つて石井氏の畫を日本第一の日本畫とする事は出來ない。ばかりでなく、石井氏の氣がきいてゐるといふ描き方が往々にして、この畫を浮滑にしてゐる弊がある。

私は又、所謂筆力能扛鼎的の沈著なる畫の存在をも希望するものである。

素明、百穂、柳塢、香涯氏等の出品も見せては貰つたが、餘裕を缺くので、止むなく評を省く。かゝる批評に對して一棒を呈するが主であつたからである。

五　新進作家小品展覧會

美術新報社で發起して、八官町の吾樂で催した。面白い企で、殊に新風の建築と調和した。

此の會に關する世間の批評は大抵一致して居る。讀賣の黒田鵬心氏は、殊に山下新太郎氏の諸作、山脇信德氏の「午前」「街路」、中村氏の「ヒヤシンス」柳氏の「少女」等を賞めてゐた。國民では千山萬水樓主人が紹介して、山本氏、富本氏の抱負を賛してゐた。

之等は孰れも片々たる紹介に過ぎぬから、格別言ふ程の事もなく、御尤と申すばかりである。

小さい作品に於て、文部省あたりの大作等に於けるよりも、個人の氣質、その時の感興等が明かに出るのは面白い。私の記憶するところ丈けでも、何といつても、山下新太郎氏が一番うまくもあり、しつかりもしてゐる。殊に「セゴヴヰアの市場」といふ繪は、素人の言ひ草だが、人物が生きてゐる。その他「セーヌの河畔」、「羅馬」「リユクサンブルゲンの公園」「パリの雪」等は皆面白く、一々異つた手管を味はせる。之に比べると、山脇氏の「午前」「街路」等は藝が無さ過ぎた。色と筆觸、畫の表面等の趣が一様なのは遺憾である。殊に「街路」等は、油畫具でかいた昔の名所畫といつたやうなものである。

小形駒太郎氏は例によつて河岸の畫「雨後の河口」を出してゐる、小さい丈けに器用にまとまつては居たが、特別の氣稟、個人性といふやうなものが出足りなかつた。調子は眞珠、灰紫、薔薇紅といふやうな軟かい彩配調であつたやうに覺えてゐる。

正宗得三郎氏のもあつた。が餘り感心しなかつた。

例へば椿の畫等は無理におしつけられた畫具が、雜然として窮屈に押し合つて居た。

國がせまいから、凡ての新しい現象が直ぐ一様に普通化せられて仕舞ふのは不愉快である。新しく輸入した手法色調乃至は或人の多少創意にかゝる、思ひ付きといふ風のものが直ぐに他の人のならふところとなるのは困る。此の小品展覧でも、多少上手下手はあるが、皆似通つて居て、全體を只三四の人が書いたかと思はれるやうだ。例へば五島といふ人の「庭の雪」等は、已に何處かで見たやうな色や筆觸、全體の感であつた。大給氏の「花に雪に花」「紅葉」といふのは En Miniature の黒田清輝氏であつた。

富本憲吉氏の「花」、南薫造氏の「羊群」といふ水彩畫は今でも思ひ出す

やうな鮮美を有つて居た。そして此等新歸朝者の間には何處か情調に共通な處があるやうである。

リイチ氏のエッチングは、うまいやうであるが面白くなかつた。

繰返していふが、山下新太郎氏の「セコヴヰアの市場」は近頃見た日本の油畫の中では最も氣持のいゝものゝ一つであつた。畫中の人物の間にある戯曲的の統一がある爲めにいゝのではない。風物が私達に珍らしい爲めではない。圖中の自然の如何は單にこの爲めに興味のあるものではない。それとそれを現はす技巧と、繪の約束に對する理解のあるといふのが重要事である。その他の何處かに氣のきいた處でもあれば、畫の味は更に増すのである。

六　山脇信徳氏作品展覽會

四月の下旬から神田の琅玕洞で開かれた。作品の數は二三十もあつたその作畫の時期も一定して居ないから、畫風も從つてさまぐ\である。私は氏の作品の間から進歩といふものを認めるよりも、却つて變化を認めた。

就中比較的最近の畫としては「お茶の水」「橋」「入日」等があつた。が、全體として見るとそれは作家の感激が强烈であつたらうといふ事を思はせるばかりで、恰度怒つた啞者を見るやうに、如何にも表現の技巧に乏しい。私は元より感激といふものを、高く評價するものではあるけれども、この感激を自覺し、巧みなる手練を以て、よく理解されたる繪畫の約束の下に發表されたならば、更にいゝ事であらうと思ふ。繪畫といふものは、血壓計の曲線といふやうなものではなく、一つの技術であると思ふからである。例へば外光の爲めにキラ/\光る橋の下の水面、橋梁及び家屋等の强烈なる印象によつて、畫家の感情が激動するかもしれないが、その時、直ちにパレットの色を秩序もなく雜にとつて、心臓の亢奮を筋肉運動として畫面に現はすならば、その畫は技術でなくてスフイグモグラフが描き出す表である。畫といふものはこれ以上だ。感激と同時に、一方には靜かな理解力を發つて貫いたいものである。

兎に角、どの畫も/\ヴアミリオンとかコバルトとかオオクルとかの、一樣な色彩配調（アレンヂメント）では、食傷するのである。

私には却つて、比較的古い頃の「新橋」等の作品の方が面白い。その他「寶店」「ウオータア、シユート」等は時代も古からうけれど、要するに、唯形へ色をはめこんだやうなつまらない繪である。

七　三宅氏滯歐作品展覽會

五月の上旬に、交詢社及び吾樂で開催した。

私は嘗て、氏が洋行される時に、讀賣新聞紙上で、送別の辭を述べたのであるから、今度は是非共この土産をよく享樂し、之を世間に傳へたいと思つて居た。

萬朝報の記者ばかりを引合に出すやうであるが、彼は餘りに喜悅して居ない。「變つた變つた」と噂された三宅氏の繪畫が、餘りうれしく變つて居なかつた」事を失望して居た。その「變つた變つた」といふ事が恰度、圓太郎馬車が鐵道馬車に變つたやうに、色はバアントシンナア、オ

ナクルヴヨンの一手販賣である事と、並びに構圖の非日本人的であるといふ事を不快におもつて居たやうである。之に反して讀賣の黒田鵬心氏は「變つた變つたといふ評判をきいたが、成る程一目見ると變つたやうである」が、然し實はそれ程變つて居るのではなくて、構圖描法は矢張三宅式だけれども、「新しいもの」とならなかつたところに却つて、三宅氏の價値があると斷定してゐる。黒田氏の評は餘りに簡單で、兩極の何れに賛成していゝか分らないが、新しいものとならぬ所に價値があるといふのも聞えない話である。

成程、氣稟とか感情とかは變るまいが、技巧といふものは、年齡見聞と共に變つて差支ない、又變るべき筈である。變らないでいゝものなら、一枚の畫で澤山だ。黒田氏の意見も、三宅氏の氣稟及感情が、變色蜥蜴（カメレヲン）のやうな浮薄なる藝術家のやうに變らなかつたのを稱賛したのであらう。

萬朝報記者の方は、その口調によつて察すると、變つた事は認めたが、その變り方が圓太郎と馬車鐵位で電車までは行かぬといふ謎かもしれない。之を非常に進んだ人から見ると、變化も變化に、進歩も進歩に見えない。この記者がどの位の鑑賞力を有つて居るか、餘りに文章が短かくもあるし、只五六の好む作品から歸納してゞは、見識はわかりかねるのである。

私は三宅氏から繪畫を習つて、氏の癖や何かをもよく知つて居るから、今度の作品を見ても、自分がやつて來たものゝやうに愉快にも思ひ、又不滿にも感ずる點がある。愉快に思ふ點は槪して、個人的にした經歷が、形になつて現はれた處に存する。一作品の後には、恰度シエクスピアの一字一句の後に劇的行爲とその情調が隱れてゐるやうに、戀しい懷かしい旅人としての情緒が潜んでゐるわけである。併しながら、これは主觀的の事で、客觀的には、個々の作品の間にある一々の異つた感情を見る事が出來ない。これが、私の所謂個人的といふわけであつて、第三者としてはも少し多樣な技巧及情緒を味ひたいものである。此の多くの繪畫は例へば、日記のやうなものであつて、餘りに槪念的に事實を語るの餘り、その時の感情、境遇（シチユエシヨン）等の委曲を語る事が少いからである。

八　東京勸業博覽會展覽會

個々の西洋畫については言ふ事がない。言ふ程の作品はなかつた。

大谷といふ人の橋の畫が、うまくはなかつたが、特殊の心持を現はしてゐた事を今も記憶してゐる。

田中松太郎氏の肖像が、和田英作氏の筆によつて描かれてあつた。私は田中氏とは知合である。自分が若し畫家であつたなら、肖像畫をかいて見たいと思つた事があるから、田中氏の特性が如何に畫かれた時に最も效果があるかをも考へておいた。

こゝで見た肖像畫は單に、田中氏に似た顏であるといふに過ぎない。もとより一寸した畫であるから、是によつて直ちに鼎の輕重を問ふに足るものではないけれども、望むらくは片鱗もよく雲間の龍を想像するに足るといふ事を信じさせてもらいたい。

序に横川大觀氏の「水國の秋」といふ畫を評する。

大觀氏は「[illegible]燈水の卷」以來、世の興味を集めてゐる畫家である。私は氏が何處かにある獨創力を有つてゐる事を信じてゐる。この用筆用墨の如きには非難もあるが、藝術家の有つべきあるものを有つてゐる事は確かである。此畫の如きは氏が才人である事をよく現はしてゐるものである。

闡如來氏は、讀賣新聞紙上に於て、此畫の主眼は、後景の水樓に於ける歡讌と、河上の貧しき舟人との對照にあるとしたが、私はさう思はない。あれは支那の昔からの詩、歡樂及哀愁をうたへる多くの詩を吾々が知つてゐて、支那の狹斜街を想像してゐるが、此畫はさういふ情調をサジエストせしめ、その聯想から見せるものであると想ふ。

鏑木淸方氏の「お七吉三郎」があつた。構圖に藝術的理解力のあつた事は認める。線、色孰れも非常に上手だ。たゞもつと別の所が欲しかつた。

國定、三代豐國等はいよ〳〵巧みになつたけれども、却つて單純な初代豐國に面白味が餘計にあるといふ事は、主に時代が古かつたといふ事以外に、意味のあるものであつたらう。

九　太平洋畫會

此の會については五月二十一日、二十二日の朝日新聞記者の所論がやゝ正鵠を得て居た。私はこれに餘計な附加へをする事をさけやう。同月九日、十一日の國民新聞に出た、滿谷國四郎氏の意見は、私をして首肯せしむるに足りるものであつた。殊に後者の、年寄連が概ね現狀維持に終り年少者は年寄連中から啓發される處が少くて、却つて沒りに新らしがつて居るといふコントラストを認めるといふのは、面白い考へである。それから又、吉田博氏の畫を評して、種々の境遇を掴んでゐる割合に色彩の乏しいのを憾んでゐるやうであるが、これは尤もである、更に不折氏の婦人の裸體畫を評して、「肉もよく出來てゐるし、第一スラリとした氣持のいゝ作だ」といつて居る。

私は、少しくここに裸體畫の藝術上の價値について、述べたい。

成る程スラリとして居るからいゝといふのは、尤もである。裸體畫といふものは、別に之が模範的の體格だといふ事を示す科學的の標準でもない、さりとて、俗の考へるやうに色情を挑發するものでもない。作品そのものについて見れば、今の吾々が裸體の美を如何に見るかといふ事を、畫家がよく表はしてくれゝばいゝのである。畫家としては、美しいと思つた裸體を上手に描き出せばいゝのである。併しながら、文明史的の興味は、その時代が裸體の美をどういふ風に見たかといふ事と、それを發表する技巧と當時の文明とを關係させて見るから、面白くなるのである。

此畫會に關する世評には、隨分奇拔なものもあつたが省く。たゞ萬朝報の記者が中川八郎氏を賞めそやした事實、それから小杉未醒氏の「白木蓮」が、一般に好評を博してゐた事實、この二つは私の腑に落ちない。

十　歐洲繪畫展覽會アプサント同人展覽會

此の二つは批評を書きたい。

元より、自分はレンブラントやムルリオ等の複寫（コピイ）に對して、批評しやうとは思はない。又之等の畫の輸入が日本の社會に大した影響のある事とも思はない。今記憶してゐるのでは、藤島武二氏のパステルの女の首が、氣持よく描けてゐた。

アブサント同人の方は、嚴格の意味で批評するに足りるものは一つもなかつた。皆なりつゝある人々である。あれを以て公衆の嚴格なる鑑賞に訴へたわけでもあるまい。私達はたゞ後の爲めに、此等の作品を記憶しておけばいゝ。

一言だけ言つておきたいのは、非常に、ドラフトマンシップを忽諸に附して、色彩及構圖の矜奇を貴んでゐるが、之は餘りいゝ事だとは思はない。青木繁氏の遺作が一二枚交つてゐた。

十一　畫論の概評

畫論の方面では、別段注意するに足る程のものもなかつた。やゝ面白く感じたのは、五月十一日の讀賣新聞に出た、齋藤君の論文である。此の考へでは、今の日本に於ける生活と自分の理想の藝術との間に非常な矛盾があつて、常にそれより苦しめられて居るやうに見える。結果として、眞面目な藝術のとる道に解決が二つある。一は全く世間からはなれて、自分一人で自己の藝術を齋き祀る事、又は自殺である。二は世の中にまき込まれて仕舞ふグヅ〳〵なやり方である。實際齋藤君の舉げた問題は今の藝術界・寧ろ今の日本の精神文明に於ける重要問題であらう。

思ふに、現代の藝術家が不安は、第一に藝術が非常な繼子扱ひを受けてゐる事である。これは日本の社會生活が各個人の自由な生活が集まつて、全體の大きな調和をなすのでなくて、個人性といふものは寧ろ壓迫されて、河上肇氏の所謂一様に方面を定められた個人が、國家といふ大きな責荷を背負ふて居るからであらう。

戯曲に於て、社會全體に對する個人の謀反が、殆ど凡ての作品の主題である様に、藝術といふものは個人の自由といふものからはなれては、生氣を失ふものである。

兎に角、今は藝術家が單に見た目に綺麗だからといふのでそれを描く以上に、綺麗なものば何故に描かれねばならぬか、或は綺麗なものを何故描いてはならぬかといふ問題に苦しめられて居る。元來、チエンが言つたやうに、ドイツ人は考へ性だから、ペンを持つにはいゝが、畫筆を握るには適しないといつたやうに、藝術家といふものは、寧ろ無邪氣に、物などは考へずに綺麗な事を描いてゐればいゝのだけれど、日本の今はこれを許さないから、いゝ批評家のない以上、藝術家自身が考へなければならぬ。これ程、みじめな社會を了解しながら、その解決を握りつぶしにして身を退いて了ふのは餘りに時代に對して冷淡の憾があるのである。然し藝術家に向つて社會の改善を求むるのは極めて無理難題であると齋藤君もいつて居る。純藝術の批評から社會乃至政治的批評に移らんとする傾向が窺ふ事が出來る。

こういふ傾向は喜ぶべき事とも悲しむべき事とも言はれない。必然

がさうしたのである。若し畫家の心にかういふ問題の起つた時には、望むらくは、畫家が之を哲學的乃至社會的の問題にせず、畫の問題として丈けに止めて貰いたい。さすればその畫が時代と密接な關係を持つやうになるのであらう。

近頃の流行で、畫に思想を入れてはならぬといふ說が專ら行はれるがそれが必しも千古不變の眞理だとは思はぬ。ドガやモネの畫を見たすぐ後では、ベックリンやクリンゲルの畫は非常に不快に思ふが、又後者の畫に自己を投入すれば、その畫が又意味のある、力のあるものに思はれて來る。一頃印象畫の盛んな時分にはストライキを描いた爲めに、その畫がいゝのではなくて、さういふ情景を描く色彩用筆がいゝからいゝのだといつた。必しもさうでないかもしれない。時代は推移して行く、繪畫鑑賞の標準も亦、時代と共に推移せねばならぬ。（完）

▲德富蘇峯氏の「大久保利通論」は、氏の事を以て急に朝鮮に赴かれし爲、止むなく此號に收め得ざりしを遺憾とす、何れ氏の都合を待ち成るべく近く讀者の期待に副はしめむ事を欲す。

▲黑頭巾氏も亦多故、今月は遂に寄稿せられざりしを深く遺憾とす、次號には「島の人」を完結せしむる以外に、更に新しき題にて奇勁の筆を振はるべき約あり。

六月革新號出來

婦女界

◎自覺せよ若き女！……内田魯庵

▲不健全なる孝道を排す……慶應義塾大學教授 向井軍治
▲如何なる音樂が家庭に適するか……理學士 田邊尚雄
▲苦闘廿餘年に亘る婦人問題……女子學院長 矢島揖子
▲共公事業に活動する西洋の娘……バチラーオブアーツ 河井道子

◎西洋の家庭は家族主義より成る……文學博士 姉崎正治

◎最も恐るべき子供の悪癖……高島平三郎

閨秀小説「妹」……國木田治子

▲家庭に於ける佛光寺裏方
▲情史に見えたる貞婦 大倉桃郎

▲夏の室内裝飾
▲洋服の扱ひ方
▲故郷の情味
▲海外婦人界
▲文藝其月々
▲六月の園藝
▲家庭の實驗
▲ミシン裁縫の新話
▲夏季の婦人用品

懸賞募集
親に對する娘の希望……一等＝十圓
其他文藝の募集あり詳細本誌に掲載

◎娘に對する親の希望

▲家庭の情味を怠るな……鎌田榮吉
▲人らしき人となれ……宮田脩
▲外貌裝飾に氣をつけよ……井上哲次郎
▲園藝に趣味を有たせたい……大山捨松子
▲實地の稽古が必要……兵頭榮子
▲借金の恐しさを知れ……横井時敬
▲當世一流の人に愚鈍の子……尾崎行雄
▲鍛錬と修養とを怠るな……[illegible]納子
▲實際の稽古は卒業後……岡[illegible]ゆう子
▲先方の家族と同化せよ……森村市左衛門
▲親には逆らふな……中川謙二郎
▲學問と從順とは矛盾せぬ……竹越與三郎

二頁大彩色石版 庭の花 井川洗厓
極彩色石版 美人草 大下藤次郎
一冊十五錢 六冊九十錢 十二冊一圓七十五錢

東京神田區表神保町 同文館 振替口座東京一三五

(中付の一)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

英語辭書界之雙璧

二男爵十博士共編

模範英和辭典

内容見本進呈送料貳錢

特色

最新英語辭書の長所を採り組織新新なり
純日本語を以て譯し漢字には假名を附す
最新の語辭を含有し專門學術語を網羅す
發音記號は正確にして一新機軸を出せり
前置詞用法に注意し熟語慣用句の數驗し
多樣の意義ある語には成べく用例を示す
外國地名人名一覽及類語對語表は新工夫

五萬部限

特價 壹圓五十錢 郵稅八錢

良辭書を選べ

英學界の新記錄!!!

井上十吉先生編

第四版發行

新譯和英辭典

内外人の好伴侶たる最新式實用和英辭典にして語數の多きと譯例の豐富なるとは殆ど他に比類匹儔なし特に著者が外國語に精通せると何人も其右に出る者なく隨て記述解譯の精確なる實に天下一品たり

定價 金一圓六十錢 郵稅金八錢

發行所 東京神田 三省堂書店 振替口座一五九七

(とけの二)

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

死の方へ

田山花袋

一

大きな病院の暗い六疊の間にかれは横になつて居た。今朝、車で辛うじてこの病院の診察室に遣つて來たが、診察中、烈しい熱と咳との爲めに半ば意識を失つて了つて、擔架に載せられぬばかりにして、漸くこの室につれられて來た。

其時丈の高い看護婦が、取敢へず毛布を敷いて、氷を額と胸とに當てゝ吳れた。午過には灰色の壁に殘暑の日が佗しくさして、向ふの廊下を步いて行く草履の音が夥しくその神經を刺戟した。

ふと入つて來た弟の貞助の顏が見えた。

「何だこんな處に居るのか」

貞助はかう言つて、慌たゞしく病人の寢て居る前に來て坐つた。鬚の生えた、黄くどす黑い病人の顏には喜悅の色が上つた。

『診察して貰つてる中に……倒れて了つたものだから――』病人はかう一伍十什を話さうとしたが、苦しさうに出る咳嗽は、絕えずその言葉を途切れさせた。

貞助は點頭いて聞いて居たが、手で制して、『家から誰も來ない？』

『うむ……まだ來ない……何をして居るんだか……本當に氣が利かない』

咳嗽が續いて出た。

貞助の勤めて居る處には、一緒に病人を診察につれて來た男が先程電話を懸けて呉れた。『何うもよくない――』かう其の電話は言つて切れた。

弟は默つて兄の顏を見詰めた。年に比べて白いのが多い髮には艶がなく、黄がゝつた皮膚には肉の衰へが歷々と見えた。眼は凹んで光がなかつた。

病人は二三日前に朝鮮に行く人を送つて、新橋の停車場に行つた。何とも言ひやうのない惡寒を總身に覺えたのは其歸りてある。て、山の手の家に歸ると、夕飯も食はずに、有合せの發汗劑を飮んで、其儘床を座敷に布かせた。翌日の午後に診察に來た醫師は、胸をはだけて、彼方此方を叩いて、袒をぬがせて背中を見て、最後に驗溫器の熱度を見たが、『ふむ』と言つて、『これは熱が中々深く來てる。いつ

もの風邪ぢやない。肋膜になるかも知れない。御大事になさい」と言つて歸つて行つた。弟が昨日見舞に行つた時には、熱が三十九度三分あつた。『明日は病院に行つて見て貰はう！』かう言つて居た。

『此處では何と言つたえ？』

貞助がかう訊くと、

『まだ、よくは訊かないが、矢張肋膜らしいことを言つて居た。』かう言つて少しの間途切れて、『此處に入る積りでも何でもなかつたんだけれど……倒れて了つたもんだから、仕方がない。……こんな處に入つて居る金なんかありやしないんだからな』

『まあ仕方がないサ』

貞助は兄の苦しい生活を知つて居た。官吏をやめてからは、兄は其月々の生活に追はれて居た。西洋人に日本語を敎へなどして辛うじて其月々を送つて來た。

『一體いくらかゝるんだ』

こんなことを思ひながら、弟は兄の枕元に置いてある入院費用を刷つた定價表を見て居た。

其處に看護婦が胸の氷を取り替へに入つて來た。やがて緣先の小さい流元に行つて、一生懸命に錐で氷塊を細かく碎き始めた。その後姿に黄い夕日が靜かにさした。中庭には、芝の綺麗に生えた丘があつて、其處に据えてある榻には、半癒えた患者が白い衣を着た若い看護婦と並んで腰をかけて居た。

中庭に面した廊下には、梧桐の葉を透して、日影が處々に落ちた。白金巾で日蔽ひをしてあるところ

もあれば、日がまともにさし込んで居るところもある。突當りは厠で、手を洗ふ水の音がをりをり聞えた。

『便所が近いね、……いやな間だねえ。今少し好い處はあいて居ないのかなあ』貞助は廊下だの緣側だのを歩いて見て來てから言つた。

貞助のまだ居る中に、今年十六になる男の兒が來て、それから暫く經つて、細君のお冬が蒲團や何かを車で運んで來た。

『まア、本當に、こんなことになつて、何うしたら好いんでせうねえ』

お冬は思案に餘つたといふ風で、泣きさうな聲で言つた。

男の兒は年に比べて丈が高かつた。洗ひざらしの久留米絣の單衣を着て、小倉の袴をたくしあげて穿いて居た。先妻の子で、今の細君には子供がなかつた。

お冬は運んで來た蒲團を二枚重ねて其上に眞白な敷布を敷いた。棒立に立つて居る男の兒に、『そんなにぼんやりして立つて居る人がありますか。本當に氣がきかない』かう言つて病人を床の上に移した。

お冬の持つて來た包の中には、茶道具だの、菓子だの、水蜜桃だのが入れられてあつた。細君は男の兒にナイフを出させて、水蜜桃を一つ剝いて、これを病人と貞助とに勸めた。病人はそれを旨さうにして食つた。

『看護婦は何うするんです。頼むんですか』

貞助がかう訊くと、

「看護婦なんぞ要るものですか。私が看病するつもりで來たんですから……。そして、そんなに長く此處に置くといふ譯ぢやないんですから……。とても、そんなこと出來やしないんですもの」

「早く治れば好いけれど……」

「なあに、四五日經てば治る。本當にそんなにいつまでもこんな處に入つて居られやせん」病人も傍からこんなことを言つた。

「宅は何うしてあるんです?」

暫してから貞助が訊くと、「宅ですか。宅には丁度、私が來やうと思つて居た處に、里の妹が來ましたから、よく頼んで參りました。二三日留守をして貰ふことにして置きましたから大丈夫です」

山の手の林を背後にした四間の古い家――それが此時誰の眼にも見えた。椿、南天、檜などが庭に繁つて、半ば傾き懸けた古い門には、同じく西風に曝されて古くなつた表札と郵便箱とがかけてある。裏の雨戸の際の壁は破れて、踏むとでこぼこする疊の縁は處々ほぐれて居た。四疊半の書齋には、古い書籍が本箱に入れ切れずに、壁に添つて幾通りも積かさねられてあつた。長押には古い額がかけてあつた。

男の兒は其處で生れて其處で成長くなつた。五歳位の時には、よく前の田畝の中に入つて、泥いぢりをして、白髪のお婆さんに叱られた。田畝の向ふの小學校に入るやうになつてからは、友達と蜻蛉を釣りに行つたり、寺の竹籔に竹の子を盗みに行つたりした。父親が毎日役所に出かけなくなつてからは、

家庭は火の消えたやうになつて了つて、書齋に行つて見ると、父親はいつも默つて机に向つて、古い本を繙いて居た。

男の兒はそれでも中學校には入れて貰つた。帽子を買ふ、洋服を買ふ、敎科書を買ふ、それに限らず、何か物を買はうとする時には、父親の眉はいつも曇つた。でも、父親は默つてそれを何うにかして呉れた。さういふ時には、母親は屹度こんなことを言つた。「そんなに買つて遣つたッて、何うなることだかわかりもしないに……」

父親は滅多に小言を言つたことはなかつた。でも、何うかすると、しみじみした調子で、「お前、そんなことで何うする。お前が立派になつて呉れなくては仕方がないぢやないか。お前は一人子だぞ。父さんの一人子だぞ」こんなことを言つて聞かせる時には、父親の眼にはいつも涙が見えた。自分の本當の母親は、自分を產むとすぐ死んで了つて、其墓が青山にあるといふことを知つたのは十一二の頃であつた。そのお爺さんとお婆さんの家は千駄ヶ谷にあつて、行くとよくチヤホヤして呉れた。

其日、男の兒は貞助と一緒に病院を出た。もう六時を過ぎて居た。別れてから、伯父さんの洋服姿の水道橋の電車の停留場の中に入つて行くのを見えなくなるまで見てゐたが、やがて橋を渡つて外濠の電車に乘つた。神樂坂を登る時には、もう明りがそろ〱點いて居た。おしろいをつけた若い女の白い顏も夕暮の色の中に際立つて見えた。

庭樹の繁みの中にぽつつり洋燈の灯が浮き出すやうに見えた。門から入口の格子を明けて入ると、「誰

れ？」といふお文叔母さんの聲が逸早く耳に入つた。「私」と言ふと、「あ、政ちやんかえ」と言つたが、別に出て來る氣勢もなかつた。お文叔母さんは娘の兒と一緒に夕飯を食つて居た。

「叔母さん、今度來る時に、座蒲團を二枚持つて來て下さいッて、母さんが言つてゐましたよ」

「あいよ」と叔母さんは元氣よく言つて、「何うだッてたえ？父さんは？」

「何うだッたか、僕にはよく解らないけど、同じなんだらう、乾度」

こんなことを言つて、叔母さんの出して呉れる夕飯をさびしく食つて、玄關に置いてある机の上の洋燈に灯を點けた。男の兒は壁に張つてある時間表を見て、明日の教科書を讀み出した。

二

枕元に近い柱に體溫表が懸けてあつて、熱を計る度毎に、看護婦は鉛筆でその高低を記入して行つた。時には障子をはめる位冷々する夜もあるが、晝は殘暑が猶烈しく、午過にさし込む日影は、白金巾の幕を蔽つても猶ほ堪へ難いほどであつた。二日目の朝、それと聞いて見舞に來た從弟は、昔からの仲好で、今では本所あたりの製氷會社に勤めて居るが、氷が澤山要ると聞いて、「それでは譯は無いから本社から毎日屆けて寄さう、その位のことは僕がしても好いから」と言つて歸つて行つたが、その夕方からアンペラ包の氷が五十斤づゝ配達されて來た。それは特に選ばれた綺麗な氷で、氷袋を取りかへる度毎、お冬がその碎片を丼に入れて出すと、病人は厚い情を喜ぶといふ風に、さも旨さうにしてそれをがりがりと嚙み碎いて食つた。

「綺麗ぢやないか、市中て買つたのには、こんなに埃の交つてゐない綺麗なのはありやしない」社の歸りにいつも寄つて行く貞助にかう言つて、それを手に取つて、すかして見せなどした。

病院の門を出て、少し阪を下りると、其處に水蜜桃や、梨や、林檎や、オレンジなどを並べて賣る菓物舗があつた。病人は好んで水蜜桃を食ふので、お冬はをりをり其處に出懸けて行つて買つて來てそれを枕元に並べて置いた。

「こんなに買つて來て好いのか。金があるのか」

病人は何うかすると、それを見て、こんなことを言つた。自分で驗温器を腋の下に挾んで見て、熱の容易に減かないのにじれて見たり、自己の恢復を試驗するために、わざと永い間床の上に起きて居て見たりした。

「困るなア、熱が引なくつて？」

「だツて、貴郎のやうに、さうあせツたツて仕方がないぢやありませんか。……病院に入つたからには、仕方がありませんから、落附いて、一刻も早く治つて下さらなけりや私も困りますよ」

「宅の方の先月の會計はして來たのか」

「……それ處ぢやなかつたんですよ。……だけど、そんなことはよう御座んすから、そんな心配せずに落附いて居る方が好いんですよ」

「てもなア……」

かう言つて病人は考へて、『そんなに長く入つて居られやしないからなア』

『心配なさるなよ』

お冬はいつもかう言つて強いて笑つて見せた。

醫師は午前と午後とに遣つて來た。院長は一週間の中に火曜と木曜とに日を定めて、跡は副院長がよく見廻つた。院長は名高い博士て、肥つた脂切つた立派な體格をしてゐる人であつた。二度目の診察の時に、『先生、一體私の病氣は何ういふんてせう。肋膜てせうか』病人は今日こそ病名を問糺して、病院に居ても家に歸つて保養しても同じものなら退院したいといふ意向を洩しかけると、院長は笑つて、『まア、そんなにあせらずに、今が大事なんてすから』かう言つて、傍を顧みて、藥を改へることを跟いて來た看護婦に命じた。今一人の看護婦は驗温器を取つて、熱の度數を表に書きつけた。

院長は別に氣にも留らないといふ風をして、跟いて來た醫員と看護婦とをつれてさつさと出て行つて了つた。

看護婦を一人つけなければ十分な手當が出來ないから。かう病院の方から申込んで來た。

『病氣もさう輕い方ぢやないんださうてすから』

其人はかう附加へて言つた。

若い看護婦がやがて遣つて來た。年は十九を超えて居なかつた。細そりした色の白い娘て、昨年信州

の松本から上京して女學校に入つたが、學資がつゞかないのでかういふ處に入ることになつたと話して聞かせた。持つて居る扇子に『吾人は須らく現代を超越せざるべからず』といふ樗牛の言葉を自筆で書いて置くといふやうな女であつた。それでも熱心によく世話をした。緣側の柱の處に小さい桶を置いて、緣の下のアンペラ包の中から、氷の塊を出して來ては、それを錐で細かく砕いた。その音が絶えず病人の神經を亢奮させた。

この看護婦はやがて如才のないお冬に馴染んで、僅かの給金で、不思議にも帶や衣服を澤山拵へてゐる朋輩の話や、此間の健康診斷に月經の閉止してゐる看護婦が二人あつた話や、其他いろいろなことを小聲で話して聞かせた。

『奥さん、本當に、かういふ病院で、看護婦をして居ると、怖いやうな氣がしますわ。十人の中、四人位まで傳染して肺病になつて了ふさうですからねえ』

『何うして、さうなんでせう。豫防を十分にしてゐるんでせうがねえ』

病人の靜かに寢て居る夜など、こんな話をすることなどもあつた。と、看護婦は、

『それがねえ、奥さん。普通なら、滅多にそんなことはないんでせうけど……』

『マア、厭だ!』と細君は思はず聲を立てゝ、『そんなことがあるのかねえ!』

『え、ありますとも』

『厭だねえ、まア。そんな命知らずがあるのかねえ』

若い看護婦は笑つて見せた。

病院とは賑かなものだとは來た晩にすぐ思つた。社から來る貞助はまた貞助で、『嫂さん、病院とは厭なもんだねえ。何だか變な氣がするよ。女が草履をぺたつかせて歩いて行く處など愛憎が盡きる』こんなことを言つたのを覺えて居る。それに夕方になると、看護婦達は、皆々衣裳を着改へて、白粉をつけて、支那人の患者などと一緒に町に出かけて行つた。

夜が更けると、それでも四邊は靜かになつて、草履を引摺る音も絶えて了ふ。電燈が明るく廣い廊下に照つて、ひねり忘れた水道の口から水の漏れる音が微かに聞える。咳嗽の音が一つ二つ、病室の電燈は大抵白布で蔽はれてぼんやりして居る。

四五日て歸るつもりで遣つ來た病院は容易に離れられなかつた。熱は依然として除れない。表に書いた高低は著しく、時には三十九度五分まて上つて居ることもあつた。病牀日誌には、徴候依然、咳嗽頻繁などゝいふ字が毎日書かれて、これがいつまでつゞくのか解らなかつた。

『何うせ、治らないなら、治らないて好い。もう明日は何うしても歸らう』かう言つては病人はいつも愼れた。

病院の費用――それが常に頭にあつた。弟が來て、それは何うにか出來ないことはないから、そんな心配はしなくつても好いと言つても駄目だつた。朝起きて、鷄卵と牛乳とを飮んで、少時すると、熱は

見る間に、ずん〳〵と昇つて行つて、顏は赤くなる、眼は血走つて來る、脈は高くなる。胸と頭との氷は忽に解けて了ふ。

て、散藥を飲ませると、今度は死んだやうになつて眠つて了ふ。額からは油汗が流れ、氷袋からは湯氣が上つた。外に投げ出した手をつかんで見ると、それが火のやうにあつくなつて居る。

「お冬、お冬！」

と名を呼ぶので、『何か用ですか』と顏を出すと、『何うしたら好いだらう』と眼を半閉ぢながら夢現のやうに言ふ。『何を』と聞くと、『もう明日が二十日だ』とかう言つてはすぐ眠つて行つて了ふ。時には、熱い手で妻の手を堅く握つて、『お前には苦勞をさせた！樂をさせやうさせやうと思ひながら、樂をさせることが出來なかつた』こんなことを言ふ時には、きまつて大きな涙がぽろ〳〵と頰を傳つて流れた。

さう言はれると、お冬はつく〳〵悲しかつた。一緒になつた時にも、熱した心で互に手を握つた。二人の前途には明るい光がないでもなかつた。役所でもかなりの古株であつた渠には、かうした否運に遭逢しやうとは思はれなかつた。お冬は若い時からの身の不運を思はない譯に行かなかつた。

お冬は此の辛い長い生活を頭に繰返して見た。

お冬に取つては、此の病人は少くとも好い夫であつた。欲には今少ししつかりした處があれば好いとは思ふが、しかしやさしい氣の置けない好い旦那であつた。お冬はこれまでに三度夫を持つた。田舍の

ある家には半年しか居なかつた。姑が難かしいのはまだ辛抱が出來たが、男の意氣地のないのに愛憎が盡きて、未練といふものは露ほどもなく出て來た。次ぎに嫁つたのは、蒼白い顔をした商家の若旦那で角帶をしめて前垂を懸けて居た。男振の好いのに、此方から望んで行つたが、さて行つて見ると、それは始終藥瓶を離さぬやうな人て、夜は大抵室を別にして寢た。其次に行つたのは、郵船會社の船乘て、金は澤山に取れるが、一月に三日が四日位しか居ないて、しかも歸つて來ると、大酒をして港々て逢ふ節操のない女の話などをして聞かせた。厭だ、厭だと思ひながら、それても此男には三年一緒に添つて居た。子供てもあつたら、一生其男を夫にして居たてあらうと今ても思ふ時があつた。

今の夫に嫁いて來たのも、不思議な緣てあつた。その隣に幼馴染の女友が嫁いて居た。神樂坂の通て、ふと摩れ違つて、『おや、お雪さん』『まあお冬さん!』と十二三年振で聲を懸けたのが始めて、お冬はよく其友達の家に遊びに出かけて行つた。其友達も矢張子供がなくつて、年に比べては、派手なつくりをして、模樣の白く大きく出た襟などをかけて居た。『お冬さん、隣の旦那の處に行く氣はなくつて? それは氣立のやさしい方よ』こんなことをお雪に言はれて、『もう私は亭主は眞平』などと手を振つて見せたが、それても、時には垣の隙から庭を歩いて居る『隣の旦那』を覗いて友達に笑はれたこともあつた。その時分今の夫はよく茶縞の袷羽織を着て居た。見合の時には、髮の縺れたのを三十分も懸つて解きつけて、けし炭色に笹の葉の細く白く出た襟をかけて行つた。

その夫も細君に緣のない人てあつた。大きなな男の兒の母親てあつた最初の細君、その人とは從弟同

士て、其寫眞は薄くなつて、眼鼻ももう分明には解らぬ位になつて居た。今一人の細君は、田舍から連れて來た人て、其人の生んだ男の兒は、一月ほど經つて死んで、靑山の墓塋の中に小さい石塔になつて居た。「あのお嫁さんは、器量はよくなかつたけれど、それはよく働いた人よ。每日、なりふりも構はないて、襷がけになつて、洗濯だの拭掃除だのをして居たよ」と隣の友達は話した。今ても時々その細君から長い長い手紙が來た。

後には夫は戲談半分に、自分の馴染の女の話などをして聞かせた。一束に丸めた其女の手紙を出して見せたことなどもあつた。現にかういふこともある。役所をやすんで家に引込んで居る時分、格子戶を靜かに明けて小聲て案內を乞ふ人があつた。出て見ると、其處に二十六七になる派手なつくりをした銀杏返しの女が立つて居た。それはよく手紙を寄越したその馴染の女てあつた。

流石に夫も顏を赤くして居た。女もきまりが惡るさうに內輪に丁寧な言葉をつかつてゐた。時々笑ふ眼の處に好もしい愛嬌があつた。いよいよ年が明けて、國に歸るところだと言ふ。歸つて行く時、夫は道を敎へて遣ると言つて、駒下駄を突かけて、後からついて出て行つた。窓の障子の穴から見て居ると、二人は向ふの丘の上についてゐる路の角の處に立留つて、何か頻りに話して居る。此方を向いた顏に午過の日影が明るく照つた。笑つて居る顏もそれと見えた。ても二人は其處て挨拶をして別れて行つた。

三

社の歸りに寄る貞助の顏を見ると、病人はいつも氣にして居る病院の費用のことをそれとなく言つた。

初めの一度は、先月の生活費があつたので、それで漸く拂ひをすましたが、それをすましたお冬の財布にはもういくらも金は殘つては居なかつた。お冬は見舞に來た里の兄に金の才覺を賴んだが、しかし何うすることも出來なかつた。

病勢が日增に惡い方に向ふのに、さりとて退院させるにも忍びなかつた。

兄の身にしては――お冬の身にしては、弟の世話になるのが、ことに心外でもあり氣の毒でもあつた。役所を退いた後に、弟の世話になつたのも、ちつとやそつとではない。それに弟だとて、僅かの月給を取つて居る身の上である。

ある日、お冬は弟を廊下に連れ出して其話をした。

『無論、何うかします。そんな心配はしない方が好いですよ。……ことに、嫂さんが心配するのはまだ好いてすけど、病人には、そんな心配はさせないやうにしなくつてはいけませんよ』

『何うかよろしくね、……本當に御氣の毒てすけれど』

かう言つたお冬は助けられる身のつらさをつくづく感じた。

弟の身に取つては、此兄はいかやうにも世話をしなければならなかつた。『今少ししつかりして呉れなくつては困る』と常に言つて居たが、しかしその困つて居るのを默つて見て居るのには忍びなかつた。

弟の妻のお鳥は肥へた口喧しい女てあつた。兄が病院に入つた時にも、『何うするんだらう、病院など

に入つて……。もう御世話は御免だ』こんなことを誰に言ふともなく言つた。

こればかりではなかつた。兄が浪人して居る間、困つて居る中だけといふ話で、月にいくらかづゝ弟は扶助した。と、月末の勘定の一杯になる時など、僅かな金ではあるが、お鳥は女だけに、『あの金があつたら……』などゝ言つてこぼした。『そりや、出來るんなら好いですけれど、宅も困つて居るんですから……、衣更の時が來ても、子供に袷もこしらへて遣ることが出來ないんですから、お冬娘さんも少しは考へて呉れないでは、本當に困るわ』などゝ言つた。

それに、兄の方でも、少しは察して呉れゝば好いのだが、扶助されるのについ慣れて、『今月は何うやらかうやら間に合ひましたから、』から世辭にも言つて呉れることなどはついぞなかつた。兄が西洋人に日本語を教へて、月々の收入があるやうになつても、矢張其金はあてにして居た。『まだ、困つてるからだよ』と初めは貞助も言つてゐたが、後には、『何うも仕方がないものだな。助けられる氣分になると、あゝいふ風になるものかな……本當に兄貴にも困る』などゝ言ふやうになつた。

時にはまた、『だから、人を助けるといふことはいけないものだ。人を助けると却つて互の間柄が面白くなくなるといふ樣なことになる。情けないものだな、人間といふものは――兄弟の間柄でもさうだ』こんなことを言つて長大息をつくことなどもあつた。

兄が病氣になる半年前位から、その毎月の扶助金を遣らぬことにしたので、互の間柄は少し變な具合になつて居た。『お鳥が吝嗇いから……』こんな言葉が兄とお冬との間にも度々取交されて居た。

「病院になぞ入つて何うするんだらう」

お鳥は其噂を聞いた時から、それを氣にかけて居た。貞助も口にこそ出して言はないが、内々心ではそれを考へて居た。世話になつた兄の不幸に對して、そんなことを思つては濟まないと思ひながら、何うかしてこの災厄をのがれたいものだとも思つて居た。

嫂から相談が懸けられた日は何だか氣分が進まぬやうな風をして歸つて來た。父親が歸つて來ると、いつも飛んで迎へに出る子供達の頭を撫てゝやる元氣もなかつた。膳の上の盃をも默つて取つた。

「何うかしましたか」

終には細君にまでさう言はれた。

「あれだけは遣ひたくないと思ふが、何うも仕方がない」

かう言つて貞助は長大息を吐いた。

お鳥はそれと知つて默つて考へ込んで了つた。「そんな位なら、何故病院に入つたんでせう」などといふいつもの愚痴ももう出なかつた。夫婦は物言ひてもした時のやうに默つて居た。

「それや、あれにや手を附けたくないけれど‥‥仕方がない」

暫くして貞助は繰返して言つた。

お鳥は依然として默つて居た。

貞助はチビリチビリ酒を飲んだ。「手酌をして飲んだ。

「世話になつた兄貴だからなア」

妻に向つて言ふともなく貞助は言つた。

また暫く沈默が續いた。

お鳥は急に、

「あゝ詰らない。……私も帶でも買はう」こんなことを言つて、立つて、勝手の方に行つた。

三百圓！僅かな金だ。しかし夫婦に取つては紀念の多い貴い金であつた。この金の爲めに貞助は十年も社に行つて働いた。

四

十月になると、日影が段々緣側にさゝなくなつて、梧桐の葉がガサガサと朝風夕風に音を立てた。洋館と洋館との間に見える空は深い碧を湛えて、空氣にも何處となく濃い冷い影が出來た。枕元に置いてある鉢の赤い草花も萎れた。

見舞に來る人が段々多くなつて、菓子折や菓物を入れた籠などがあたりに積まれた。病人は夥しく瘦せて、顴骨の出たのが著しく眼に立つた。

好んで食つた水蜜桃は旨いのがもうなくなつて、今度は林檎がその代りに買はれた。赤い柔いのを買つて來て「こんな拙い林檎が食へるか」と投り出されたので、其次からは、顆の小さい皮の靑いのを選んで買ふやうにした。病人は熱のある口で、さくさくと旨さうに音を立てゝ食つた。

お冬の妹のお文が來て居ることがあつたり、男の兒の祖父になる老爺が來て居ることがあつたりした。この老爺は病人の舅でもあり叔父でもあるので、平生この病人を一方ならず力にして居た。病人もまたこの老いて子のない叔父叔母の世話をすることを自分の任務のやうに思つて居た。

老爺は老いて惡くなつた眼をしよぼ〳〵させて、心配さうに、默つてその枕元に坐つて居た。自分の住んで居る處から五六町ほど離れて八幡のこんもりとした森があつた。お爺さんは、毎朝其處に御參りに行つて、その甥の病氣の全快を祈つた。初めに貰つた御くじには凶が出た。お爺さんはそれをかへす〴〵も苦にした。『今、もしものことがあつては、政吉が困る』かう言つて祖父祖母は一人の孫の身の上を心配した。

お冬に對しては、この老人達は常に一種の眼を以て見て居た。男の兒が綻びの切れた衣服を着て居たと言つては、自分の娘が生きて居たならと言ひ合つた。お冬が妹のお文の娘を世話するやうになつてからは、一層お冬に對して變な眼色をするやうになつた。『行く度にお冬さんは屹度女の兒の髮を結つて居る。あゝ自分の身内のものばかりを世話するやうでも困る』爺さんは孫の家に行く度に屹度こんなことを言つた。

お冬はまたお冬で、『本當に千駄谷の年寄達にも困つちまう。それにお爺さんかお婆さんが來ると、屹度運惡くお綱の髮を結つて居るんだもの』と言つたり、『政吉がそんなことを構はずに、汚ない裝をして千駄谷に行くんだもの』とこぼしたりした。老人達はお冬を見る度に、死んだ一人娘を思ひ出した。

老人達は東京の郊外の日に日に開ける中に、僅かばかりの畑地を持つて、微かに其日其日の烟を立てゝ居た。夕暮の仕事を仕舞つて、家に上りながら、『今日は惡くなけりや好いが』と爺さんが言ふと、『何うも今日は烏啼が惡かつた』『何うも今日は胸騷ぎがする』暗い三分の洋燈に對して、二人は盡きずに病院にゐる甥の病氣を心配した。

『長生すると、いろんな眼に逢ふなア』爺さんがかう言ふ後について、『本當にもう自分達は、自分達て死ぬ支度をしなくつちやならない。人を賴りにはしては居られない。後の雁が前に行く世の中だから』かうお婆さんは言つた。

男の兒が訪ねて行くと、『お前、本當にしつかりしなくては仕方がないぞい。お父さんが病氣なのに、ぐづぐづ遊んで居てはすまない。もうお前も十六だよ。お父さんに代つて、しつかりしなくつては――』氣の勝つたお婆さんはかう言つて、『お前、お父さんの看病に行くかえ?』

『だつて、僕にや出來ないもの』

『出來ないッて遊んで歩くものがあるかえ。お母さんに力になつてやんなけれや仕方がないぞい。何うだえ、今日は少しは好い方かえ』

『うむ――』

男の兒は小遣がなくなると、いつも貰ひに出懸けて來た。男の兒に取つて、一番氣の置けない人はこの老人達であつた。『お婆さん、本を買うんだから、お錢を少しお呉れ』かう言ふと、お婆さんはいつも

五十錢銀貨を二つ位握らせた。それに限らず、心懸けの好い老人達は、婿の困るのを見兼ねて、金を出して遣つたことも一度や二度ではなかつた。

ある朝、貞助の出勤前に、お爺さんは訪ねて來た。

『何うも病人はよくありませんかな……何うしてさういふ病氣に懸つたものだか』から言つて眼をしよぼ〱させて、『何うかして治る工夫がないものですか。……熱さへ取れれば好いッて、病人も言つて居ますが、何うも熱が除れない。……昨日、御鬮を引いて見たら、今月は好けないが、來月は吉だッて出ましたから、大きに力にしてゐますが、……』言葉を途切れさせて、『今、死なれては、本當に政吉が困りますから』

お爺さんはまどろしくつて傍では聞いて居られないやうな口のきゝ方をした。同じことを繰返しては、煩さゝうにしよぼしよぼした眼をこすつた。

最後に、懐に入れて來た紫メリンスの小さい包を出して、いぼ結びに結んだ結目をごそごそと皮の硬い指て骨折つて解いた。

中には貯金の通帳が入つて居た。

『何うせ困つて、お世話になつて居るんだらうッて、婆さんも言ふし、それに、本當に、いくら兄弟だッて……貞さん一人ては大變だ。……こゝにはいくらも入つて居ないてすけども……それに、出して

から持つて來ると好いんてしたけれど‥‥若い人の方がさういふことには馴れてゐるッて婆さんも言ますから」かう言つて、爺さんはそれを貞助の前に出した。

通帳には五十圓許入つて居た。

「困つたものですな」かうお冬の兄に當る人が言つた。

「鳥渡貞さん」と言はれて、貞助は其人と一緒に廊下に出た。今日院長に會つて聞いたら、肋膜ではない、肺病――結核性だといふ話を其人は小聲でした。

「肺結核？」

貞助は自分の耳を疑ふやうに繰返して聞いた。

「あゝいふ血も何も出ない肺病があるさうです」

かう其人が言つた。

暫くして「何うも仕方がありませんな」といふ貞助の聲がした。

病室は其日は何となく濕つて居た。お冬の眼は泣腫して赤くなつて居た。病人は散藥を飲んだ後の熱睡に落ちて、痩せた腕を蒲團の上に投出して居た。貞助は柱に凭りかゝつて、じつとその病人のさまを見てゐた。お冬の兄はその隣に坐つて、さも困つた人のやうに深い沈默に沈んて居た。

昨日から手傳に來た五十ばかりの頭の少し禿げた男は、緣側に坐つて、矢張默つて時の經つのを見守

つて居た。
「熱が除れないから困る」
お冬の兄は小聲で言つて、「熱が除れて、少しても好い方に向ふやうだと、宅につれて歸つても好いし、海岸にても行くやうにしても好いんですけれど」
貞助は唯默つて點頭いて見せた。
戸外には秋雨がさびしく降つて居た。
病人が眼を覺したのは、暫く經つてからの後であつた。そんなことを知らないかれは、其處にめづらしく義兄と弟と並んで坐つて居るのを見た。さもなつかしさうに笑つて見せた。
「度々難有う」
かう義兄に向つて言つた。
仰向くやうにして外を見て、「雨が降つてるねえ」
續いてかう言つたが、すぐ落附いた心を失つたやうに焦々して、「貞、己はもう厭々した。院長は何と言つた。肋膜なら、さう何時までこの熱が除れない譯がないがなア」
一座は何とか曖昧なことを言つて置かなければならなかつた。病人は今日院長に病氣の容體を訊くことを知つて居た。「肋膜には肋膜だが、他にまだ病狀の解らない餘病が出て居て」義兄はこんなことを言つて聞かせた。

『餘病が出たッて、さういつまで、高い金を拂つて入つて居られやしなない。治らないものなら退院した方が好い。貞ばかりか、千駄谷の年寄にまで世話をかけて……。』いかにも心外といふ風で、『本當にあの年寄の世話になると、身が切られるやうな氣がする。あゝした年を取つた體で働いた金を、こんな病院などの入費に使つて了ふと思ふと、かうしてじつとしては居られない。あの叔父叔母は私が世話をしなくつてはならない年寄だ。』涙がどす黒い頰を流れ落ちた。

お冬も歔欷げた。手傳に來た男は、手持無沙汰にそこらに落散つてる紙片を拾つて、低頭いてそれを丸めて居た。

『貞、己はもう退院しやう』

かう言つた病人の聲は高かつた。

『そんなことを言つたッて仕方がない。まア今少し辛抱して貰はなくつては――』義兄は宥めるやうに言つた。

病院生活は辛かつた。十日目毎の入院費用を考へないだけでも、病人は宅に歸る方が好いと思つた。成程、醫師は時間通りに見舞つて吳れる。藥餌には不自由をしない。しかし病院は矢張病院であつた。左右を仕切つた灰色の壁は冷たく、看護婦共の騷ぐ聲や、廊下を通る草履の音は喧しかつた。『また、草履を引摺つて居やがる！』病人はいつもかう罵つた。

一座はまた深い沈默に落ちた。

『あゝ厭だ、厭だ。早く死んだ方が好い』跡の一句は小聲で言つたが、『おい、杉山、氷はすつかり解けちやつたぞ』から言つて、胸に當てた氷袋を前に投り出した。

半禿げた男は、慌てゝそれを拾つて、桶の中の氷塊を砕き出した。

五

熱の爲めに、意識を失ふやうになつてから、病人は一層憔悴した。

『己のことてはもう少しも心配することはない。己はちやんとお前が困らないやうにして置いた』

病人は眼を明いて、正氣としか思はれないやうな風をして、こんなことをお冬に言つた。『己はな、人の爲め、人の爲めをと思つて世を送つて來たが、今、漸くその報酬が來た。己が病氣になつたといふのを聞いて、長野から其人が昨日出て來た。もう心配することはない。此處の費用だッて何だッて、もう貞に世話をかけなくつても好い。もう、ちやんと其人が世話をして吳れることになつて居る。安心して居ろよ』

看護して居る杉山を呼んでは、

『おい、お前御苦勞だが、其處まで行つて來て吳れ。……門を出て、小川町の方に行くと、勸工場があるな、あそこから少し橫町に入ると、旅館がある。其處に其人が來て居るんだから……其處に行つて、長野から來て居る人とさへ言へば解るんだから』

さうかと思ふと、

「今、電話が懸つて來たらう。己は病氣さへ治れや、朝鮮に行くことになつた。月給が百圓、もうお前は心配することはないぞ。己が先に行つて、一月も經つと、迎へに來るから……」お冬の顔をじつと見て、「お前には今まで非常に苦勞をさせた。これからは樂をさせてやるから、」

こんなことを言つて、いかにも喜ばしさうな顔をして笑つた。

正氣を失つて居るのだとは思ひながら、猶正氣で言つて居るのではないかと思はれるやうな處があつた。杉山はお冬に言つた。「先生の言つてることは本當ぢやないんでせうか」

後には、お冬も滿更虛言ではないのではないかなどと思ひ出すほど、病人の言ふことはしつかりして居た。お冬はいろいろな質問をして見た。「朝鮮には誰の世話で行くやうになつたんですか」などと訊いて見た。すると、「お前、己の言ふことを虛言だと思つて居るのかえ。あの通り、役所から電話がかゝつて來たてはないか。」

長野から出て來た人の方の話は、一層信實らしかつた。行つて來いと言ふのに、躊躇して居ると、後には焦れて腹を立てた。顔さへ見ると、「おい、杉山、まだ行つて來ないのか」と叱るやうに言つた。

「奥さん、先生があれほど仰しやるから、行つて來て見ませうか」

「さうねえ」

杉山は兎に角行つて見やうと言つて出懸けた。歸つて來た時には、貞助も來て居た。

病人は眠つて居た。

「宿屋は、先生の仰やる處にちやんとあるんです。しかも大きな旅籠屋なんてす。長野から來て居るお客があるかッて聞きましたら、今一寸お出かけになりましたと言ひました。また來るッて言つて歸つて來ましたが、來てるには來てるんです」杉山はかう言つて不思議さうな顏をした。

「出かけて行つて見たのは面白いね」と貞助は笑つた。

「しかし本當かも知れません」杉山は何處までも眞面目だ。

不遇の兄の一生、熱の上の譫言と信ずるまでに好運に渇して居る人々の心――それを考へると、貞助は笑へなくなつた。

貞助は杉山といふ男のことをかなりよく知つて居た。世の中の流れに漂つて、何うすることも出來なくなつた男、若い時には財産のある家に生れて、相場に手を出したことのある男――それが何處にも行く處がなくなつてから、兄はよく世話をして遣つた。

役所で兄の下に使はれて居たこともあつた。兄がやめてから、自分も何だか居心が惡いと言つて役所を退いて、長い間兄の家に居た。「あんなに困つて居ながら、人の世話をする氣が知れない」兄はそれに就いてよく親類から蔭言を言はれた。

流石に兄の家に居るのを氣の毒がつて、車を挽いて見たことなどもあつた。「字もあの通り綺麗に上手に書くのだから、そんな車なんぞ挽かないでも好ささうなものだがねえ」と誰も言つたが、しかし用ゐ

て呉れる人は何處にもなかつた。

『杉山さん、暢氣ねえ。鼻唄を唄つて、空車を挽いて歸つて來る處だッた』こんなことを言つてお冬が笑つて居ることなどもあつた。

貞助の妻は妻で、『杉山さんと言ふ方は面白い人だこと。今日、通て摩違ふと、私の通るのを知らずに、竹の皮の中から、餅菓子を出して頰張りながら歩いて居るぢやありませんか。だらしのない人ね、あの禿頭をして――。私はそんな人に挨拶されると、此方か見つともないから、怱々と知らん顏をして通つて了ひましたけれど』かう言つて、あれぢや誰だッて使つて呉れやしないといふ意をほのめかした。

でも兄のことは、『先生、先生』と神樣のやうに尊敬して、その爲めには骨身を惜しまないといふやうな處があつた。今度兄が病氣になつて入院した留守宅に、田舍から突然遣つて來たが、何處にも行く處がないので、其處に二三日寢泊りをして居た。處が毎朝早く井戸端で水をあびてるものがある。お文は不審には思ひながら、別段氣にも留めずに居ると、ある時杉山は額の禿げた處に小さい傷の出來たのを撫て丶、『何うもピリピリして仕方がない』と言つて居た。それは釣瓶の當つた跡て、毎朝早く水を浴びるのは、かれが兄の爲めに病氣全快の水垢離を取つて居るのであるといふことが解つた時は、お文は思はず吹出して笑つた。

『それでも杉山さん、感心なものだよ』

お文は翌日病院に行つた時に、かう言つて話した。

て、杉山は病院に行つて病人の世話をしたり、留守宅に歸つて、お文の爲めに走り使ひをしたりした。

貞助の妻が見舞に行つて歸つて來て、『また來てるのね、杉山さん。』から言つて、『賑かだ、賑やかだ。私は今日行つて、賑やかなのに呆れて了つた。あれで病人に好いのかしら……。貴郎、それや大變よ。あの狹い六疊に、嫂さんの次の兄さんが來てゐる。杉山さんが居る。お文さんが居る。政吉さんが學校の歸りだッて言つて來て居る。それに看護婦が居るでせう。丸で一杯さ、あの六疊が――。その中で、兄さんが土氣色の顏をして、油汗をかいて寐て居るんですがね、まア……それに、まア、あの病院の賑かなこと、看護婦がキャッキャッと騷いで居るばかりなら好いけど、庭の向ふに廊下があるでせう。彼處で支那人がハーモニカなどを吹いてると、若い看護婦などが患者を捉へてふざけて居るぢやありませんか。病院ッて一體あんなものでせうか。あれなら高いお錢をかけて、入院させて置くことなどありやしません。……宅で靜かに保養した方がどんなに好いかしれない』衣裳を疊みながらから貞助に言つて聞かせた。

貞助は默つて居た。

六

幻影の見える時があつたりなかつたりした。此頃では、大森の海岸に新築しかけて居る家屋が出來上つたらうから見て來いなどと言つた。言ふことを聞かずにゐると、すぐ怒るので、お冬は行く振りをして、一時間近くを廊下に立つて居ることなどもあつた。

「家が出來た、出來たッて、厭なことを言ふのねえ」

お冬は貞助に小聲で言つた。正月な時は、矢張金のことを氣に懸けたり、貞助に度々見舞に來て呉れる禮を言つたりした。お冬が餘り櫛卷にばかりして置くからと言つて、久し振りて湯に入つて髮を結ふと、病人は常に似ぬ晴々しい顏色をして「綺麗にお髮が出來ましたね」などと笑つた。

ある夜てあつた。病人の前には、二十八九の束髮に結つた女が坐つて居た。室の隅に吊つた電燈は半ば白布の蔽ひをかけてあつて、朧ろげにあたりを照した。

珍しく四邊がしんとして居た。

「忙しいのに、よく來て呉れたね」

病人がかう言つた。

女は低頭勝にして居た。紬の上に縮緬の羽織を着て居た。膝の上に置いたハンケチが白く際立つて見えた。

「大變にお痩せなすつてねえ」

女はかう言つて、病人を見たが、低い聲て、

「電話がかゝつて、始めて病氣つて言ふことを知りましたが、こんなに惡いとは知りませんてした。

もつと早く知らせて下されば好いのに……」

二人は默つて居た。

二人の胸には別れた時のことが歴々と見えた。其の前の晩、二人は泣明した。其室は四疊半であつた。洋燈が渺くついて居た。生れた兒が死んだ。その悲哀もまだ消えないのに、夫に別れる辛さを女はしみじみと經驗した。十年前のことが今更に二人の胸を打つた。

「本當によく來て吳れた」

言ひたいことは病人の胸にも溢れるほどあつた。女にもあつた。

しかし互に何も言へなかつた。

病人の頭には厭きも厭かれもしない其妻に別れてからの辛いライフが明かに繰返された。女はそれから芝あたりの某病院の看護婦になつて、白い服を着て、藥の臭ひや患者の呻聲や、女同士の尖つた心地の中に長いさびしい月日を送つて來た。田舍を出た時に比べると、自分ながらも驚かれるほど、心も情も硬くなつた。

病人は頻りに咳嗽をした。

女は傍にある痰壺を取つてやつた。水をも飲ませてやつた。

「こんなに瘦せちやつた」

病人は暫くしてから、細い腕を出して見せた。

輕い草履の音は、先程から長い廊下を行つたり來たりして居た。その草履の音を二人は知つて居た。

お冬は氣をきかせて、暫しこの室を外したのである。

『己ももう駄目かも知れない』

かう言つて、病人はまた咳嗽をした。

『そんなことはありません。肋膜位で死んでたまるものですか。少しよくなつたら、海岸にでも行つて、保養するやうにする方が好う御座んすよ。私も其時は都合して行つて看病して上げますから』

袋と病牀日誌を見て、

『熱は今日は少しは引きましたね』

草履の音は近いて、障子が明いたと思ふと、其處にお冬が入つて來た。女は席を讓らうとすると、『まア、何うぞ』と言つて、お冬は其處に坐つた。女は少し身體を斜にして、お冬と相對するやうにした。

『よく知らせて下さいました』。女はかうお冬に向つて言つて、『早く來やうと思つていろいろしましたけれど、生憎、今日は忙しかつたもんですから』

『さうでせうともねえ。お知らせしやうかしまいかッて申したんですけど……それに、世間は親類がまゐりましたり何かして、……もしひよつと、貞助さんにでも逢つて、嫂さんは餘計なことをするなんて言はれても困ると思ひましたものですから、……それて夜と申上げたんですが……』

『何うも難有う御座いました』

女はかう言つて言葉をついて、『貞助さん、矢張御達者でせうね。』

『えゝ、えゝ、よく訪ねて呉れます。』

女は別れる時貞助が姑と一緒になつて兄に忠告がましいことを言つたことを思ひ出さない譯に行かなかつた。

『相變らず難かしいことを言つてゐらつしやるでせうね』

『えゝ、え』

女は一時間位居た。

室を出る後をお冬は追つて來て、廊下を並んで歩きながら、

『肺結核だッて、院長さんが言んですがね、あんな結核があるもんでせうか』

『妾も先程此處の看護婦さんから聞きましたが、……困つたことですねえ。さぞ御困りだらうと思ふと、本當に、……』

『でも一度は治して、海岸にでも行くやうになると好いと思つて居りますけれど…熱が何うしても取れませんでねえ。院長さんも骨を折つて下さるんですけれど……』

女は暫し默つて歩いたが、

「此處の院長さんは、かういふ病氣にかけては評判な方ですから、申分は御座いませんけれど」

「それはねえ、もう……」

「あゝいふ風に出て來た熱は何うも除れませんものですねえ」

廊下から勝手の傍を通つて、事務室に行かうとする處に、電燈が明るくついて、大きな火鉢に凭りかゝつて、若い看護婦が居眠をして居た。大きな眼鏡をかけた年寄の事務員は帳簿をひろげて何か頻りに書いて居た。其後に大きな金庫があつた。

「それてはまた、夜分にてもちよいちよい伺ひますから……」かう言つて、入口に亂雜に踏散した下駄をさがしてはいて、『お大事になさいまし』と言つて出て行つた。外を覗くと、好い月の夜て、病院の鐵柵の門の影が黑くくつきりと地上に落ちて居た。

お冬はそれきり山の手の家に歸る暇はなかつた。六疊の一間をすまひにして、晝と言はず夜と言はず、病人の眠て居る間を眠る時間にした。しかも三十分と經ぬのに、烈しい咳嗽に起されるのが例てある。

「あゝ苦しい、苦しい」

かういふ隙もないほどに咳嗽が出るやうになつたのも、間もなくてあつた。それに、夥しく痰が出た。時の間に、痰壺が一杯になつて、日に幾回となくそれを捨てに行つた。

看護婦は二日と居ついて居るものはなかつた。伯母が病氣だとか、少し重い患者があるから其方に行かなければならないからとか言つて出て行つた。心付けも十分に呉れぬのに、あの痰の烈しく出る患者などを世話するのは誰も好まなかつた。それに、患者は、この頃では、性質が違つたかと思はれるほど氣難かしくなつて、氣に入らぬことなどあると、「もう貴樣の顏など見たくない、あつちに行つて居れ」などと言つた。

「何うして貴郎はさう難かしくなつたの？私が氣に入らないことがあるなら、何とでも叱つて下さい」お冬は終にはこんなことを言つて泣いた。

杉山は柱の處に坐つて、手持無沙汰に紙を丸めなどして居た。抑へ難い力に堪へられないやうにこつくりこつくりやつて居る時などもある。時には落さぬやうに扇子を廻して居ることなどもあつた。

「杉山！もうその扇の藝當はよして呉れ。目まぐるしくつて仕方がない」

いかにも不愉快に堪へられないやうに、病人は眉をひそめて言つた。

一時間も二時間も、向ふむきになつて寐て居ることなどもあつた。眠つて居るのかと思ふと、灰色の壁に向いて、大きな眼を明いて居た。その眼から涙が粒をなして頰を傳つて流れた。

看護婦が驗溫器を腋の下に挾まうとすると、「もう置いて呉れ、熱なんぞ量つたつて何の役にも立たな

い。」かう言つて病人は向ふを向いて了つた。

「でゝ、時間が來れば、熱を量つて、表に書かなければなりませんから、……病院の規則ですから」

新たに來た看護婦は何の氣なしにかう言つた。

振返つた病人の顏には烈しく激した色が上つた。

「病院の規則！己は病院に規則を守りに來て居るんぢやないぞ。熱なんぞいくら量つたからつて仕方がないから仕方がないつて言ふんだ。何うせ治らないものゝ熱なんぞ量る必要があるか」

「でも、看護婦の粗忽になりますから――院長さんに怒られますから」執拗な看護婦は容易に讓らない風を見せた。

「生意氣を言ふな！」かう言つた病人は憤激して、「病人が厭だといふものを、無理にしろつて、院長が言つたのか。さういふのがこの病院の規則か。」

眼をむき出した顏は恐ろしげに見えた。

看護婦は猶何か言はうとしたが、其處に外から入つて來たお冬は、「まア、まア、今に機嫌が直つてから、私が量らせますから」かう言つて、看護婦の手から驗溫器を取つた。看護婦は膨れた顏をして、白い服の後姿を見せて出て行つた。

「馬鹿な奴だ」

病人は猶飽足らずに罵つた。

「規則々々つて、病人の厭がるものを無理にさせなくつても好ささうなものだのに……」から言つたお冬も稍激して居た。

お冬も杉山も常にハラハラして居た。氷袋を胸につけさせるにも容易でなかつた。何ぞと謂つては、氣が利かないと言つて、すぐ腹を立てた。あのやさしい、怒つたことなどのない人とは丸て別の人のやうに思はれた。

「潔がこんな綺麗な草花を呉れましたよ」

から言つて、お冬の里の弟がわざわざ持つて來て呉れた西洋の草花の鉢を見せても『うむ』と言つたきりで、別にそれを喜びもしなかつた。その草花の鉢は枕元に置かれたまゝ、幾日か日を過ぎて、室の埃に埋められて了つた。

今年大學を出たばかりの醫學士は、八字鬚を生して、頭を綺麗に分けて、香水を紛々と匂はせて遣つて來た。

好い男振て、眼と鼻との間に愛嬌があつた。「學士さん、學士さん」と看護婦達は大騷ぎをした。其の若い醫學士は、大抵毎日夕方に回診した。其日も老いた看護婦を先に立てゝ、色澤の好い顏を光らせて來た。

「何うてすな」

病人は默つて返事もしなかつた。脈を見るべく手を求めると、病人はお前のやうな生若い醫師に見て貰つたつて仕方がないと言つた風に、ぐつたりと右の腕を其處に投げ出した。

老看護婦が胸をひろげるのも、醫學士がポッケットから聽診器を出してそれに耳を當てたのも、更に頓着しないといふやうに唯大きな眼をパチパチさせて居た。容體などを聞かうともしなかつた。

醫學士は老看護婦に何か二言三言注意を與へて、そして出て行つた。

それに引かへて、院長の回診の時には、自分からいろいろな質問を出して訊いた。「何かして活かして下さい」こんなことを言つて、涙を流すことなどもあつた。

「神經を立てゝはいかん。神經を使ふほど、此病氣に毒なことはない。」院長は莞爾笑ひながら「もう此頃ぢや前のやうな譫言は言はなくなりましたか」

「もう此頃ぢや申さなくなりました」傍からお冬がかう言つた。お冬には院長の肥つた脂肪ぎつた體が羨しかつた。

痰を檢査するからと言つて、小さい痰壺を看護婦が持つて行つた。午後になつて、黴菌の居ないことが解つた。お冬はこれをせめてもの慰藉にした。

肺結核といふことは、絶對に病人に知らせないことにした。肺のハの字も言はないやうにした。しかし病人の神經は、病床に侍して居る人々の顏色からそれを知ることが出來るほど鋭敏になつて居た。「痰

の檢査？何の爲めに痰の檢査などをするのか。己の病氣は肋膜ぢやないのか」こんなことを言つて病人は焦れた。

　貞助が入つて來て、いつもの處に坐ると、病人は非常なエクスタシーに陷つたといふ風て、涙をほろほろと滴して、貞助の顏を見て居たが、そのまゝ手をじつと握つて、

「貞、おれはもう駄目だ。己はもう死なけりやならない」おい〳〵泣いて、「お前には世話になつたな、……世話になつたきりで、兄の義務も盡さないで、迷惑ばかりかけた」いよ〳〵手を堅く握り占めて、「己のやうなやくざはもう此世に生きて居なくつても好いんだ。けどもな、愚痴ぢやないが、己だつて辛かつたぞ、辛い一生だぞ。もう己のするだけのことはした。』涙は頰を傳つて流れた。『お前たちはいつまでも生きて――』涙に遮られて言葉が出ない。

　黃ばんで濁つた顏の筋肉は、泣く度に悲慘な痙攣の影を漂はせた。かうした病人の泣く顏を見るに忍びなかつた。

　默つて低頭いた貞助の眼にも、流石に涙が閃めいて見えた。慰める言葉も急には口から出なかつた。

　病人は手を愈々堅く握りしめた。拭かうともせぬ涙は留度なく頰を傳つて落ちた。『けどもな、これはまだ最後の握手ぢやないぞ。いゝか、最後の握手じやないぞ。』繰返して言つたが、歔欷はいつか泣聲になつて居た。堪へかねたやうに、瘦せた手を延して、顏を覆ふやうにした。

　靜かな午後の日影のさした一室に、泣聲が一しきり聞えて居た。杉山もお冬も默つて低頭いて居るば

かりて、何うすることも出來なかつた。しかしやがて泣聲は歔欷とかはつた。激した心もいつまでもその心の狀態を保つて居なかつた。赤く眼を泣腫したお冬は、暫くしてから、ハンケチを取つて、涙にぬれた病人の顏を拭いてやつた。

「何うして、あんな悲しいことを言出したんでせう、今日は？」貞助がこんなことを言つたのは、餘程經つてからのことであつた。其時には、病人は痙攣が收つた後のやうに、唯スヤスヤと眠つて居た。

お冬は小聲て、自分の病氣が肺にかゝつてゐることが自然に知れて來たんでせうといふことを話した。

「此頃は、それや本當に氣難かしくなつたんですよ。何うしたら好いかと思ふことがありますよ。あんなやさしい、蟲も殺さないやうな人が、かうもなるかと思ふと恐しくなりますよ」

其日は、十日目毎の會計日であつた。やがて貞助は財布から紙に包んだものを出してお冬に渡した。

「本當にもうお氣の毒で……こんなにお世話にばかりなつて、……それが、ねえ、貞助さん。治るものなら、いくら御世話になつても、お世話になり甲斐がありますけれど……好い方にはちつとも向はないんですからねえ」

お冬はかう言つて、それを帶の間に仕舞つた。

貞助は會計日の度毎に、社の主幹に理由を話して、貯金を引出しては持つて來た。月々規則として月給から差引れた貯金、餘計に金の入つた時に少しでもと思つて入れた貯金、――それが段々少くなつて行くのを見た。かれは貯金帳を引くり返して、それに見入つて居ることなどもあつた。

そんな心地を起してはならないと思つた。女ぢやなし——。兄の垂死の病床に使ふ金ほど惜しくない金はない筈だなどゝ思つても見た。しかし一方では、とても治らぬ病氣に浪費する金ほどつまらない不經濟なものはないとも思つた。それに、お冬も感謝しては居るが、病人の容體の段々重くなつて行く今日では、そんなことを問ふて居る餘裕もないといふやうな風に見えることなどもあつた。

高い入院料を拂つて、何時までかうして病人が居るか、それが解らなかつた。貞助は其處に重苦しい不安を感じた。『なあに、己の持つてるものを殘らず出して了ひさへすりやそれで好いんだ。その時は何うにでもなる』こんなことをも思つた。

千駄ヶ谷の老人達は、それでも貞助の苦心を察して呉れた。『困つたもんだねえ。少しでも好くなると云ふなら、張合があるけれど、惡くなるつて言ふんだからねえ……貞さんだつて大變だ。……さうさうつゞくもんぢやありやしない。』親身の叔父はかう同情して言つた。

『一體、初めから、病院に入れたのが間違つて居たんだよ。自分で出來もしないのに、病院になど入るから惡いんだ。病人だつて、世話になる世話になるつて思つて苦勞する爲めに、どんなに病氣を惡くしたか知れやしない。……それに、喧しい病院ぢやないか。此間行つて見たが、それは賑かだ。あれぢや病人が堪らない』氣さくな老いた叔母は猶言葉をついて『それに、人が大變に來てるぢやないか。杉山といふ人も來てるんだね。一體、お冬さんが惡いっあんなに餘計なものまで賴んで來るつていふことはない。自分一人で何處までも看病するといふ心持でなくつてはいけない。人の世話になつて置いて……』

その中には、平生の反感が言はせる言葉の語氣もいくらかはあつた。

「あの杉山といふ人は、何處にも行く處がないから來てるつて言ふんだつてよ。病院にまで行つて世話にならなくつても、何うか出來さうなものだが……」お爺さんも傍からこんなことを言つた。

七

秋は一日毎に深くなつて行つた。月が明るくカアテンを引いた病院の窓を照して居る夜もあつた。雨滴が梧桐の葉から涙のやうに落ちる朝もあつた。街の兩側に植ゑたポプラの樹の葉は、黄ろくなつて落ちて、カサゴソと夜風に吹かれてころがつて行つた。

いつものやうに鈍いうなり聲を立てゝ傾斜をなした舗石道の上を通つて行く電車の窓も夜寒の風を恐るゝやうにひつたり閉ぢて、中にともつた電燈の灯が人の影と共にチラチラした。晴れた午後などには、空が透徹る樣に碧く、光の强い光線が角の高い洋館の輪廓を鮮かにあたりに聳たてて見せた。病院御用の車屋の内には、吊臺だの俥だのが置いてあつて、赤い襷をかけた婢がいつも忙しさうにして働いて居た。

橋の向ふの女學校から出て來る娘の群は、紫のメリンスの風呂敷を抱へたり、派手な細い蝙蝠傘を持つたりして、さも樂しさうに、その前に展げられた若いライフを樂しむといふやうに、睦しげに二人三人連れ立つて談して行つた。幼稚園歸りの男の兒は、可愛らしいマントを着て、友達と惡戯をしながら歸つて來たが、大きな寫眞屋の前に立留つて、眞鍮の柵につかまつて、硝子の中の女の寫眞や風景の寫眞などを見た。

夕暮の風はもう寒かつた。鼠色の雲脚の早い日には、其間から見える空が、常より一層明かな碧を見せた。時雨がサッと降つて通る日もあつた。霧の深い夜は、家の灯も濡れたやうに光つて、通る人々が影のやうに街道を行き過ぎた。

病院の門の中の入口に、車が一臺待つて居る。中から全快した若い男が、母親らしい人と一緒に出て來た。車夫は縄でからげた行李を運んで車に乘せた。白い服を着た看護婦が二三人、其處に見送りに出て居た。「いろいろお世話になりました」母親がかう挨拶して車に乘つて行くこともあつた。時には、夜遅く吊臺が其處に据ゑられてあつて、兩眼を泣腫した女の人達が、これから遺骸を家に送る準備をして居ることなどもあつた。中庭の向ふ側の二等室には、此頃人の出入りが俄かに烈しくなつた。咳嗽をする音が絶えず聞えた。「大分惡いんですッてね」などと人々は囁き合つた。「吉原の女郎屋の亭主なんですッて、藝者らしい女がよく見舞に來ますよ。」こんなことを看護婦が話して聞かせた。ある朝、氣が附くと、あれほど出た咳嗽の音がぱつたり絶えて、其室の白いカアテンには朝日が靜かに當つて居た。「昨夜、十時頃でしたッて。それからすぐ引取るッて言ふんで、大騷ぎでした。私など眠られやしなかつた」から言つて、その看護婦は充血した眼をこすつた。

霧の深い夜、貞助はいつもの角で電車を下りて歩いて行つた。向から來た丈のすらりした、ステッキを持つた洋服姿の男が、すれ違ひながら仰ぐやうにして見て、「……君ぢやないか」

「ヤ、君か」

「病院に行くのか……何うだねえ、病人は?」
「何うもよくない」
「それて、醫者は何と言ふんだ?」
「矢張、肺だね。何うもとても治りさうもない。」から言つて少し途切れて、「それに、二三日前から惡い痰が非常に出る」
「それはいけないね。心配だな。僕も見舞に行かんけりやいかんのだけれど……その中行く」
「いや、もう……」
「大事にし給へ」
て、別れて、貞助は病院の方へ歩いて行つた。靜かな夜霧の中を人は影のやうに行つたり來たりして居る。かれは病院の門から入口に入つて、案内も乞はずに、事務室の傍を通つて、低い階段を上つた。電燈が廣い廊下にぼんやり點いて、兩側に並んだ病室もしんとして話聲も聞えない。
病人の寢て居る傍て、お冬は打伏になつて居た。いつも似ず、誰も居なかつた。杉山は用事があつて山手の宅に出かけて行つた。貞助はソッと入つて來て、いつも坐る處に柱に凭りかゝつて坐つた。病人は四五日以來著しく衰弱した。頰はすつかりこけて、眼は恐ろしいほど凹んだ。十日ほど前から獨りて厠に行けなくなつて、お冬が負つて連れて行つたが、それも今ては出來なくなつた。床の上に起き返るのすら難かしくなつて、後にはさし込のおまるを買つて來た。咳嗽につれて出る痰——それがいくら出

ても盡きやうとしなかつた。體內のものがすつかり腐つて痰になつて了ふのではあるまいかとすら思はれた。「ホウ、えらい痰だ」醫師も呆れてこんなことを言つた。

今では起き返つてその痰を吐くことすら出來なくなつた。止むなく傍に居る人は、それを紙にふき取つた。

暫くして病人は眼を覺した。咳嗽が烈しく出た。見る見るその顏は赤くなつた。

八

「若いのに可哀相ねえ」

お冬もかう同情した。

其の三間ほど間を置いた室に、新しい患者が入つて來た。黑い札に白く書いた其名を見た時、貞助は尠なからず心を動かされた。それは山の手にゐる頃貞助の隣に居たピアノを彈く若い人であつた。兄もお冬も口を利いたことはないが、よく知つて居た。

「矢張、肺なんだらう、可哀相に」

貞助はかう言つた。

貞助の家の二階からは、其の軒の低い小さい家が手に取るやうに見えた。白髮のお爺さんと腰の曲つたお婆さんが居た。お婆さんが勝手元をして居ると、其の若い人は手桶を下げて、井戸端に行つて、水を汲んでやつたりなどした。「綺麗なやさしさうな方ね」其頃居た婢はかう言つてはよく出かけて見に行

つた。

白髪のお爺さんは、禪宗の僧侶から還俗した有名な居士で、碧巖などを到る處の學校に行つて講義した。庭なども草木の繁るに任せるといふ方で、葡萄棚が一杯に蔓つて居る下に、おしろい草の紅白の花などが丈高く咲き交つて居た。草花の鉢、植木の鉢——鋏も入れず茂るに任せた杉垣の縁には、野菜の畑が僅かばかり作られてあつた。夏の夕方など、お爺さんお婆さんは外竈を拵へて湯を沸して行水を使つた。聞くと若い人はその一人子息で、つい近頃音樂學校を優等で卒業して、有望な青年音樂家としての評判が高かつた。ピアノの置いてある室は杉垣に向つた四疊半で、其處から朝に晩に流るゝ樣にその音が聞えて來た。「隣は面白さうな暮しね」などと貞助はそれを聞きながら言つたこともあつた。婢はまた婢で、其處に常に遣つて來るつい近くに居る軍人の綺麗な娘の話をした。其娘は眼のぱつちりした色の白い子で、若い人がピアノを彈いて居ると、屹度其處に遣つて來て、長い間坐つて居た。夕方など白粉を綺麗につけて、末の小さい妹を唯負ぶして、窓の處に遣つて來て話しをして居ることもあつた。

「あの娘さん、約束がしてあるんですね、屹度」こんなことを婢は貞助の妻に言つた。貞助がロマンチックな戀物語を二人の上に想像したことも一度や二度ではなかつた。

其の若い人の名を其の暗い一室の入口の柱に見た時、貞助は心を動かさずには居られなかつた。老いた父親母親、それにその綺麗な娘がすぐ思ひ出された。

「さぞ、まア、あのお婆さん、お爺さんがね」

お冬はかう言つて、

『折角、あれまで成長くして、學校も出來て、これから世に出やうとする人なんだのに……あゝもう厭だ、病氣は！』間を置いて、『何うして肺病なんて、治らない厭な病氣があるんでせう』

其の若い患者の室には、看護婦はついて居なかつた。丈のすらりとした色の蒼白い顔した姿は、何うかすると、廊下をぶらぶらして居ることなどもあつた。その枕元には、雜誌や書籍や硯箱や、その他いろいろなものが散ばつて居た。綺麗な草花の鉢なども置いてあつた。夜は坐つて居る影が大きく障子に映つたりなどした。

九

陶器の火鉢の灰を明けて、それに痰を拭き取つた紙を入れた。柔かい紙は買つて來ても買つても來てもぢきなくなるほど多く痰が出た。

咽喉の處に押寄せて來た痰が、ふき切れずに殘つて、それがいつもゴロゴロした音を立てた。

病人はまた發作のやうに、譫言を言うやうになつた。夜などお冬が看護してゐると、『おい、それ、其處に何か來た』などと言つた。『それ、小僧が來た、小僧が來た。痰壺を盗みに來た。それ盗んで行くおやないか』

もう何うすることも出來ないやうな狀態になつて居た。廻診に來た院長は、聽診器を耳に當てゝ、『ホ、えらい洞が出來た。ウム』などと新しい發見をしたかのやうに、助手の醫師に言つて聞かせた。

お冬の兄はある日院長に面會して、病人の容體を聞いた。院長は鬚をひねりながら、『大きな洞が出來ました。それで、あんなに痰が出るやうになつたのです。……さうですな、大分急に病勢が増して來ましたな。』院長の居る室では助手が入つて來たり、電話が度々鳴つて來たりした。細かく病狀を聞いて居るやうな暇はなかつた。それに、院長はつとめて分明したことを言ふのを避けた。

お冬の兄と貞助とは、やがて次のやうな話をした。

『何うも難かしいらしいですな』

『そんなになるまで、構はんておいて、豫防することは出來なかつたんでせうか』

から貞助が言ふと、

『構はんて置いた譯でもないんでせうが……そんな風になつて了つたんですから、仕方がないですな。とても駄目なものなら——』

『とても駄目なんでせうか』

『どうも、さういふ口振でした。もうそんなことは通り越して居る位に言つて居ました。』から言つて、『私の考では、むしろさういふなら、一時此處を引上げて了つたら何うかと思ふんですが——』

『さうですかな』

貞助は考へに沈んだ。

『それに、病人もこゝを喧かましがつて居ますから、宅につれて行つて、靜かに保養させた方が好くはないかと思ひますが』

『それもさうですな』

貞助は唯無意識に言つた。

かうなつて來ると、貞助は兄の不幸福な一生を思はない譯に行かなかつた。出來るものなら、何うかしてやり度い。とても駄目なら、せめて病院で死なせたいといふやうな心も起つた。しかしまたその反對に、『本當に不經濟な點から言へば、こんな不經濟なことはない。とても助からないものに、藥を飮ませたッて仕方がない。一生を萬死に期するといふやうな立場から言へば、何も病院でなくつても好い』こんなことをも言つたり考へたりした。

病人の惡いといふことが、段々遠い親類や知人の間にも知れて行つた。平生、世話好きて、面倒を見て遣つただけに、いろいろな人が見舞に來た。先の細君も暇を見てはよく訪ねて來た。

中には五六年も顏を合せない從弟などもあつた。曾て内に置いた婢は、それを聞くと、自分の親身の兄弟でもあるかのやうに、急いて遣つて來て、衰弱した顏を見るとわつと聲を立てゝ泣いた。近所の後家さん達も代る〲見舞に來た。

一日、何處の夫人かと思はれるやうな綺麗な丸髷の細君が、下婢をつれて、大きな見舞物を抱へて、

静かにその狹い室に入つて來た。お冬も杉山も、丁度其時其處に來て居たお文も、その客を知つて居るものはなかつた。今までにもそんな知人があるのを知らなかつた。客は縮緬づくめの立派なつくりで、指環を三つまではめて居た。

病人の衰弱した姿を見て、客の表情は俄かに變つた。「まあ、こんなにおなんなすつて」思はず言つた言葉には戰慄が見えた。

病人は眼をぱつちり明いて、不思議さうにその客を見て居た。「先生、おわかりになりまして」客の柔かな優しい聲を聞くと、病人は記憶を恢復したやうに俄かに喜悦の色を顏にたゝえた。

「ちつとも存じませんものでしたから――」

客はハンケチで、眼を押へながら言つた。

病人はそれでも強いて笑顏を見せた。「よく來てくれましたね――旦那さんも御機嫌が好いですか」かう言つて手を自分で返して見て、「こんなになつて了ひました」

客は胸に餘る思ひを包んで默つて居るやうに見えた。さうして相對坐して居る間に、病人は咳嗽をしたり痰を吐いたりした。お冬は其度每に其傍に行つた。

客はいつまでも其處に坐つて居たいやうに見えた。しかしそれは出來ない身の上であつた。三十分ほどして、「それでは又參りますから、お大事になさいましよ、先生」かう言つて暇を告げた。お冬に向つては、「御世話でもすると宜しいので御座いますけれど……それでは何うか御大事に」

風呂敷の中には大きな風月のカステラが入つて居た。

貞助に聞いて、お冬は始めて其客の誰であるかを知つた。「嫂さん知らないんですか。あの人ですよ、政吉の母さんの亡くなつた後で、兄さんの奥さんになるつて言ふ話のあつた人は。その時分、困つてゐてね、お袋さんと一緒に四谷に住んでゐて、宅によく訪ねて來たものですよ。小學校の先生になるつて言つて、毎日夜になると日本外史を教はりに來たものだ。小遣位は其時分兄さんが貢いで居たかも知れませんよ。行つてゐる處は、元、大きな質屋をして居て、今市會議員か何かして居ますが、其旦那から望まれて貰はれて行つたんです。兄さんが其時力にもなつてやり、無理なことを言はなかつたんでせう。それで恩に感じて居るんでせう。」

「さうですか、まア」

お冬は病人の若い時分のことを考へずには居られなかつた。

貞助は其の病室でいろいろな昔の人々に逢つた。天理教の固まりのお婆さんからは「まア、貞さんの立派になんなすつたこと」と言はれた。淺草橋あたりの旅宿屋の老主婦は、「それでもねえ、貞さんがしつかりして居らつしやるから」こんなことを言つた。それは皆な廿年前に行つたり來たりした人々であつた。貞助が袴を裾短かに穿いて學校に通つた頃のことをよく知つて居る人達であつた。病人が塾に居る頃、若い人達の中に混つて居た其頃の一人の女學生は、顔にはもう皺が寄つて、髮の毛は薄くなつて居た。

多くの見舞客に埋められる樣にして、病人は矢張苦しさうな咳嗽をして居た。晝の中は賑かでも、夜になると、人手が足らぬ勝であつた。お冬も長い看病に勞れて、物に凭りかゝりさへすれば、すぐ眠つた。杉山は日中でも人前でも頻りに居眠を遣つて居る。時には病人が顏を赤くして苦しんで居るのを二人とも知らずに居ることなどもある。看護婦は無論十二時過ぎには、御免を蒙つて別室に行つて寢た。て、お文が看護に行つたり、政吉が泊りに行つたりした。『母さん、寢て了つて、呼んでも起きないんだもの』政吉はこんなことを言つた。『本當に勿體ない。眠つちや濟まない濟まないと思つて居ても、……勞れて居るもんだからねえ、母さんは』眠い眼を摩りながらお冬は口の周圍に溜つた病人の痰の仕末をした。

知らぬ顏も出來ないと言つて、お鳥も千駄ヶ谷の老人達も一夜づゝ夜伽に行つた。『もう、とても駄目ねえ、兄さんは。……何うしてまア、あんなに痰が出るんでせう』お鳥は歸つて來て貞助に話した。貞助の夜伽に出懸けた夜は、殊にそれが烈しかつた。殆ど一分の間も咳嗽の出ない痰の出ない時はなかつた。杉山とお冬と看護婦とは交る〲世話をしたが、それが間に合はないやうな時さへある。十二時過には、痰を拭いた紙の溜つたのを捨てに行くことも出來ないので、押詰められるだけ痰壺にそれを押詰めて、後には枕元の周圍に散ばして置くに任せた。痰の出ない時にも、病人の咽喉は常にゴロゴロと鳴つて居た。

病人の呼吸遣ひを氣にしながら、ついとろりとした貞助は、ふと驚いて自から眼覺めた。見ると、周圍

に散ばつた紙は小高く山をなして居た。「これは大變ですね」貞助は一種の恐怖を感じない譯に行かなかつた。

「えゝえゝ、もう大變なんですよ、毎日かうなんですから」お冬は眠たさうな眼を摩りながら、またも出懸る痰を拭き取つた。

恐るべき肺病の痰、それを拭いた紙の中に、かうして過して行く危險さを貞助は感じた。「私が代りませう」と言はうとしたが、しかしそれは口から出なかつた。貞助の覺めた顔と、お冬の眠むさうな顔と病人の衰へた顔とが、白布に包れてボンヤリした電燈の中に、一種の對照をなして見られた。

痰の咽喉につかえるゴロゴロといふ音が、しんとした夜更の空氣に際立つて聞えた。それを聞いて居ると、それが無限にある大きな恐るべき力に續いてゐるやうに貞助には思はれた。そしてその恐るべき力が此の狹い汚ない室に充滿して居るといふことを考へた時、貞助は自分の呼吸の壓迫せらるゝのを感じた。貞助は立つて廊下に出た。

廊下に連る病室からも、矢張咳嗽の音が聞えた。夜の病院の空氣は濃く重く籠つて居た。其處でも、貞助は自由に呼吸することが出來なかつた。

かれは夜明を待ち詫びた。新しい空氣と新しい朝日の光！かれは急いで時計を出して、それを廊下の電燈の光に照して見た。時計は二時を十分過ぎたばかりであつた。夜明はまだ遠かつた。

病室に歸つた時には、それでも病人は少し落附いたらしく、痰も以前のやうに烈しく出なかつた。「少

し私、寢かして戴きますから」とお冬はかう言つて、宵から隅の方に小さくなつて寢て居る杉山をゆすぶり起した。熟睡した杉山は容易に起きなかつた。『杉山さん、杉山さん』小聲ではあるが、しかし強くお冬は呼起した。むつくり起上つた杉山は、何か事でも起つたかのやうに眼を大きく睜つてあたりを見た。『杉山さん、寢ぼけちやいけませんよ。私、代つて戴くのよ』お冬がかう言ふと、『は、は、は』と慌てたやうに言つて、眼を擦りながら起きて來た。その跡に入つて行つたお冬の微かな寢息はやがて聞えた。

杉山は柱に凭り懸つて、ブルブル身を戰はして居た。『寒いんぢやないんですか』貞助はかう言つて、後からお冬の羽織を懸けてやつた。『さ……さ……寒い方が好いんです。暖いと眠つて了ひますから』かう言つたが、それでも羽織に手を通した。十月の末の夜はもう寒かつた。

一室はしんとして居た。貞助は持つて來た雜誌を讀み出して見たが、いろいろなことが考へられて、一頁と續けて讀んで居られなかつた。『自分が死ぬ時は、病院のお世話などには決してならない。死が近いて來たら、じたばたせずにぢつとして死んで行つて了ふ。人の世話などにならない』自から氣が附くと、こんなことを考へて居た。かと思ふと、『つれて行かれるものなら、家につれて行つた方が好い。こんな汚い病院で死なせたくない……』病院の費用、これから猶續く費用のことなども考へて居た。

今夜に限らず、此頃、かれはしみじみと人間のあさましさを感ずる人てあつた。努力しやうと思つて居る自分の心にさへ自分から呆れることが度々あつた。『私も帶でも買はう』かうかれの妻は言つた。そ

れ以上にかれは冷たい心を持つて居ることを自分で發見することもあつた。千駄ヶ谷の老人達でさへ、『とても治らぬものを病院に入れて置いて、それこそ醫師に商買をさせるやうなものだ』などと言つた。『人間は一度は誰でもかういふ目に逢ふんだ。己だつてさうだ』かう考へて、今更のやうに自分の妻や子供をじつと見詰めることもあつた。

夜の明けるのを待兼ねて、貞助は其前の雨戸を二三枚繰つた。朝の冷たい空氣が流るゝやうに入つて來た。かれは蘇つたやうに冷たい新しい空氣を吸つた。

かれは其處にあつた下駄を突かけて外に出た。檜や椎などの葉が夜露にしつとりぬれて、薄い朝霧が靜かにあたりを籠めて居た。築山の上には芝草が敷くやうに生えて、其處に陶器の丸い腰掛が据ゑてある。それに腰をかけた貞助の姿は容易にそこを離れやうともしなかつた。

看護婦達の明けるのを待ちかねて、貞助はやがてまた雨戸を五六枚繰つた。新しい朝の光は病人の蒼い顏だの、終夜拭き取つた痰の紙の山だの、傍にごろごろ倒れた禿頭だの、疲れた顏を此方に見せて眠つてゐる顏などの上に張り渡つた。

電車が通り始めた。朝日がやがて靜かな光を霧の中に漂はせた。郊外に行く電車に乘らうとして貞助が橋の袂に來た時には、町ではもう雨戸を繰つて居る家もあつた。新聞配達の鈴の音が其處にも此處にも響き渡つて聞える。行きかふ人々の群――そこに世の中があつた。

十

「途中でもしものことがあるやうなことはないでせうか？」

貞助はかう院長に訊ねた。

「何處でしたな？」

肥つた大きい體を椅子に凭せながら、ゆつたりした調子で院長は言つた。「はゝア山の手ですか、それぢやそんなに遠くはありませんな。靜かに行つたら、行かれないことはないでせう」

「何うせ、いけないものなら、家につれて蹄つて保養させたいッて、親類のものが申しますものですから——」貞助は理由を説明するやうな調子で言つて、さて一歩を進めて、「もう、とても望みはないんで御座いませうな？」

「さア——」

院長は笑つて見せて、「何うも質が惡い。それに神經が手傳つた。……平生、餘程神經家だッたと見える」

老いた看護婦が院長の傍に病牀日誌を持つて來て置いて行つた。院長はそれを繰つて見た。貞助は院長の口からある言葉を豫期した。しかし院長は何も謂はなかつた。

「餘り立入つた話で御座いますが」貞助は言ひ淀んで、「まだ一週間やそこいらは大丈夫で御座いませうか」

「さア——」

院長はから言つたが、それには答へずに、「近所に平生かゝりつけて居る醫師がありますか？」

「えゝ」

「それぢや、一先づ家に歸つて樣子を見るのも好いてせう」

貞助は他に何と言ふこともなかつた。其儘そこ〳〵に其處を出た。

「醫師位よこして吳れるッて言つてもよささうなものですねえ。薄情なものですねえ」それを聞いたお冬は口惜しがつて泣いた、

「貴郞、もう歸るんですよ。靜かな家に歸るんですよ。——こんな喧しい處に居たッて治りませんからね」こんなことを謂つて、病人に取附いてかき口說いた。

十一

其日は病人の義兄に當る五十位の男と、千駄ヶ谷のお爺さんと、貞助とが遣つて來て、いろ〳〵世話をした。政吉も中學の制服を着けて來た。

「何處に行く？家に歸る？己はもう直つたのか？」また意識を失はない病人はそれを不思議にした。

お冬は泣かずには居られなかつた。「靜かな處て、靜かに保養する方が好いんてすから——えゝえゝお醫者さんは來て吳れるんてすとも。此處てなくつてもいくらも好いお醫者さんはありますからねえ。それに、貞助さんも附いて入らつしやるし、千駄ヶ谷のお爺さんも附いて入らつしやるんだから、そんな心

配はしないて、——」お冬は溢るゝ涙を袖に拭つた。

「本當にねえ、治つて歸るんなら好いけれど‥‥かうして家に歸らうとは思ひもかけなかつた。‥‥‥私が——私が屹度治して上げますからね、心配しないでね」かうもかき口說いた。

「嫂さんしつかりしなくつちや困るぢやありませんか。貴女がそんなぢや仕方がない」

「だッて貞助さん」

かう言つてはお冬はまた泣いた。

吊臺の運んで來られたのは、午後二時過てあつた。障子を外して、室の中に入れて、義兄と貞助と杉山と三人かゝりて、病人の寐て居る蒲團をそのまゝその上に移した。移す時病人の首はぐたりとした。お冬は一人殘つて、跡片附をして行くことになつた。「大抵これて澤山てせうから」貞助はかう言つて金を渡した。やがて病人を載せた吊臺は廊下に出た。其處には蒼白い顏をした人達がぞろ〳〵立つて見て居た。

尠くとも垂死の病人をかうして運び出すといふことは、この病院にも珍らしいことてあつた。摩違ふ人々は皆な振返つて見て行つた。馴染の看護婦の一人は、吊臺の上に枕を高く眼を明いてゐる病人の傍に寄つて、「御大事になさいよ」と聲を懸けて通つて行つた。

やがて玄關から外へと舁き出された。其處て人足達は吊臺に棒を通した。室内から戶外の空氣に觸れた病人の顏には何となく肉の顫動が見えた。お冬は寒くないやうにと落附かぬ蒲團を叩いた。

看護婦が二人、入口の扉の處に立つて見送つて居た。

「それぢや、杉山さん、痰が出たら、すぐ拭き取つてやつて下さいよ」お冬がかう氣を附けると、杉山は「大丈夫、大丈夫です」と訥るやうに。

人足が棒を肩に當てゝ、息杖を立てると、吊臺は輕く左右に動いた。

「靜かに遣つてくれ、重い病人なんだから」

義兄はかう傍から注意した。

吊臺は電車の通る大通を越えて靜かに動いて行つた。人足は二三十間ほど行くと、立留つて肩を替へた。傍からはいかにも重さうに見えた。

女學生が通つたり、娘をつれた丸髷の奥さんが通つたりする高臺の屋敷町は靜かであつた。栽込の綺麗な洋館からは、ピヤノの音が洩れて聞えた。

空は鼠色の雲につゝまれて居た。雨にならうとは思はれないが、暗い欝陶しい氣分のする日であつた。

凪は路傍の楊の樹を吹いて、その葉をガサコソと轉がして行つた。朴齒の下駄に黒のキヤラコの紋附の羽織を着た義兄と、眼をショボショボさせて古い帽子を冠つたお爺さんと、焦茶色の外套を着た貞助と、それに中學の制服姿の政吉と禿頭の杉山——これだけの人々が、吊臺の後について行くさまは、行きかふ人々の目を惹くに充分であつた。

病人はそれでも餘り烈しく咳嗽を堰かなつた。貞助が覗いて見ると、眼を閉ぢて、尖つた鼻を際立たせて、スヤスヤと唯眠つて居る。

『好い鹽梅だ……そんなに心配したほどのことはないかも知れない』。

高臺から町に下りる阪は長かつた。今まで見えなかつた地平線がひろびろと見渡されて、其處には濃い煤烟を漲らせた二三本の烟突やら、赤煉瓦で築き上げられた洋館やら、高い處を滑かに駛つて行く電車などが指さゝれた。折れて曲つた川は溝のやうに黑く濁つて、泥を載せた船や肥料を積んだ船が靜かに通つて行つた。風が寒く岸の楊柳を吹いた。

貞助は重苦しい心を抱いて、一番後から跟いて行つた。今日の曇つた空――それ以上にかれの心は佗しかつた。病人の過ぎて來た一生、それはかれ自からも一緒に歩いて來たものである。かれは自分のライフと兄のライフとを比べて考へない譯に行かなかつた。兄のライフと自分のライフとの岐れて行つた路、それを貞助はよく知つてゐる。『行く處へ行け――』貞助はいつもかう兄に言つた。『己にはさうは出來ない』兄はかう言つて、その行くべき路の方に行つた。

『しかし、死んで了へば――何もない。辛いライフも樂しいライフもない。この病人だつてさうだ。幾日の後、あの目が閉ぢ、あの咳嗽が止みさへすれば、あらゆる悲慘も痛苦もなくなつて了ふのだ――』

貞助は深く考へながら、頭を低れて歩いて行つた。

病人の咳嗽はやがて始つた。杉山は其度每に、其傍に行つて、紙でそれを拭き取つて枕元に置いた痰

壺に入れた。「それ――杉山さん、また咳嗽が出る」義兄はかう絶えず注意した。
お爺さんは辛さうな眞面目な顔をして、トボトボ歩いて跟いて行つた。手に持つた古びた蝙蝠傘を立てゝは、時々腰を延してゐることもある。「お爺さん、此處から車に乘つて行つたら、何うてす？中々遠いてすから？」度々義兄や貞助が勸めても、老爺はそれに從はうともしなかつた。
咳嗽が出る度に、人々は胸を轟かせた。何うか無事で家に著くやうにと願つた。それにも拘らず、咳嗽は段々烈しくなつた。十間と間を置かずに吊臺をとゞめなければならなかつた。
「何うしました？下駄は？」
杉山が跣足になつて居るのを見て、貞助は訊ねた。
「緒が切れましたから」
「下駄は？」
「吊臺の後の處に入れて置きました」
杉山は尻はしをりになつた。摩違ふ人は笑つて通つた。
そこらは病人や貞助が若い頃からよく歩いて通つた處であつた。阪の狹い通には、毘沙門の緣日があつて、夜は植木を冷かしによく出かけて行つた。木犀の鉢を安くまけられて、重たい思をして持つて來たこともあつた。其處には病人の行きつけの理髮鋪もあれば、懇意になつて居る小間物屋の主人も居る。
役所に通ふ二十年近くの朝に晩に、病人は羊羹色になつた洋服を着て、いつも此通を通つた。

今日も同じやうに、大きな肴屋の店に夕河岸が着いて、庇髮の細君や丸髷の上さんや腹かけをした職人などが其前に集つて廉い肴を買つて居た。『大安賣だ――大安賣だ――』肴屋の若い男にかう叫んで客を呼んで居た。

郊外の家近く行つたのは、もう暮方に近かつた。一筋の通――昔は其處に竹藪があつたり、梅の林があつたり、雲雀のあがる麥畑があつたりしたが、今は新しい町並が續いて、夜は明るい瓦斯の灯が晴がましく點いた。酒屋の娘は、丁度其時通りかゝる吊臺を見て居たが、いきなり家に入つて行つて、『原さんの旦那さんが――』かう言つて家の人々に敎へた。

車屋の上さんも出て見て居た。

通りから曲つて入ると、もう其家はすぐであつた。崩れかゝた門、風雨にさらされた郵便箱と表札、鋏を入れない庭樹は、延びた髮の毛のやうに茂つて、入口の三疊の高窓の障子が夕暮の色に際立つて白く見えた。

四邊はしんとしてゐた。

俄かに賑かな足音が門から庭へと入つた行つた。留守番をして居たお文さんの顏が緣側の處に鳥渡見えたが、やがて入口から慌てゝ下駄を穿いて出て來る音がした。

棺の繋つた間を辛うじて通つて、やがて吊臺は緣側近くに据ゑられた。人足は息杖を傍に置いて、額

に漲る油汗を手拭で拭いた。

『中々遠い。柳町の交番の近所だつて言ふから、もつと近いと思つた』こんなことを言ひながら、井戸端に水を飲みに行くものもあつた。

縁側には跟いて來た人達が並んで腰をかけて居た。

『もう、一息だ、中まで運んで呉りやれ』

かう義兄に言はれて、人足は再び吊臺の周圍に集つた。義兄と貞助と杉山とは、縁側の上から病人を受取る役目に廻つた。

敷蒲團を今一枚下に敷いて、枕を庭の方に向けて、さて靜かに病人を其處に臥かして、それて人々は兎に角に胸を撫てた。

『まア、好かつた、好かつた』

とお爺さんも言つた。

『此處の方が好い、此處の方があんな病院よりどんなに靜かて好いか知れない。本當に淸々した。存外、かうして落附いた方が病人に好いかも知れない』貞助も重荷を下したやうな氣がした。

『本當にねえ、まア。それてもまア、よく伴れて來られましたねえ』お文は人足に茶を入れて出した。

『杉山さんが一番大變だッた。咳嗽がよく出るんだもの』

『いゝえ、もう……。それても一時は心配てした』

「神樂阪を上る時分は私も一寸心配した」

義兄は傍から言つた

棒立に立つて、ぐつぐつ言つて居た人足も、いくらかの增賃を貰つて、滿足して歸つて行つた。其處に車て歸つて來たお冬は、一番先に病人の傍に行つて、すやすや寢て居るのを見て、安心して、送つて來て呉れた人々に禮を述べた。「十分な心附も出來なかつたものだから、看護婦達も變な顏をして居た」などと話した。車夫は積んて來た蒲團やら荷物やらを緣側に卸した。

夕飯の準備も出來て居ないのて、取敢へず男の兒は通りの蕎麥屋に驅けて行つた。誰も彼も腹を空かして居た。移轉の時てもあるかのやうに、人々は蕎麥のざるを積上げて食つた。杉山は貧乏德利から、燗もしない酒を茶碗て飮んて居た。

十二

裏の雨戶が閉め切つてあるのて、家の內は何處となく薄暗い。其の暗い光線の中に、病人の尖つた鼻、力のない口、瘦せこけた頰などが際立つて見えた。

それても午後には、枕元の障子に、初冬の薄い日影がさして、朝夕は動けなくなつた蠅がブンブン音を立てゝ居ることなどもあつた。庭の垣の緣に紅白の菊が小さく咲いて居るのが此方から見えた。

離れの四疊半は、此頃ては誰も戶を明けたものはなかつた。其處は書齋て、壁に寄せて大きな唐机が置かれてあつて、其上には古びた昔の記錄書などが散かつて居た。病氣になる前の晩、病人は遲くまて

洋燈をつけて何か調べ物をした。あたりはそのまゝになつて居た。

古い額、古い幅物、――室にあるものは總て主人公の一生を語つて居るやうに見えた。押入の中には、古文書や反古や記錄書が手もつけられぬほど一杯に積上げてあつて、古臭い埃の臭が夥しく鼻を撲つた。

人々は同じやうにして、病人の枕元に侍して居た。病人の咳嗽の音は、依然として四邊に聞えた。

郊外の初冬は寂しくもあり、靜かでもあつた。雨がサツト降つて通ることもあれば、風が潮のやうな音を立てることもあつた。晴れた日は春のやうに暖かで、一田圃越した小學校からは、兒童の騒ぐ音が手に取るやうに聞えて來た。

和歌

尾上柴舟選

細井慶三

○

うらかなしすべて我が身のうれひをば小さき鞄(かばん)に入れて旅出す

思ひきはめ飽くまで旅をつづけんと家出せし子に風なすさびそ

谷間よりあはき日影をあふぎつゝ今日も深山に旅をつゞくる

疲れたる身を砂濱になげやりし旅の男が空をながむる

菜の花の少しまじれる春の草我がゆく道につゞくはかなさ(以上旅出して詠める)

黒くうれて木の實殘れる落葉木の淋しきを見て山をすぎけり

風吹けば山の手かなし黄の砂の埃の中を人の往き來す

白楊の葉ずれはげしき朝あけの空は靜かに晴れ渡りけり

○ 捫垣青花

淡くわくこゝろの疲れ春のひる草をながるゝ日の光ふむ

沈丁花こゝろかなしく君にかく鵞ペンの音のあわたゞしさよ

うは眼してものいふくせの十六の少女なりしも眼にうかぶかな

新らしきネルの單衣の肌ざはりゆふべあかなく麥の香の沁む

庭樹刈る午後の明るさ神經のにぶさ覺えて巻煙草吸ふ

春くれぬ小鳥のごとくわびながら若き男は旅にいてゆく

○ 奥川夢郎

青と云ふたゞ青と云ふいろにのみ眼は馴らされて六月に入る

野より山やまより空へ眼をなげて榛の木立にロシア巻を吸ふ

顔見らるゝがはづかしきとてうしろ向き紀伊の

圖など彈きたる少女
死斯消してまぶたとづればよき歌のたゞひとつ
浮くあはれさびしき
鳴かぬ鳥めしひの鳥の如くにも悲しく「我れ」を
思ひつゞくる
鳥等みな歌へり靑き空を見てその空の下にわれ
等悲しむ
君よりもなほ美くしき子のあるがはらだゝしさ
に憎しみもする
なげ棄てしトルコ煙草の金口にうすくもつれし
むらさきの煙

○　飛川晶欝

ヒアシンス香を吐く暮の一室は居耐へぬまでに
物のかなしき
あたたかき春の日吸ひて木々の芽の延びゆくを
見る瞳のあかるさ
なつかしく春の吐息のかよひ來るゆふべの窓に
愁ひあらたなり
こころよく白紙にペンを走らする薔薇くづれし
朝の卓の上
エニシダのこまかき枝に日ぞふれり輕く病後の
眩暈おぼゆる
ふるさとの寂しき土佐へかへりなば君もさびし
き人となるらむ（野老山愁果君を送る）

○　逸見雨山

過ちし胸のくるしさ詩とすべくあまりに事のま
のあたりなる
ゆくりなく雜報欄に友の名を見いではかなき
思ひする
こゝろよき夏の憂のせまりたる青葉がくれの白
然の灯よ
窓の戸をとざし忘れて寢たる夜のねざめを襲ふ
月の悲しさ

○　若林牧春

春の夜の灯ひとつをよろこびてねられぬわれの
あはれなるかな
わづかなる日なたを追ひてうつりゆく猫のごと
くもわれは世に生く
疲れたる胡蝶のごときうつくしさ花見がへりの
君が足どり
朝起きてまづ太陽を仰ぎ見るこの若人に憂ひあ
らすな

ポイントをかへす響きのさびしさよ停車場裏の冬の夕ぐれ

春の夜や散りたる花に月光のうすく光るを踏みてかなしむ

○　比　古　思

冬の日の弱き光にてらされてわづかにふるふ白きカアテン

草の香の黄なる匂ひを嗅ぎにゆくうらがれはてし冬の日の午後

濁りたる空氣をすべり耳をうつ彼の雜音に囚はれてゆく

酒甕の封じ目を切るよろこびに似し心地して君にむかひぬ

おほひなる力得まくも得られざるおとろへ人となりにけるかも

灌木の林の上に月ぞ浮くうらがれはてしあはれなる秋

○　井　田　葉　歌

歌ふにはあまりにかなし目を瞠り櫟林の煙れるを見る

濕地に櫟若葉のかげ淡き大久保町のひるのしづけさ

新たちの貸家の裏のさゝ川に芹の根白くゆらぐ夕暮

かなしきは君なき室に散らばれる蜜柑の皮を見つむる心

ふみなれし事務所の前の石段に靜かに散れる白椿かな

○　安　井　竹　美

別れたる午後の瞳にしみてくる五月の末の茅花の穗並

木蓮のしみもつころとなりにけり春の愁ひぞ身にいたましき

葉脈を明るくみせてながれくる桐の葉かげの初夏の日光

たんぼゝの夕日の前にとべるあり春のをはりの人の戀ひしさ

なげやりの遊里の人のたましひか春のをはりにとべるたんぼゝ

○　鈴　木　風　影

半身を湯槽に沈めつくゞゝと春の眞晝の日の色を見ぬ

明日と云ふ新しき日の輝の來ることさへもなやましきかな

漁家は未だ起きず渚の巖蔭の椿ばかりが輝やける朝

誰一人得知らぬ町に迷ひ來て人にもの聞く時のさみしさ

○　　　　福山杜鵑花

行けばわが眉に向へる檜山霧に匂へるあか躑躅かな

思ひ見るかの國境の月照れる山のあたまをよぎる風あらむ

見はぐれし夢なつかしみ丘の日の花の前なる涙尊とし

思はぬにあらぬ罪をば責められて庭のついじに眼を落すかな

○　　　　林白愁歌

人妻と呼ばれて尙も歌を咏むいぢらしい哉君は十八

梨の花ゆらげり今宵冷やゝけき闇の親しく思はるゝかな

靜やかに微光の中をゆれて行く車の幌のなつかしまれぬ

○　　　　武田青眼

春の日の空にも似たりわが心かの白雲も來て映らなむ

やはらかき土を素足にふみゆけば柳の芽より滴する雨

誰かきて耶蘇を說かずや悲しくもわが心こそ自棄を思へれ

○　　　　龜山敬外

鷺草になまあつき風ふく頃を庭に水まきある一人かな

いらたちし心を丘に持ちて來ぬうすくもりたる初夏の夕暮

終日をふるき机の上におきし腕の疲をおもふ春の夜

○　　　　杉原紫舟

春雨にほのうるみゆく灯の色は血の色にしてなつかしきかな

草の芽の玉のやうにも輝きて春の日を吸ふ野の面(おもて)かな

夏の日の光のなかの涼(すゞ)しき瞳(め)黑き翡翠(ひすゐ)をくしけ

づる君

○　堀　斷絃

さら〳〵と狐色なる枯草を流れてやまず初冬の風

冬の日のくれつくさんとするまへのしばしが程の空の黄色さ

茶器などをとり亂したるなかに寐てしづかに波のさゞめきをきく

○　森　一雄

けふも亦ミルクホールに麵包をかむ親なきわれの生は淋しき

○　木暮刀水

ふるさとの夜霧のなかに立ちぬれて君よぶ時に吹きし口笛

ふるさとを戀しと思ひかなしとすわが前の身の墓のごとくに

山の石われ疑はず落て行く出れる道もえらぶひまなし

○　桑田白水郎

山の裾白う枯れたる熊笹に風さら〳〵と渡る夕ぐれ

病める身は夕べあへなく泣れぬる葉ずゑ葉ずゑの雨のしたゝり

春が來てもののうれひと歡びと亂るゝこころのやるせなきかな

○　澁谷せゝらぎ

古埴輪類のそげしが並び居る博物館の晝の寂しさ

歸り來て冷めたき部屋にはらばひて燐寸探るこそ泣かまほしけれ

○　丸山英

おほかたの刺戟に慣れてこのごろは世の單調をうれしみて生く

山上の湖水にも似てかの瞳靜かに物をうつして澄めり

○　桂田白露

なりはひといふその聲に鞭うたれペンを持ちてはため息をつく

○　朝山茶花

いかなればかくは哀しき青々とはてなき空に春はあまねし

遲々として春の日渡る大空のうす青色に涙して

立つ

○　吉井南鷗

柳の芽日毎に青くなりまさる騒がぬ心春とあゆめり

○　山邊溪韻

たゞ一人夕日の町をかへり來ぬたらはぬ心率てかへり來ぬ

○　月森神來

心ゆくばかりおほきく笑ひたる後も一縷の哀愁のこる

嫁ぎての後のさびしさ露ばかり知らぬ妹を見れば泣かるゝ

○　鬼百合子

病みぬればおなじ病み人多かれと咒ひて見つるこゝろ憐れむ

○　二松泰河

中學のひとなき庭の兩環に蜻蛉まつはるはつ夏の晝

○　八重野武郎

さら〳〵ととゞこほりなく書き終りペンを銜へて物思ひする

○　高杉露星

川原路や玉になる石ならぬ石あまた蒐めてえりて見るかな

○　西村孤舟

雨が降る北風が吹く雪がくる衣更月の日もそれだけのこと

投稿以外に多く、繰越しのとあはせて掲載し得ず、更に次號に廻せしもの中に及べり。諒察を乞ふ。

應募和歌は
東京市小石川區原町百三十三尾上柴舟宛の事

俳句

茂

高田蝶衣選

瀧開きとて酒振り舞も茂る里　波月
義士の裔茂を楯に住みなせり　同
尖塔の趣を廟茂りけり　同
湧井あるを佛徳に歸す茂哉　同
瑠璃堂の茂書寮に訪はゞやな　同
定期船來て茂る島果に市す　月精
書庫敷地木挽場と墓域相茂る　同
早瀬舟中繼屋この一と茂り　同
遠漕日程茂江の午睡算したる　同
鳥居筋茂る頃箙賑へり　素車
里茂り水汲場珍ら乾く日や　同
忙中の閑畫筆五山茂る頃　同
奥丹波降る朝は里茂り伸ぶ　同

灑疏水漕ぐを禁じて茂りけり　摘星辰
裸棺舁ぎ行くを茂路曲る　同
雙手擧ぐべき城尙落ちず茂りけり　同
十藥も試す黴疾や萱茂る　松蓼
吝なれば憎謡もありて家茂る　同
僕と居て話題近里や寺茂る　同
我棺に石を選ぶや木の茂る　湧漁聲
蕃族の馘首を憶ふ茂かな　同
神代記貌として草茂りけり　同
潮筋の迂回乘れば蘚岩茂樹の俯す　都月
故人の像刻むに茂み通ひけり　同
茂る樹に訪ひ鐘吊す官舍とも　同
風蝕の海透き穴も茂り岩　緑星子
茂と題す書趣寺に得て長居せり　同
守錢奴と忌まれ家高茂かな　同
禪中の妄念を愧づ茂かな　玄波
剃らせたる子を見に來るや夏茂　同
小屋出たる粉挽立つ岸茂り映ゆ　同
箕埃の湖へ流るゝ茂かな　公子樓
山寺の石組の鴨や草茂る　同
臍にある瀬響きや茂る杣が宿　同

機むらを梭音にも云ふ茂りけり　花畝史
寐食者足らはぬもよし茂る頃　同
温泉尻茂り漸盛をおもふ旅舍増すに　百幽
炭場固め山寒めく茂り螺道して　同
落罠を覗けば暗し茂り山　翠郭
神の橋の奇勝に翳す茂り哉　同
落陽を占む茂り島舟もなき　雪骨
海鳴れる悲みの夕茂りけり　同
囚徒耕す日三竿や茂りけり　朱星
江の茂り客あれば纜く涼み舟　同
茂る頃杣が娘を假戀うて　碧松
里舊家的場も存す茂りかな　紫海
疫調べ受く船つけぬ洲の茂り　牟婁男
弓師逝て休會暫し木の茂る　水馬
瀧場茂り行衣に白う月榮ゆる　志山
茂る山訪へば陶爐の凪もいふ　星溢樓
戯畫弄す夕や茂る香に慣れて　三石
夜灑ぎの河原の石や草茂る　愚案
反臣の書簡秘む寺や高茂り　竹美

雜題　蝶衣

痺れまじなふ薬しべ乞へば鳴水鶏
流蛇岸に着くを見居れば遠水鶏
書寫山高見の寺にて
天井に貼れる方位やほとゝぎす
杉戸繪を見て返す廊やほとゝぎす
畫賛
僧がつゝく鍋鐵兜やほとゝぎす
幽蘭の香に岩間蟹出遊べり

課題　俳　六月十日〆切
秋近　七月十日〆切

規定　▽淡路國假屋在釜口高田蝶衣宛
▽一人三十句限▽文字明記の事

評論

英帝戴冠式

英國皇帝ジョルジ五世戴冠の大式、本月を以て行はれんとす、萬國の衣冠、肅々として倫敦市街を行列するの盛觀、殆んど想見す可きものあり。

戴冠式の順序は如何、六月中の豫定計畫を記すれば、則ち下の如し。

十七日より十九日迄、外國代表者の謁見△二十日バッキンガム宮大晩餐會△二十一日コンノォト親王の饗宴△二十二日戴冠式日△二十三日倫敦市街行列△二十四日スピットヘッド大觀艦式△二十六日英帝及皇后スピットヘッドより倫敦に還御△二十七日バッキンガム宮大園遊會△二十八日外國遣英特使等歸途に就く△三十日英帝水晶宮に於て兒童十萬人を饗し給ふ。

參列外國代表者は下の如し。

獨逸皇太子同妃△佛國トジョンキイル中將△米國ジョン、エッチ、ハモンド△墺國皇儲フランツ、フェルヂナンド△西班牙フェルナンド親王(皇帝の從兄弟)△土耳其皇太子△伊太利アオスタ公△日本東伏見宮殿下△和蘭ハインリッヒ親王△淸國載振△塞爾比皇太子△露國(不明)

其他領土四海に遍き英國の事とて、多數の殖民地屬邦代表者あり、何ぞ尊嚴壯美、一世を驚かすの偉觀無かる可けん哉。

顧みるにジョルジ五世の登極は昨年五月六日に在りき、戴冠式が今年を以て擧行せらるゝは、一箇年の服喪服に制せられたるに依る、抑も皇帝は謹嚴篤行の君子として知らる、稍々父皇の圓轉滑脫を缺かせ給ふ嫌ありと雖も、叡明の資、有爲の材、以てアルビオン島の誇りとするに足る、今此盛儀に當つて英國民の欣喜、それ果して如何ぞや。

風聲鶴唳

英米仲裁々判條約說、一たび傳へられて、天下驚く、曰く累を日英同盟に及ぼすの恐ありと、仲裁々判條約は畢竟仲裁々判條約而已、豈雙方紛議の平和的決定を期する外あらん哉、吁嗟風聲鶴唳か、風聲鶴唳か、我國民が近來平維盛を學ぶの狀あるは、それ何の兆ぞや

排ツラスト判決

五月中旬、米國大審院、米國對スタンダード石油會社事件に關し判決を下し、同會社の解散を命ず、蓋し一世の快事也。

顧みるに同訴訟は一九〇六年ミゾリー巡回裁判所に提起せられ、翌年會社敗訴し、大審院に控訴を見たる也、目下スタンダード石油會社の支配下に在る會社は六十五箇、間接的關係あるもの又四十九箇を以て數ふ、之をしも排ツラストの所謂「商業妨害」を意味せずと言ふを得ば、天下何處にか不法のコンビネーションあらん。

國際海獸保護會議

英米日露四國の海獸保護會議、五月十八日華盛頓府に開會す、列席者は英國大使ブライス氏、米國々務卿ノックス氏、露國公使(摩洛哥駐劄)ボトキン氏、日本大使内田康哉男、同水產局長道家齊氏等より成る。之を見るもの、誰か米國の成功を認めざらん、何ぞや、海獸(即ち膃肭獸)産地は米國第一に居り、保護の必要切實なるを感じつゝあるも亦米國なり、從つて保護會議の利益を受くるものも亦米國なる可ければ也。特に前回(一八九七年の華盛頓會議)迄は、日米露のみより成り、英國は則ち與らず、爲めに會議も失敗に歸したりしが、今や米國は英國をも說得して之に參加せしむるを得たり、是一は近年プリビロフ島方面に於ける加奈陀海獸獵衰頽し、英國も昔年程同獵獲業を重視せざるに依る可しと雖も、亦米國が最近仲裁條約計畫其他の爲め、愈密接し來れる英米關係を巧みに利用したるに依らずんばあらず。

雖然、吾人は自ら顧みて竊かに怪む、我當局者は果して海獸保護の爲めに我遠洋漁業が如何なる大犧牲を忍ばざる可からざるを知る乎を、蓋し我漁業が過去十

年に於て、驚く可き發達を遂げたる所以如何、海獸獵護最も其功ありたるにあらざる乎、然るに今日此利益ある事業を放棄せしめんとするもの、則ち今回の會議也、知らず當局者は如何なる條件の下に此讓歩を肯ぜんと欲する乎。

蓋し海獸保護は必要なり、然かも海陸兩生の動物に對して、海獵を禁止し、陸獵を許すは、偏頗至極也、我當局者は、米國が陸獵を禁じたる程度に準じて、我海獵問題に讓歩す可き而已、米國に盲從するは斷じて不可也。

佛軍摩洛哥遠征

摩洛哥ベルベル族叛して、フェッ府危險なり、佛國爲めに救援軍を派遣す、西班牙はアルゼシラス協約に依りて、佛國と同じく摩洛哥軍隊の訓練を受持つもの、嫉視甚し、獨逸新聞又盛んに怨言を放ち、威脅を試む、

形勢斯くの如し、誰か復又摩洛哥問題の再開無きを保せむ、之を防ぐの途如何、他無し、叛亂鎭定後、佛軍直ちに摩國を撤退するの一事のみ。

(備考、今春摩洛哥蠻族、神聖戰爭を主張し掠奪を始め四月上旬勢力大に振ひ、官軍屢々敗る。賊遂に摩洛哥王ムライ、ハフキッドの兄弟を擁して眞王と稱す、佛國ブレモン少佐のフェッ救助隊フェッ着以後賊勢衰運に向ふの色あり)

清國新内閣

五月三日清國新內閣成立す、任命閣臣下の如し

總理大臣慶親王、協理大臣那桐、同徐世昌、外務大臣梁敦彥、民政大臣肅親王、度支大臣載澤公、學務大臣唐景崇、陸軍大臣蔭昌、海軍大臣載洵、司法大臣紹昌、農工商大臣溥倫貝子、郵傳大臣盛宣懷、理藩大臣壽耆

以上を國務大臣とし、總理大臣は舊の如く外務部事務を管理し、總理及協理大臣は憲政編纂の大務を兼ね、別に我樞密院と見る可き弼德院成り、陸潤庠議長に、榮慶副議長に任ぜらる。

英獨諸新聞は評して曰く是清國立憲政治の實際的進捗と果して然らんか、是清國の幸福也、然かも吾人は尙書と大臣となり、各種の名稱が變化したる以外に、遺憾ながら何等の實際的進歩を認むる能はざるを奈何。

英清阿片協約

英清阿片協約成る、之を欣ぶもの、豈清國官民のみならん哉。

顧みるに清國民の衰弱無氣力は、阿片の害毒に依るもの少からざりき、是に於て乎清國政府は、一九〇七年英國との間に阿片輸入制限協約を締結し、印度阿片輸入額を一年五萬一千擔(ピコール)と見積り、年々五千一百擔(ピコール)宛遞減し、一九一七年を以て阿片輸入を禁絶せん事を期したりき、然かも英國政府は之が承諾の條件として、清國內地の阿片栽培面積遞減を要求し、先づ三箇年間、試みに右遞減を實行し、清國側が果して遞減の實を擧ぐるに於ては、更らに遞減を繼續す可きを約したりき、今回の協約は則ち此遞減繼續の公約也。

否獨り遞減繼續確定せるのみならず、其年限も短縮せられ得可き機會を生じたり、何ぞや、同條約は一九一七年以前と雖も、清國の阿片栽培禁絶成功するに於ては、印度阿片輸入全禁を見る可き旨規定したれば也。

吾人は事玆に至りたるを見て、深く英國に志士仁人多く、利害得喪を輕しとして、公議を重しとし、能く政府を輾轉して、玆に至らしめたるを美とせずんばあらず、然かも清國の阿片栽培禁止にして成功すべくんば、彼等の義心を以てしても恐らくは、政府を動かすの口實を得ざりしならん。然らば則ち新協約を成立せしめたる功勞は寧ろ清國側に在りと言はざるを得ざる也。

墨國內亂終了

墨西哥叛賊、五月十日ジアレス市を占領し、翌日革命派新內閣を組織す、其面觸下記の如し
外務卿ゴメス、大藏卿ギュスターヴ、マデロ、陸軍卿アランサ、司法卿スアレッタ、
大統領は言ふ迄も無く叛將マデイロなり。

爾來一週日、墨西哥政府を屈服し、大統領チアス氏辭職す、次で外相ラバルラ假大統領となり、叛將マデイロ、其高等顧問となる、愈革命派萬歲也。

然かも吾人は此間に在つて最も老大統領チアス氏の心事を憐まずんばあらず、氏や一八七六年始めて大統領に選擧せられ、爾來三十餘年、國政を掌握し、宛然一箇の帝王也、而して今や俄然身境變轉、一布衣となる、是戰敗に依るにあらず、中央政府の威力足らざる

にもあらず、唯米墨國境附近の戰亂永續せんか、遂に米國に干渉の機會を與へ、その野心墨國を危うす可きを恐れたるに外ならず、誰か斯くの如き辭職に對して一片同情の涙を吝むものぞや。

土耳其内閣動搖

土耳其内閣動搖し、藏相ドシヤ、ウィッド辭職す、藏相の辭職は再び軍人派、高政壓策贊成者の跳梁を促すに至らんか。斯くの如くにして、回基兩教徒の衝突、乃至勃牙利、モンテネグロとの紛爭を挑發するなくんば幸ひ也。

（懷砂隱客）

文藝委員會に對する疑問

紅　荳　生

◎諸家の文藝委員會評は收めて說苑欄に在り、又些辭の技に贅する要なく、讀者も亦已にそれにて滿腹したらんも、尙ほ吾人に異なる觀察點よりして多少の言はんと欲する所あり、暫く玆に語るを許せ。

◎文藝院の先聲や久し、久うして後文藝委員會なるもの產る、男兒の產るゝかの豫想の下に女兒の呱々を聞きたるが如き感ありや否や、そは暫く問はず、萬衆の期待心が然くそれに比すべく大なる者あるやを知らざればなり。

◎只それ產れたり、產れたるからには何とか眼鼻立ち揃ひて生ひ立つ者の見たきに非ずや、徒に子澤山の貧乏者の如く餓鬼扱ひに厄介がるにも當らざるべきなり。それは言はでもの事なり。此に於てか吾人は先づ政府者の眞意と其人選の標準とを揣摩せんと欲す。

◎文藝委員會の頭腦を見るに頗る多樣なり、而に之を檢するに、こは國語調査會等に見るが如く、凡そ廣義に見たる文藝の閾に呼吸する凡ての代表的人物を網羅せんとするが如し、去月廿二日の文相邸に於ける同委員招待會の談話の模樣より察するも亦之を證す。曰く何某、曰く何某、純然たる戲作者も見ゆれば紀行文家も見ゆ、國文學家も見ゆ、立派なる評論家も見ゆれど亦箇の新聞記者も見ゆ。文藝の範圍を廣く包括的に定めたりとせば固より首肯かるべし、されば此の如くにして抑も何をか爲さむとする。

◎文藝委員會なるものは抑も何をか爲さんとする。吾人は暫く其官制第一條を讀まずして單に頭腦よりのみ判ぜんか、頗る疑なき能はず、彼等の中には萬衆の認めて全然文藝批評の落第者と做さんもの少からざればなり、單に明治の文運に貢獻したりとのみ見らるべくして、今は寒日和に行火を抱へ水洟を啜り上ぐべき兩々の樂隱居、文藝の店は息子に任せて然るべき好爺さへ二三氏交れればなり。

◎之を文藝の功勞者として德を表彰するものならば則ち可なり。されど此意義に於てすれば捜れたる者により大なる功勞者あるを憾むとはいへ、洩るゝを許すの制自ら然らしむる處其此に至るは固より當然のみ、文藝委員會は其名の語るが如く實は爲すべき大なる事業を有する一種の會なり、即ち同會官制の第一條を顧みしめよ。

◎同會官制第一條に曰く「文藝に關する事項を調査審議す」と、果然デクの棒たるを許さゞる也、而かも其調査審議の內容は如何、今日迄輸聞する所にして略ぼ確實なるものは年々の作品の審査なるもの是なり、これは文相邸の招待會に於て文相より語り出でたるもの。

◎業腹居なる語を憚なく剝き出せばデクの棒也。然らば吾人は今の文藝委員會に於て多大の矛盾を感ぜずんばあらず。

◎審査には批評眼を要す、然らば審査委員は又自ら批評眼あるものならざるを得ず。然かも文藝委員會の成れるや文藝の發達を圖るものなるべし、發達は株を守つて兎を待つの謂にあらずとすれば常に新思想を解し得、新主張を立し得、不斷に文藝の氣運を高處に指導し得るものならずんばあらず。故に其專攻の部門は詩、歌、小說、劇作何はありとも、常に一貫する文藝の根本義を解しそが發達進化して已まざる不斷の潮流に親み居るものならざるべからず。

◎諸君、此標準を以て暫く文藝委員の顏觸を見よ。吾人は文藝を廣義に解するを決して非難せず、要するに文藝の網は如何に大にして包括の範圍廣しとするも、而かも投網の索目盡く一處に輻るが如く動かざる龍頭の如き根本義はあり。諸君暫く此龍頭際を握つて而して其索目に嚮へたる委員諸士の顏觸を見よや。

◎作家の必ずしも評家に非ざる斷らずもがな。作家には只一種の混沌たる氣分を有し、之を書き現すにのみ勉むるものあり、此の如きも亦作家たるべし、而かも只作家たるの故のみを以て之を批評家とせんには、只自己と同趣味の作物に對する印象評を下す以外に何等の能力なきもの往々あるべし。審査を事とする委員會に此徒あらばデクの棒のみ。

◎作家々々とのみ一口に言ひたるは言稍偏せん、固より然り、請ふ須く此標準を以て他にも臨め、吾人は言の冗漫を恐れて餘は諸君の推想に任せん。

◎世評は新聞記者の頭顱二を加へしを以て往々噴飯の料とするが如し、一應はそれ然り、されど再應は然らず、是には吾人に聊か辯あり、只一轉語を許せ。

◎文藝委員會は成れり、而して其宣言を正直に聞き濟まんか、純正の文藝の爲には甚だ結構なり。何となれば該委員會は純政治の標準を離れて別に文藝を保護する所あるべければなり、只それ然らば將來警視廳の文藝取締とは如何の交涉あるべきぞ。

◎警視廳の取締は頭燃を救ふが如く急を要す、而かも文藝委員會の審査は其性質上急なるを得ず、故に手取り早き交涉を兩者の間に有するを得ず、又其標準とする所吾人の前項所說の如しとすれば兩者元より合致すべきに非ず、一は少くも純然たる文藝の標準を以てす、他は純然たる政

治上の標準を以てす、而して吾人は元より二ながら之を承認するを惜まざるの襟度を有す。

◎理想は現實に先つ。而して純然たる文藝の審査は時を離れたる此最高標準より下すを常とし、又せざる可からず、然るに政治上の標準は常に現實に在り。故に文藝の標準よりして有價無害のものも一方警視廳眼よりすればそを是認しつゝも而かも知識上に於ける民度の如何よりして劣情挑發其他の弊害あるべきものあるべし、低級の知識に居る市井の雜輩は乾燥無味なる一部の造化機論、尙ほ時には淫蕩の媒たるべきが如く警視廳は時には之を禁止せざるべからず。

◎然らば玆に起るべき問題は警視廳にて發賣禁止したる作物は文藝委員會は之を審査の議に上すべきや如何是なり。されど此疑問は要するに幼稚なり。文藝を尊重する委員會は之を公平に考へなば議に上すに於て吝なるべからず、而して偶ま傑作なりと看做さんか、之を特別に保存して機を見て世に發表すべきもの也。

◎美とは何の時ぞ、要するに吾人は廣義の美は善を包容す、少くも美と相悖らざる者との見地に立つ。故に吾人の理想的の文藝委員會なるものありて之を是認し、而かも今世に公にし得ずとする事あるの作物は、即ち只今公にし得ざるのみ、今の低度の知識階級に向つてのみ公にし得ざるものなりとするものと解せんと欲する也、故に五十年の後なり、百年の後なり、時の當局者が其民度の如何に察し之を公にするも弊害なきを親取するの日あらむを豫期して語るものなり。されば此の如きの作物に在つては是に授賞するが如きは或はあるべからざるべし、其處に至れば假令文藝委員會と雖も亦一種の政治的約束なくんばあらず。

◎されど人の見地は爾く理想の如くなるを得ず、警視廳眼と文藝委員會眼とが其知識上の民度を察するに於て相異なる事ありとせんか之を如何すべき是れ又其解釋は無雜作なるべし、形式上より察するも吾人は其專門を以て立てる文藝委員會の決議に其眼識の優尙を許さゞるべからず、即ち一旦警視廳眼にて禁止せるものも文藝委員會眼の是認に逢ひ、之を發表する苦からずとの決定を得んか、直に警視廳は其敎に從つて禁止を解くべきものなりと信ず、恐らくは當局此議あらむ、無くんば新に其道を講じて可なり。而して時には發賣禁止の作物が却つて文藝委員會に於て授賞せらるる事なしとも限るべからず、此の如くんば初めて文藝委員會の權威有り、吾人は痛快を叫ばざるべからず。

◎對警視廳の問題はそれにて可なり去れど文藝委員會内部に於ては如何想ふに我文藝委員會は官制によつて文部次官其會長たり、從つて政治上に關係ある一機關たるや免れず、之を以て其人選中にも純正なる文藝家と然らざる官僚派との混在を免れず、然らば官僚派の目と、純文藝家の目と常に兩樣に輝くなるべく、辯言すれば知識上の民度測定の上に政治標準の目と文藝標準の目との二種輝くべし。「人を見たら泥棒と思へ」は政治本位の人の陷り易き目の光り樣なり、「渡る世間に人鬼はなし」は文藝家側の人の陷り易き目の光り樣なりとせば、其作品審査の後、更に世に發表するせざるの決を與ふるに當つて如何すべき前者は見る事低きに失

し後者は見る事高きに逸す。
◎吾人は此に於て新聞記者よりの人選當を得たるを思はずんばあらず。實際の人物を拉しての議論は暫く措く。少くも其形式に於て冷かに見る第三者の眼より之を否認するを欲せざるもの也。
◎何となれば蛇の道は蛇と言ふが如く、常に社會に接して働き又常に社會を研究しつゝある者最も能く社會を知るべければなり。卽ち其知識上の民度の如何の如き、道理上航海者に於ける海圖の如く、閉ぢたる眼にも尙ほ明瞭なる底の物ならざるべからず。彼等にして比せず黨せず、公平なる識見を以て其間に自己の信ずる標準を語らむか、文藝對政治の關係點に於て彼等より最も眞求の味方たる判斷の下らん事を豫想し得るものなり。
◎されど是も人に由る事なり、一世の文運を指導すべき位置にある文士にして實は時代後れの舊頭腦あるものあるが如く、新聞記者必ずしも新聞記者たるの本領を有するものとは斷ずべからず。されど蘇峯氏と北鷗氏。共に其所管する新聞に於て文藝の縁淺からず。特に後者の如き教育新聞と稱すると同時に又文藝新聞たるの古き歴史を有するもの、政府者の人選、偶ま此二氏に及ぶは敢て妥當ならずとせず。
◎吾人は當局者の着眼の那邊に在りやを知らずと雖も、一方通俗教育委員會に於ても亦讀賣より主筆笹川潔氏を拔く、文藝と教育の兩委員會に同一新聞より各一人を拔く政府者の用意は頗る周到なるを思ふ。只それ置れてもいふ、文藝委員會に於ける新聞記者の働くべき事は實に前項所説の範圍に限るべく、これ以外の容喙は實は各自に深く反省して其本領以外の力量に謀らざるべからず。
◎要するに實際の審議の方法は如何、或は各部門に細別せられて、而して、其各主任の意見が常に他の群盲を率ゆる事ともなるべきか、然らば吾人の憂ふるが如くに憂ふべき結果の或は萬一なかるべきやも知らず。假に然りとせば可なるが如きも、何の要ありて政府は此群盲を容るるを敢てするか、之を當局者の不明に歸せずんば遂に其心事の如何に思ひ到る外適當なる解釋を得る能はず。疑問は依然たり、暫く筆を擱きて更に是非を他日に期せむ。

戲曲「ハムレツト」の第一暗示

舞臺稽古の日にも、初日の二十一日にも、私はたゞ一個の若年者として、あの荒野のダムロのやうな帝國劇場の表口を入つた。若年者の此公演に對する興味は殆ど初めから二日のハネまで減退するといふ事がなかつた。それ程此の劇の上場は修練されて居た。それ程確定して居た。舞臺稽古と初日との相違は、背景の目立たぬ一部を除いたのと、與堺男の調子と詰の場の王を討つハムレツトの所作が、幾分違つてゐた位のものである、何れを評の眼目に置いてもいゝ位であつた。唯、劇場で燭光を惜んだ舞臺稽古の日の方が餘りに舞臺の輪廓を鮮にした初日よりも第一私を勞れさせなかつた。觀覽所の燭光の多過ぎる事は、殊に舞臺にかけ

る光線の貧弱なのに照應した。背景の出來すぎたに、シツカリと歩いて來る幽靈、カンヴスの高過ぎた城に、不完全極まる日本人の顔音、此の第一幕四場は、勢ひ興行者をして「亡靈出現の場」といふ無意味な當て場を思ひ付かせざるを得ない。好奇心ばかりかと思はれるやうな淺いハムレツトを見ながら、私は長い事おとなしくして居た。可なり憂欝に見える廣い／＼城中に、「ハムレツト」といふものの背景が興行者の手管かわからないやうな單純な色のキモノを着た人が大概目見えをした。

あらいおぢいさんは坪内博士である。幾百回も精練された科白は、新しい博士の科白、新しい博士の肉聲をさへ之等の俳優に注射してゐる。餘りに音樂的な科白の構造はこゝに、あるロマンテイツクな甚しい效果を收めて居ると同時に、坪内博士のイルージヨンと新しい試演者の眼高手低といふ事との切ない關係を思はしめる。更に沙翁に於けるトガキの努力と、自分の役目を受持すぎた俳優諸氏が、學校に於ては數へられ過ぎた人々であることを思はしめる。或は數へられ過ぎずして相談し過ぎたのが、土肥春曙氏一人であるかも知れない。いゝ眼を持ちそこねたクローデイアスと調子のいゝポロニアスと徹底せずに考へ込んでゐるホシレオや身體のこわいレアテイスと精神の集め所に困つたやうなガーツルードと、抑へる事の出來ぬある惡いものを持つてゐる墓堀男等に比べれば、土肥氏だけは此王國の王子に相違ない。たゞ土肥氏はハムレツトよりも若く、ハムレツトよりも王子に近い。王子の狂氣を待つ間の完全な十八世紀の芝居を見ながら、カインツの顔やアーヴキングの眼等を弄んでゐると罷音の朗讀がすみ、チロイと當てゝ經過する獨白の場がすむ。狂氣を伴はつて、ハムレツトは現代人になつた。シクエスピアの藝術だ。藝術だ。藝術だ。こゝでは藝術でむせるやうだ。

あらいおぢいさんは坪内博士である。この次あたりの公演には、博士はその子遂を愛すればそれで足りる事にならう。そしてならう事ならその方がいゝのである。第三幕から劇は漸く暗くなつて來る。劇中劇の場てのハムレツトが狂言はその暗の一本のマツチである。土肥氏の藝術も或はさうではあるまいか。あはれなる色白の王が憂愁の紫を着て苦み惱むと、光線に豐かな、さらに迷ひ出したやうなハムレツトと理解のないガーツルードとが、ウキツトの眼立つ第四場である。ジツとしては居られない苦誅の場である。單純なモノログでない此の中のモノログは、母と觀衆とに對してさま／＼の苦諫をなげる。シエクスピアの藝術だ。死んでもハムレツトの後見になる亡靈は矢張り大きな藝術である。

一番ダレるのは矢張、この王とレアーテイズとが王子の噂をする處であらう。このオフイリアを人形だといつた此の劇の本國人等は忘れて、單純な役である、一番よく出てゐるであらうと思ふのが至當である。表情も柔らかだし、暗示もかなりに充實してゐると思ひたい。少くもその他の俳優諸氏はオフイリアの狂亂の爲にあの一場は雇はれて居たやうに見えた。

オフイリアが死んで、劇は墓地まで落ちて來る。會堂の鐘が今にも陰氣に響いて來さうだ。そこへ日常のハムレツトは墓地のハムレツトが

現はれる。沙翁の疑と說明とはこゝに多塡に投げられる。墓堀男はさらに之等を墓穴の中まで落して了ふ。

ある樂觀の屈服せぬ妨害がどうしてもこのあたりで出るやうであるにも拘らず、力――と云ふものを私は最多く此場面に認めた。シエクスピアの藝術だ。大きな藝術だ。

復讐のカタストロフのあのゴタ〳〵した有樣を、その夜の眠の冒頭につけて、二夜の私は逃げるやうに、寒い夜更の堀端とさらされた海魔の死骸のやうな大劇場の周圍に別れた。（青二）

新刊批評（七）

▲書齋より街頭に

田中天堂著　廣文堂發行

沈滯せる今の評論壇上獨り異彩を放つて極めて活氣に富んだ評論の筆を擅にし、自由想家としての面目を明快に發揮し居らるゝものは王堂田中喜一氏である。此處に收むる十三篇は近く兩三年間氏の物せられた論文中、其十三篇を抽いて先づ世に示れたもの、是に於て尤も大なるものには「自由思想家の倫理觀」と夏目漱石氏の「文藝の哲學的基礎を評す」の二篇がある、後者の如きは實に二百〇九頁殆んど全卷の半を領して居る。が前者は丁酉倫理學會講演集に、後者は明星に、共に深り讀者の普遍的ならぬ雜誌に現れたのだから、玆に盛裝して新に現れる事となつたのは喜ばしい。其他「近時の文壇に於ける評論の價値」を初として「公準」、「哲學の將來」、「ニイチエのザラツストラを論ず」等の十一篇、皆充實せる思想內容に富んで居るもので、眞面目なる讀書の見遁すべからざるものと思ふ。氏の思想根柢は極めて堅固に築かれて居つて、之を大經として一糸亂れず、哲學にまれ文學にまれ、倫理にまれ、宗教にまれ、社會にまれ、悉く一元的にそれより派生せしめて論述される所は、他の評家と選を異にし、水際立つて鮮かに見える。それだけ又容易に他より首肯されまいと思ふ觀念も其處に幾多存在する樣に認める、が兎に角新味がある、そして其立論の見地を極めて大處、高處に据ゑらるゝ爲に、何となく讀んで氣宇の濶大を覺ゆる事、宛も高嶽に踞して千尋の谷間を覗く趣がなる。全篇四六二倍の五百二十八頁、頗る厖大のものだが、併し其思想の大綱を一わたり知るには骨は折れぬ、初めの「公準」と「哲學の將來」二篇丈で澤山である。之を精讀してかかれば後は庖丁の牛を解くが如くにスラ〳〵と分る。其思想の批評は兎も角として近來の希覯の良著たることを斷言し、普く之を讀者に推薦する、尚ほ後學我等の如きものにも聊か御尋ねして見たい所もあるが、餘白のない爲遺憾ながら本號には載せる事が出來ぬ、屹度次號に於て改めて評論欄で述べる事とする。ギルトトップのフリーエッヂ、甚だハイカラの美本だ。（定價金壹圓八拾錢）

▲模範英和辭典

三省堂發行

英和の中辭典としては矢張り三省堂發行の新譯英和辭典が是迄一番世に行はれて居たのだが、それにまだ遺憾の點が少くないとして、今度更に著者の數を增し、神田乃武氏外、横井、藤岡、有賀、平山の四博士に加ふるに醫學では樫田博士、工學では高松、中村、寺野の三博士、法學では江木博士、理學では神保博士等、外に肝付海軍中將と、合せて七氏を以てして新に此辭典を出した。中辭典には携帶と索出とに便ずべく容積を小にする必要があるから、勢ひ苦心を要するのは其語の選擇である、

次に其解釋繁簡宜きを得る事である、此點に於て從來の新譯英和辭典には猶ほ頗る遺憾あるを免れない、即ち日用肝要の語數がまだ足りない、新解釋には用例が擧げてない。譯語の數も亦不足、それに幾分生硬のものもあつて、中學生相手には讀んで或は義に通ぜず、通じても或は情にシツクリ副はぬものもあつた。此處が此度最も注意された主要點であろう、此等の缺點が本書に於ては略ぼ遺憾なく充たされて居る、是より以上は之を中辭典に望む事が無理であろう、特に漢字には括弧して邦訓を附けたなど、今迄のものとは變つて著しく童蒙に便ずる事と思ふ。が慾には一歩を進めていつその事に全體通な口語を採用したらうと思ふ否時代の要求は段々左樣いふ方向を取ると思ふ。挿畫の著しく增加したのも結構だ。附錄の「外國地名人名表」、「類語及對語」、「外國地名用語解」は共に前著に見ぬ新しい景物だ、容積は勢ひ前著は全體に少し伸びて居るが、携帶に不便の程度ではない。學生には重寶なものが出來た。(定價金二圓)

▲時勢之變

河上肇著
讀賣新聞社發行

經濟學者には珍しい文藻を有する著者の筆、明暢流麗に物質的方面より靜に時勢の變遷を見て之を叙述し、現代政治の要訣より以下幾章に渉つて政府並に國民に向つて警策を與へられたもの。平凡の頭にも興に促されて一氣呵成に讀み了り得る快味がある。其破壞主義を說いて其原因を尋ぬる處、日本文明の進歩を語つて其弱點を探る處、一々犀利な眼光を見、又日本特種の機械の應用及び製造を盛にすべき事、食料を世界に求むべき事等を論ずるあたり最も超邁な識見を窺ひ得る、列國に於ける社會主義の大勢を概叙し、我國に於けるそれは故らに言はんと欲して言はずに殘して居るが、此空白の部分は最も我爲政者をして再三再四熟讀翫味沈思默想の値あると思ふ。著者の要は不言の處に最も濃厚に現れて見える。(定價金五拾八錢)

▲魔の曲

高安月郊著
上田屋發行

思ひ切つて主觀を出した一篇の長篇小說である。その文章は甚しく音樂的で、そしてキビ／＼した江戸辯のやうな調子である。作者にとつては、此一篇は餘程大膽な勞作であつたらう。いま一歩とは思ひながらある種の讀者は必滿足する創作の性質である。作者の興奮てある。書物は涼しげな紋絽の型に、鹿を脊皮にした。紙も贅澤なものである。(金壹圓)

▲東京の印象

兒玉花外著
文淵堂發行

九十一篇の東京市スケッチ集である。見方にも描方にも著者一流の力を見せてゐる。一種の謳歌である。詩的な描寫に獨特の哲學を見せた「新江戸兒」への獻本である。(金七十五錢)

▲扉

森田草平著
左久良書房發行

「扉」「離合」「母」「水死」「四月盡」の六短篇を集めてある。現在の著者にとつては、連續した過去であらうが、讀者にとつては煤煙の內容と形式とに伴つた興味を以て一讀すべきものであらう。

▲辭林

金澤庄三郎編纂
三省堂發行

四十四年版として公にされたもので、第三回目の改修である。全部を訂正し補足し、新に難訓索引を加へた。初版に於て此書の價値は已に定まつてゐる。此辭書が、現代あらゆる國語字書の中にあつて、比肩するものがないのみならず、簡便な點に於ても勝れて居た事を喋々する必要もない位である。今これが更に新しい版として少からざる新材料を盛つた。「永く向上的たるべき」著書の言は、常に誤まらぬものであらうと思ふ。(金二圓五十錢)